

九州横断自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

— 22 —

朝倉郡朝倉町所在鎌塚・山ノ神・鎌塚西遺跡の調査

1992

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

— 22 —

朝倉郡朝倉町所在鎌塚・山ノ神・鎌塚西遺跡の調査

## 序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公園から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告書は、昭和62年度に調査しました朝倉郡朝倉町鎌塚遺跡と山ノ神遺跡・鎌塚西遺跡の調査結果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第22集としてとりまとめたものであります。古墳から奈良時代にわたる集落の構成を知る上で貴重な遺跡といえるでしょう。

発掘調査の記録としては、十分に満足のいくものではありませんが、本書を通して地域の文化財ならびに歴史に対する認識と理解を深める一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々の御指導・御協力を頂いた地元の方々をはじめ、関係各位に対して心から感謝申し上げます。

平成4年3月31日

福岡県教育委員会  
教育長 御手洗 康

## 例 言

1. 本書は、昭和62年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡の発掘調査を実施した鎌塚遺跡と山ノ神遺跡・鎌塚西遺跡の報告書で、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書の22冊目にあたる。
2. 遺構の実測は、井上裕弘と高田一弘が主にあたり、高瀬セツ子・本石セツ子・中村光恵・渡辺輝子・後藤カミヨ・矢野静子氏の協力を得た。写真撮影は井上が行い、空中写真撮影はフォト・オオツカの協力を得て実施した。
3. 出土遺物の整理は、岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館と文化課甘木発掘調査事務所で行った。また、鉄器類の処理は九州歴史資料館の横田義章氏が行った。
4. 出土遺物の写真撮影は、九州歴史資料館の石丸洋・林崎新二・内本浩子氏が行った。実測は井上・木下修・水ノ江和同の他に、渡辺輝子・高瀬照美氏の多大な協力を得た。
5. 製図は、豊福弥生・関久江・原カヨ子氏と文化課甘木調査事務所の塩足里美・近藤美恵子氏の協力を得た。
6. 本書の執筆は、井上・木下・水ノ江・渡辺が分担し、それぞれ文末に記した。なお、カマドの実測については全て渡辺輝子氏が文化課調査補助員武田光正氏(現遠賀町教育委員会)の指導のもとに実施したもので、今回、はじめて執筆していただきました。謝意を表します。
7. 本書の編集は、井上が行った。

## 本文目次

I 調査経過 .....	1
II 位置と環境 .....	7
III 鎌塚遺跡の調査 .....	9
IV 山ノ神遺跡の調査 .....	129
V 鎌塚西遺跡の調査 .....	151

## 挿 図 目 次

第 1 図	九州横断自動車道路線図	2
第 2 図	鎌塚・山ノ神・鎌塚西遺跡と付近地形図(1/1,000)	折込み
第 3 図	カマド造り	3
第 4 図	骨組み作業	3
第 5 図	骨組み作業の完成	3
第 6 図	屋根葺作業	3
第 7 図	復元住居①	3
第 8 図	復元住居②	4
第 9 図	住居の復元と一般公開	4
第 10 図	移築後の荒廃した住居	4
第 11 図	住居災上	4
第 12 図	焼け落ちた住居	4
第 13 図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	8

## 表 目 次

表 1	九州横断自動車道関係遺跡一覧表	折込み
-----	-----------------	-----

## I 調査の経過

鎌塚遺跡は、九州横断自動車道関係の第30地点(STA211+30~212+80)として、山ノ神遺跡は第31地点(STA212+80~213+60)としてそれぞれ登録されていた地点である。昭和62年4月に実施した試掘調査の結果、鎌塚遺跡からは奈良時代の住居跡や溝、多数のピット群が検出され、奈良時代の大規模な集落跡の存在が予想された。また、山ノ神遺跡では遺構は散在的であったものの、縄文土器や多数のピット群が検出され、縄文時代の生活遺構の存在も予想された。

鎌塚遺跡の調査は、昭和62年6月1日から開始し、調査が終了したのは年末の12月11日であった。山ノ神遺跡の調査は一部鎌塚遺跡の調査と併行した11月1日から昭和63年1月6日の間で実施した。62年度の発掘調査は、後半には全ての工事区の工事が発注され、一部工事と調査が雑糅する状況となった。また、例年にない夏場の長雨で、調査地区からの泥水の流出や土砂崩壊にも悩まされた調査であった。

調査の結果は、鎌塚遺跡では竪穴住居跡76軒、掘立柱建物3棟からなる奈良時代の大集落跡が発見された。住居群は中央に広場を有し、六群をなし弧状に配置されていた。古代の集落構造を知る上で興味深い遺跡となった。また、集落形成以前のものである畑の畝を思わせる数条の浅い溝と、用排水路を思わせる溝状遺構も面白い発見であった。他に、縄文時代晩期の土壇3基、弥生時代前期の貯蔵穴17基と円形の竪穴住居跡1軒、さらには先土器時代の石器類が検出されるなど大規模な複合遺跡の調査となった。

山ノ神遺跡からは、縄文時代晩期の土壇16基と、大型の単室式の横穴式石室を有す古墳1基が発見された。古墳は削平が著しく、周溝も不明瞭であったが、北側に残存する同時期の溝が周溝の一部だとすれば径30mを越す古墳となる。石室の規模からして可能性はあるだろう。他にナイフ形石器や三稜尖頭器などの先土器時代の石器も出土しているが、包含層は遺存していなかった。

鎌塚遺跡の調査がほぼ終了してきた11月末には、調査員一同の兼てからの企画でもあった古代住居を我々の手で再現しようということになった。近隣の山からは建築材を、屋根材は調査地区に繁茂していた茅を刈り入れるなど、急務、現地の竪穴住居を再利用して復元することにした。設計図の作成から始まり、カマドの構築、建築部材の切込み、柱の設置と骨組の組立作業、茅による屋根葺作業といった工程は極めて複雑で難行した。しかし、何回となく失敗や試行錯誤をくり返し、まがりなりにも古代住居とおぼしき家の再現に成功した(第7図)。

完成した古代住居を発掘調査に参加していただいた作業員の人達とともに、一般に公開し、現地説明会を実施した。その結果、小中学生の見学を含めて200名を越す見学者を得て好評であ



第 1 図 九州横断自動車道路線図

表 1 九州横断自動車道関係道路一覧表

地点	道路名	所在地	内 容	面積	開 発 地 区 と 開 発											備 考	報告書			
					34年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	日 1			日 2		
1	小倉東バイパス	小倉市大字小倉	中央通、環状路	11,200					5,000			560						完	了	7集
2	鹿伏道路	"	"	10,400							353	6,000						完	了	11集
3	大坂中道路	" 大坂府	中央、古墳地区	6,400								3,000						完	了	15集
4	"	"	"	9,200							3,500	5,000						完	了	15集
5	井上道路	" 井上	中央、中核集落	8,900							4,500	3,700						完	了	10集
6	藤原東道路	" 藤原町	中央、古墳地区(旧町界)	32,000					300	7,300	10,100							完	了	13集、16集
7	宮道	" 今限	中央集落	7,200					200		100							完	了	
8	宮道	大津町大字山根	中央集落	4,000					3,600									完	了	
9	藤原東	"	先上、中央、古墳、近郊	10,800					100	6,700								完	了	
10	"	" 中央部	敷布地	34,400			700	300										完	了	
11	立野、宮道	甘木市大字下道	地区内、中央部、方野、山根、山根、山根、山根	33,800			13,800	13,300	10,000	3,000								完	了	11、12、13集
12	小石原川内東	" 上道	中央	68,000			6,100											完	了	
13	" 中央部	" 上道高田	"	56,000	200													完	了	1集
14	上ノ浦道路	" 上道	中央、古墳集落	18,400	200	7,600												完	了	1集
15	西原、下道	" 一つ水原	"	54,800			4,500	4,500	1,400	5,400								完	了	1、2、3集
16	高野	" 高野	中央、中央、古墳集落	7,800														完	了	
17	口ノ坪	" 中央	中央、中央	100						100								完	了	
18	"	"	敷布地	2,550						300								完	了	
19-A	越ノ上	"	古墳集落	50,000					700	8,200								完	了	9集
19-B	大津町大字石成	中央集落、中央集落	50,000								5,400							完	了	
19-C	石成久保	"	古墳集落	30,000							6,100							完	了	
20	中道	" 大津	中央、中央、中央集落	15,400					300		11,400							完	了	
21-A	新道中	"	中央集落、中央	45,900							8,400							完	了	
21-B	越ノ上	"	敷布地				800	600			2,300							完	了	
21-C	大津久保	"	中央集落、中央集落								9,650							完	了	
21-D	上ノ原	"	中央集落、敷布地								12,300							完	了	18集
22	越ノ上	" 入地	中央、中央、古墳集落	5,400					300	4,800								完	了	
22-C	高野	"	中央、中央集落、中央	5,000							3,400							完	了	
23	越ノ上	"	中央集落、中央	2,600							2,600							完	了	
24	才田	"	中央集落、中央	5,400							1,650	6,650						完	了	
25	家子田	"	"	4,900							1,300	4,400						完	了	
26	"	" 山根	敷布地	1,800														完	了	
27	長島	"	中央、中央、中央	18,000					70			500	16,900					完	了	
28	中砂見	"	中央、中央集落	2,400														完	了	
29-A	坂の東	" 坂野	中央、中央集落、中央	16,800									5,240	2,100				完	了	
29-B	砂原谷	" 方野	中央集落										4,650					完	了	
30	越ノ上	" 坂野、山根	中央、中央、中央	4,500									6,550					完	了	22集
31	山ノ神	" 山根	中央、中央	2,000									1,980					完	了	22集
32	"	"	敷布地	2,400			300											完	了	
33	長島	"	中央、中央、古墳集落	2,800									5,500	2,600				完	了	
34	金野	"	中央、古墳	3,600									680	16,400				完	了	
35-A	上ノ原	"	中央、敷布地	2,600									880	2,900				完	了	20集
35-B	越ノ上	"	古墳集落										2,400					完	了	20集
36	越ノ上	"	古墳集落	2,400									3,980					完	了	20集
37	大津	"	中央、中央、古墳集落	2,000									5,410	9,900	700			完	了	24集
38	外之原	"	中央、中央、古墳集落	125									5,150	12,600		1,200		完	了	
39-A	杷木宮道	杷木町大字志波	中央、古墳、中央集落	22,000								350	3,400					完	了	21集
39-B	早野	"	"															完	了	21集
40	志波	" 中央	敷布地	2,500									300	7,700				完	了	
41	志波	"	"	18,500									300	9,400				完	了	
42	江東	"	中央、中央、古墳	8,500									300	9,700				完	了	
43	大谷	" 古墳	12,900										300	7,560				完	了	
44	"	" 敷布地	1,800											150				完	了	
45	藤原	" 敷布地	2,400										400	3,710				完	了	
46	夕月、天間	" 中央	1,800										300	2,210	225			完	了	
47	上道	" 中央	4,600										3,300					完	了	
48	越ノ上	" 中央	1,800										6,800					完	了	
49	"	" 敷布地	3,200										150					完	了	
50	"	" 敷布地	2,400										300					完	了	
51	越ノ上	" 中央集落	5,200										6,500					完	了	
52-A	小笠原	"	"	2,900									1,000	1,280				完	了	
52-B	二十	" 中央集落	2,400										1,550					完	了	
53	藤原	" 中央	3,500										5,700					完	了	
54	上野	" 中央	1,800										2,700					完	了	
55	"	" 敷布地	1,600										700					完	了	
56	"	" 敷布地	2,400										800					完	了	
57	越ノ上	甘木市大字越ノ上	古墳、中央、中央集落	200,000			900	8,300	15,000	18,500	4,400							完	了	4、8、12集
58	山根	杷木町大字山根	中央、古墳集落	40,000			14,100		2,500	2,500	8,710							完	了	23集
59	越ノ上	杷木町大字中央	中央、古墳集落										6,650					完	了	
60	越ノ上	杷木町大字中央	中央集落										2,600					完	了	
61	越ノ上	杷木町大字中央	中央集落、古墳	100,000									1,270	1,270				完	了	
62	越ノ上	"	中央、古墳集落										4,180					完	了	
63	越ノ上	"	古墳										2,400	4,000				完	了	
計					8,683	22,306	20,470	28,570	48,498	69,780	115,810	80,380	82,710	49,125	700	1,300				



第 2 図 鎌塚・山ノ神・鎌塚西遺跡と付近地形図 (1/1,000)

った。その後、この住居は、学校教育や社会教育の学習教材として有効に活用したいという朝倉町教育委員会の要望で、町民グラウンドの一角に移築された。

そして、3年を経過した古代住居は、歳月とともに風雨にみまわれ、各所に老朽化が進行した。人間が生活しない住居の廃居化が急速であることを知らされた。

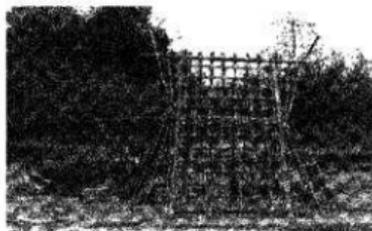
平成2年6月、朝倉町教育委員会から老朽化した古代住居の屋根材を除去したいという要望を受けた。発掘調査で、しばしば火災を受けた住居を発掘する機会が多いが、火災の実体は今なお、不明であるため、この機会に火災の実験を行い、災上する古代住居の状況を解明すること



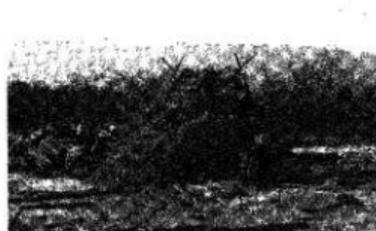
第 3 図 カマド造り



第 4 図 骨組み作業



第 5 図 骨組み作業の完成



第 6 図 屋根葺作業



第 7 図 復元住居①



第 8 図 復元住居②



第 9 図 住居の復元と一般公開



第 10 図 移築後の荒廃した住居



第 11 図 住居炎上



第 12 図 焼け落ちた住居

とも貴重な体験と考え、消防署の立合いのもとに実施することにした。カマドから出火した住居は、またたく間に炎につつまれ、約10分という短時間で完全に焼け落ち、柱だけが残ったという結果となった。約10分間という短い時間であったが、炎上する凄まじさは、恐しささえ感じさせた。古代人の火災に対する恐怖心を彷彿とさせる実体験であった。この復元住居の建築から炎上までの過程は、全てビデオと写真で記録した。

なお、発掘調査にあたっては、朝倉町教育委員会、町建設課には多大な御援助、御協力を得た。記して謝意を表します。 (井上)

昭和62年度の調査関係者と平成3年度の整理関係者は下記のとおりである。

#### 日本道路公団福岡建設局

(昭和62年度)

局 長	杉山 美昭	
次 長	菱刈 庄二(前任)	吉岡 康行
総務部長	安元 富次	
管理課長	森 宏之(前任)	副島 紀昭
管理課長代理	三野 徳博	

(平成3年度)

中島 英治(前任)	加藤 典史
高野 武(前任)	渡辺 国丸
岡本 房徳	
江良 信弘	
塚本 文康	

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所(昭和62年度)

所 長 風間 徹  
 副 所 長 西田 功  
 副 所 長 友田 義則(技術担当)  
 庶務課長 徳永 登(前任) 大河 尋光  
 用地課長 松尾 伸男  
 工務課長 後藤二郎彦(前任) 豊里 栄吉  
 朝倉工事区工事長 上野 満  
 杷木工事区工事長 小沢 公共

福岡県教育委員会

総括	(昭和62年度)	(平成3年度)	
教 育 長	竹井 宏	御手洗 康	
教育次長	大鶴 英雄	亀谷 陽三	光安 常喜
指導第二部長	大平 岩男	月森清三郎	
指導第二部参事	窪田 康德	栗石 勲(兼任)	
文化課長	窪田 康德(兼任)	森山 良一	
文化課参事		森本 精造	石松 好雄
文化課長補佐	平 聖峰	国武 康友	松尾 正俊
文化課長技術補佐	宮小路 賀宏		
文化課長参事補佐	中矢 真人	柳田 康雄	
同	加藤 俊一	井上 裕弘	
同	栗原 和彦	石山 勲	
同	大塚 健	濱田 信也	
同	柳田 康雄	副島 邦弘	清水 生輔
庶務・管理			
文化課庶務係長	加藤 俊一(兼任)	管理係長	岸本 実
文化課事務主査	竹内 洋征		
文化課主任主事		安丸 重喜	
調 査			
文化財保護室室長		石松 好雄(兼任)	
文化課調査班総括	柳田 康雄(兼任)	柳田 康雄(兼任)	
同 総括補佐		井上 裕弘(兼任)	
同 技術主査	井上 裕弘		

同	技術主査	木下 修	
同	主任技師	中間 研志	小田 和利
同	主任技師	佐々木隆彦	
同	主任技師	伊崎 俊秋	
同	技 師	小田 和利	水ノ江和同
同	文化財専門員	木村幾多郎	日高 正幸
同	臨時職員	日高 正幸	
同	調査補助員	高田 一弘	武田 光正
		佐土原逸男	
		向田 雅彦	
		田中 康信	
同	整理指導員	岩瀬 正信	

発掘作業員

大熊 勝造	緒方 仁造	石松又次郎	篠原 清彦	半田 武則
丸山 静子	丸山美紗代	丸山 幾子	丸山フミ子	瀧 文子
丸山 智子	友納ノブヨ	半田 エツ	大熊キクエ	安岡よし子
藤田マスミ	木下千寿子	林 ノブカ	井上シゲノ	林 良枝
林 ムツ子	林 美津子	上村 梅子	篠原ミユキ	大内田千江美
篠原サチエ	妹川ミドリ	梅尾 一枝	小林あい子	鶴川 水子
丸山喜代子	高瀬セツ子	本石セツ子	中村 光恵	渡辺 輝子
後藤カミヨ	牟田サエ子	矢野 静子		

甘木調査事務所(遺物整理作業員)

中塩屋リツ子	西 奇子	小島佐枝子	石井紀美子	尾花 道子
藤井カオル	塩足 里美	松嶋 邦子	高瀬 照英	渡辺 輝子
矢野 明英	尾塩本康子	大野 愛里	近藤美恵子	

## II 位置と環境

鎌塚遺跡、鎌塚西遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字菱野にあって、前者は字鎌塚、後者は字先牟田に所在する。山ノ神遺跡は鎌塚遺跡の東側に狭い谷を挟んで隣接し、大字山田字山ノ神に所在する。

鎌塚遺跡と鎌塚西遺跡は、今回の高速道路関係の調査で新たに発見された遺跡であるが、山ノ神遺跡については、山ノ神古墳群として登録されていた周知の遺跡である。

今回、調査した鎌塚遺跡と鎌塚西遺跡の中心をなす時期は、奈良時代である。この地域一帯の歴史的環境については、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第18(註1)・20集(註2)にも、すでに詳しく記述しているところである。ここでは奈良時代の遺跡について触れることにしたい。

これまで、この時期の遺跡については数カ所が知られるだけであった。しかし、近年の九州横断自動車道の発掘調査が進む中で、各地でこの時期の大規模な集落遺跡が発見され、一躍、この地域が注目されるようになった。特に、甘木市宮原遺跡の約450軒にも及ぶ竪穴住居跡と、掘立柱建物跡200棟以上といった巨大な集落の発見は、今までの我々の予想を越すことであった。この他にも、50～100軒前後といった住居跡が検出された遺跡としては、甘木市高原遺跡・塔ノ上遺跡(註3)、朝倉町西法寺遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡・才田遺跡・長島遺跡などがあり、今回、調査した鎌塚遺跡や鎌塚西遺跡もその一角をなすもので、大規模な集落が各地に形成されていたことが判る。奈良時代におけるこの地域の繁栄を物語っている。

斉明天皇(661)に百済救援のため、斉明天皇の行宮として建設されたという著名な朝倉橋広庭宮推定地(註4)は朝倉町須川にあり、それに近接して奈良時代の寺院跡として知られる長安寺跡(註5)もある。また、この朝倉宮の造営と関連する軍事的要塞とも考えられる杷木神籠石(国指定)は、東方、大分県との県境である杷木町林田に所在する。この地域一帯に近在するこれら国家的重要施設で造営されたと考えられる重要な遺跡の存在は、奈良時代におけるこの地域の繁栄ぶりとは無関係ではなく、今後、その関連を注目すべきであろう。

註1 井上裕弘編「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」18 福岡県教育委員会 1990

註2 井上裕弘編「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」20 福岡県教育委員会 1991

註3 伊崎俊秋編「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」9 福岡県教育委員会 1987

註4 新野正憲「第三編 古代」『朝倉町史』朝倉町史刊行委員会 1986

註5 註4に同じ



- |            |             |             |              |             |
|------------|-------------|-------------|--------------|-------------|
| 19B 大遷葬遺跡  | 19CD 石成久保遺跡 | 20. 中道遺跡    | 21A 西法寺遺跡    | 21C 大庭久保遺跡  |
| 21D 上の原遺跡  | 22C 狐塚遺跡    | 22AB 治部ノ上遺跡 | 23. 座禪寺遺跡    | 24. 才田遺跡    |
| 25. 東才出遺跡  | 27. 長島遺跡    | 28. 中妙見遺跡   | 29A 原の東遺跡    | 29B 妙見古墳群   |
| 30. 錦塚遺跡   | 31. 山ノ神遺跡   | 33. 長田遺跡    | 34. 金塔遺跡     | 35A 上ノ宿遺跡   |
| 35B 志麻山遺跡  | 36. 神畑遺跡    | 37. 大道遺跡    | 38. 外之原遺跡    | 39A 柁木富原遺跡  |
| 62. 鳥巢院1号墩 | 63. 北八坂古墳群  | 65. 宮地鎌古墳   | 66. 長安寺廃寺    | 67. 伝明倉富跡   |
| 68. 八並遺跡   | 70. 剣塚古墳    | 71. 鎌塚古墳    | 75. 志麻八幡宮古墳群 | 76. 奈良ヶ谷古墳群 |

第13図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

# 鎌塚遺跡の調査

# 本文目次

1. 遺跡の概要 .....	9
2. 先土器・縄文時代の遺構と遺物 .....	9
(1) 先土器時代の遺物 .....	9
(2) 陥穴状遺構 .....	11
(3) 土葬 .....	11
(4) 包含層出土の土器・石器 .....	16
3. 弥生時代の遺構と遺物 .....	23
(1) 竪穴住居跡 .....	23
(2) 貯蔵穴 .....	25
(3) 土葬 .....	34
(4) ビット・その他出土の遺物 .....	36
4. 古墳・奈良時代の遺構と遺物 .....	37
(1) 竪穴住居跡 .....	38
(2) 掘立柱建物跡 .....	110
(3) 鍛冶状遺構 .....	113
(4) 土壙墓 .....	113
(5) 溝状遺構 .....	115
(6) 畝状遺構 .....	117
(7) ビット及び表探遺物 .....	117
5. その他の遺構と遺物 .....	121
6. おわりに .....	122

## 図 版 目 次

本文対照頁

図 版 1	(1) 鎌塚遺跡・山ノ神遺跡遠景(西から).....	9
	(2) 鎌塚遺跡全景空中写真.....	9
図 版 2	(1) 発掘区東部全景.....	9
	(2) 発掘区中央部全景.....	9
図 版 3	(1) 発掘区西部全景.....	9
	(2) 1号陥穴状遺構(東から).....	11
図 版 4	(1) 2号陥穴状遺構(西から).....	11
	(2) 1号土壌(北から).....	12
図 版 5	(1) 2号土壌(西から).....	12
	(2) 2号土壌内縄文土器出土状態(西から).....	13
図 版 6	(1) 3号土壌(南から).....	13
	(2) 76号住居跡(東から).....	23
図 版 7	(1) 1号貯蔵穴(東から).....	25
	(2) 2号貯蔵穴(西から).....	25
図 版 8	(1) 3号貯蔵穴(西から).....	25
	(2) 4号貯蔵穴(北から).....	28
図 版 9	(1) 5号貯蔵穴(南から).....	28
	(2) 5号貯蔵穴内弥生土器出土状態(南から).....	28
図 版 10	(1) 5号貯蔵穴土器除去後(北から).....	28
	(2) 6号貯蔵穴(南から).....	28
図 版 11	(1) 7号貯蔵穴(北から).....	29
	(2) 8・9号貯蔵穴(北から).....	29
図 版 12	(1) 11号貯蔵穴(南から).....	29
	(2) 12号貯蔵穴(南から).....	29
図 版 13	(1) 13号貯蔵穴(西から).....	30
	(2) 14号貯蔵穴(東から).....	33
図 版 14	(1) 17号貯蔵穴(西から).....	33
	(2) 18号貯蔵穴(東から).....	33
図 版 15	(1) 住居跡D・E群全景.....	37
	(2) 住居跡E・F群全景.....	37

図版 16	(1)	1号住居跡(西から).....	38
	(2)	1号住居跡カマド(西から).....	38
図版 17	(1)	1号住居跡旧カマド内土層断面(西から).....	39
	(2)	1号住居跡旧カマド(南から).....	39
図版 18	(1)	2・3号住居跡全景.....	40
	(2)	2号住居跡(西から).....	40
図版 19	(1)	2号住居跡カマド(西から).....	40
	(2)	2号住居跡内鉄鏝出土状態(北から).....	40
図版 20	(1)	3号住居跡(南から).....	45
	(2)	3号住居跡カマド(南から).....	46
図版 21	(1)	4号住居跡(西から).....	46
	(2)	5号住居跡(西から).....	47
図版 22	(1)	5号住居跡カマド(西から).....	48
	(2)	6号住居跡(東から).....	50
図版 23	(1)	7号住居跡(東から).....	50
	(2)	8・50号住居跡(東から).....	51
図版 24	(1)	9号住居跡(東から).....	51
	(2)	9号住居跡カマド(東から).....	51
図版 25	(1)	10号住居跡(南から).....	54
	(2)	10号住居跡カマド(南から).....	54
図版 26	(1)	10・11・38・60・78・79号住居跡群(南から).....	54
	(2)	12・51・60・68・79号住居跡群(南から).....	56
図版 27	(1)	13号住居跡(東から).....	57
	(2)	13号住居跡カマド(東から).....	59
図版 28	(1)	14号住居跡(南から).....	60
	(2)	15号住居跡(東から).....	61
図版 29	(1)	16・61~64号住居跡(東から).....	63
	(2)	16・61・64号住居跡(東から).....	63
図版 30	(上)	16号住居跡(東から).....	63
	(下)	16号住居跡カマド(東から).....	64
図版 31	(1)	17号住居跡(南から).....	66
	(2)	17号住居跡カマド(南から).....	66
図版 32	(1)	18号住居跡(西から).....	68

	(2)	19号住居跡(北から).....	69
図版 33	(1)	20~22・27~31号住居跡群.....	71
	(2)	20・21・31号住居跡(南から).....	71
図版 34	(1)	28号住居跡(南から).....	75
	(2)	28号住居跡カマド(南から).....	75
図版 35	(1)	29号住居跡(南から).....	76
	(2)	29号住居跡カマド(南から).....	76
図版 36	(1)	28・29・70号住居跡(南から).....	76
	(2)	28・29・70号住居跡下層(南から).....	76
図版 37	(1)	20・21・25・26・31号住居跡下層(南から).....	77
	(2)	31号住居跡カマド(南から).....	78
図版 38	(上)	32号住居跡(西から).....	78
	(下)	33~37・39号住居跡(西から).....	79
図版 39	(1)	40~43号住居跡(西から).....	82
	(2)	44~49号住居跡(南から).....	85
図版 40	(1)	44号住居跡下層(南から).....	85
	(2)	44号住居跡カマド(南から).....	85
図版 41	(1)	45~49号住居跡(南から).....	87
	(2)	45号住居跡カマド(南から).....	87
図版 42	(1)	東半部住居跡群全景.....	89
	(2)	東半部住居跡群近景.....	89
図版 43	(1)	53号住居跡(西から).....	92
	(2)	53号住居跡カマド(西から).....	92
図版 44	(1)	53号住居跡下層(西から).....	92
	(2)	55・56号住居跡(南から).....	94
図版 45	(1)	58・59号住居跡(北から).....	95
	(2)	63号住居跡カマド(南から).....	97
図版 46	(1)	71・73号住居跡(南から).....	103
	(2)	71号住居跡カマド(南から).....	103
図版 47	(1)	1号掘立柱建物跡(北から).....	110
	(2)	2・3号掘立柱建物跡(北から).....	110
図版 48	(1)	1号土壙墓(北から).....	113
	(2)	1号土壙墓内遺物出土状態(西から).....	114

図版 49	(1) 畝状遺構全景	117
	(2) 畝状遺構近景(北から)	117
図版 50	(1) 近世墓(南から)	121
	(2) 近世墓内副葬品出土状態(西から)	121
図版 51	(1) 出土石器①(表)	9
	(2) 出土石器①(裏)	9
図版 52	(1) 出土石器②	21
	(2) 出土石器③	22
図版 53	(1) 2号土壇出土縄文土器	15
	(2) 3号土壇出土縄文土器	14
図版 54	(1) 1・2号土壇出土縄文土器(表)	13
	(2) 1・2号土壇出土縄文土器(裏)	13
図版 55	(1) 3号土壇出土縄文土器(表)	15
	(2) 3号土壇出土縄文土器(裏)	15
図版 56	(1) 包含層出土縄文土器①(表)	17
	(2) 包含層出土縄文土器①(裏)	17
図版 57	(1) 包含層出土縄文土器②(表)	18
	(2) 包含層出土縄文土器②(裏)	18
図版 58	(1) 包含層出土縄文土器③(表)	19
	(2) 包含層出土縄文土器③(裏)	19
図版 59	住居跡・貯蔵穴出土弥生土器	24
図版 60	(1) 76号住居跡、4・13号貯蔵穴出土石器	24
	(2) 住居跡出土石器	24
図版 61	紡錘車・土錘・小玉・羽口	24
図版 62	住居跡出土土師器・須恵器	41
図版 63	住居跡出土土師器・須恵器・瓦	49
図版 64	(1) 住居跡・土壇墓出土鉄器	45
	(2) 近世墓出土副葬品	121

## 挿 図 目 次

第 1 図	先土器時代包含層の確認調査	9
-------	---------------	---

第 2 図	出土石器実測図(1/2).....	10
第 3 図	1・2号陥伏遺構実測図(1/30).....	11
第 4 図	1～3号土壌実測図(1/40).....	12
第 5 図	1号土壌出土縄文土器実測図(1/3).....	13
第 6 図	1・3号土壌出土石器実測図(1/2).....	13
第 7 図	2号土壌出土縄文土器実測図(1/3).....	14
第 8 図	3号土壌出土縄文土器実測図(1/3, 181±1/4).....	15
第 9 図	3号土壌出土石器実測図(1/3).....	16
第 10 図	包含層出土縄文土器実測図 1(1/3).....	17
第 11 図	包含層出土縄文土器実測図 2(1/3).....	18
第 12 図	包含層出土縄文土器実測図 3(1/3).....	19
第 13 図	包含層出土石器実測図 1(1/2).....	21
第 14 図	包含層出土石器実測図 2(1/3).....	22
第 15 図	76号住居跡実測図(1/60).....	23
第 16 図	76号住居跡出土土器実測図(1/4).....	24
第 17 図	76号住居跡出土石器実測図 1(1/2).....	24
第 18 図	76号住居跡出土石器実測図 2(1/3).....	24
第 19 図	1～6号貯蔵穴実測図(1/40).....	26
第 20 図	貯蔵穴出土土器実測図 1(1/4).....	27
第 21 図	4号貯蔵穴出土石器実測図(1/3).....	28
第 22 図	7号貯蔵穴実測図(1/40).....	29
第 23 図	8～12号貯蔵穴実測図(1/40).....	30
第 24 図	13～16号貯蔵穴実測図(1/40).....	31
第 25 図	貯蔵穴出土土器実測図 2(1/4).....	32
第 26 図	13号貯蔵穴出土石器実測図(1/2).....	33
第 27 図	17・18号貯蔵穴実測図(1/40).....	34
第 28 図	1号土壌実測図(1/40).....	35
第 29 図	1号土壌出土土器実測図(1/4).....	36
第 30 図	ビット・その他出土土器実測図(1/4).....	36
第 31 図	カマド分類図.....	37
第 32 図	1号住居跡実測図(1/60).....	38
第 33 図	1号住居跡旧カマド実測図(1/30).....	39
第 34 図	1号住居跡カマド実測図(1/30).....	40

第 35 図	1～3号住居跡出土土器実測図(1/3)	41
第 36 図	紡錘車・土釜・小玉・羽口実測図(1/2)	42
第 37 図	1・2号住居跡出土石器実測図(1/3)	43
第 38 図	2号住居跡実測図(1/60)	43
第 39 図	2号住居跡カマド実測図(1/30)	44
第 40 図	出土鉄器実測図(1/2)	45
第 41 図	3号住居跡実測図(1/60)	45
第 42 図	3号住居跡カマド実測図(1/30)	46
第 43 図	4号住居跡実測図(1/60)	46
第 44 図	4号住居跡カマド実測図(1/30)	47
第 45 図	5号住居跡実測図(1/60)	47
第 46 図	5号住居跡カマド実測図(1/30)	48
第 47 図	5・6号住居跡出土土器・瓦実測図(1/3)	49
第 48 図	6号住居跡実測図(1/60)	50
第 49 図	7号住居跡実測図(1/60)	51
第 50 図	8・50・75号住居跡実測図(1/60)	52
第 51 図	8・9号住居跡出土土器実測図(1/3)	53
第 52 図	9号住居跡実測図(1/60)	54
第 53 図	9号住居跡カマド実測図(1/30)	55
第 54 図	10～12・38・51・60・68・78・79号住居跡実測図(1/60)	折込み
第 55 図	10号住居跡カマド実測図(1/30)	57
第 56 図	10～13号住居跡出土土器実測図(1/3)	58
第 57 図	13号住居跡実測図(1/60)	59
第 58 図	13号住居跡カマド実測図(1/30)	59
第 59 図	14号住居跡実測図(1/60)	60
第 60 図	14号住居跡カマド実測図(1/30)	61
第 61 図	住居跡群全景	61
第 62 図	14・15号住居跡出土土器実測図(1/3)	62
第 63 図	15号住居跡実測図(1/60)	63
第 64 図	15号住居跡全景	63
第 65 図	15号住居跡カマド実測図(1/30)	64
第 66 図	16・61号住居跡実測図(1/60)	65
第 67 図	16号住居跡カマド実測図(1/30)	66

第 68 図	16・17号住居跡出土土器実測図(1/3, 80は1/6).....	67
第 69 図	17号住居跡実測図(1/60) .....	68
第 70 図	17号住居跡カマド実測図(1/30) .....	69
第 71 図	17・19~21・24・26号住居跡出土土器実測図(1/3) .....	70
第 72 図	18号住居跡実測図(1/60) .....	71
第 73 図	19号住居跡実測図(1/60) .....	71
第 74 図	20~22・24~26・29~31号住居跡実測図(1/60) .....	折込み
第 75 図	27~29・70号住居跡実測図(1/60) .....	73
第 76 図	27・29・31・32号住居跡出土土器実測図(1/3) .....	74
第 77 図	28号住居跡カマド実測図(1/30) .....	75
第 78 図	29号住居跡カマド実測図(1/30) .....	76
第 79 図	31号住居跡カマド実測図(1/30) .....	77
第 80 図	32号住居跡実測図(1/60) .....	77
第 81 図	33~36号住居跡実測図(1/60) .....	78
第 82 図	33・35・39~44号住居跡出土土器実測図(1/3) .....	80
第 83 図	40~43号住居跡実測図(1/60) .....	82
第 84 図	42号住居跡カマド実測図(1/30) .....	83
第 85 図	44・69号住居跡実測図(1/60) .....	84
第 86 図	44号住居跡カマド実測図(1/30) .....	85
第 87 図	44・45・48・50~52号住居跡出土土器実測図(1/3) .....	86
第 88 図	44号住居跡出土土器実測図(1/3) .....	87
第 89 図	45~49号住居跡実測図(1/60) .....	88
第 90 図	45号住居跡カマド実測図(1/30) .....	89
第 91 図	52~54号住居跡実測図(1/60) .....	90
第 92 図	53号住居跡カマド実測図(1/30) .....	92
第 93 図	53・55・59・60・63・64・66号住居跡出土土器実測図(1/3) .....	93
第 94 図	55・56号住居跡実測図(1/60) .....	94
第 95 図	55号住居跡カマド実測図(1/30) .....	95
第 96 図	57号住居跡実測図(1/60) .....	96
第 97 図	58・59号住居跡実測図(1/60) .....	97
第 98 図	58号住居跡カマド実測図(1/30) .....	98
第 99 図	62~64号住居跡実測図(1/60) .....	99
第 100 図	62号住居跡カマド実測図(1/30) .....	100

第 101 図	63号住居跡カマド実測図(1/30).....	100
第 102 図	67・71・73・82号住居跡実測図(1/60).....	101
第 103 図	67・69・71-73・75・77・78号住居跡出土土器実測図(1/3).....	102
第 104 図	69号住居跡出土石器実測図(1/3).....	103
第 105 図	71号住居跡カマド実測図(1/30).....	104
第 106 図	72・77号住居跡実測図(1/60).....	105
第 107 図	72号住居跡カマド実測図(1/30).....	106
第 108 図	78号住居跡カマド実測図(1/30).....	108
第 109 図	82号住居跡カマド実測図(1/30).....	108
第 110 図	発掘風景.....	109
第 111 図	1号据立柱建物跡実測図(1/60).....	110
第 112 図	1・2号据立柱建物跡出土土器実測図(1/3).....	111
第 113 図	2・3号据立柱建物跡実測図(1/60).....	112
第 114 図	鍛冶状遺構出土土器実測図(1/3).....	113
第 115 図	土壁墓実測図(1/30).....	114
第 116 図	出土鉄器実測図(1/2).....	114
第 117 図	出土土器実測図(1/3).....	114
第 118 図	溝1土層断面図(1/20).....	115
第 119 図	溝状遺構出土土器実測図(1/3).....	115
第 120 図	竈状遺構実測図(1/150).....	118
第 121 図	ビット内出土土器実測図(1/3).....	119
第 122 図	表探土器実測図(1/3).....	120
第 123 図	近世墓実測図(1/30).....	121
第 124 図	出土遺物実測図(1/2).....	121
第 125 図	住居跡群変遷図(1/400).....	折込み

## 表 目 次

表 1	縄文土器観察一覧表.....	20
表 2	1号据立柱建物跡計測表.....	111
表 3	2号据立柱建物跡計測表.....	111
表 4	3号据立柱建物跡計測表.....	113
表 5	竈穴住居跡一覧表.....	124

# 付 図

付 図 1 線路遺跡遺構配置図(1/200)

### III 鎌塚遺跡の調査

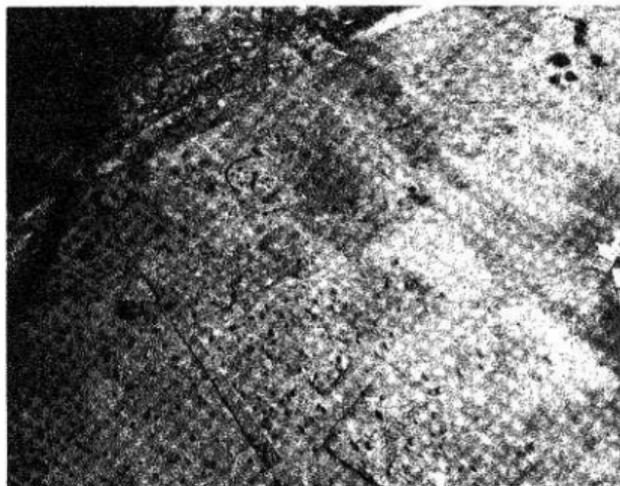
#### 1. 遺跡の概要

遺跡は、舌状に伸びた丘陵裾部の広大な低台地上に形成されている。検出された遺構は、縄文時代のもと思われる陥穴状遺構2基をはじめ縄文晩期の土塚3基、弥生時代前期後半の貯蔵穴19基と前期末の円形住居跡1軒、奈良時代を中心とした竪穴住居跡78軒と独立柱建物跡3棟からなる大集落跡、集落を区画するとともに、畑地の用排水路として利用されたと思われる溝状遺構1条、畑の畝を思わせる浅い溝状遺構などが発見された。他に、先土器時代の石器や、古墳時代後期の土塚墓1基、近世墓1基なども検出され、大規模な複合遺跡となった。

#### 2. 先土器・縄文時代の遺構と遺物

##### (1) 先土器時代の遺物

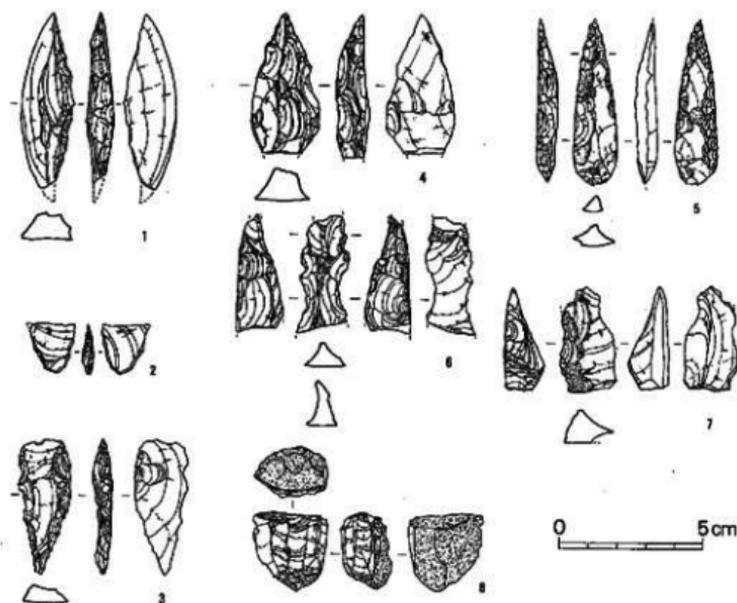
遺跡の中央部付近を中心に住居跡・ピット等の埋土中からナイフ形石器・台形石器などの先土器時代の遺物が出土したため、包含層の遺存状況を把握するトレンチを発掘区中央に設定した。その結果は、包含層はすでに削平され、遺存しないことが判った。(井上)



第1図 先土器時代包含層の確認調査

石器(図版51, 第2図)

1は両端の鋭い翼状剥片を素材とする園府型ナイフ形石器。片縁全体に刃つぶし加工を施し、弧状の刃部を有す。残存長6.2cm, 最大幅1.8cm, 厚1cm, 重9.5kgで安山岩製で表採資料。2は将棋の駒状を呈す百花台型の台形石器。縦長剥を折断し, その部位に刃つぶし加工を施すが、背・腹両側から行なわれている。長1.8cm, 幅1.5cm, 厚0.4cm, 重1.1gを測り, 23号住居跡下層出土で, 良質な腰岳産黒曜石製。3は横長剥片を素材とし, 打点側と末端の両側に刃つぶし状の調整を施すが, それは直角に近いものではない。特に打点部付近は平坦剥離に近い。幅1.2cmほどの直線刃には使用による刃こぼれが見られる。断面形は台形を呈す。直線刃のナイフ形石器であろう。長4.7cm, 幅1.8cm, 厚0.7cm, 重5.6g。2号住居跡内出土で安山岩製。4は部厚な横長剥片を素材とし, 両縁及び背稜から調整を施した基部を欠損する三稜尖頭器。全体の調整は荒いが, 先端付近は主要剥離面側からやや丁寧な調整を施す。残存長4.9cm, 幅2.5cm, 厚1.1cm。表採資料で良質な黒曜石製。5は横長剥片を素材とした断面三角形の尖頭器で, 先端部を若干欠損する。丸味を持つ基部の主要剥離面側のみが研磨されている事は注意。縄文時代



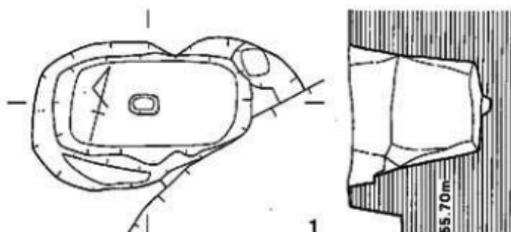
第2図 出土石器実測図(1/2)

の可能性が強い。長5.7cm, 基部幅1.5cm, 厚0.8cm, 重7.1gで安山岩製。6は部厚な縦長の剥片の両縁から急角度の調整を施す。断面は三角形を呈す。7は横長の剥片を素材としたもので、片縁のみに急角度の調整を施す。断面はやはり三角形を呈し、一部自然面も残存する。6・7とも破損資料であるが、いわゆる角錐状石器と呼ばれている石器である。4の三稜尖頭器と断面形態等類似点も少なくない。6は51号住居跡下層, 7は17号住居跡出土で、両者とも黒曜石製。8は角錐の平坦な自然面をそのまま打面とした細石刃核で、素材の調整はまったく施さない。長2.7cm, 幅2.6cm, 厚1.8cm, 重14.5g。9号住居跡下層出土で、黒曜石製。(木下)

## (2) 陥穴状遺構

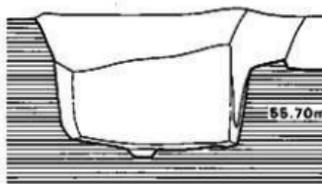
### 1号陥穴(図版3, 第3図)

76号住居跡に一部を切られた状態で検出された土壌で、底面形は楕円長方形プランを呈す。底面中央には16×10cm, 深さ4cmビットが穿たれている。底面での規模は89×45cm, 上面からの深さ72cmを測る。



### 2号陥穴(図版4, 第3図)

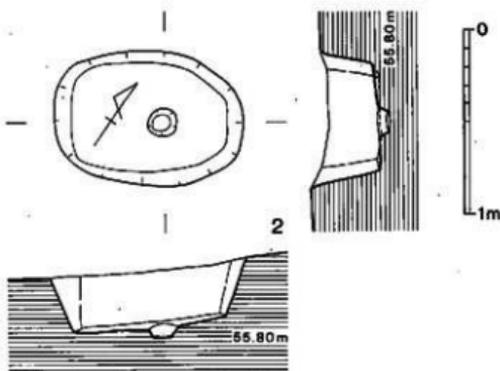
32号住居跡の南側から検出された楕円形プランの土壌で、底面中央やや東寄りには小さなビットが一個ある。規模は、上面で102×73cm, 底面で83×60cm, 深さ30cmを測る。底面はわずかに西側に傾斜している。



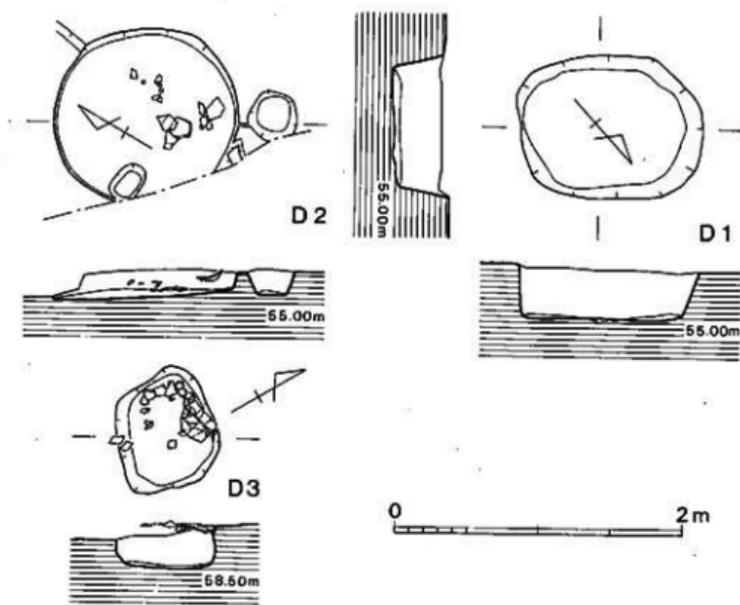
## (3) 土 墳

### 1号土墳(図版4, 第4図)

39号住居跡の北側から検出された楕円形プランの土壌で、規模は底面で112×82cm, 深さは34cmを測る。



第 3 図 1・2号陥穴状遺構実測図(1/30)



第 4 図 1-3号土壙実測図(1/40)

#### 出土遺物 (第 5 図)

**縄文土器 (1~5)** 1号土壙から出土した縄文土器は器厚がいずれも9mm程度と厚く、胎土も粗い。器面調整は二枚貝の腹縁による朱紋も一部に施されているようだが、基本的にはナデ調整が多用される。1には突帯文らしきものが窺えるが、わずかにしか残存しないため断定はできない。3の屈曲は意図的に作られたというより偶発的な感がある。胎土や調整等から判断して少なくとも後期以降のものであるが、細かい時期比定は難しい。(水ノ江)

**石器 (図版51, 第6図)** 1・2は縦長の刃器状切片。両者とも小さな自然面の打面を有す。1は末端部を欠く資料で、両側縁には刃こぼれが著しい。長4.8cm, 幅2.1cm, 重2.9g, 両者とも漆黒の黒曜石製。3は片脚を欠損する打製石鏃。全体に荒い調整を施す。長3.2cm, 厚0.4cm, 重2.1gで安山岩製。(木下)

**2号土壙 (図版5, 第4図)** 1号土壙の南側にあり、33・39号住居跡の床面下から検出された土壙で、南西側の一部は用地外のため未掘である。平面形は円形プランを呈し、規模は底面で126×118cm, 深さ18cmを測る。埋土中からは底面より若干浮いた状態で土器が出土した。

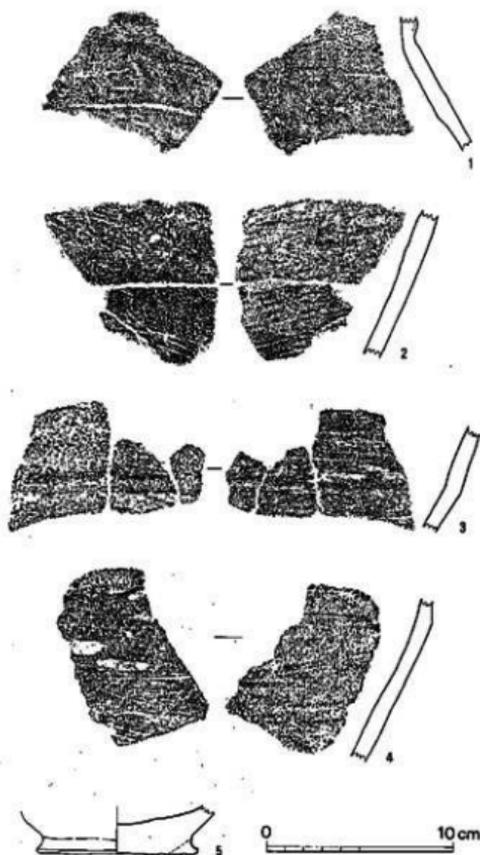
出土遺物 (図版53・54, 第7図)

縄文土器(6~8) 2号土壌から出土した土器は比較的少ないが、遺存状態は良好であった。6はミガキを器面調整とする鉢形の精製土器、7はやはり精製の浅鉢形土器、8はナデを器面調整とする粗製の深鉢形土器である。8については全体の1/3ほどの破片が残り、4段の波頂部を持つ波状口縁で、復原口径33cm、復原高27cmを測る。本遺構から出土した土器は、いずれも晩期中葉の黒川式土器である。(水ノ江)

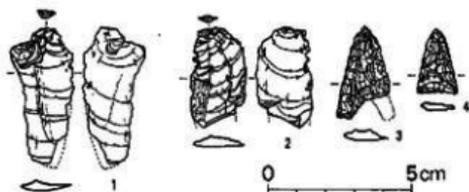
3号土壌(図版6、第4図) 北側の丘陵斜面から検出された不整形プランの土壌である。規模は上面で85×70cm、深さ北側で26cmを測り、断面は袋状をなす。底面より23cmも浮いた状態で深鉢形土器がつぶれて出土した。(井上)

出土遺物(図版55、第8図)

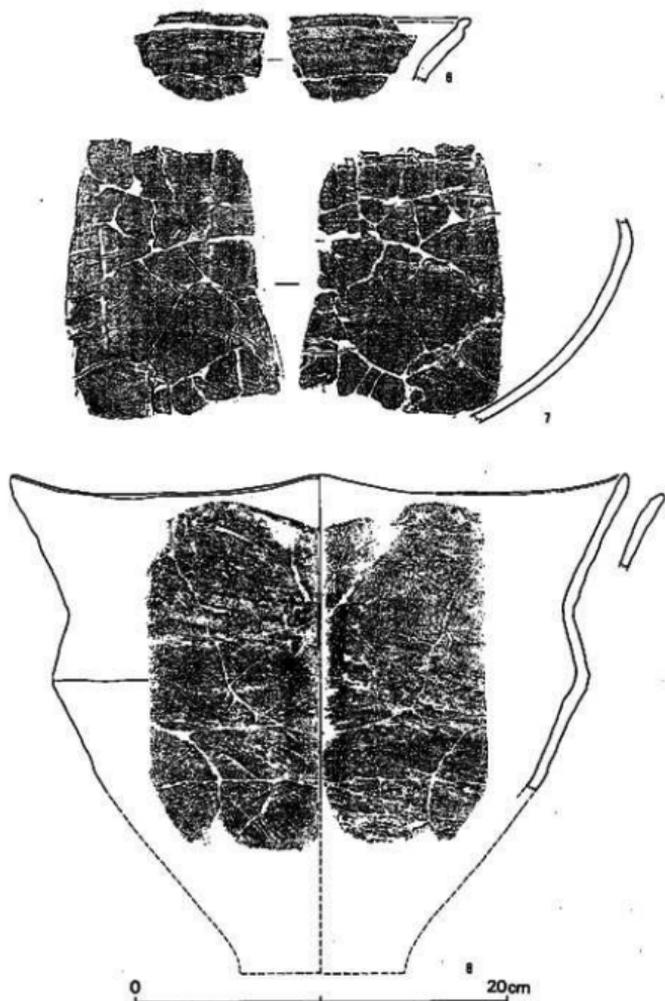
縄文土器(9~18) 3号土壌から出土した縄文土器のうちここでは10点を図示したが、精製土器は9の浅鉢形土器1点だけである。12の内面には補修孔を穿つのを途中で止めた痕跡が残る。14~16は接合こそしないが、同一個体の土器である。14の口縁端部には面が作出され、そこにLの縄文が施される特異



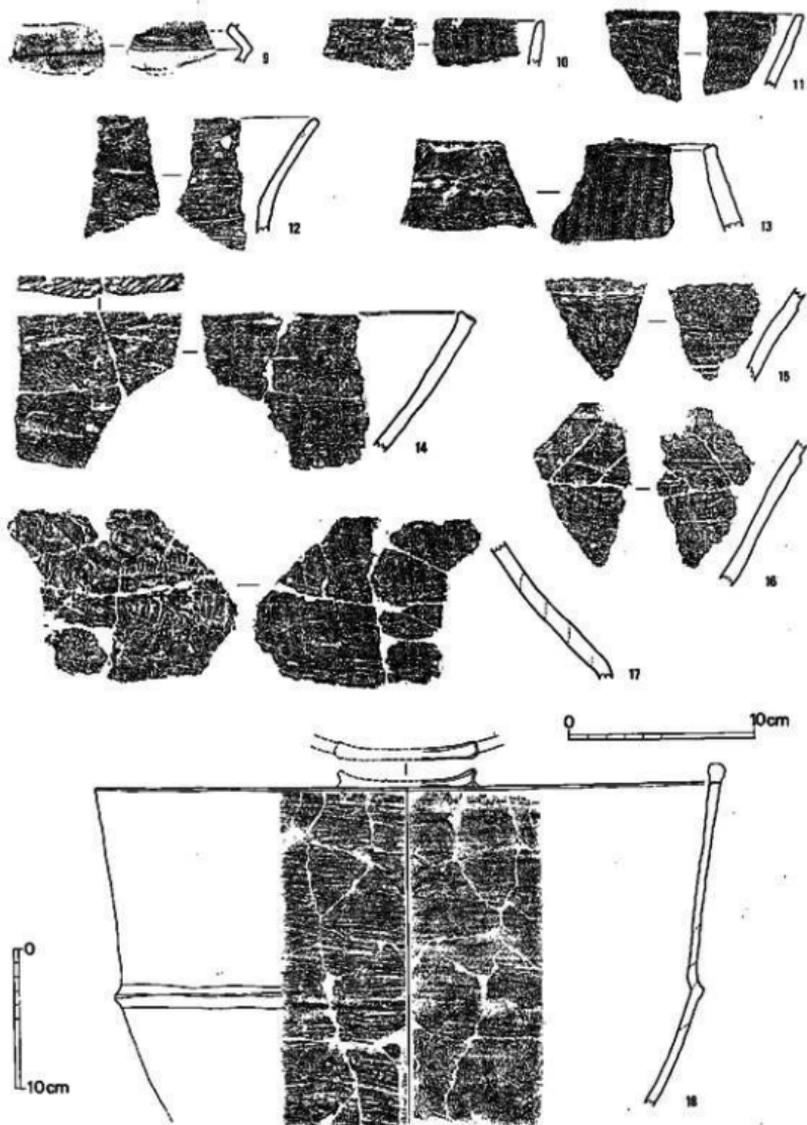
第5図 1号土壌出土縄文土器実測図(1/3)



第6図 1・3号土壌出土石器実測図(1/2)



第 7 图 2号土坑出土绳文土器实测图 (1/3)



第 8 图 3号土坑出土陶文土器实例图 (1/3, 18(2)1/4)

な特徴を有する。15・16の上端部には強いナデによるような段が作出される。胎土・調整とも他の土器と異なり本遺構への混入の疑いもあるが、3号土壙出土ということで一括して提示した。18は全体の1/3ほどが残る深鉢形土器である。口縁部に付く突起は、とりあえずシンメトリーになるように復原してみた。復原口径は33cm。本遺構からは9・18のように晩期黒川式土器のほかには17のような壺形土器も見られ、多少の時期幅が窺える。



第8図 3号土壙出土  
石器実測図(1/3)

(水ノ江)  
石 器(図版51, 第6図4, 第9図)4は抉りの非常に浅い二等辺三角形鉢の完形品。先端部に近い両側縁が張り、薄手。長2.3cm, 幅1.4cm, 厚0.3cm, 重1gの安山岩製。5は緑泥片岩製の打製石斧。片側縁には比較的丁寧な調整を施す。長10.7cm, 幅4.4cm, 厚1.5cm, 重82g。

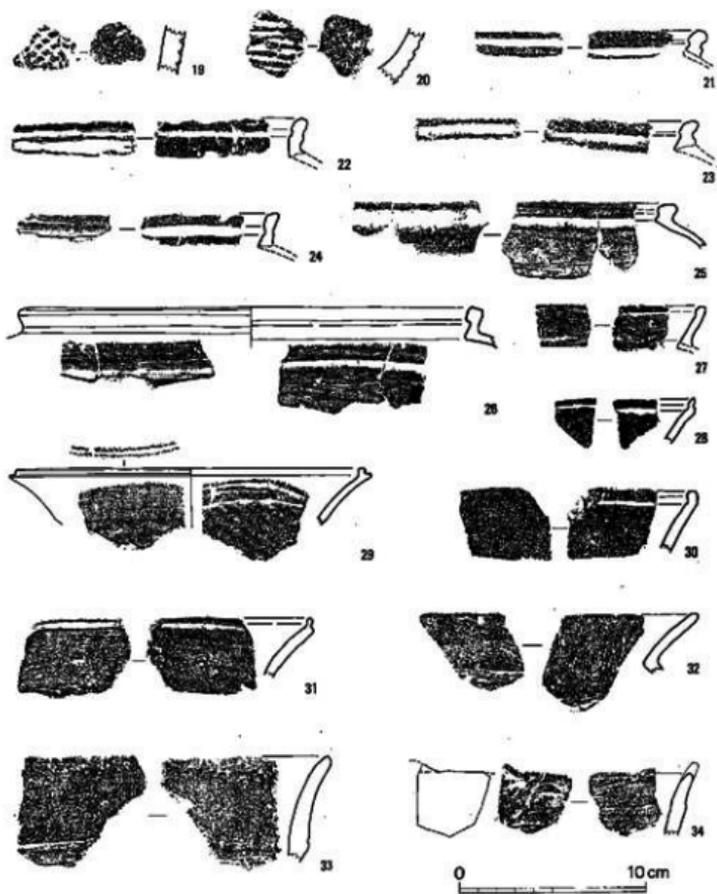
(木下)

#### (4) 包含層出土の土器・石器

##### 縄文土器(図版56-58, 第10・11図)

ここでは弥生時代以降の各種遺構に混入した土器をはじめ、包含層から出土した土器を一括して扱った。19は一見押型土器のようであるが、先端の尖った櫛状の工具による連続の刺突文である。胎土や器厚から判断して早期に属するものと考えられる。20は底部付近の沈線文が地面との接触で潰れたような状態にある。前期の曾畑式土器であろうか。21-26は精製の鉢形土器である。口縁部の内外面に凹線もしくは沈線状の段を有し、頸部で外側へ強く屈曲し張り出す特徴がいずれの土器にも見られる。26のみ口径の復原が可能で25cmを測る。27-31は精製の、32は粗製の鉢形土器である。27・30には内面にのみ、28・29・31には内外面に沈線文が施される。33・34は粗製の深鉢形土器である。33の屈曲部には1条の沈線文が施され、34の口縁端部には突起が付けられる。21-31の精製土器にはミガキが施され、胎土には石英がほとんど含まれず、わずかに長石が観察されるだけで相当に精緻である。35は鉢形土器、36は口縁端部を外側へ屈曲させる深鉢形土器である。37-44はいわゆる突帯文土器で、突帯文上にはいずれも刻みが施される。器面調整は41のみ二枚貝の腹縁による条痕が窺えるが、他はすべてナデである。45は4段の波頂部からなる波状口縁方形浅鉢の波頂部と考えられる。焼成以前の穿孔が一つ見られるが、その機能については明確ではない。46-51は粗製深鉢形土器の口縁部である。外側へ開くものや内傾するものなど傾きは様々で、49には突帯文のようなものが施されるが刻みはない。52-58は深鉢形土器の胴部破片である。56-58は屈曲部にあたり、55の内面にのみミガキが施される。器面調整の条痕には、二枚貝や巻貝のほかには植物質の工具によるものも見られる。59-63の底部は、薄くて胎土の精緻な59-60と、分厚い上げ底で胎土の粗い61-63とに分れるが、前者は精製土器の、後者は粗製土器の底部と考えられる。

(水ノ江)

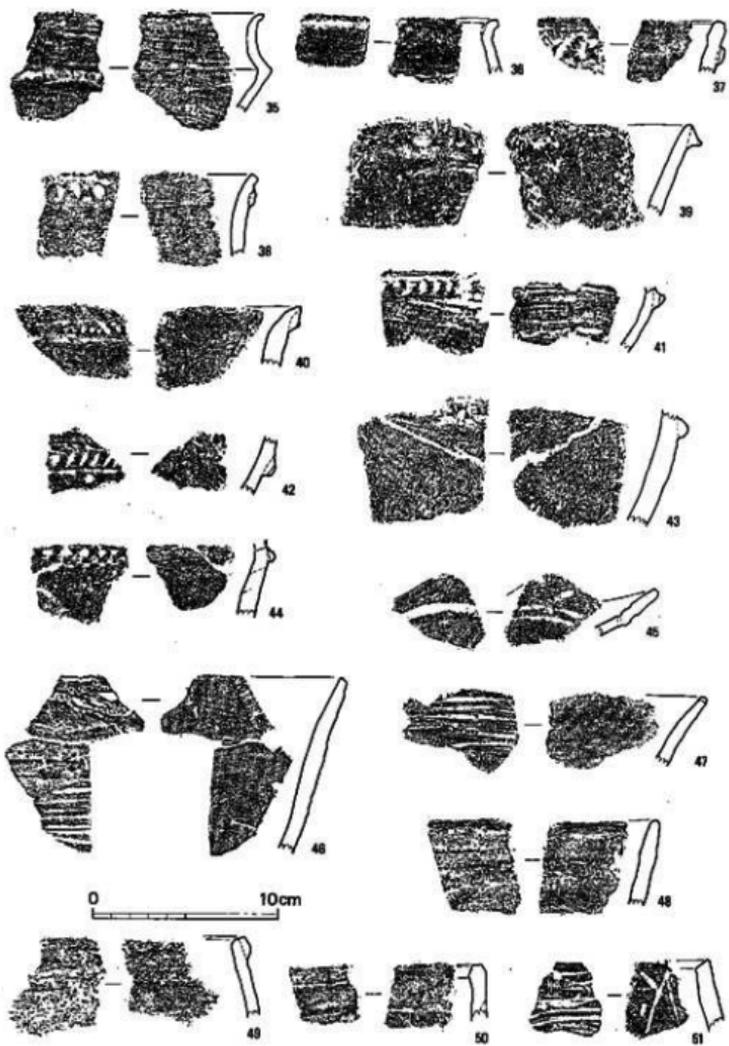


第 19 図 包含層出土縄文土器実測図 1 (1/3)

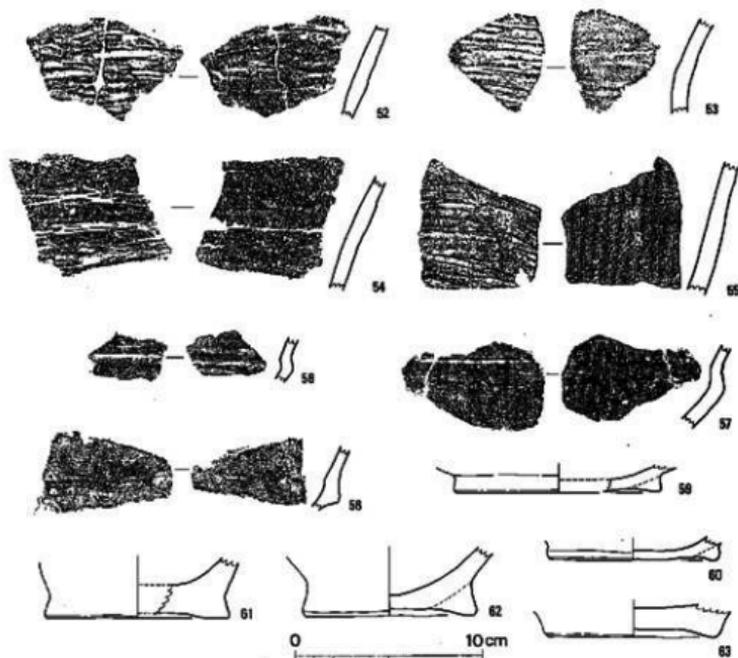
石 器 (関版52, 第13・14図)

出土した石器は、石鏃・スクレイパー・刃器状剥片・打製石斧・円盤状石器・磨石である。包含層出土資料の他に、古墳時代の住居跡から出土した石器についても、この項で扱う。

1～13は石鏃。凸基状(1), 平基式(2～4), 凹基式(5～13)がある。1は厚みがあり、重1.



第 11 图 包含层出土陶文土器尖部图 2 (1/3)

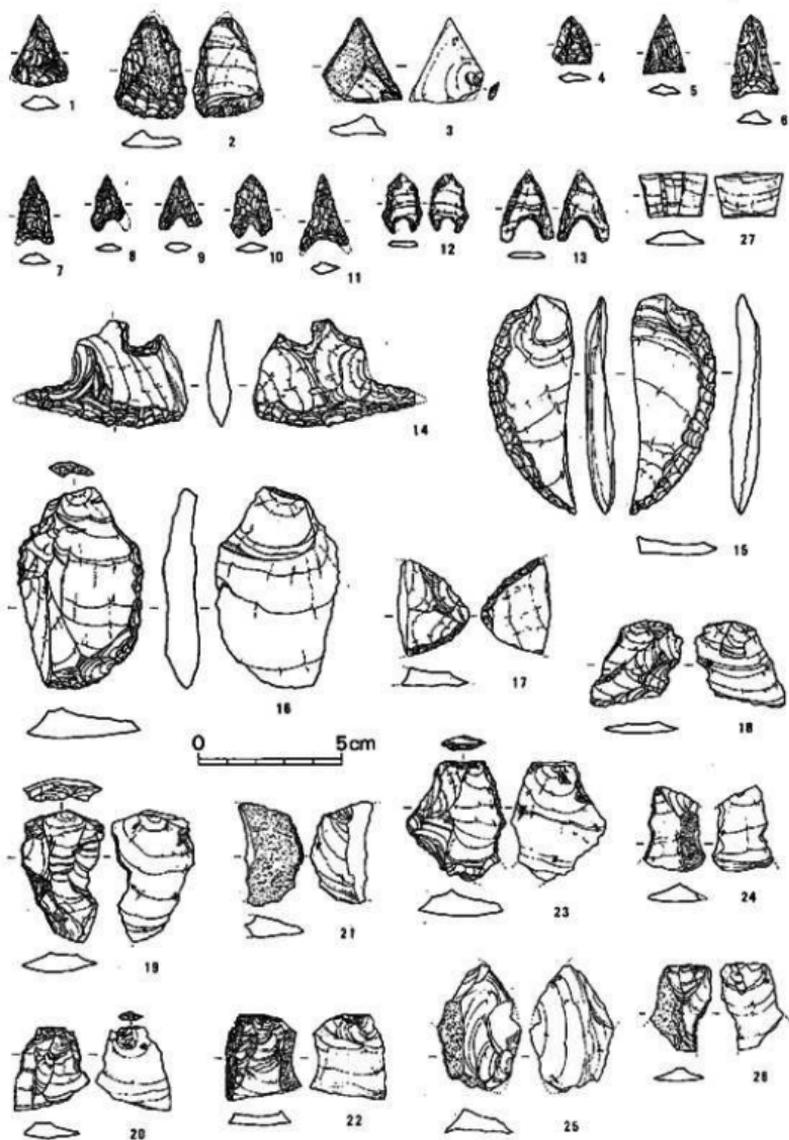


第 12 図 包含層出土縄文土器実測図 3 (1/3)

.9g. 10号住居跡, P-2 出土。2は幅広い表皮剥片を素材としたもので、基部調整で打瘤を除去する。残存長3.5cm, 基部幅2.4cm, 重5g。2号住居跡出土。3は台形に近い剥片の周囲に細かい調整を施す。鋭い先端部を有す石鏃としたが、スクレイパーの可能性もある。長3cm, 重3.8g。4号溝出土。4は完形品で、長1.7cm, 重0.75g。47号住居跡出土。5は長2.1cm, 重0.8g。6号住居跡カマド内出土。6は有肩の鏃で、調整は荒い。長2.9cm, 幅1.6cm, 重1.8g。10号住居跡下層出土。7も有肩の鏃。45号住居跡カマド内出土。8は裏面には主要剥離面を残す。2号住居跡カマド煙道出土。9は長1.9cm, 重0.6g。11号住居跡出土。10は将核駒状を呈し、先端部付近に細かい調整を施す。長2.2cm, 重0.8g。17号住居跡出土。11は長身で両側縁が内湾する。残存長2.6cmで44号住居跡出土。12は基部・13は先端部に打点を有す剥片鏃。12は長2cm, 重0.6g。15号住居跡カマド内出土。13は79号住居跡P-1出土。石材は1-4・7-10・12が黒曜石製で、9のみが姫島産。他は安山岩製。なお、石鏃は合計31点出土しており、黒曜

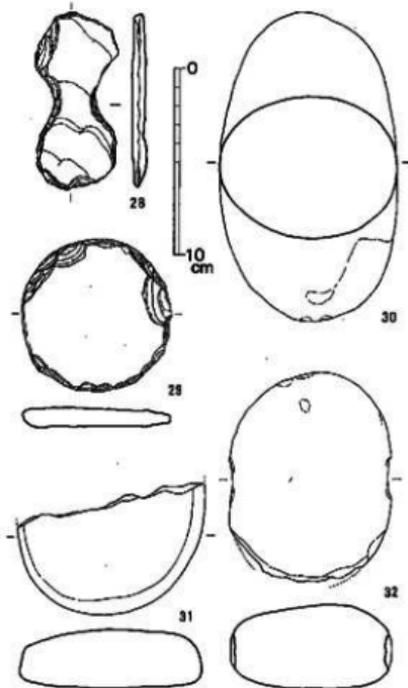
表 1 縄文土器観察一覧表

番号	出土地点	胎土	器面図数(外)	器面図数(内)	整理番号	備	考
1	1号土器	石英	ナデ	ナデ	15		
2	1号土器	石英・長石・角閃石	ナデ	二枚貝条痕→ナデ	14		夾器文?
3	1号土器	石英・長石	ナデ	ナデ	13		外面炭化物
4	1号土器	長石・角閃石	二枚貝条痕→ナデ	二枚貝条痕	12		
5	1号土器	長石・雲母	ナデ	ナデ	61		
6	2号土器	石英・長石・雲母	ミガキ	ミガキ	28		
7	2号土器	長石	ミガキ	ミガキ	1		外面鉄部付泥に黒斑
8	2号土器	石英・長石	ナデ	ナデ	62		外面口縁・胴下半部に炭化物
9	3号土器	長石	ミガキ	ナデ	53		
10	3号土器	石英・雲母	条痕→ナデ	ナデ	23		
11	3号土器	長石・雲母	細いミガキ	ナデ	22		
12	3号土器	石英	二枚貝条痕→ナデ	二枚貝条痕→ナデ	21		内面に途中で止めた補修孔
13	3号土器	石英	ナデ	ミガキ	18		外面炭化物
14	3号土器	石英	条痕→ナデ	ナデ	16		口縁部縮部に縄文しを施す
15	3号土器	石英	条痕→ナデ	ナデ	20		
16	3号土器	石英	条痕→ナデ	ナデ	19		
17	3号土器	石英	ナデ	ナデ	17		整?
18	3号土器	石英・長石・角閃石	帯貝条痕	帯貝条痕	67		内外面に炭化物
19	76号住居跡	石英	ナデ	ナデ	60		新文
20	31号住居跡	石英	ナデ	ナデ	35		沈線文
21	76号住居跡	長石	ミガキ	ミガキ	51		
22	P-312	長石	摩滅不明	摩滅不明	56		
23	25号住居跡	長石	摩滅不明	摩滅不明	44		
24	76号住居跡	長石	ミガキ	ミガキ	50		
25	76号住居跡	長石	ミガキ	ミガキ	52		
26	76号住居跡	石英	ミガキ	ミガキ	31		
27	10号住居跡	石英	摩滅不明	摩滅不明	48		
28	P-3	長石	ミガキ	ミガキ	55		
29	33号住居跡	長石・角閃石	ミガキ	ミガキ	32		
30	76号住居跡	長石	摩滅不明	摩滅不明	34		
31	P-315	石英	摩滅不明	摩滅不明	38		
32	64号住居跡	長石	ナデ	ナデ	10		
33	18号住居跡	石英・長石	ナデ	ナデ	26		沈線文
34	P-165	石英	条痕→ナデ	ナデ	36		突器あり
35	76号住居跡	石英・雲母	ナデ	ナデ	25		
36	31号住居跡	長石	ミガキ	ミガキ	49		
37	76号住居跡	石英・長石	ナデ	ナデ	43		
38	3号住居跡	石英・長石	摩滅不明	摩滅不明	41		刻目夾器文
39	P-106	石英・長石	摩滅不明	摩滅不明	24		刻目夾器文
40	76号住居跡	石英・長石	摩滅不明	摩滅不明	5		刻目夾器文
41	76号住居跡	石英	二枚貝条痕→ナデ	二枚貝条痕	4		刻目夾器文
42	P-179	石英・長石	ナデ	ナデ	11		刻目夾器文
43	21号住居跡	石英・長石	ナデ	ナデ	3		刻目夾器文
44	44号住居跡付遺	長石・角閃石	ナデ	ナデ	37		刻目夾器文
45	19号住居跡	長石	摩滅不明	摩滅不明	9		沈線
46	4号貯蔵穴	石英	二枚貝条痕	ミガキ	30		
47	76号住居跡	石英・長石	二枚貝条痕	ナデ	59		
48	P-265	石英・雲母	摩滅不明	摩滅不明	7		
49	9号住居跡	石英・長石	摩滅不明	ナデ	8		突器文?
50	76号住居跡	石英・長石・雲母	ナデ	ナデ	42		
51	P-134	石英	条痕	ナデ	6		
52	76号住居跡	石英・長石	条痕	条痕→ナデ	58		
53	P-329	石英・長石	二枚貝条痕	二枚貝条痕→ナデ	27		外側炭化物
54	76号住居跡	石英・長石	条痕	ナデ	59		
55	4号貯蔵穴	石英・雲母	帯貝条痕	ミガキ	2		
56	76号住居跡	長石	ミガキ?	ミガキ?	40		
57	76号住居跡	長石	摩滅不明	ナデ	29		
58	12号貯蔵穴	長石	摩滅不明	摩滅不明	39		
59	P-64	長石	摩滅不明	摩滅不明	62		
60	P-81	長石	摩滅不明	摩滅不明	63		
61	13号貯蔵穴	長石・雲母	ナデ	ナデ	64		
62	P-313	石英・雲母	ナデ	ナデ	65		
63	19号住居跡	石英・長石・角閃石	摩滅不明	摩滅不明	66		



第 13 图 包含层出土石器实测图 1 (1/2)

石18点のうち姫島産は計3点であり、他は安山岩製である。14～26はスクレイパー。14は横型石匙で、打痕部を大きく除去する。つまみ部の調整は片側のみである。刃部厚は0.8cm、残存幅5.6cm、重11.2g。1号住居跡カマド内出土。15は半月形を呈し、外湾刃の整った良品。長7.3cm、幅3.1cm、厚1cm、重19g。9号住居跡出土。16は自然面の打面を有す幅広い縦長剥片を素材とする。片側縁に刃部を作り出す。長7.1cm、重32.4g。33号住居跡出土。17は10号住居跡出土の欠損品。18～20、22～24・26は、縦長剥片を素材とし、一側縁に細かい調整を施す。18は16号住居跡出土。19は長4.7cm、重8.9g。P-288出土。20はP-27出土。22は両側に自然面を残し、その片縁に細かい刃こぼれ状の調整が見られる。長3cm、重4.8g。33号住居跡カマド内出土。23は9号住居跡下層出土。24はP-204、26は44号住居跡出土。21・25は不定形の剥片を素材としたもので、21は自然面の



第14圖 包含層出土石器実測図2(1/3)

の片縁に調整を施す。P-450出土。25は横長の剥片の打面及び末端の一部に調整を施す。51号住居跡床面出土。石材は14～17が安山岩、他は良質の黒曜石製。27は刃器状の折断剥片で、刃こぼれが観察される。幅2.3cm、重2.5gでP-314出土の漆黒の黒曜石製。28は分刺形の打製石斧。周縁に調整を加える。長9.5cm、厚0.8cm、重45g。緑泥片岩製で63号住居跡カマド内出土。29は厚1cmほどの盤状の周囲に調整を加えた石器。図上左側の一部には磨かれた箇所がみられる。径8cm、重110g。P-223出土で砂質片岩製。30～32は磨石。30は長円形を呈し、片端部には敲打痕が残る。全体に熱を受けており、亀裂が走る。長16.5cm、重1.52kg。P-120出土で輝石安山岩製。31は全面の磨痕が著しい。48号住居跡出土で凝灰岩質。32は長軸両側に浅い抉りを施す。この資料も30と同様熱を受けている。厚4.6cm、重600g。44号住居跡出土で礫岩製。

(木下)

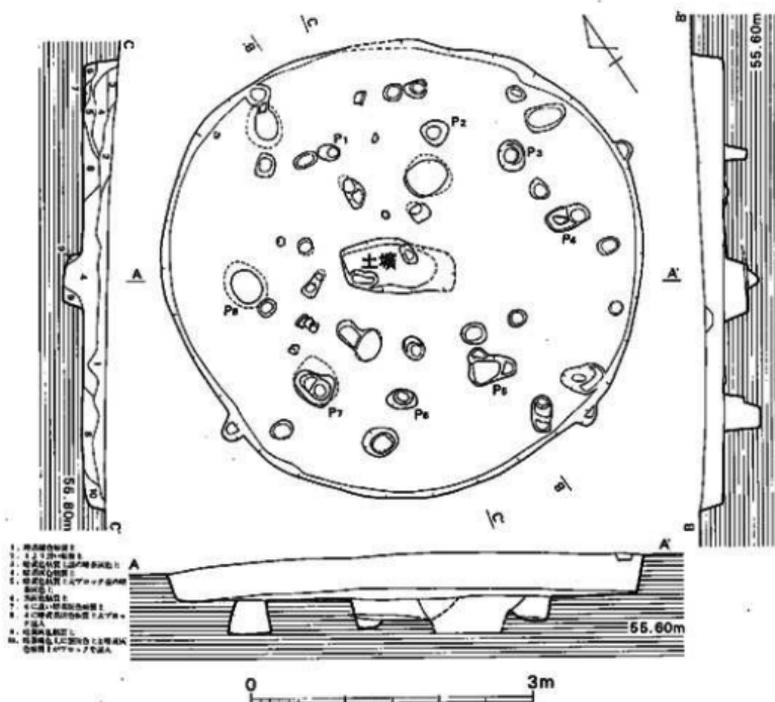
### 3. 弥生時代の遺構と遺物

#### (1) 竪穴住居跡(図版6, 第15図)

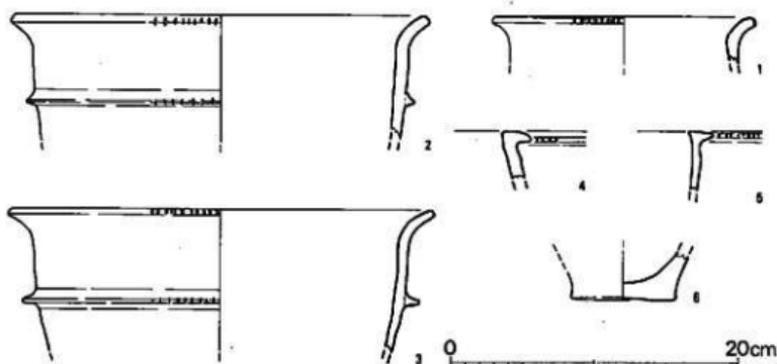
76号住居跡(第15図) 発掘区中央より西側から検出された円形プランの竪穴住居跡である。規模は上面で長径5.1m, 短径4.86mで, 若干楕円形気味である。深さは25~43cmを測る。床面中央には長方形の土壌があるが, 炉跡を示す焼土等はみられない。柱穴はかならずしも規則的ではないが, P1~P8の8本と思われる。埋土中からは若干の弥生式土器片と紡錘車・石錘・石鏝などが出土した。時期は弥生前期末である。

出土遺物(図版59・60, 第16~18図)

弥生式土器(1~6) いずれも甕の破片資料で, 大きく3つのタイプがある。いわゆる如意



第 15 図 76号住居跡実測図(1/60)



第 16 図 76号住居跡出土土器実測図(1/4)

形口縁のもの(1),  
如意形口縁の口縁  
下に1条の三角凸  
帯がめぐるもの  
(2・3), 口縁端  
部に1条の三角凸  
帯を付したもの  
(4・5)があり,  
口縁端部と凸帯端  
部には刻目が施さ

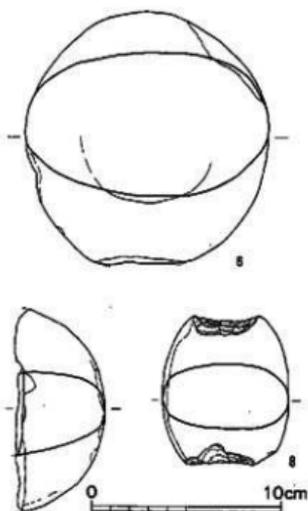


第 17 図 76号住居跡出土石  
器実測図1(1/2)

れている。復原口径1が18.4cm, 2が29.3cm, 3  
が29.9cmを測る。調整手法は風化のため不明なも  
のものもあるが, 胴部内外ともナデ調整, 口縁部内外  
と凸帯周辺はヨコナデで仕上げている。色調は1・  
2・6が茶褐色, 3が淡茶褐色, 4が黄褐色, 5  
が暗茶褐色を呈し, 焼成はいずれも良好である。  
2・3・5の外表面には煤の付着がみられる。6は  
平底の資料で, 底径7.3cmを測る。

土製品(第36図3) 土製紡錘車で, 径3.85cm, 身厚1.6cm, 重さ30.2gを測る。色調は淡茶褐色  
で胎土・焼成とも良好である。

(井上)



第 18 図 76号住居跡出土石器実測図2(1/3)

石器(図版51, 第17・18図) 石鏃・刃器状剥片・磨石・石錘が出土した。石鏃(1-4)はいずれも平基式で、1は長1.5cm, 重0.4g。2は正三角形に近く、両側縁とも内湾する。長1.4cm, 重0.4g。3は先端が左に寄る。重0.9g。4は部厚い剥片を素材としたもので、重2.6g。3は黒曜石で、他は安山岩製。5は断面台形の刃器状剥片で、両側縁とも刃こぼれが著しい。覆土中出土で漆黒の黒曜石製。6・7は磨石。6は中央部が若干平坦になり、周辺には敲石として使用した折の欠損が見られる。全面の磨痕は著しい。長径13.5cm, 厚7.6cm, 重1.9kg。7は円形を呈す欠損品。側面は部分的に磨きによる平坦面を有す。厚4.6cm。両者とも輝石安山岩製。8は長円形で、やや薄手の礫を素材とし、長軸上・下端とも、図示していない側を一回打ち欠き、その後を打面として反対側に細かい調整を加えた石錘。長7.9cm, 幅6.7cm, 厚3.5cm, 重260g。凝灰岩製。(木下)

## (2) 貯蔵穴(付図1)

1号貯蔵穴(図版7, 第19図) 76号住居跡の南西から検出された底面形が不整形の竪穴で、断面は逆台形状をなす。規模は底面で、89×88cm, 深さ76cmを測る。埋土上層から壺などの弥生土器破片が少量出土したのみである。時期は弥生前期後葉である。

### 出土遺物(第20図)

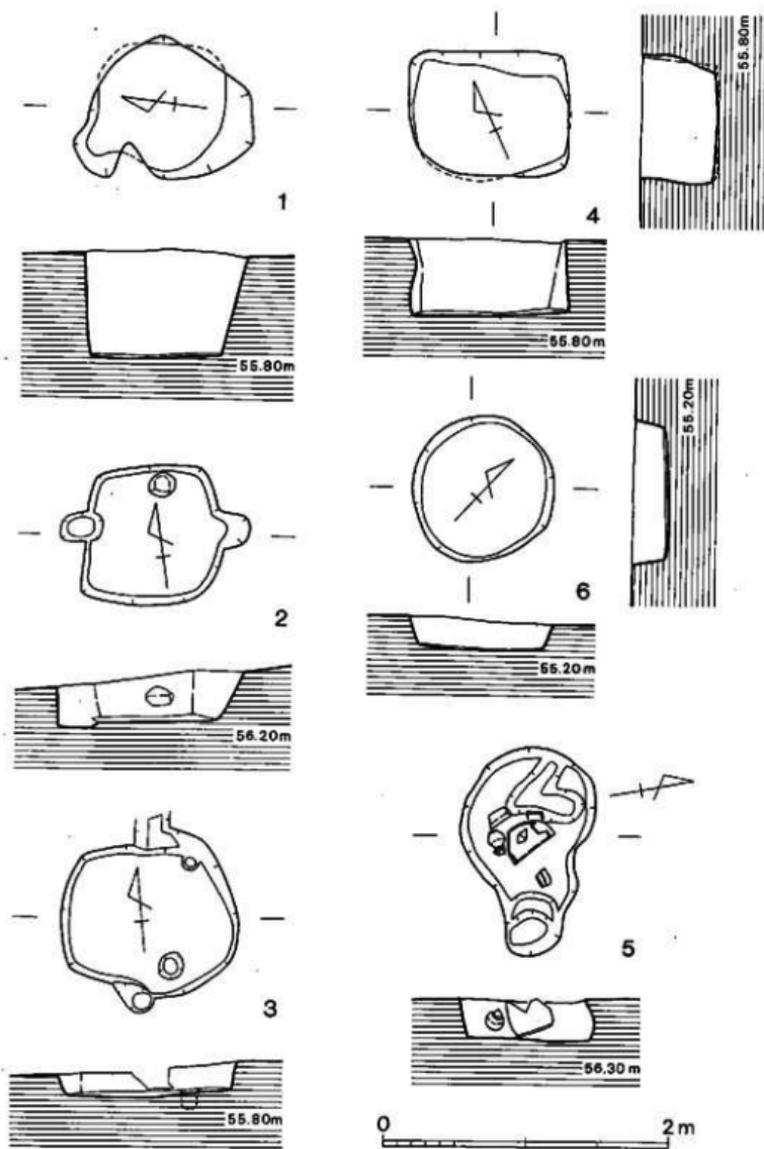
弥生式土器(7-9) いずれも壺の破片資料である。7は圓球形の胴部にための口頸部がつく壺で、胴部に1条のへら描き沈線がめぐる。底部内外がナデの他は、丁寧なへら磨きで仕上げた作りの良い土器で、胴部外面下半には部分的に刷毛目を、底部付近には指頭圧痕を残している。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。8・9とも口縁部付近の破片資料で、口縁部の屈折線が不明瞭な壺である。9は風化が著しく不明だが、8は頸部内外はへら磨き、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は8が褐色、9が茶褐色を呈し、焼成はいずれも良好である。復原口径は8が13.8cm, 9が15.6cm, 7は復原口径16.2cm, 復原胴部最大径23.6cm, 底径8.6cm, 復原器高26.2cmを測る。

2号貯蔵穴(図版7, 第19図) 1号貯蔵穴の北側から検出された底面形が隅丸方形プランをなす竪穴で、断面は逆台形状を呈す。規模は底面で、87×87cm, 深さ35cmを測る。出土遺物は弥生土器小片が若干出土したのみである。

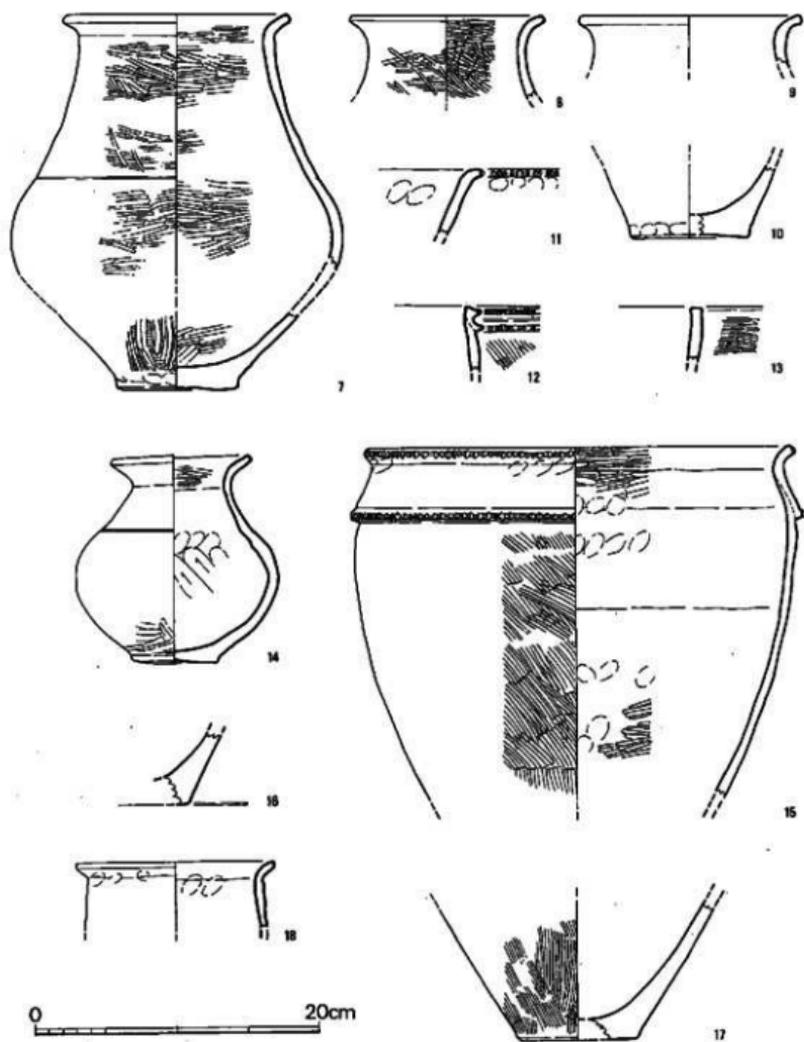
### 出土遺物(第20図)

弥生式土器(壺) 壺の底部破片で、復原底径8.4cmを測る。調整は胴部外面は風化のため不明だが、他はナデで仕上げ、底部付近には指頭圧痕を残している。色調は外面が暗赤褐色、内面は暗茶褐色を呈す。

3号貯蔵穴(図版8, 第19図) 2号貯蔵穴の北側から検出された竪穴である。底面形は楕円形を呈し、底面には2個のピットが穿たれている。規模は底面で113×96cm, 深さ17cmを測る。



第 19 圖 1-6 号貯藏穴実測図 (1/40)



第 20 图 黔东大山土器实测图 1 (1/4)

出土遺物は弥生土器小片が若干出土したのみである。

4号貯蔵穴（図版8，第19図） 76号住居跡の北側から検出された底面形が隅丸長方形プランで、底面が袋状を呈す竪穴である。規模は底面で110×81cm，深さ54cmを測る。埋土中からは若干の弥生土器小片と匙形土製品が出土しただけである。しかし、匙形土製品は調査中に盗難にあい紛失してしまった。時期は前期後葉と思われる。

#### 出土遺物（第20図）

弥生式土器（11～13） 11は緩やかに外反する如意形口縁の鉢，13は立ち気味の単口縁の鉢である。11の口縁端部には刻目が施されている。調整は11が体部内外ナデ，口縁部内外をヨコナデ，13は体部外面ヨコヘラ磨き，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は11の外面が暗茶褐色，内面は暗黄褐色，13は内外とも暗黄褐色である。12は口縁端部に2条の三角凸帯を付した甕の破片資料で，端部には刻目が施されている。胴部外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は外面が黒茶褐色，内面は茶褐色を呈し，焼成良好である。

（井上）

石器（第21図） 磨石1点が出土した。ほぼ円形を呈し，全面に磨痕が著しい。片面の中央部はそのため平坦に近い。長径10cm，厚4.6cm，重610gで，輝石安山岩製。

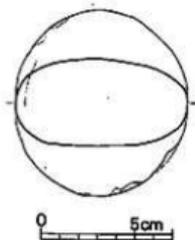
（木下）

5号貯蔵穴（図版9，第19図） 4号貯蔵穴の東側から検出された小形の竪穴で，一部ビットと複合している。底面形は不整形円形を呈し，底面中央より西側に偏して不整形なビットが穿たれている。埋土中からは，底面より若干浮いた状態で完形の壺と甕破片が出土した。時期は前期後葉である。

#### 出土遺物（図版59，第20図）

弥生式土器（14～16） 14は胴球形の胴部に強くすぼまる頸部がつく小形甕で，胴部には1条の沈線がめぐる。外面は風化しているがヘラ磨き仕上げのようである。頸部から胴部内面はナデ，口縁部内面へラ磨き，外面はヨコナデで仕上げている。色調は暗黄褐色を呈し，焼成も良好である。口径9.9cm，胴部最大径14.3cm，底径6cm，器高14.6cmを測る。15は胴部上半，16は底部の破片資料である。15は如意形の口縁下に1条の三角凸帯がめぐる甕で，口縁部と凸帯端部には刻目が施されている。胴部外面刷毛，内面はナデ，口縁部内外と凸帯付近はヨコナデし，内面はさらにヨコヘラ磨きで仕上げている。口縁部外面には成形時の指頭圧痕が残っている。胴部内面には炭化物の付着がみられる。色調は淡茶褐色を呈す。16は甕の底部小片で，内外ともナデで仕上げている。15と同様，内面には炭化物の付着がみられる。色調は外面が黄褐色，内面は暗茶褐色である。

6号貯蔵穴（図版10，第19図） 4号貯蔵穴の北側から検出された竪穴で，底面形は円形を呈



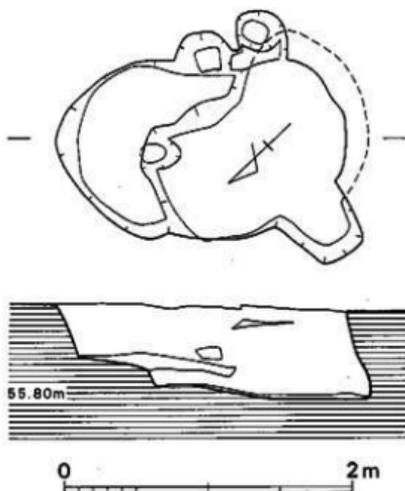
第21図 4号貯蔵穴出土石器実測図(1/3)

す。規模は底面で96×94cm、深さは約19cmを測る。遺物は嬰破片が出土した。

#### 出土遺物 (第20図)

弥生式土器 (17) 甕の底部付近の破片資料である。胴部外面は刷毛調整、内面と外底部はナデで仕上げている。内面には多量の炭化物が付着している。色調は外面が茶褐色、内面は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。復原底径8.4cmを測る。

7号貯蔵穴 (図版11, 第22図) 2号貯蔵穴の東側から検出された竪穴である。底面形は不整形円形を呈し、東壁側はピットと複合し不明だが、断面は袋状をなす。底面北東隅には小ピットが穿たれている。規模は底面で、134×100cm、深さ62cmを測る。遺物は弥生土器小片が若干出土したのみである。



第 22 図 7号貯蔵穴実測図(1/40)

8号貯蔵穴 (図版11, 第23図) 4号貯蔵穴の南東から検出された竪穴で、9号貯蔵穴を切って作られている。底面形は楕円形で、断面は逆台形状を呈す。規模は底面で93×80cm、深さ55cmを測る。遺物は何等出土しなかった。

9号貯蔵穴 (図版11, 第23図) 西側を8号貯蔵穴に切られた状態で検出された竪穴である。底面形は楕円形を呈し、壁面は直に立つタイプであろう。遺物は何等出土しなかった。

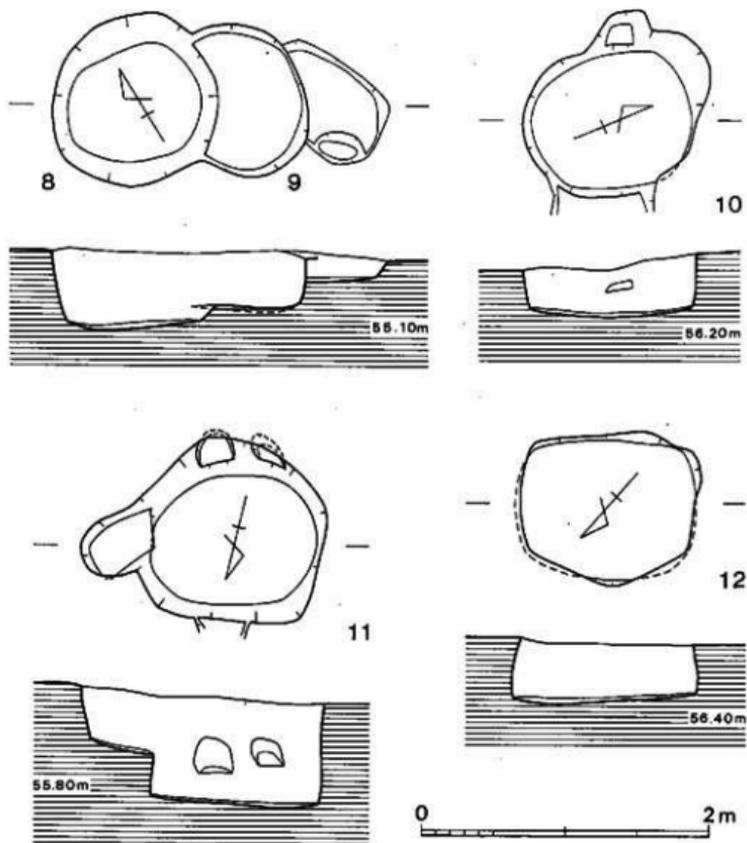
10号貯蔵穴 (第23図) 8号貯蔵穴の東側から検出された竪穴で、底面形は楕円形を呈し、断面は箱形をなす。規模は底面で110×94cm、深さ37cmを測る。遺物は何等出土しなかった。

11号貯蔵穴 (図版12, 第23図) 76号住居跡の床面下から検出された竪穴である。底面形は楕円形で、断面は弱いが袋状を呈し、両側壁面には2個のピットが穿たれている。規模は底面で115×90cm、深さ75cmを測る。遺物は何等出土しなかった。

12号貯蔵穴 (図版12, 第23図) 5号貯蔵穴の東側から検出された竪穴である。底面形は胴張り隅丸長方形を呈し、断面は典型的な袋状をなす。規模は底面で126×96cm、深さ42cmを測る。

#### 出土遺物 (第20図)

弥生式土器 (18) 如意形口縁の小形の甕で、復原口径14cmを測る。胴部内外ともナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は外面が暗茶褐色、内面が暗黄褐色を呈し、焼成良好である。

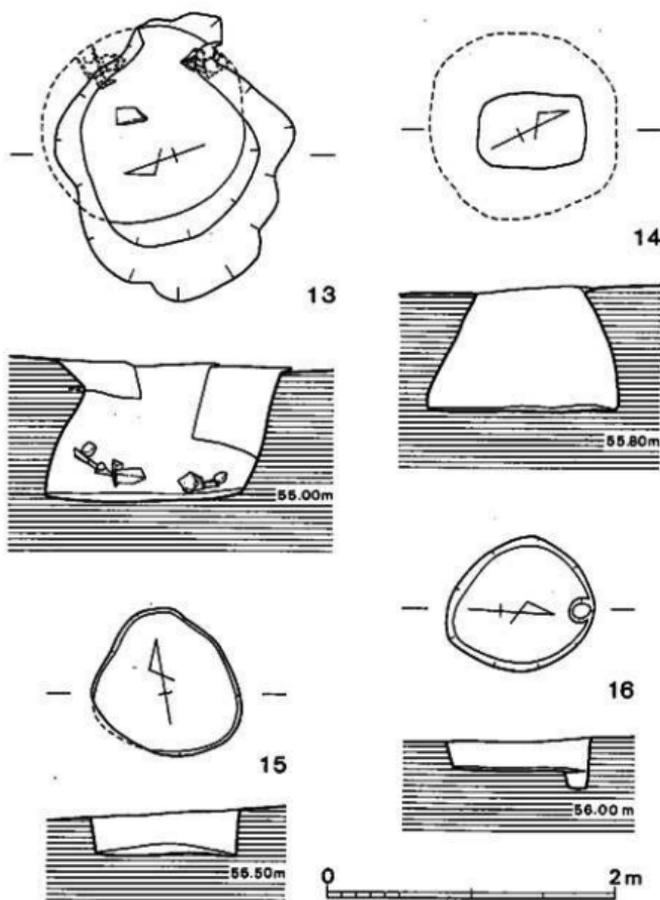


第 23 図 8-12号貯蔵穴実測図(1/40)

13号貯蔵穴(図版13, 第24図) 1号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で, 18号貯蔵穴を切っ  
て作られている。底面形は円形を呈し, 断面は袋状をなす。規模は底面で141×137cm, 深さは  
93cmを測る。遺物は土器片が少量出土したのみである。時期は前期後葉と思われる。

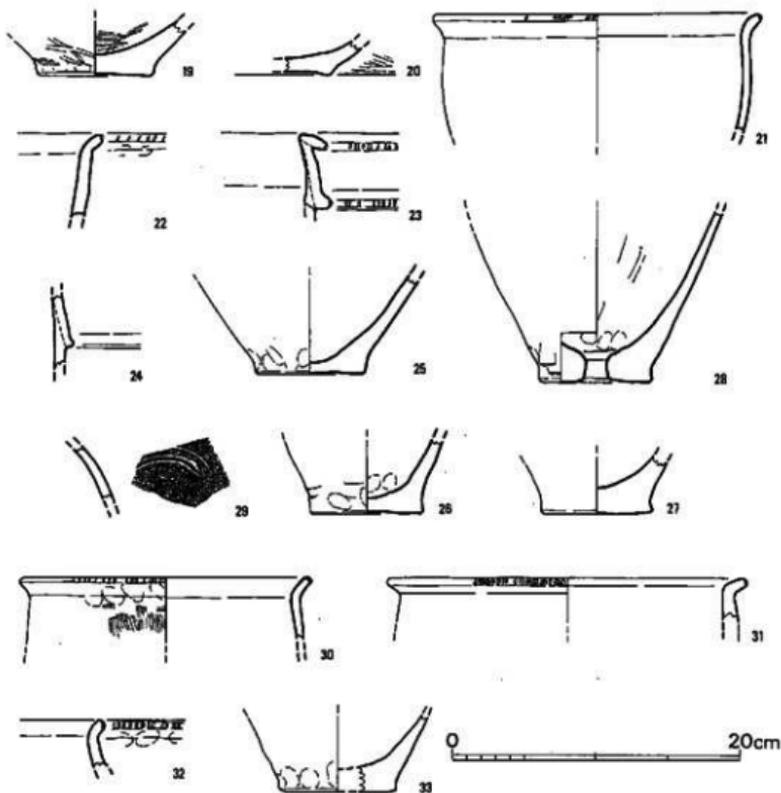
出土遺物(第25図)

弥生式土器(19-28) 19・20は壺の底部破片である。19は内外ともヘラ磨き, 20は外面ヘラ  
磨き, 内面はナデで仕上げている。色調は19の外面が茶褐色, 内面が暗茶褐色, 20は茶褐色で



第 24 図 13-16号貯藏穴実測図 (1/40)

ある。21-27は甕の破片資料で、21-24が口縁部付近、25-27は底部付近の資料である。21・22は如意形口縁の甕で、口縁端部には刻目を施している。23は口縁端部と口縁下に1条の三角凸帯を付した甕で、端部には刻目を付している。24も同じタイプの甕と思われる。調整は外面が風化が著しく不明な点が多いが、胴部内面ナデ、口縁部内外と凸帯付近はヨコナデで仕上げ



第 25 図 貯蔵穴出土上土器実測図 2 (1/4)

ている。色調は21の外表面が黒茶褐色、内面暗茶褐色、22が暗黄褐色、23が淡茶褐色、24が暗茶褐色を呈す。21の外表面と23の口縁下の凸帯付近には煤の付着がみられる。焼成はいずれも良好である。21は復原口径23cmを測る。25~27は平底で、27は他に比べ器肉が厚い。調整は風化で不明瞭な部分も残すが、内外ともナデて仕上げたものと思われる。25・26の外底部と26の内底部には成形時の指頭圧痕が残っている。色調は25が茶褐色、26が淡茶褐色、27が暗黄茶褐色を呈し、25の内面には炭化物が付着していた。底径は25・27が7.9cm、26が8cmを測る。28は甔の胴下半の資料で、底部には焼成後の穿孔がみられる。調整は内外ともナデ仕上げで、内面には炭化物が、外表面にはわずかであるが煤の付着がみられる。色調は暗黄赤褐色を呈し、焼成良好

である。

(井上)

石器(第26図) 横長の剃片を素材とした大型の石鐵脚部片で良質の黒曜石製。

(木下)

14号貯蔵穴(図版13,第24図) 12号貯蔵穴の南東から検出された竪穴である。底面形は不整形円形で、断面は強い袋状をなす。規模は底面で130×129cm,深さ88cm,上面での規模は76×53cmを測り、入口部が狭い残りの良い貯蔵穴である。遺物は若干の弥生土器片が出土したのみである。



第26図 13号貯蔵穴出土石器実測図(1/2)

#### 出土遺物(第25図)

弥生式土器(29・30) 29は壺の胴部片で、ヘラ描きによる3条の半円弧文が施されている。外面はヘラ磨き、内面はナデで仕上げた作りの良い土器である。色調は外面が暗茶褐色、内面は暗黄褐色を呈し、焼成は良好である。30は如意形口縁の甕で、口縁端部には刻目が施されている。調整は胴部外面を刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口縁部外面には成形時の指頭正痕が残り、外面全体に著しい煤の付着がみられる。色調は外面が暗茶褐色、内面は暗黄褐色を呈す。

15号貯蔵穴(第24図) 2号貯蔵穴の西側から検出された竪穴で、底面形は不整形円形を呈し、壁面は直に立ち上がる。規模は底面で96×92cm,深さ29cmを測る。遺物は弥生土器小片が若干出土したのみである。

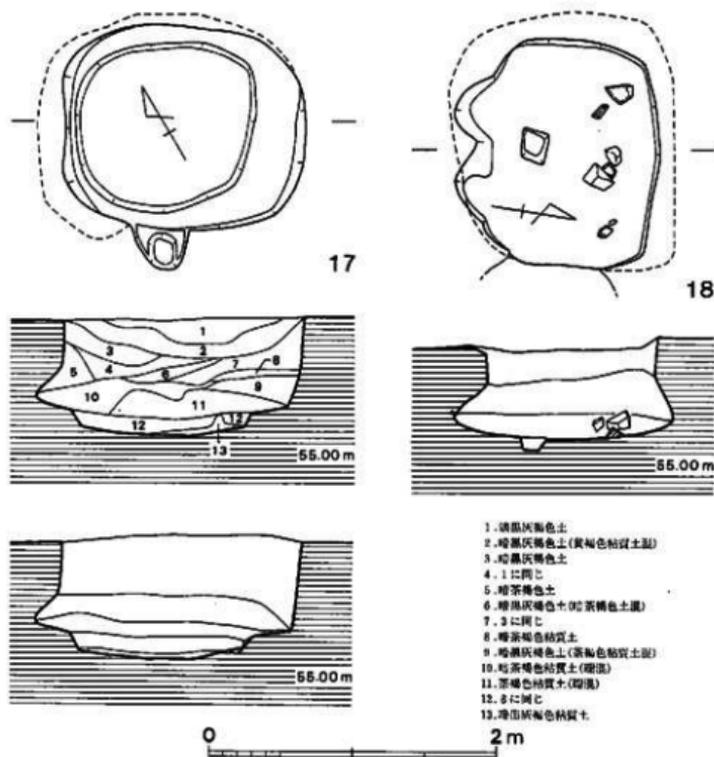
16号貯蔵穴(第24図) 13号貯蔵穴の南側、3号住居跡の東側から検出された竪穴である。底面形は不整形円形で、北壁側底面には小ビットが穿たれている。規模は底面で93×81cm,深さは21cmを測る。遺物は何等出土しなかった。

17号貯蔵穴(図版14,第27図) 13号貯蔵穴の南東側から検出された竪穴で、底面形は胴張隅丸長方形を呈し、底面はさらに一段下がっている。断面形は南壁が立ち気味であるが、他は袋状をなしている。竪穴内の土層堆積は、南北からの交互堆積を示している。規模は底面で180×150cm,深さ87cmを測る。遺物は何等出土しなかった。

18号貯蔵穴(図版14,第27図) 13号貯蔵穴に切られた状態で検出された竪穴である。底面形は胴張隅丸長方形を呈し、断面は強い袋状をなす。底面には中央より南壁に偏して小ビットが穿たれている。埋土中からは弥生土器破片が若干出土したのみである。規模は底面で176×153cm,深さ63cmを測る。

#### 出土遺物(第25図)

弥生式土器(31~33) いずれも甕の破片資料で、31・32が口縁部、33は底部の資料である。31は如意形口縁、32は明確ではないが、如意形口縁下に1条の三角凸帯がめぐる甕と思われる。31・32とも口縁端部には刻目が施されている。色調は31が外面暗茶褐色、内面暗黄褐色、32は茶褐色を呈し、焼成は良好である。31は復原口径25.2cmを測る。33は復原底径8.2cmを測る平底



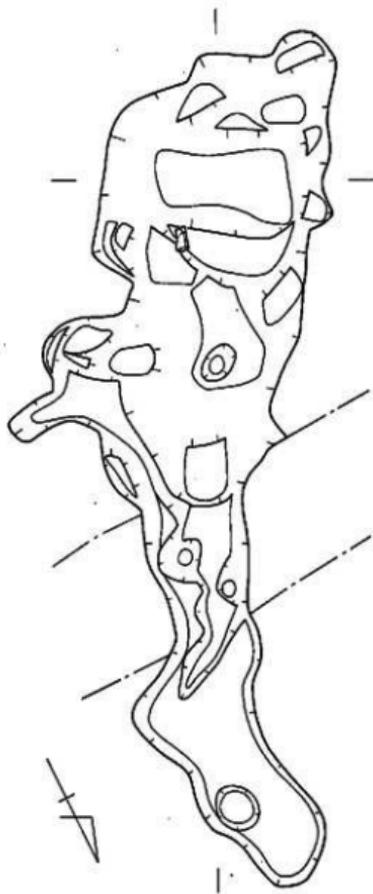
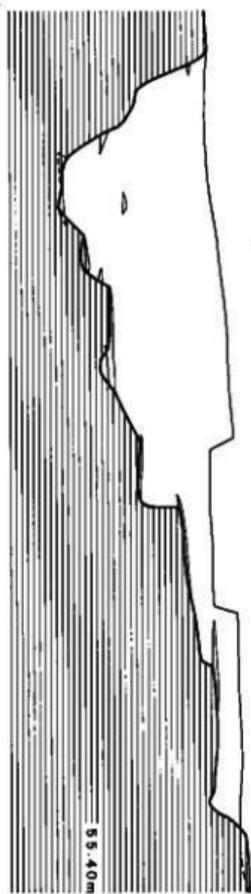
第 27 図 17・18号貯蔵穴実測図(1/40)

で、内外とも風化が著しいがナゲ仕上げのようである。底部付近外面には指頭圧痕がみられる。色調は外面が黄褐色、内面は暗茶褐色を呈す。

18号貯蔵穴(付図1) 18号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で、その大半は用地外のため未掘である。調査部分での底面規模は163×46cm、深さ69cmを測る。断面は袋状を呈す。遺物は何等出土しなかった。(井上)

### (3) 土 壌 (付図1)

1号土壌(第28図) 17号貯蔵穴の東側で、畝状造構下層から検出された不整形な土壌である。北から南に階段状に深くなり、南端部では108cmを測り、断面はU字状をなす。上面での規



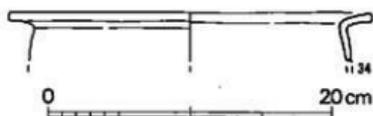
第 28 图 1号土壤实测图 (1/40)

楕は長径58.3cm, 短径(最大部)160cmを測る。  
遺物としては弥生中期前葉の土器片が若干出土しているだけである。

出土遺物 (第29図)

弥生式土器 逆L状口縁の甕で、復原口径  
25.9cmを測る。調整は器面風化のため不明で、色調は肌色を呈し、焼成はやや良である。

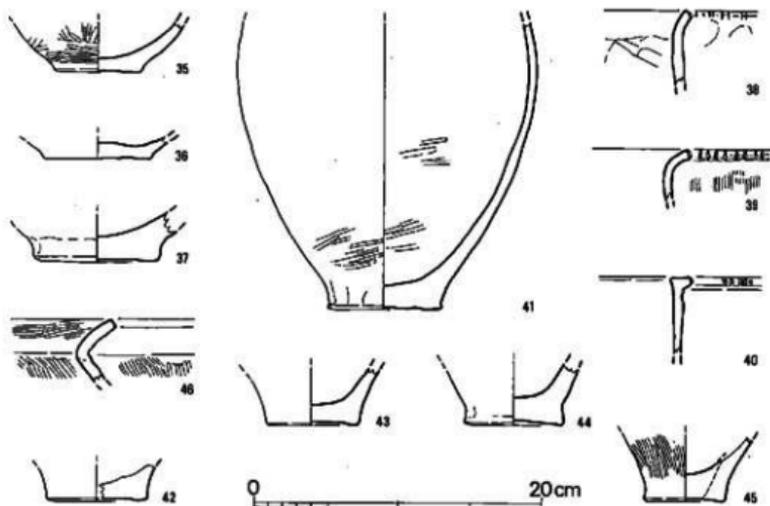
2号土壙(付図1) 6号貯蔵穴の西側から検出された不整形長方形プランの土壙で、北壁側と東壁側小口にはテラスを形成し、床面には多数のビットが穿たれている。長辺388cm, 短辺中央で105cm, 深さ約24cmを測る。埋土中から炭化物の小片多数と黒曜石のチップ多数が出土した。



第 29 図 1号土壙出土土器実測図(1/4)

(4) ビット・その他出土の遺物

弥生式土器(第30図) 35-37は壺の底部破片である。調整は35が胴部外面へラ磨き, 内面と外底部はナデ, 36は外面ナデ, 内面へラ磨き, 37は内外ともナデ仕上げである。35の内外には黒漆の塗布がみられる。色調は35が暗茶褐色, 36の外面が黄褐色, 内面が暗黄褐色, 37は外面暗黄褐色, 内面茶褐色を呈し, 焼成はいずれも良好である。復原底径は35が6.3cm, 36が7.6cm, 37は9.2cmを測る。38-40・46は甕の口縁部小片, 41は胴部下半, 42-45は底部の資料である。



第 30 図 ビット・その他出土土器実測図(1/4)

38・39は如意形口縁、40は口縁端部に1条の三角凸帯を付した甕、46はく字状口縁の甕である。38～40の口縁端部には刻目が施されている。調整は38・40が胴部内外ナデ、49は胴部外面刷毛、46は内外とも刷毛、口縁部内外はいずれもヨコナデで仕上げている。38・40・46の外面には煤の付着がみられる。色調は38・40が外面暗茶褐色、内面暗黄褐色で、39は淡茶褐色、46が暗黄褐色を呈し、焼成はいずれも良好である。41は底径7.9cm、胴部最大径20.9cm、残存器高20.5cmを測る甕で、器面は風化しているが内外とも部分的にヘラ磨きの痕跡を残している。色調は外面が茶褐色、内面は暗茶褐色である。胴部内面には炭化物の付着がみられる。42～45は平底の資料で、調整は45の外面が刷毛調整の他は、風化が著しく不明瞭である。色調は42が外面黒茶褐色、内面暗赤褐色、43が外面淡黄褐色、内面黄褐色、44・45は暗黄褐色を呈し、焼成良好である。底径は42が復原径7.1cm、43が6.6cm、44が7cm、45が5.7cmを測る。(井上)

#### 4. 古墳・奈良時代の遺構と遺物

この時代が本遺跡の中心をなす時期で、整穴住居跡80軒と掘立柱建物跡3棟からなる大集落跡である。発掘調査した路線範囲内では、少なくとも六群の住居跡群が弧状に配置されるなど、集落の構造を知る上で興味深い遺跡である。次に各住居跡を説明するわけであるが、住居に付設されたカマドについては、大きく次の

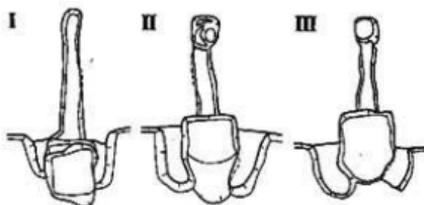
3つの形態があり、その分類に従って記述する。

カマド(第31図)大きく3つの形態がある。

I. 住居の壁を越えることなく、作り付け型のカマド。

II. 住居の壁から外側へ突出して作られ、突出した部分がごく僅かな形態で、燃焼部が壁ラインの内側にあるIとIIIの中間タイプのカマド。

III. 住居の壁から、かなり突出して作られたもので、燃焼部が壁ライン外にある突出型のカマド。



第 31 図 カマド分類図

また、I～IIIに共通する煙道部についても、4つの形態がある。まず煙道を作る方法で、堀り込み式とトンネル式に、煙道先端部(煙出口)を、一段堀り窪めたビット状のものであるものとないものとに大別できる。さらに、先端部のビットに、土器の入った例をいくつか見る。なお、支脚は殆ど遺存せず、カマド廃棄時に撤去したものと考えられる。詳細については表5を参照されたい。(渡辺)

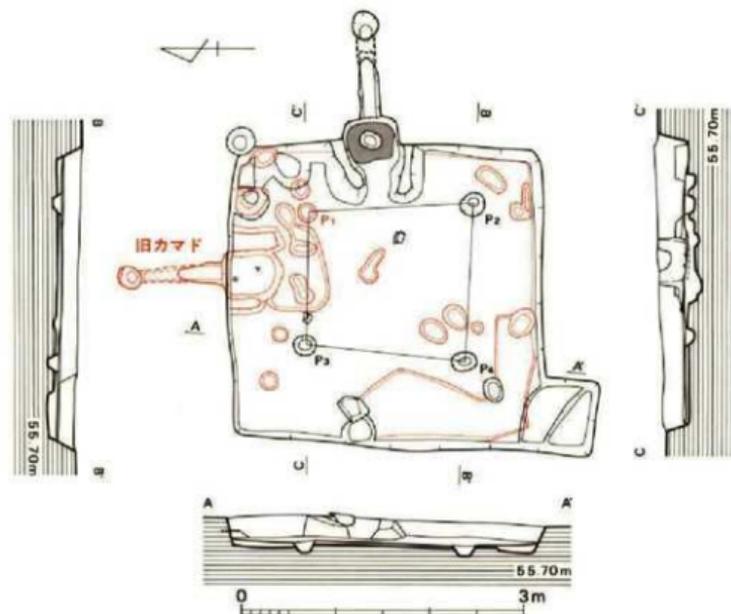
## (1) 竪穴住居跡

### 1号住居跡 (図版16, 第32図)

76号住居跡の南側から検出された方形プランの住居跡である。カマドは北壁と東壁の2カ所あるが、北壁側のカマドが当初に構築されたもので、その後、何等かの理由で東壁側に新たに改築されている。柱穴はP1～P4の四本柱で、床面は中央部付近が良く敷きしめられていた。住居跡の規模は、長径335cm、短径326cm、壁高16cmを測る。住居跡内埋土やカマド内・ピット内からは土師器甕・鉢・杯、須恵器杯蓋・高台付碗などの土器や土製紡錘車などが出土した。

(井上)

**カマド** (図版17, 第33・34図) 旧カマドは北壁中央部に設置され、東壁側に作り直された新カマドと共に遺存していた。旧カマドはI類に分類されるが、両袖共に住居貼床面まで削平されている。支脚は遺存せず、火床面は70×40cmを測り、床面より僅かに深くなり灰層も残っていた。カマド前庭部にも、径60cm程に炭化物が散乱していた。煙道は先細りのトンネル式で、



第 32 図 1号住居跡実測図 (1/60)

は水平で先端に6cm掘り窪めたビットを設け煙出口としている。新カマドはII型のタイプで遺存度のよいカマドであり、暗黄茶灰色の粘質土を両袖際の壁穴壁体と袖部にかけて貼りつけられ、カマドを作ったものと思われる。袖部内の土層に焼土等が含まれることから、旧カマド壁等を混入して作られた可能性が窺われる。燃焼部はほぼ水平で支脚抜き痕と思われるビットがあり、火床面も40×30cm程焼土化していた。煙道は先細りのトンネル式と思われ、先端部へ緩やかに下り、急傾斜で先方へ立ち上がって煙出しとしている。

(渡辺)

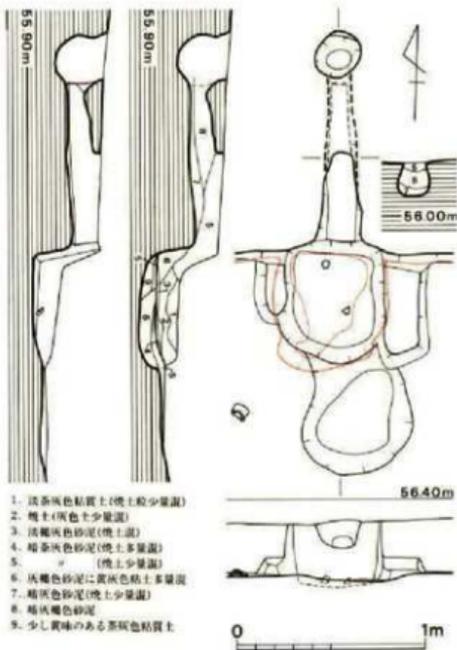
出土遺物 (図版62, 第35図)

土師器 (1~5) 1は大形, 2は小形の甕破片で、口縁部の器肉が厚く、胴部が張らないタイプである。

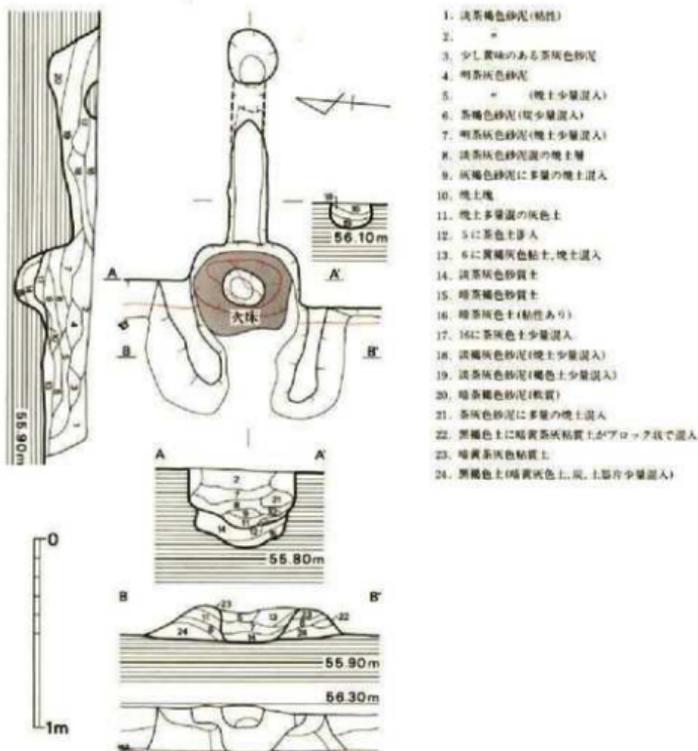
調整は胴部外面粗い刷毛, 内面は粗いヘラ削り, 口縁部内外はヨコナテ

で仕上げている。色調は1が黄褐色, 2が外面黄褐色, 内面暗黄褐色を呈し、焼成は良好である。3は復原口径31.6cmを測る浅鉢で、1と同様、器肉が厚い土器である。調整は胴部外面を粗い刷毛, 内面は粗いヘラ削りで、口縁部はヨコナテで仕上げている。口縁部内面に黒斑があり、胴部外面の一部には著しい煤の付着がみられる。色調は黄褐色を呈し、焼成良好である。4・5は器面が風化しているものの、内外にヘラ磨きの痕跡を残している杯で、底部の切り離し手法はヘラ切りである。復原口径は4が12.6cm, 5が15.8cm, 底径は4が8.6cm, 5が7.1cm, 器高は4が2.8cm, 5が3.8cmを測る。色調は4の外面が暗茶褐色, 内面が茶褐色, 5は暗褐色を呈し、焼成は良好である。

須恵器 (6~9) 6は扁平な杯蓋で、口縁端部のつまみ出しは不明瞭である。調整は天井部内外ナテ, 体部内外は回転ナテ仕上げである。復原口径12.8cm, 器高1cmを測る。7・8は小型の椀で、高台も低く畳付が外傾する。復原口径は7が11.2cm, 8が11.9cm, 器高は7が3.95



第 33 図 1号住居跡旧カマド実測図 (1/30)



第 34 図 1号住居跡カマド実測図 (1/30)

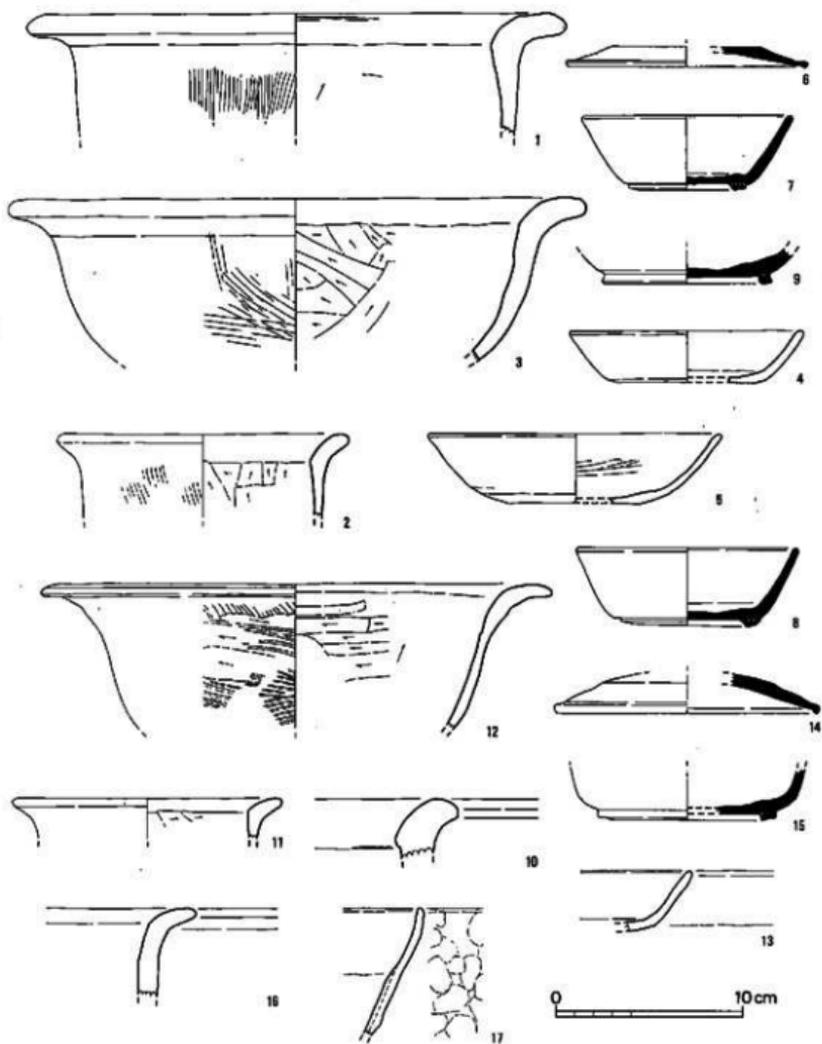
cm, 8が4.2cmを測る。9はひとまわり大きいタイプで、高台の畳付は平袒である。調整は体部内外を回転ナテ、内底部ナテ、外底部はへら切りのままである。復原高台径9cmを測る。

紡錘車(第36図1) 径4cm, 身厚1.5cm, 重30.2gを測る土製紡錘車である。(井上)

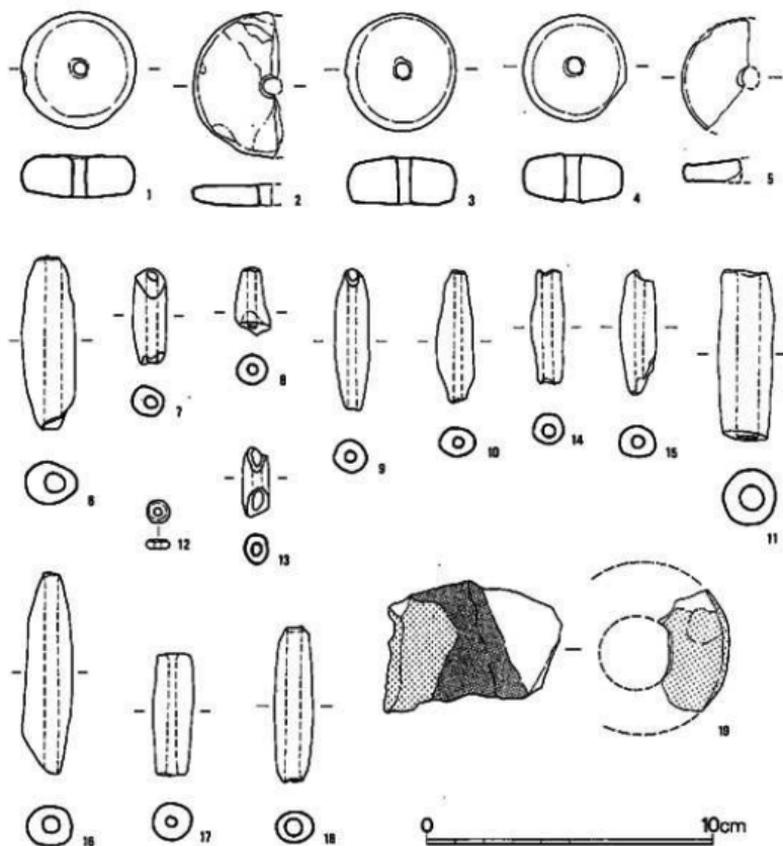
石器(第37図1) 4面の底面を有す仕上砥石で泥岩製。(木下)

## 2号住居跡(図版18・19, 第38図)

1号住居跡の北東から検出された長方形プランの住居跡で、3号住居跡の南西隅の一部を切って作られている。カマドは東壁中央に付設され、柱穴はP1～P4の4本である。住居内南東隅付近の床面上からは完形の鉄鎌1点が出土した。住居の規模は、東西415cm, 南北345cm, 壁高は20cmを測る。埋土中からは土師器甕・鉢・杯、須恵器杯蓋・碗などの破片と鉄斧が出土



第 35 图 1~3 号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 38 図 紡錘車・土差・小玉・羽口実測図 (1/2)

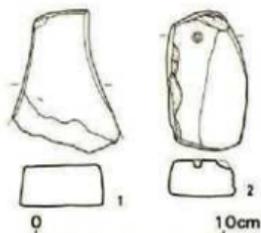
した。また、カマド内からは不明鉄器が出土している。

(井上)

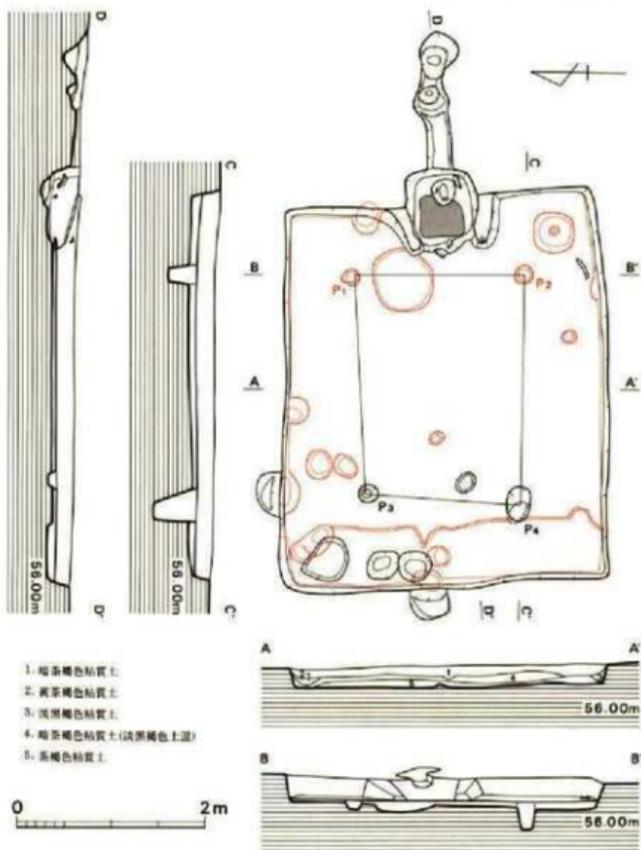
カマド (図版19, 第39図) II 類のカマドで、構築時に貼りつけられたと思われる暗黄色粘質土が奥壁に遺存し、上部が堅く焼けていた。また、燃焼部には支脚抜痕が遺存し、支脚を固定した粘土と思われる焼土塊があり、火床面は50×50cmと広く遺存する。左右の袖下に焼土・灰等を含んだ窪みがあり、築造時の湿気取りとも窺われる。煙道はほぼ平行で上り気味に掘られ、途中のピットは雨水防止の対策なのか。このタイプの煙道は29号住居にも見られる。(渡辺)

出土遺物（第35図）

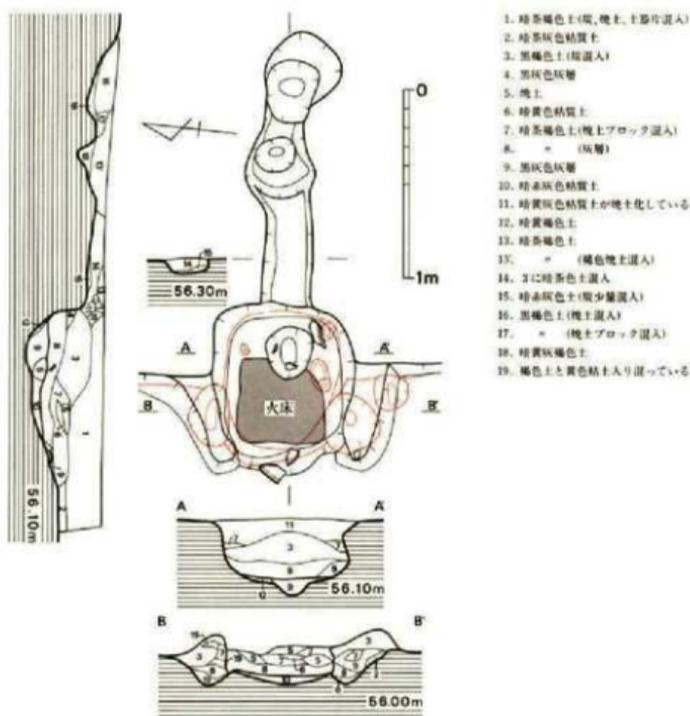
土師器（10～13） 10は大形，11は小形の甕破片で，11は復原口径14.6cmを測る。胴部内面はへら削り，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。12は強く外反した口縁をもつ浅鉢で，復原口径27.6cmを測る。調整は胴部外面を粗い刷毛のあと上半部はさらに横へら削りしている。内面は粗いへら削りで，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調



第 37 図 1・2号住居跡出土石器実測図(1/3)



第 38 図 2号住居跡実測図(1/60)

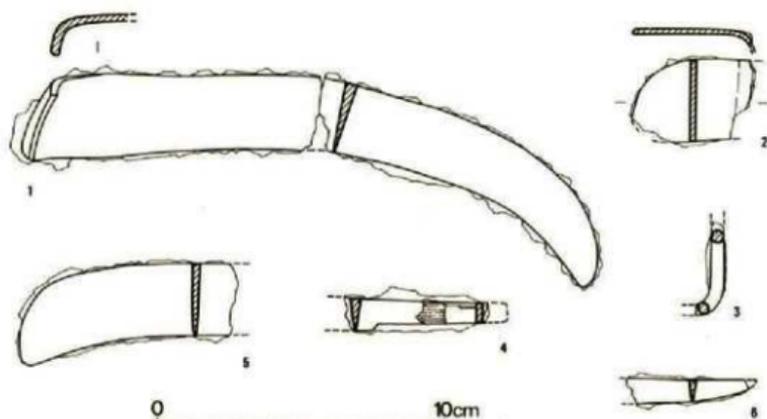


第 39 図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)

は暗茶褐色を呈し、外面には煤の付着がみられる。13は杯の小破片である。器面は風化しているが、体部内外はヨコナデのあと部分的にヘラ磨きしているようである。外底部はヘラ削りである。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

須惠器 (14・15) 14は杯蓋で、口縁端部のつまみ出しは不明瞭ながらも三角形状を呈すタイプで、復原口径は13.8cmを測る。口縁部内外は回転ナデ、体部内外はナデ仕上げである。15は復原高台径が9.6cmを測る高台付碗の破片資料である。高台は低く、畳付けは外傾している。調整は内外底部がナデ、体部内外と高台付近は回転ナデしている。

鉄器 (第40図1・2) 1は大きく湾曲した鉄鎌の完形品で、全長205mm、中央刃部幅25mm、背厚4mmを測る。2は右端部が折れ曲っているものの、刃部などもなく用途不明の鉄器である。カマド内出土。(井上)

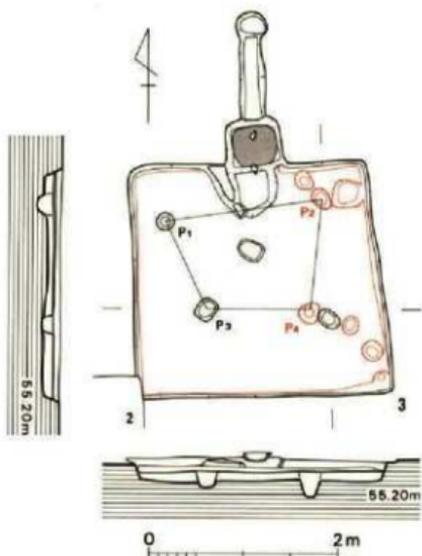


第 40 図 出土石器実測図 (1/2)

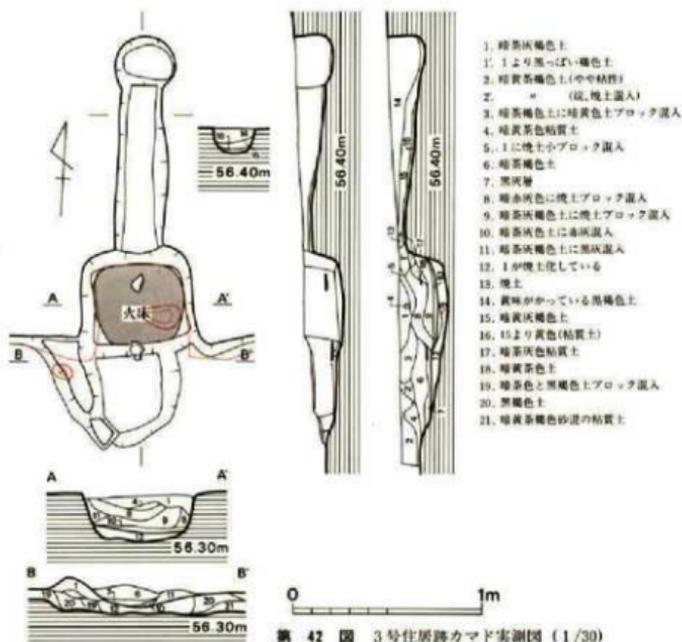
石 器 (第37図 2) 隅丸長方形を呈し、上端部に未貫通の一孔を有す。孔は径 5 mm、深 4 mm。表裏・全側面とも研磨される用途不明の石器。長 7.5 cm、幅 4.2 cm、厚 2.1 cm、重 132 g で緑泥片岩製。(木下)

3号住居跡 (図版20, 第41図) 2号住居跡に南西隅を切られた状態で検出された方形プランの小形の住居跡である。カマドは北壁中央に付設され、柱穴は P1 ~ P4 の 4 本と思われる。床面は全体に良く敲きしめられていた。住居の規模は東西 260 cm、南北 250 cm、壁高 8 cm を測る。遺物は土師器小片が若干出土したのみである。(井上)

カマド (図版20, 第42図) III類のカマドで、燃焼部は床面より二段に掘り込まれ、完全に住居外にある。カマド壁体は粘質土であるのに、焼土化した面もなく、火床面は 40×40 cm を測る。袖部は 2号住居のような袖下の窪みは



第 41 図 3号住居跡実測図 (1/60)



第 42 図 3号住居跡カマド実測図 (1/30)

なく、胎土に焼土塊等を含んでいた。煙道は、ほぼ平行の下り勾配で先端部にピットを設け、煙出しとしている。

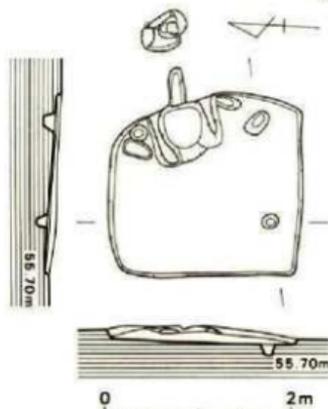
(渡辺)

#### 出土遺物 (第35図)

**土師器 (16・17)** 16は甕の口縁部小片である。17は焼塩壺の小破片で、内外ともナデで仕上げている、外面には指頭圧痕が顕著に残っている。色調は褐色を呈し、焼成良好である。(井上)

#### 4号住居跡 (図版21, 第43図)

76号住居跡の西側から検出された方形プランの小型住居跡である。カマドは東壁の中央より北側に偏して付設されている。床面はさほど敷きしめられておらず、柱穴も不明である。住居の



第 43 図 4号住居跡実測図 (1/60)

規模は南北207cm，東西197cm，壁高は8cmを測る。遺物は何等出土しなかった。(井上)

**カマド**(図版21, 第44図) I類のカマドで，殆ど削平されて遺存度が悪い。カマド際の竪穴壁に暗黄灰褐色粘質土を貼りつけ，袖部も同粘質土で盛っている。燃焼部は床面より僅かに掘り込まれていたが，支脚や火床面は確認出来なかった。煙道は煙道口より40cmしか遺存せず，やや離れたピットは木の根等に攪乱されてはいるが，位置的にも煙出口と思われる。(渡辺)

#### 5号住居跡(図版21・22, 第45図)

1号住居跡の西側から検出された方形プランの小型の住居跡で，西壁側は畑の開削で欠失している。カマドは東壁中央に付設されているが，柱穴は4号住居跡と同様に不明である。カマド左袖付近から土師器杯，カマド内から土師器甕と丸瓦片が出土した。(井上)

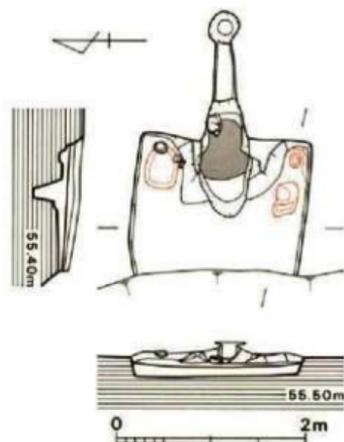
**カマド**(図版22, 第46図) 比較的遺存度の良いII類のカマドである。燃焼部は床面より緩やかに窪み，内壁は堅く焼けているが，火床面ははっきりせず黒灰が多く堆積する。カマド内出土の小型甕は支脚として使用されたのであろう。袖部は竪穴壁に暗黄茶褐色粘土を貼りつけ，暗黄灰色粘質土と暗茶褐色土を盛っている。カマド壁に見られる小ピットは，カマド構築時の杭痕だろうか。煙道は先細りで水平に掘り込まれており，先端に10cm程掘り窪めたピットを設け煙出口としている。煙道側壁体は全部が堅く焼土化し，煙道口の天井に使用されたと思われる瓦片がカマド内より出土した。(渡辺)

出土遺物(図版62, 第47図)

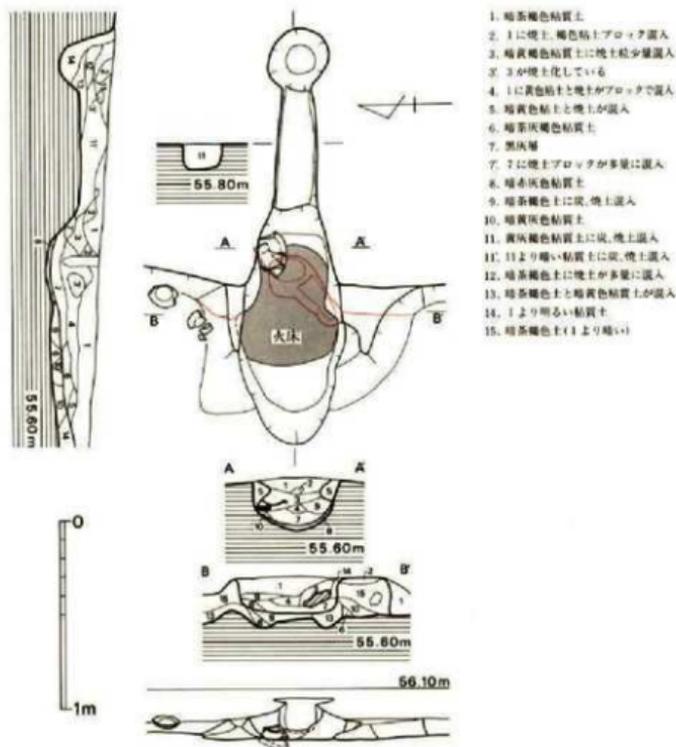
土師器(18~22) 18・19は小型の甕である。18



第44図 4号住居跡カマド実測図(1/30)



第45図 5号住居跡実測図(1/60)

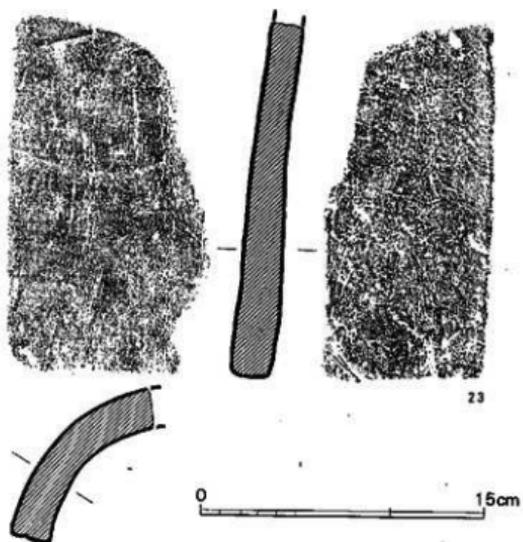
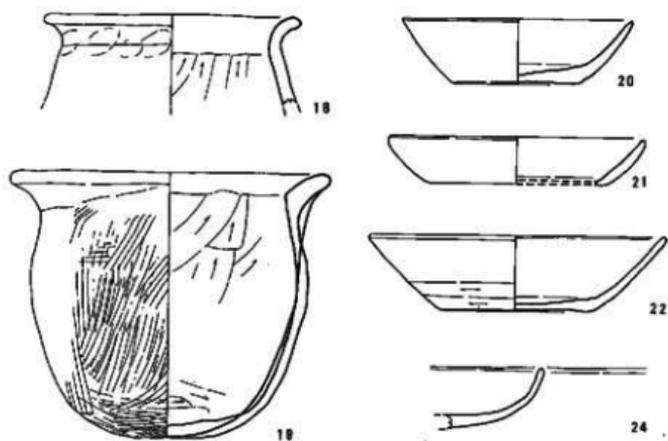


1. 暗茶褐色粘質土
2. 1に焼土、褐色粘土がアロクで混入
3. 暗茶褐色粘質土に焼土が少量混入  
3が焼土化している
4. 1に黄色粘土と焼土がアロクで混入
5. 暗茶褐色粘土と焼土が混入
6. 暗茶褐色粘質土
7. 黒灰層
7. 7に焼土がアロクが多量に混入
8. 暗赤灰色粘質土
9. 暗茶褐色土に灰、焼土混入
10. 暗黄灰色粘質土
11. 黄褐色粘質土に灰、焼土混入
11. 11より暗い粘質土に灰、焼土混入
12. 暗茶褐色土に焼土が多量に混入
13. 暗茶褐色土と暗黄褐色粘質土が混入
14. 1より明るい粘質土
15. 暗茶褐色土(1より暗い)

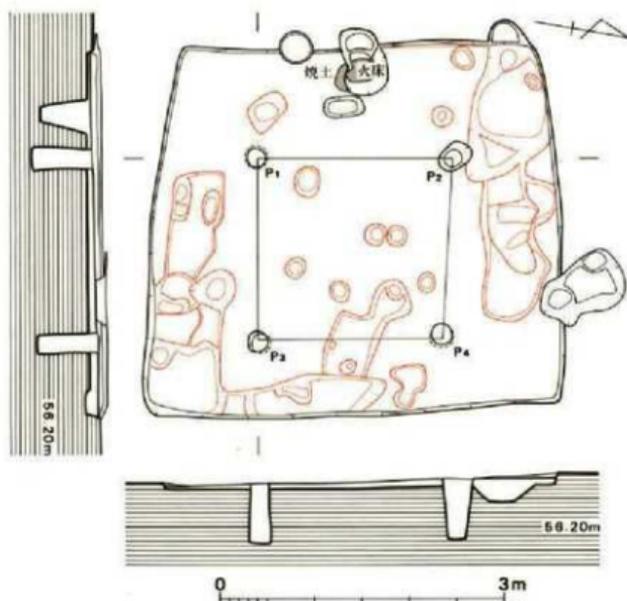
第 46 図 5号住居跡カマド実測図 (1/30)

は19に比べ胴の張りが強い筈で、復原口径は13.6cmを測る。19は復原口径17cm、器高14.1cmを測り、胴部外面は粗い刷毛、内面はへら削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げた焼成良好な土器である。19は外面全体に、18は外面から口縁部内面まで煤の付着がみられる。20～22は杯で、大中小がある。調整は21が風化のため不明の他は、体部内外を回転ナデ、内底部はナデで、底部の切り離し手法はへら切りである。色調は20・21が淡褐色、22が淡茶褐色を呈す。口径は20が12.4cm、22が15.9cm、底径は20が7.15cm、22が8.2cm、器高は20が3.45cm、22が4cmを測る。21は復原口径が13.7cm、底径9.5cm、器高2.5cmである。

丸瓦 (23) 丸瓦の破片資料である。器面は風化が著しいが、外面は縄目文のタタキ、内面には布目が残っている。色調は淡黄灰色で、軟質である。カマド内出土。(井上)



第 47 图 5·6 号住居跡出土土器·瓦実測图 (1/3)



第 48 図 6号住居跡実測図 (1/60)

#### 6号住居跡 (図版22, 第48図)

2号住居跡の東側から検出された長方形プランの住居跡である。全体に削平が著しく残りは悪いがカマドは西壁中央に付設されている。床面には多数のビットが遺存しているが、柱穴はP1～P4の4本である。床面はかなり固く敲きしめられていた。遺物は土師器小片が若干出土したのみである。 (井上)

**カマド** 殆ど削平されているが、II類に分類できるカマドである。燃焼部は床面より一段窪められ、35×20cmの火床面が遺存する。袖部、煙道部は遺存せず、辛うじて左袖の位置に暗茶褐色粘質土が焼けて残っていた。 (渡辺)

#### 出土遺物 (第47図)

**土師器** (24) 杯の小破片で、口縁部付近には黒斑がある。調整は口縁部内外がヨコナデ、体部外面へら削り、内面はナデで仕上げている。色調は黄褐色で、焼成良好である。 (井上)

#### 7号住居跡 (図版23・24, 第49図)

D群にあって55号住居跡の南西隅を切った状態で検出された長方形プランの小型住居跡である。カマドは削平され、ほとんど残っていなかったがわずかに残る火床から西壁側に付設され

ていたことが判る。床面はさほど固くなく、柱穴も不明である。住居の規模は東西255cm、南北215cm、壁高7cmを測る。カマド内からはフィゴの羽口小片が出土している。(井上)

**カマド** 殆ど削平され、住居壁外側30cmの所に火床面と思われる焼土があり、Ⅲ類に分類されるカマドと窺われる。(渡辺)

#### 7号住居跡 (図版23, 第50図)

E群の北半部にあつて50・75号住居跡を切った状態で検出された長方形プランの住居跡である。北壁側は新しい溝で欠失し、カマドも不明である。柱穴はP1～P4の4本である。現存部での住居の規模は、東西506cm、南北387cm、壁高は南壁で16cmを測る。遺物としては土師器甕、須恵器甕・椀などの破片が少量出土している。

#### 出土遺物 (第51図)

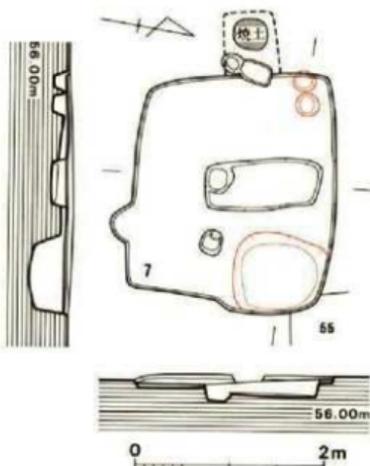
**土師器** (25・26) 両者とも小型の甕で、26は胴部中位をつまみ出して把手を作り出している。25は復原口径15.3cmを測り、口縁部内面には煤の付着がみられる。

**須恵器** (27～29) 27・28は小型の椀で、復原口径は27が10.6cm、28が11cmを測る。調整は体部内外を回転ナデで、色調は27が外面暗灰色、内面灰色、28は外面黒灰色、内面灰色を呈し、焼成は両者とも良好である。29は甕の口縁部小破片である。色調は黒灰色を呈し、焼成良好である。27・29は住居跡下層出土のものである。(井上)

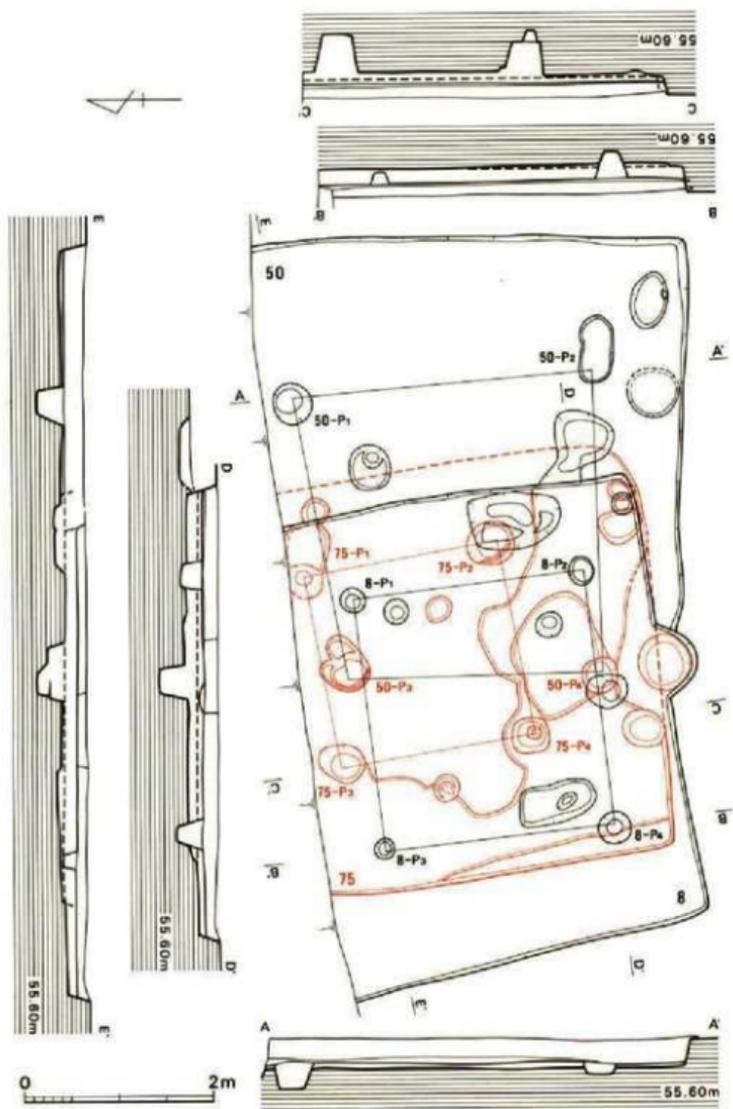
#### 8号住居跡 (図版24, 第52図)

8号住居跡の南側に近接して検出された方形プランの住居跡で、東壁側は38・78号住居跡に切られている。カマドは西壁中央よりやや北側に付設されている。柱穴はP1～P4の4本で、床面は堅固に敷きしめられていた。住居の規模は、現存部で東西410cm、南北440cm、壁高は11cmを測る。遺物は土師器甕、須恵器杯蓋・椀などの破片が少量出土している。調査時には、38・78号住居跡を切って作られた住居跡と考えたが、出土遺物などの検討の結果、間違いであることが判った。(井上)

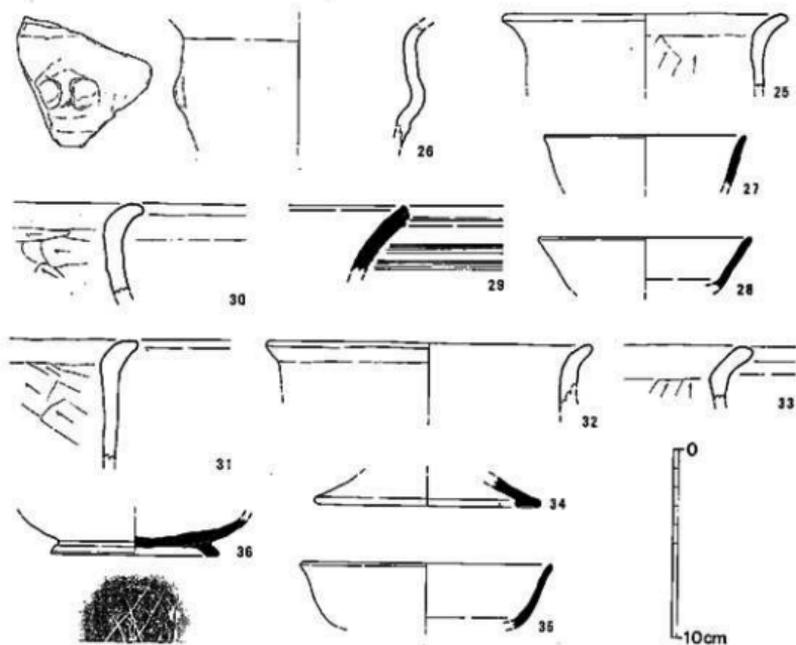
**カマド** (図版24, 第53図) I類のカマドで、燃焼部は床面より僅かに窪まり60×50cmの火床面がある。その後方中央に10×8cmのビットがあり、支脚抜き痕と思われる。袖は基底部に暗緑灰色の砂質土を用いて暗茶褐色の粘質土で覆って作られている。煙道は削平されて煙道口は



第49図 7号住居跡実測図(1/60)



第 50 图 8·50·75号住居跡实测图 (1/60)



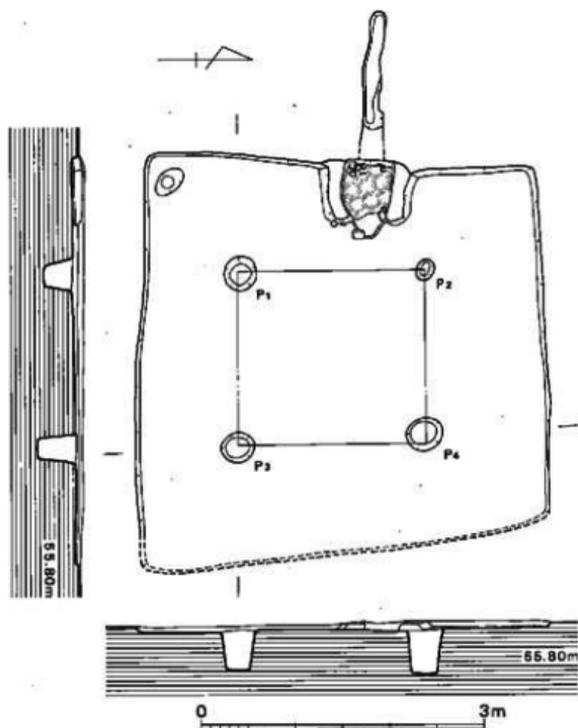
第 51 図 8・9号住居跡出土土器実測図(1/3)

遺存しないが、地山が堅く焼土化しているので煙道底面と思われる。やや先細りで下り勾配に作られ、雨水防止としていたのだろう。(渡辺)

#### 出土遺物(第51図)

土師器(30-33) いずれも甕の破片資料で、口径のわかるのは32のみで、復原口径17.4cmを測る小型の甕である。調整は胴部内面へラ削り、外面は風化が著しく不明、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。いずれも胴部外面から口縁部内面にかけて二次加熱により赤変し、31・32の口縁部内面には煤の付着がみられる。30が住居跡下層、31がカマド右袖内、33がカマド内、32は住居跡埋土から出土した。

須恵器(34-36) 34は低い身受けのかえりをもつ杯蓋で、復原口径11.4cmを測る。調整は口縁部内外を回転ナデ、体部外面ナデ仕上げである。色調は外面が淡灰色、内面は黒灰色を呈し、焼成良好である。35・36は高台付椀で、35が復原口径13cm、36は復原高台径8.8cmを測る。調整は35が体部内外を回転ナデ、36は内底部をナデ、外底部はへら起こしのままで、体部外面と高



第 52 図 9号住居跡実測図 (1/60)

台付近は回転ナデで仕上げている。外底部にはヘラ記号がみられる。

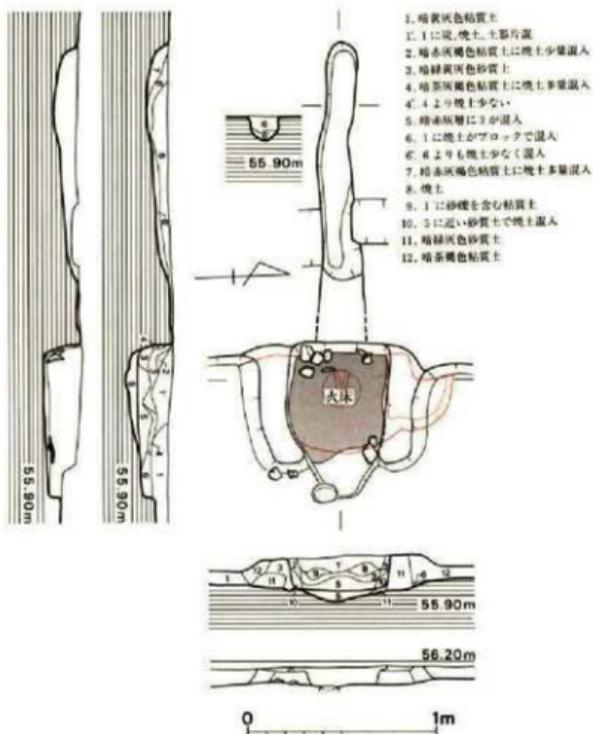
(井上)

10号住居跡 (図版25, 第54図)

9号住居跡の東側に近接して検出された方形プランの小型の住居跡である。床面上には焼土や炭化物が散乱していて、火災を受けた住居と思われる。床面は堅く敲きしめられていたが、柱穴と思われるビツは検出できなかった。カマドは北壁中央に付設されていて、残りの良いカマドである。住居の規模は、東西325cm, 南北325cm, 壁高は30cmを測る。遺物としては土師器甕・杯、須恵器杯蓋・皿・椀などの破片と土錘が出土している。

(井上)

カマド (図版25, 第55図) 北壁中央に付設された大型で、典型的なⅢ類のカマドである。燃焼部は広く床面よりやや下り、壁体は堅く焼土化し、天井部の崩壊と思われる粘質土の残骸が



第 53 図 9号住居跡カマド実測図 (1/30)

詰っていた。支脚抜き痕のピットが遺存し、火床面下にも灰層があって、作り直しが窺われる。両袖は下層に径40cmのピットがあり、焼土・灰等を埋め込み暗黄褐色粘質土を盛っている。右袖は竪穴壁体を10cm程掘り込み、粘土を貼りつけている。煙道は先細りのやや緩やかな下り勾配のトンネル式で、壁体は天井共に堅く焼土化し、底には黒灰が少し残っていた。先端のピットは従来とは違って規模も大きく、後世の遺構と重複したのであろうか。カマド奥壁にカマド作り時の杭痕とも思える小ピット3個を検出した。(渡辺)

#### 出土遺物 (第56図)

土師器 (37~39) 37はく字状口縁で胴部の張った中型の甕で、復原口径16.8cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面へら削り、口縁部内外はヨコナデである。38は大型甕で、復原口径28.4

cmを測る。調整は胴部内面へら削り、外面は風化のため不明で、口縁部内外はヨコナテしている。口縁部内面上端には煤の付着がみられる。色調は37・38とも暗茶褐色を呈す。39は杯破片で、復原口径15.8cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明で、色調は褐色である。38はコマ下付近、37・39は住居跡下層出土のもので、38号住居跡に帰属するものかもしれない。

須恵器 (40~44) 40~42は杯蓋の破片資料である。いずれも口縁端部のつまみ出しが不明瞭な三角形を呈すもので、復原口径は40が14.2cm、41が17.2cmを測る。調整は口縁部内外を回転ナテ、天井部外面は回転へら削りのあと粗いナテ、内面はナテ仕上げである。43は復原口径14.2cm、器高1.25cmを測る皿である。口縁部内外は回転ナテ、内底部はナテ、外底部はへら切り離しのままである。色調は青灰色で、焼成良好である。44は高台付椀で、復原口径15.45cm、高台径10cm、器高3.7cmを測る。調整は体部内外回転ナテで、色調は外面黒灰色、内面黒灰色を呈し、焼成は良好である。

土 鍾 (第36図 6) 紡錘形の土鍾で、長径6cm、短径1.9cm、重さ19.75gを測る。(井上)  
11号住居跡 (図版26, 第54図)

北側を10号に、東側を12号住居跡に切られ、その大半を欠失した住居跡で、カマドの位置や柱穴も不明である。現存部での規模は、東西245cm、南北160cm、壁高5cmを測る。遺物は土師器壺・甗、須恵器高杯などの破片が少量出土した。

出土遺物 (第56図)

土師器 (45・46) 46は小型壺、45は胴部下半を欠失しているため明確ではないが、口縁部の形状から甗と思われる。45・46は胴部上半の破片資料で、復原口径は45が22.6cm、46は14.4cmを測る。調整は胴部内面へら削り、外面は風化のため不明、口縁部内外はヨコナテで仕上げている。45は内外とも風化が著しく調整は不明である。色調は45が褐色、46が淡褐色を呈す。

須恵器 (47) 高杯の脚部資料で、復原脚部径9.6cmを測る。器端部は不明瞭ながらも三角形状につまみ出している。脚部内外は回転ナテ調整である。色調は淡灰色で、焼成は良好である。

(井上)

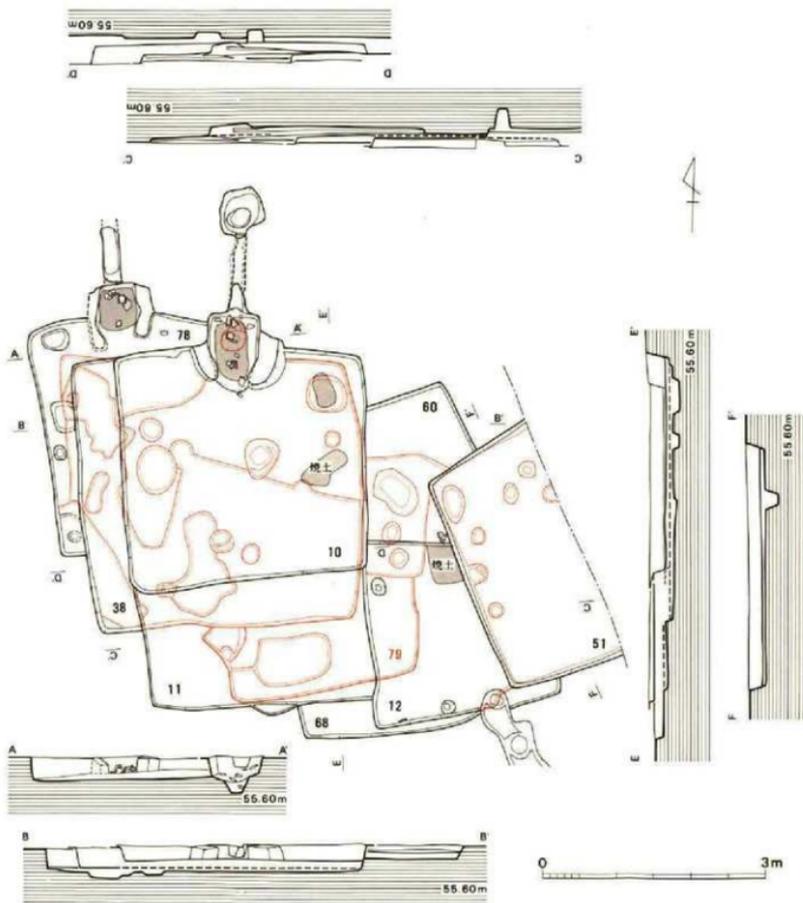
12号住居跡 (図版26, 第54図)

11・38・60・68号住居跡を切って、10・51号住居跡に切られた状態で検出された小型の住居跡である。カマドは半分欠失しているが北壁側に付設されている。ピットは2個遺存するものの柱穴は不明である。住居の規模は、東西255cm、南北255cm、壁高13cmを測る。遺物は土師器と須恵器の破片が若干出土したのみである。

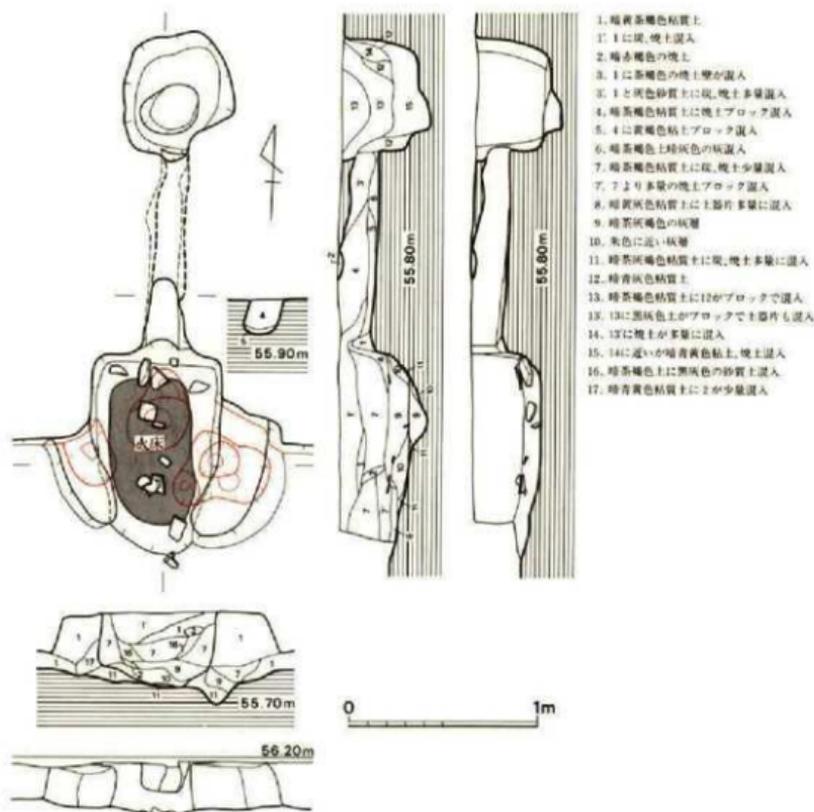
出土遺物 (第56図)

土師器 (48) 壺の口縁部の破片資料で、復原口径は22cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成はやや良である。

須恵器 (49) 大きめの高台付椀の破片で、復原高台径は11cmを測る。調整は内外とも回転ナ



第 54 图 10-12·38·51·60·68·78·79号住居跡実測図 (1/60)



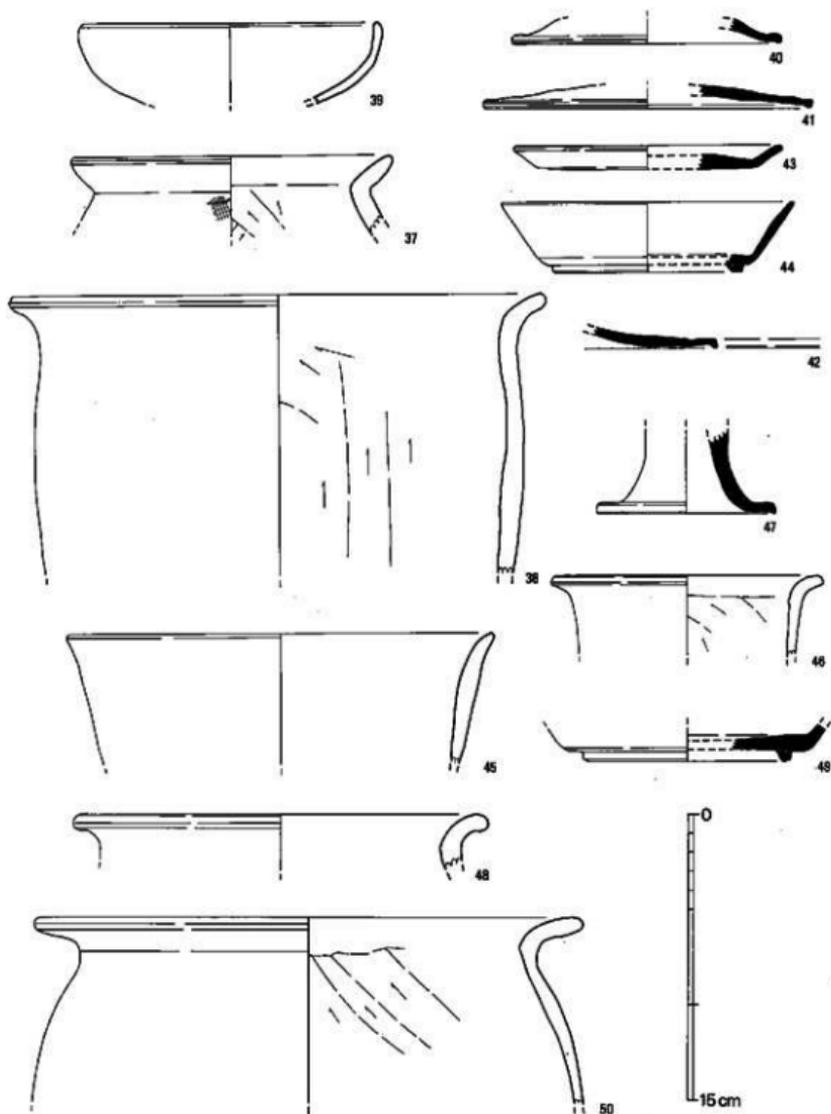
第 55 図 10号住居跡カマド実測図 (1/30)

テで、色調は外面が暗灰色、内面は淡灰色を呈す。

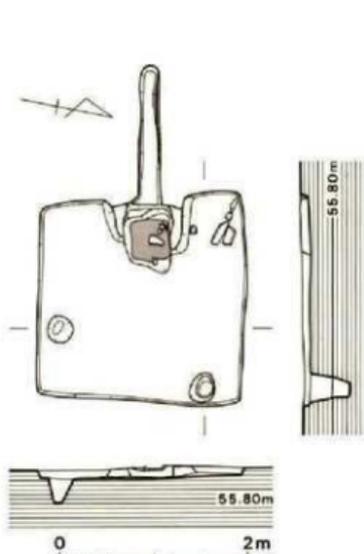
(井上)

### 13号住居跡 (図版27, 第57図)

E群にあって12号住居跡の西側、9号住居跡の南側に近接して検出された方形プランの小型住居跡である。カマドは西壁中央に付設されている。床面は堅く敲きしめられていたものの、柱穴といえるピットは検出できなかった。床面北西隅からは河原石3個が置かれたような状態で出土しているが性格は不明である。住居の規模は、東西225cm、南北220cm、壁高9cmを測る。



第 56 图 10~13号住居跡出土土器実測图 (1/3)



第 57 図 13号住居跡実測図 (1/60)

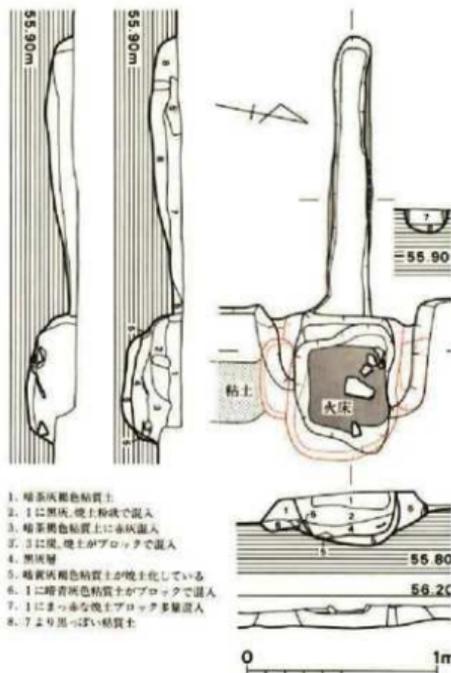
遺物は土師器片が若干出土したのみである。(井上)

カマド (図版27, 第58図) 1類のカマ

ドで燃焼部は床面より一段と深く掘り込まれ、火床面は40×40cmで支脚は確認出来ない。右袖は暗青灰色砂泥の粘質土で盛られ、カマド内側面は堅く焼土化していた。左袖は暗茶灰褐色粘質土で盛られ、袖横の床面に暗青灰色の粘質土が散乱していた。煙道はやや先細りで緩やかな下り勾配の掘り込み式と思われる。辛うじて残っている壁面に、4～5mm厚さに貼りつけられた粘土があり、堅く焼土化している。その壁体に、幅5～6mmの凹凸状の板目痕が明瞭に残っていた。煙道を上から掘り込み、箱状に板で囲んで粘土を貼ったものと推測される。これと同じような煙道に板目痕を有するカマドが外之隈遺跡でも調査されている。(渡辺)

出土遺物 (第56図)

土師器 (50) 甕の胴上半の破片で、復原口径は、29.2cmを測る。胴部外面は風化のため調整は不明だが、胴部内面は粗いヘラ削り、口縁部内外やヨコナデで仕上げている。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好である。カマド煙道内から出土した。(井上)



第 58 図 13号住居跡カマド実測図 (1/30)

14号住居跡 (図版28, 第59図)

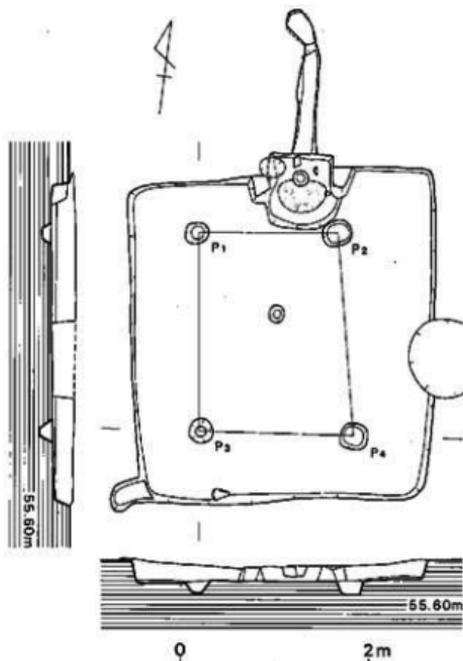
13号住居跡に北壁の一部を切られ、71・73号住居跡を切った状態で検出された長方形プランの小型住居跡である。カマドは北壁中央よりやや東寄りに付設されている。柱穴は北東側のビット(P2)がカマドに近すぎるが、P1～P4の4本柱と思われる。床面はさほど敲き締められていなかった。住居の規模は、東西325cm、南北352cm、壁高は20cmを測る。遺物は土師器甕・椀、須恵器杯蓋・椀などの破片や土鏝が出土している。(井上)

カマド(第60図) II類のカマドで一部をビットに壊されている。燃焼部は、床面とはほぼ水平で奥壁近くに径16cmの支脚抜き痕があり、その前面に50×40cmの火床が遺存していた。奥壁から15cm程は天井部の崩壊と思われる焼土化した粘質土が多量に落ち込んでいた。袖は遺存状態が悪く、壁際から30～40cm遺存していた。左袖は暗黄灰色粘質土等で盛り、右袖には焼土ブロックを含んでいた。袖の補強材の役目を果していたのであろうか。煙道は先細りのやや緩やかな下り勾配で、先端は左方へ折れてビットを設け、煙出口としている。

出土遺物 (第62図)

土師器 (51～57) 51～56は甕の破片資料で、51～53が中型甕、54・55が小型甕、56は底部破片である。51・53は胴の張らないタイプで、52は胴部が強く張る甕である。復原口径は50か22cm、52が18.8cm、53が18.3cm、54・55は14.4cmである。調整はいずれも器面の風化が著しく不明瞭であるが、胴部内面へラ削り、外面は刷毛、口縁部内外はヨコナデと思われる。53と55の口縁部内面には煤の付着がみられる。57は高台付椀で、復原高台径は7.9cmを測る。調整は器面風化のため不明である。色調は淡茶褐色を呈し、焼成はやや良である。

須恵器 (58・59) 58は身受けのかえりをもつ低平な杯蓋で、復原口径15.2cm、残存器高1.42cm



第59図 14号住居跡実測図 (1/60)

を測る。調整は回転ナデで、色調は黒灰色を呈し、焼成良好である。58は復原口径13cmを測る輪で、高台が付くものと思われる。体部内外は回転ナデで、色調は黒灰色を呈す。焼成は堅緻である。

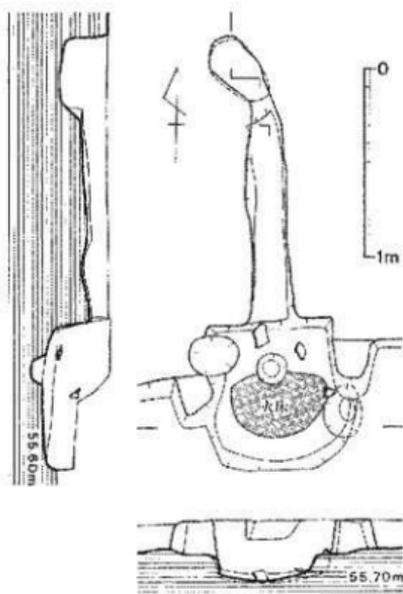
土 鍾(第36図7) 紡錘形の土甕であるが、上下が欠損している。現存部での長さは3.3cm、中央部の径は1.1cmを測る。

(井上)

#### 15号住居跡 (図版28、第63・64図)

E群にあって14号住居跡の南西側から検出されたやや歪みのある方形プランを呈す住居跡である。カマドは西壁中央に付設され、柱穴はP1-P4の4本からなる。床面はかなり固く敲き締められていて、カマドの前には焼土や灰が掻き出されていた。住居の規模は東西380cm、南北385cm、壁高30cmを測る。遺物としては土師器壺・杯、須恵器杯蓋・高台付碗・高杯・甕などの破片と羽口小片が出土している。(井上)

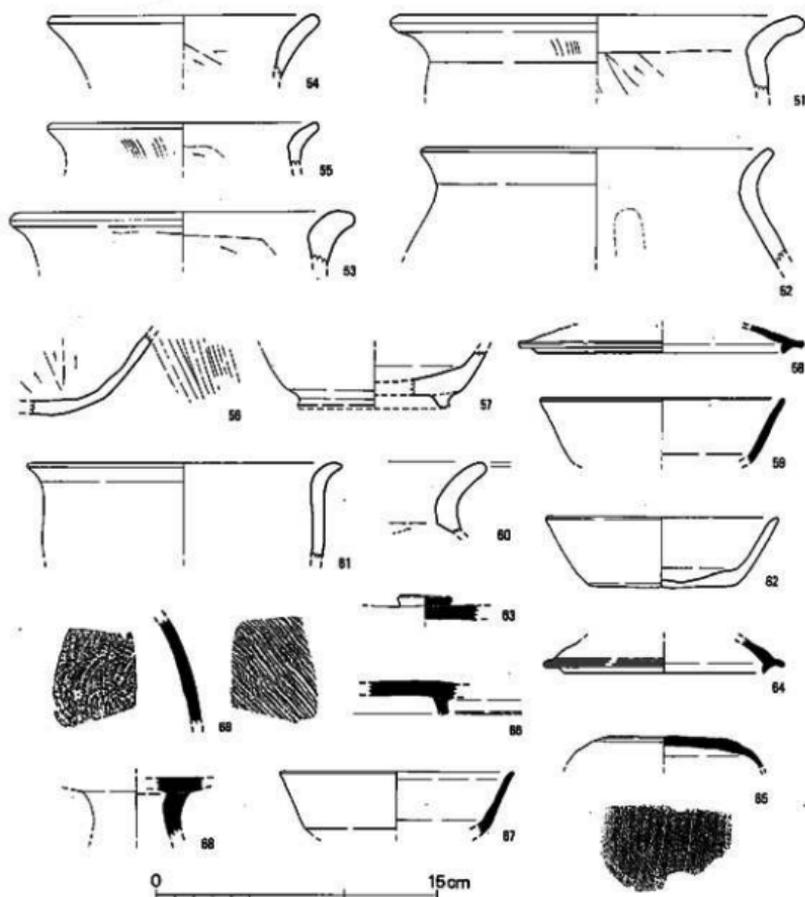
カマド(第65図) 上部は削平されているものの、遺存度の良いH型のカマドである。燃焼部は床面より一段窪ませ、火床面が35×40cm程残っていた。支脚は遺存せず、カマド内壁は焚口付近まで堅く焼けて灰層の上に天井部の崩壊と思われる残骸が落ち込んでいた。灰層には小さい骨片が多く含まれていたことから、鳥類を焼いて食べていたのであろうか。袖は淡黄褐色粘質土で盛られ、カマド前庭部から左袖下へ炭・皿灰等が散乱し、カマドの作り直し等が窺われる。煙道は先細りの緩やかな下り勾配で振り込まれ、先端に長さ30cm、深さ10cmの長円形のビットを設けて挿出口



第 60 図 14号住居跡カマド実測図 (1/30)



第 61 図 住居跡群全景



第 62 図 14・15号住居跡出土土器実測図 (1/3)

としている。煙道部はカマドから30cm程が焼土化していた。

(渡辺)

出土遺物 (第62図)

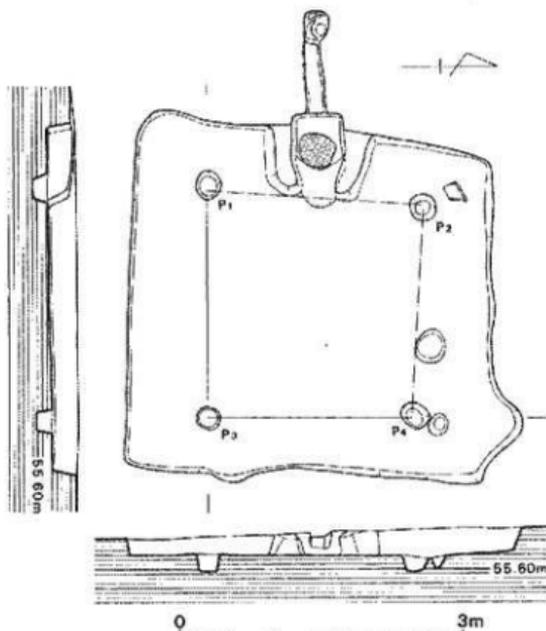
土師器 (60-62) 60・61は甕で、60は胴部の張ったタイプ、61は張らない通有のものである。61は復原口径16.7cmを測る。62は杯で、復原口径12.3cm、器高3.7cmを測る。器面は風化が著し

く調整は不明だが、底部の切り離しはヘラ切りと思われる。色調は黄褐色を呈し、焼成はあまり良くない。

須恵器 (63-69) 63は低平な宝珠形罐付近の破片である。色調は淡灰色で、焼成はやや軟質である。64は身受けの返りをもつ低平な杯蓋で、復原体部径10.15cmを測る。65は口縁部を欠くが64と同じタイプの杯蓋と思われる。天井部内面にはヘラ記号がみられる。調整は64が体部内外を回転ナデ、65は天井部外面を回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外は回転ナデで仕上げている。色調は64が灰色、65が暗茶灰色を呈し、焼成は良好である。66は大型の甗の高台部の小破片である。67は復原口径12.5cmを測り、調整は体部内外回転ナデ仕上げである。色調は暗灰色で、焼成堅緻である。68は杯部から柱状部にかけての小破片で、69は甗の胴部破片である。胴部外面は平行タタキ、内面は青海波タタキで仕上げている。(井上)

#### 16号住居跡 (図版30, 第66図)

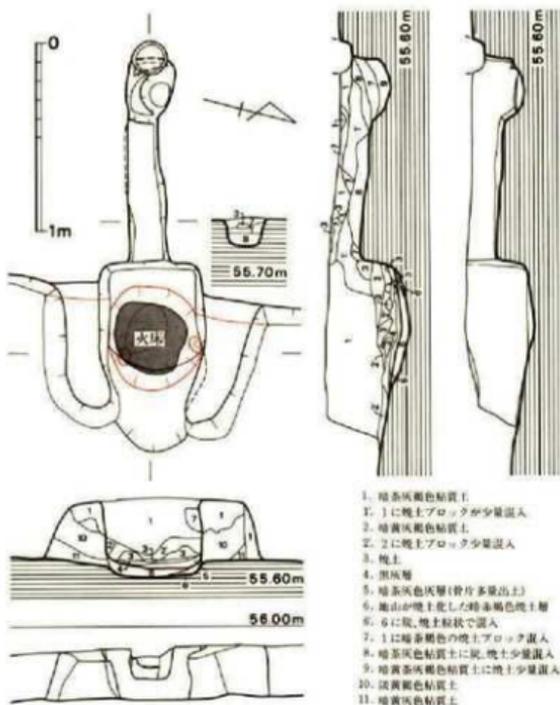
15号住居跡の北側において、61



第 63 図 15号住居跡実測図 (1/60)



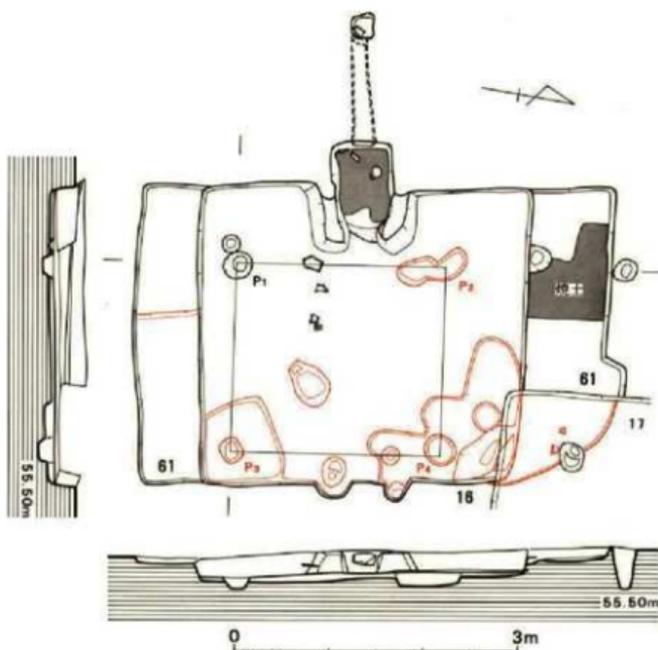
第 64 図 15号住居跡全景



第 85 図 15号住居跡カマド実測図 (1/30)

号住居跡を切って、17号住居跡に北東隅を一部切られた状態で検出された長方形プランの住居跡である。カマドは西壁中央に付設されている。柱穴は南壁と東壁側に片寄りすぎるが、P1～P4の4本かもしれない。床面は堅固に締っていた。住居の規模は東西350cm、南北320cm、壁高23cmを測る。遺物としては土師器甕・杯、須恵器甕・杯蓋・椀などと鉄製釣針の破片が出土した。

カマド (図版30, 第67図) 15号住居カマドと同様、遺存度の良いⅢ類のカマドである。燃焼部は床面より深く窪まり、火床面も50×60cmと広く遺存していた。カマド内壁は堅く焼け、奥隅に多量の焼けた粘土が詰まり天井部の崩壊と思われる。これらの焼土塊には補強材の苧が混入されているのが見受けられた。桶は土器片や焼土塊を含んだ暗緑灰色粘質土で盛られ、焚口近くまで遺存していた。煙道は先細りで下り勾配に掘り込まれ、焼土化した天井部のズリ落ち



第 66 図 16・61号住居跡実測図 (1/60)

が見受けられることから、掘り込み式で作られたと思われる。先端のビットは15cm深く掘り下げ、底から30×14cmの須恵器の胴部破片が出土した。このビットの内壁も上部が焼土化していた。(渡辺)

#### 出土遺物 (第68図)

**土師器 (70~73)** 70~71は甕の口縁部付近の破片資料で、72は小型甕である。全体に器面の風化が著しいため調整は不明瞭だが、胴部内面はへら削りである。70の胴部内面上半には煤の付着がみられる。復原口径は70が23.2cm, 71が27.2cm, 72が13.6cmを測る。73は杯の破片資料で、復原口径16.6cmを測る。調整は器面風化のため不明で、色調は茶褐色を呈す。

**須恵器 (74~80)** 小型の宝珠形鍾を有す蓋である。天井部外面は回転へら削りのあと粗いナデ、内面はナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成堅緻である。75~78は高台付樽で、75・76が小型、77・78が大型のタイプである。復原口径は75が12.2cm, 76が12.5cm, 77は16cmを測る。高台はいずれも低く外方にふんばっている。調整は体部内外を回転ナデ、内底部ナデ、

外底部はヘラ起しのままである。79は斐の口縁、80は胴部の破片資料である。79の口縁端部は凹線状をなしている。復原口径28.4cmを測り、色調は灰白色で、焼成は軟質である。80は外面を格子目、内面は平行タタキを施している。色調は灰色で、焼成は堅緻である。

#### 鉄器(第40図3)

釣針を思わせる湾曲した鉄器片で、断面は径3.5cmの円形をなす。現存部長3.3cmを測る。(井上)

17号住居跡(図版31, 第69図)

16号住居跡の北東隅を切った状態で検出された長方形プランの住居跡で、74号住居跡も切っている。カマドは北壁のほぼ中央に付設されている。柱穴はP1～P4の

4本柱である。床面はかなり敲き締められていた。住居の規模は東西375cm、南北320cm、壁高20cmを測る。遺物としては土師器甕・杯蓋・焼塩壺、須恵器杯蓋・杯・碗などが出土した。

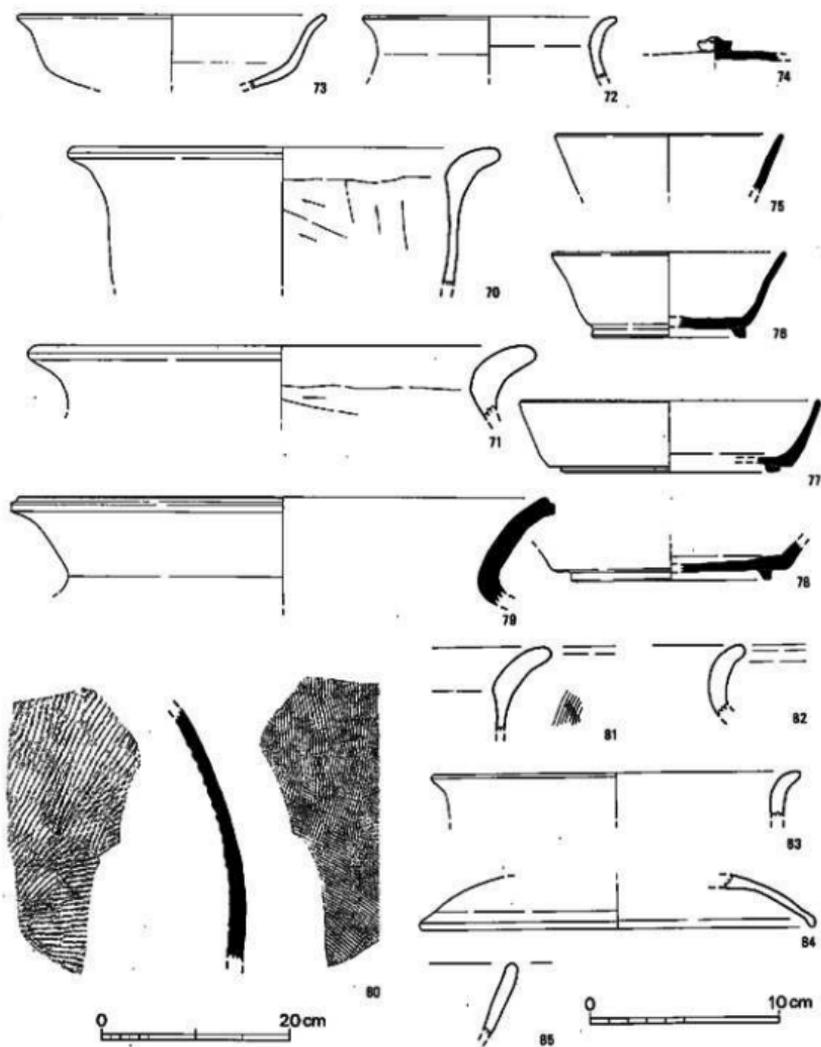
(井上)

カマド(図版31, 第70図) III類のカマドで、燃焼部は床面より一段窪まって40×110cmと長く、支脚抜き径の径20cmのビットが残る。支脚位置から焚口までが他より一段長いのは、使用時の熱効率による工夫とも窺われる。袖部は下層に径20cmのビットを設け灰等で埋めて、その上を暗緑色粘土混の暗茶褐色粘質土で盛っていた。煙道は一段短かく細網りで、緩やかな下り勾配に張り込まれ、先端に25cm程のビットを設けて煙出口としている。ビットの底には黒灰が



第 87 図 16号住居跡カマド実測図(1/30)

1. 暗茶褐色粘質土に灰、焼土粒混入
2. 暗茶褐色粘質土に灰、焼土粒混入
3. 暗茶褐色粘質土に灰、焼土粒混入
4. 暗茶褐色粘質土に灰、焼土粒混入
5. 3と暗茶褐色粘質土が多数に混入
6. 3に2が入り混っている
7. 焼土
8. 暗茶褐色粘質土
9. 砂礫を合した暗茶褐色粘質土(焼土混)
10. 暗茶褐色粘質土
11. 暗茶褐色粘質土

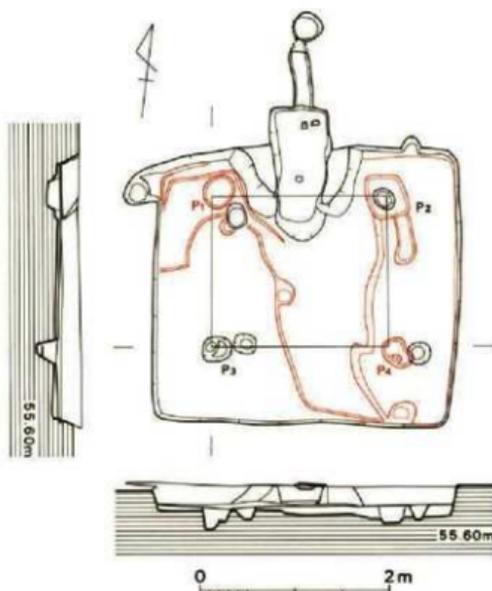


第 68 图 16·17号住居跡出土土器実測图 (1/3, 80±1/6)

僅かに遺存していた。(渡辺)

#### 出土遺物(第68・71図)

**土器器(81~85)** 81~83は甕の口縁部破片で、83は復原口径19.6cmを測る。調整は器面風化のため不明なものもあるが、81は胴部外面刷毛、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナテ仕上げである。81の外面と82の口縁部内面には煤の付着がみられる。色調は81が褐色、82が淡褐色、83が淡茶色で、焼成はやや良である。84は杯蓋で、口縁端部のつまみ出しは不明瞭ながらも断面は三角形状をなす。復原口径は21cmを測る。色調は淡褐色で、焼成は軟質である。85は焼塩壺の小破片で、二次加熱のためか器面に剝離がみられる。色調は暗茶褐色を呈す。



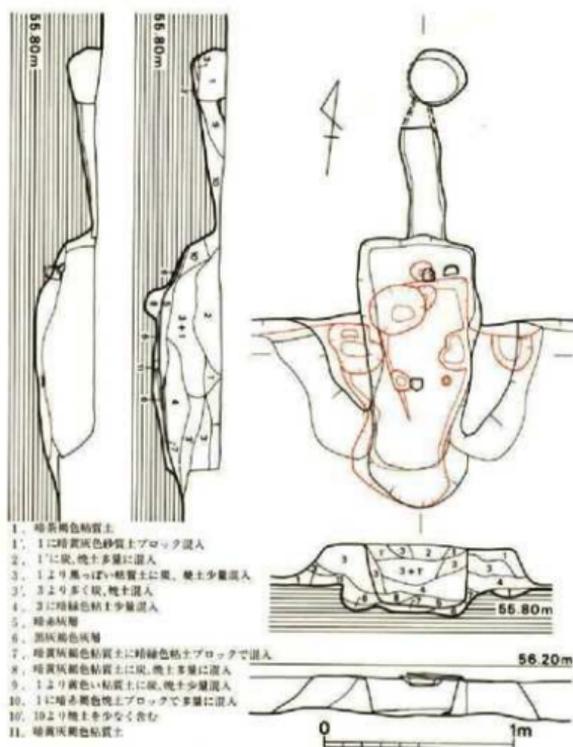
第 68 図 17号住居跡実測図(1/60)

**須恵器(86~90)** 6・7は杯蓋で、口縁端部のつまみ出しは断面三角形状をなす。調整は天井部外面が回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外は回転ナデである。色調は86が淡灰色、87は灰色で、焼成堅緻である。復原口径は86が14.7cm、87が16.1cmを測る。88・89は高台付碗である。高台は低く、立ち気味で、畳付けは外傾する。色調は87が茶灰色、89は淡灰色を呈す。復原口径は89が12.35cm、高台径は88が10.1cm、89が9.4cm、復原器高は89が4.7cmを測る。90は杯の完形品である。調整は体部内外を回転ナデ、内底部はナデ、外底部はヘラ切り起しである。色調は淡灰色を呈し、焼成は軟質である。口径は15.1cm、底径は8.5cm、器高3.9cmを測る。

(井上)

#### 18号住居跡(図版32, 第72図)

E群にあって8号住居跡の西側から検出された長方形プランの住居跡である。住居跡は全体に削平が著しく、西壁南半部は欠失している。カマドは北壁中央よりやや西側に寄って付設され、削平のため燃焼部掘り方を残すのみであった。他の住居跡にはみられない幅35~65cmの幅広い周溝がコ字形にめぐっている。柱穴も他と異なり、四隅にあるP1~P4の4本柱である。



第 70 図 17号住居跡カマド実測図 (1/30)

遺物は土師器小片が若干出土しただけである。

(井上)

**カマド** 北壁中央左寄りに40×50cmの焼土のみ遺存するカマドで、I類と思われる。奥壁際の径10cmのビットは支脚抜き痕であろう。

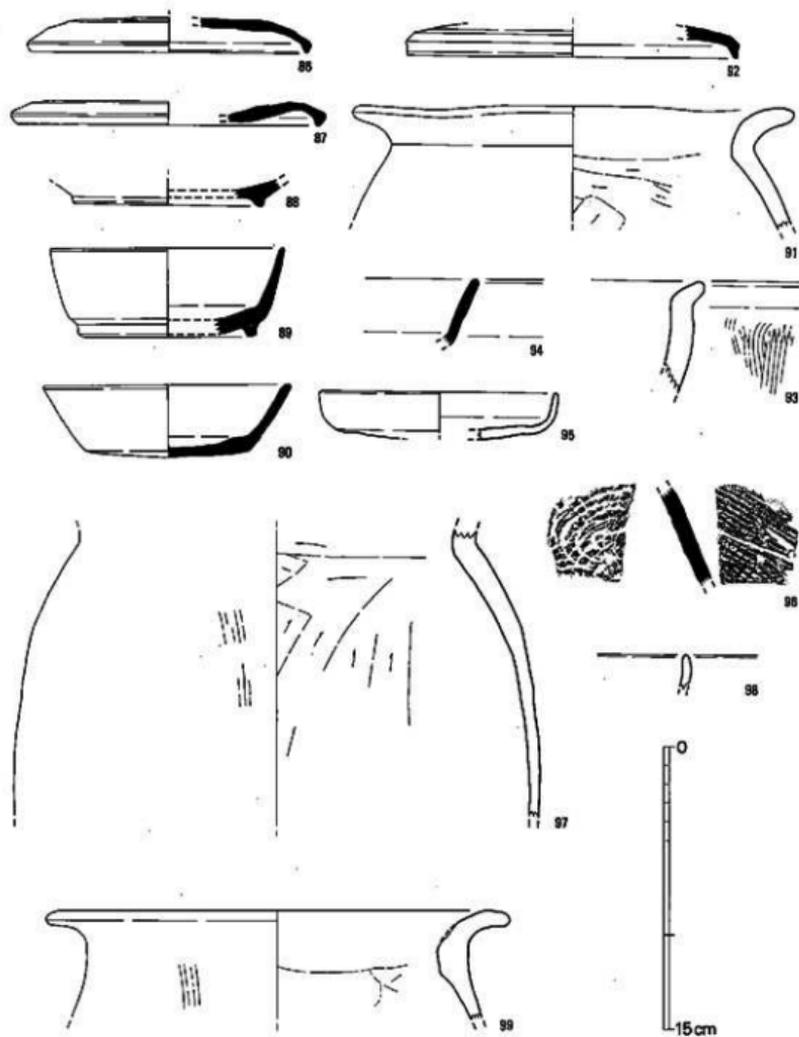
(渡辺)

#### 19号住居跡 (図版32、第73図)

18号住居跡の北西から検出された住居跡で、北半部の大半は新しい溝で壊されている。現存部での規模は東西355cm、南北140cm、壁高は南壁で30cmを測る。カマドの位置・柱穴などは不明である。遺物は土師器・須恵器破片が若干出土しただけである。

#### 出土遺物 (第71図)

**土師器** (91) 甕の破片資料で、復原口径は23.5cmを測る。胴部外面ナデ、内面は粗いヘラ



第 71 图 17·19-21·24·26号住居跡出土土器実測图 (1/3)

削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げ、外面には煤の付着がみられる。色調は茶褐色を呈し、焼成良好である。

須恵器(92) 杯蓋の破片資料で、復原口径は17.6cmを測る。口縁端部は断面が三角形形状に細く仕上げている。天井部外面は回転ヘラ削り、内面から口縁部内外は回転ナデ調整である。色調は暗灰色を呈し、焼成堅緻である。(井上)

20号住居跡(図版33, 第74図)

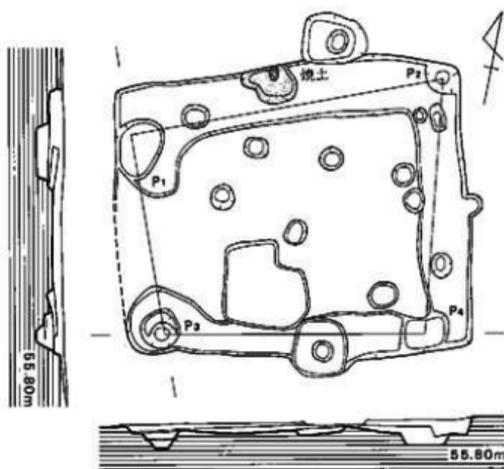
C群にあって21号住居跡を切って、22・24・31号住居跡に切られた状態で検出された住居跡である。柱穴・カマドなどは不明である。現存部での規模は、東西336cm, 南北427cm, 壁高は6cmを測る。遺物は若干の土師器小片のみである。

出土遺物(第71図)

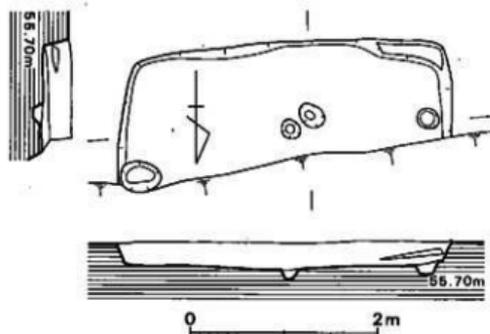
土師器(93-95) 93は器内の厚い甕の小破片, 94・95は杯の破片資料である。95は内湾気味に立ち上がる浅い杯で、復原口径12.8cm, 残存器高は2.5cmを測る。調整は内底部ナデ, 外底部ヘラ削り, 口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡褐色を呈し、焼成良好である。

21号住居跡(図版33, 第74図)

20・21・31号住居跡に切られ、南壁側の一部をわずかに残すだけの住居跡である。なお、重



第72図 18号住居跡実測図(1/60)



第73図 19号住居跡実測図(1/60)

複部分の下層を掘り下げた結果、北壁と東壁の一部が検出され、カマドも東壁中央に付設されていたと思われる火床跡が残存していた。柱穴はP1～P4の4本柱である。住居の規模は東西503cm、南北507cm、壁高5cmを測る。遺物は若干の須恵器片が出土しただけである。

#### 出土遺物 (第71図)

須恵器 (96) 甕の胴部片で、外面は格子目、内面は青海波文のタタキを施している。色調は淡灰色を呈し、焼成堅緻である。 (井上)

#### 22号住居跡 (図版33, 第74図)

20・21・30号住居跡を切って、29・31号住居跡に切られた状態で検出された方形プランの小型の住居跡である。重複部分の下層を掘り下げたら北壁側のほぼ中央からカマドの痕跡が検出されたが、柱穴は不明である。住居の規模は東西345cm、南北340cm、壁高は5cmを測る。遺物は若干の土師器・須恵器小片が出土したのみである。 (井上)

#### 24号住居跡 (第74図)

C群にあって一部20・26号住居跡を切っているものの、27・29・31号住居跡に切られて北壁の一部を残すだけの住居跡である。ピットは多数存在するか柱穴として確定できない。遺物はカマド内から出土した土師器片のみである。 (井上)

カマド 左半分のみ遺存するⅢ類のカマドである。右半分は27号住居に削平されているが、床面下には明確なカマドの痕跡が残る驚嘆させられた。燃焼部は床面より緩やかに窪めて、火床面も25×40cm測り、灰層が5cm程遺存する。袖部は殆ど残っていないが、暗黄灰色粘質土等で盛っていたらしい。煙道も遺存しない。 (渡辺)

#### 出土遺物 (第71図)

土師器 (97・98) 97は口縁部を欠く甕の胴部破片、98は杯の小片である。96は胴部外面を粗い刷毛、内面はへら削りで、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。胴部外面には煤の付着がみられる。 (井上)

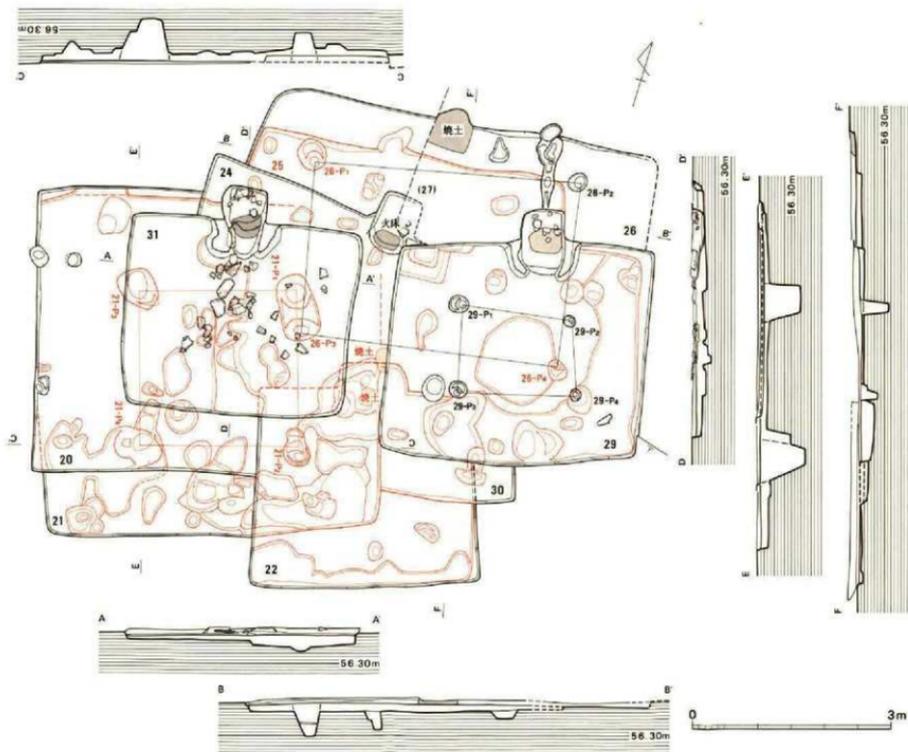
#### 25号住居跡 (図版37, 第74図)

24・27・29号住居跡に切られ、26号住居跡を切って作られた住居跡で、北壁側は遺存するが他は欠失している。カマド・柱穴なども不明である。現存部での規模は、東西475cm、南北120cm、壁高は13cmを測る。遺物としては土師器・須恵器小片が若干出土した。 (井上)

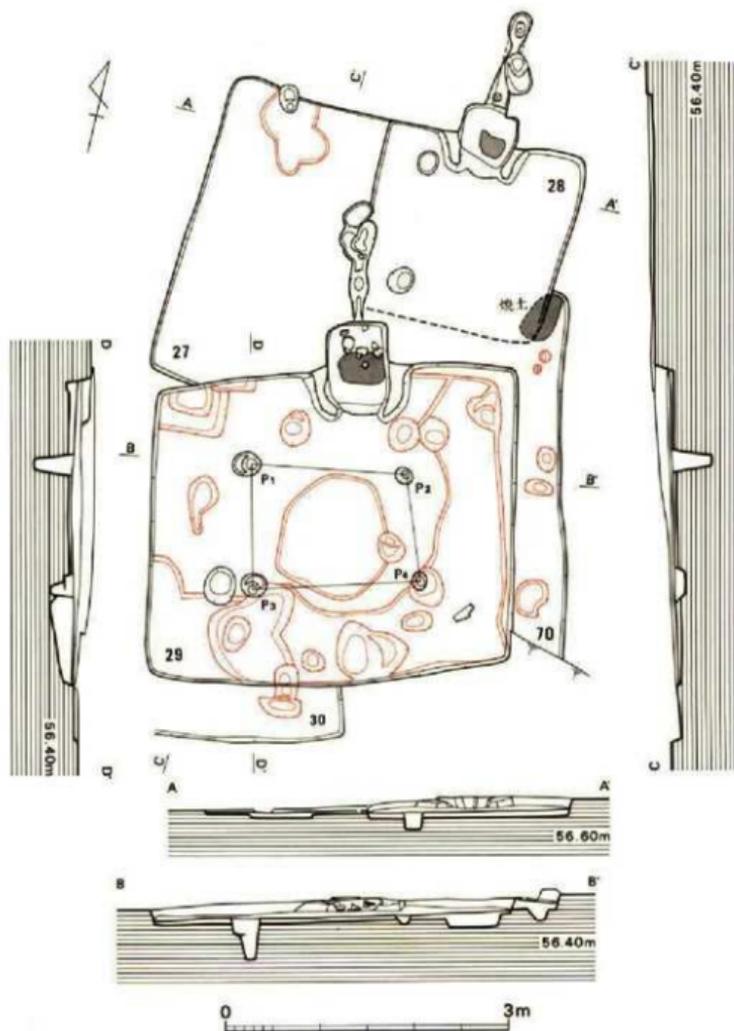
#### 26号住居跡 (図版37, 第74図)

25・27・29号住居跡に切られ、北壁側を残すだけの住居跡である。カマドは北壁のほぼ中央に付設されていたらしく火床が残存していた。柱穴はかならずしも明確ではないが、P1～P4の4本柱と思われる。住居の規模は、現存部で東西590cm、南北140cm、壁高は6cmを測る。遺物は土器が若干出土したのみである。 (井上)

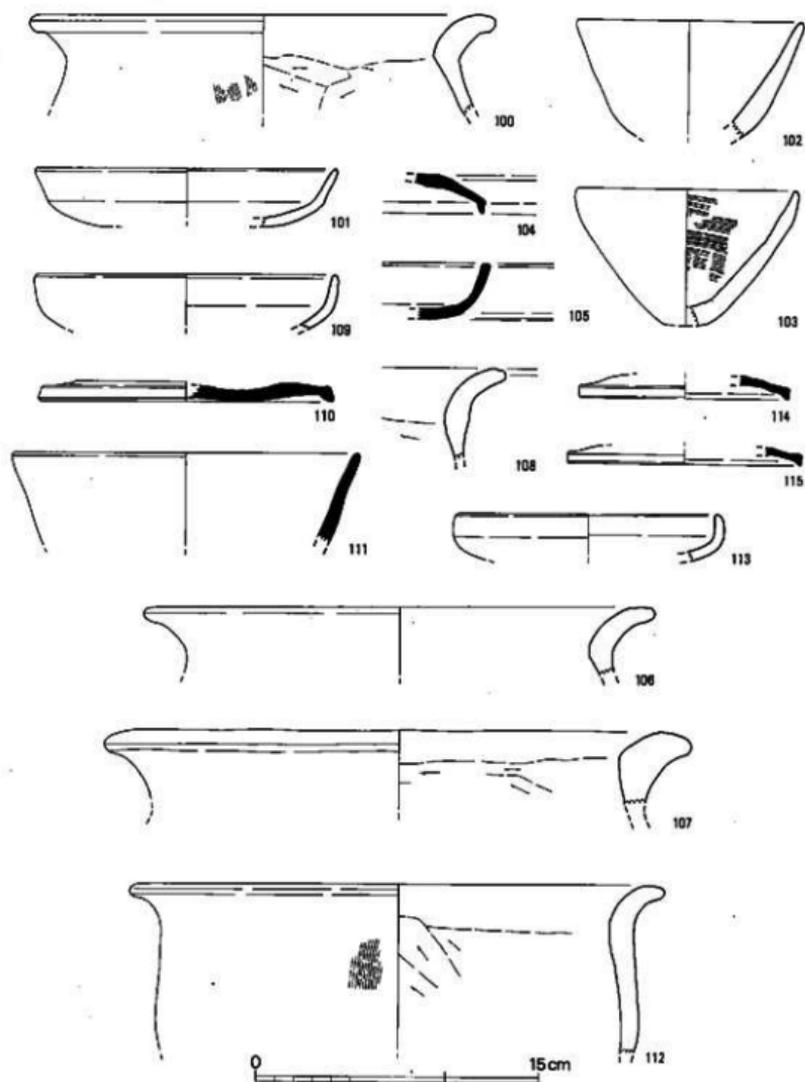
カマド 27号住居床面下より僅かに焼土・灰層が出土し、位置的にも燃焼部と思われⅡ類に



第 74 图 20-22·24-26·29-31号住居时平面图 (1/60)



第 75 图 27~29·70号住居跡実測图 (1/60)



第 76 图 27·29·31·32号住居跡出土土器実測图 (1/3)

分類されるカマドである。

(波辺)

出土遺物 (第71図)

土師器 (99) 甕の口縁部付近の破片資料で、復原口径は24.8cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面は粗いヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は淡褐色を呈し、焼成は良い。

(井上)

27号住居跡 (第75図)

C群にあって26号住居跡を切って、28・29号住居跡に切られた状態で検出された住居跡であるが、カマド・柱穴などは不明である。住居の規模は、現存部で東西173cm、南北330cm、壁高5cmを測る。遺物は土師器片が若干出土しただけである。

出土遺物 (第76図)

土師器 (100) 甕の口縁部付近の破片で、復原口径は24.8cmを測る。胴部外面は細かい刷毛、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げ、色調は淡茶褐色を呈し、焼成は極めて良好である。外面には煤の付着がみられる。

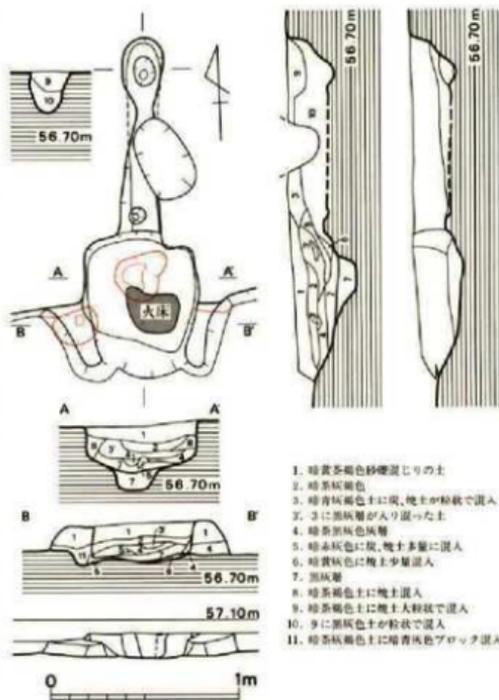
(井上)

28号住居跡 (図版34・36, 第75図)

27・29・70号住居跡を切った状態で検出された方形プランの小型の住居跡である。カマドは北壁のほぼ中央に付設されている。床面は全体に敷き詰められていて、床面上にはビッドが2個存在するものの柱穴としてのまとまりをなさない。住居の規模は、現存部で東西220cm、南北175cm、壁高は15cmを測る。遺物は土師器・須恵器小片が若干出土している。

(井上)

カマド (図版34, 第77図) III類のカマドで、燃焼部は床面よ



第 77 図 28号住居跡カマド実測図 (1/30)

り一段深く掘り窪め、径20cmの支脚抜き痕の前に僅かに火床面が遺存していた。カマド内壁は堅く焼け、天井部の崩壊と思われる残骸が詰まっていた。袖部は基底に灰層があり、その上を暗青灰色粘土混の暗茶灰褐色土で盛っている。煙道は住居床面より低い位置から、水平で先細りに伸び、先端に浅いピットを設けて煙出口としている。煙道は途中、後世のピットに壊されるが、壁体は堅く焼土化していた。(渡辺)

#### 29号住居跡 (図版36、第75図)

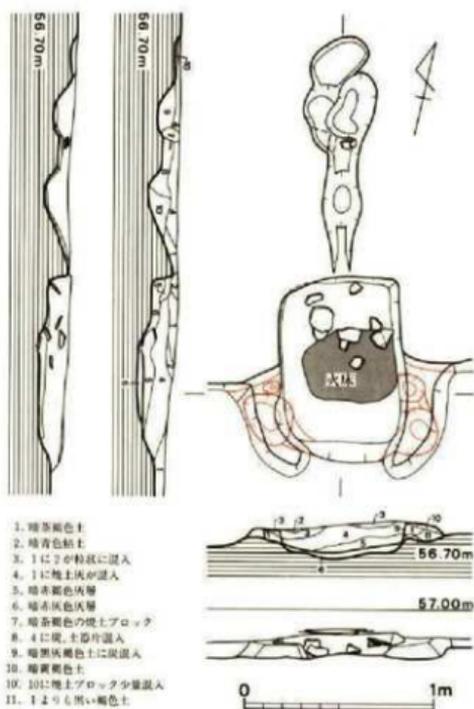
22・27・28・30・70号住居跡を切って作られた長方形プランの住居跡である。カマドは長辺である北壁中央よりやや東寄りに付設されていた。柱穴はP1～P4の4本柱で、床面もよく敲き締められていた。床面下を掘り下げた結果、東壁から南壁に沿って18号住居跡例と同じ幅広の溝が検出された。

住居の規模は東西390cm、南北330cm、壁高17cmを測る。遺物は土師器杯・焼塩壺蓋、須恵器杯蓋・杯などの破片が少量と紡錘車が出土している。(井上)

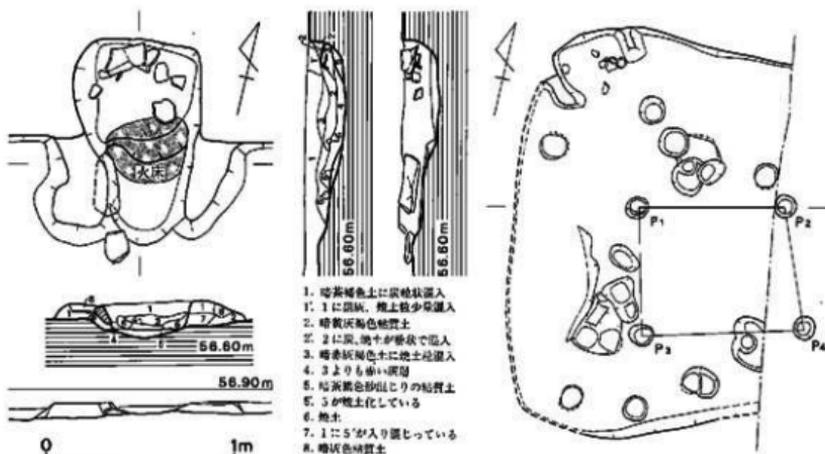
**カマド** (第78図) III類に分類されるカマドで、燃焼部は中央部が床面より少し窪まって火床面30×50cmを測る。内壁は堅く焼土化し、多くの土器片が散乱して灰層も厚く残っていた。袖部は暗茶褐色土を基底にして、暗青灰色粘土で覆っている。袖部の下層に浅いピットがあり、左袖の壁際ピットには焼土塊が含まれていた。煙道はやや平行で、途中2ヶの窪まりがあり、やや上り気味で煙出しとなっている。(渡辺)

#### 出土遺物 (第76図)

**土師器** (101～103) 101は体部外面に屈折線を有す杯で、復原口径は16cmを測る。調整は内外底部ナテ、口縁部内外はヨコナテで、色調は淡褐色を呈す。102・103は橢形の焼塩壺破片で、



第 78 図 29号住居跡カマド実測図 (1/30)



第 78 図 31号住居跡カマド穴測図 (1/30)

復原口径は102が12cm, 103は11.77cm, 復原器高は103が7.25cmを測る。103の底部は小さいが平底と思われる。調整は器面の剥落が著しいため明瞭ではないが、103の内面は粗い刷毛目で仕上げている。色調は両者とも褐色を呈す。

須恵器 (104・105) 104は杯蓋の小片で、口縁端部のつまみ出しは細く、断面が三角形状をなす。調整は天井部外面が回転へら削り、内面はナデ、口縁部内外は回転ナデである。105は杯の小片で、外面には自然釉がみられる。調整は外底部回転へら削り、内底部ナデ、口縁部内外は回転ナデ仕上げである。色調は104が暗灰色、105が灰色を呈し、焼成は堅緻である。

紡錘車 (第36図2) 緑泥片岩製の木製品である。径は5cm, 厚さは中央で0.7cmを測る。

(井上)

### 30号住居跡 (第74図)

21・22・29号住居跡に切られ、わずかに南壁東半部を残すだけの住居跡である。従って、カマド・柱穴、その規模なども不明である。現存部での規模は、東西200cm, 南北52cm, 壁高6cmを測る。遺物は土師器小片が若干出土したのみである。

(井上)

### 31号住居跡 (図版37, 第74図)

20~22・24号住居跡を切った状態で検出された長方形プランの小型の住居跡である。カマドは北壁中央に付設され、床面上には緑泥片岩の塊石が散乱していた。床面はかなり強く敲き締

められていたもの、柱穴は検出されなかった。住居の規模は、東西350cm、南北242cm、壁高6cmを測る。遺物は土師器甕・杯、須恵器杯蓋などの破片が少量出土した。(井上)

**カマド** (図版37, 第79図) 煙道部は完全に削平されたⅢ類のカマドである。燃焼部は床より一段深く窪まり、支脚は確認出来ず火床面が35×45cm残っていた。カマド内壁は堅く焼土化し、土器片が多く散乱して天井部の残骸が詰まっていた。袖部は暗灰色粘質土と暗赤灰色粘質土で盛っている。左袖内側にある扁平な石は、袖の補強材か焚口部の天井に使用していたのであろう。(渡辺)

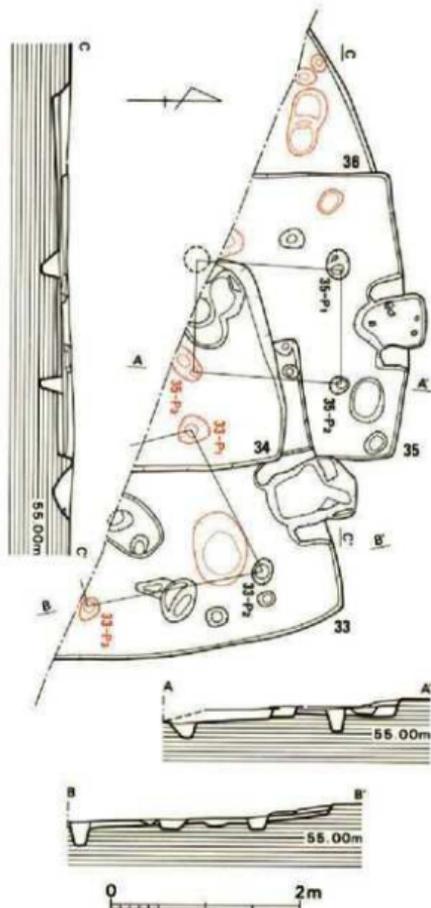
#### 出土遺物 (第76図)

**土師器** (106~109) 106~108は甕の口縁部付近の破片資料で、復原口径は106が27.2cm, 107が31.2cmを測る。108の外面には煤の付着がみられる。109は杯破片で、復原口径は16.1cmを測る。口縁部内外はヨコナデで仕上げ、色調は褐色を呈し、焼成良好である。

**須恵器** (110・111) 110は低平な杯蓋で、鈕は欠失している。口縁端部のつまみ出しは三角形形状をなす。調整は天井部外面を回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外は回転ナデである。色調は暗灰色を呈し、焼成堅緻である。復原口径15.7cmを測る。111は大型の碗で、復原口径は18.45cmを測る。調整は体部内外回転ナデである。色調は淡灰色で、焼成も良い。107がカマド内出土の他は、埋土及び床面から出土したものである。(井上)

#### 32号住居跡 (図版38, 第80図)

B群の北方から単独で検出された住居跡で、東壁側は削平され欠失してい



第 81 図 33~36号住居跡実測図 (1/60)

る。カマドは他の住居跡とは異なり北西隅に付設されている。床面上には多数のビツが存在するが、P1～P4の4本柱と思われる。住居の規模は、現存部で東西280cm、南北430cm、壁高17cmを測る。遺物は土師器甕・杯、須恵器杯蓋などの破片が出土した。(井上)

カマド 煙道もなく、住居の隅に僅かに遺存する特異なI類のカマドである。燃燒部は床面より少し窪み、赤灰層が厚く残っているが火床面は焼土化していない。袖部は遺存状態悪く、僅かに暗緑灰色粘質土が痕跡を留める。(渡辺)

#### 出土遺物(第76図)

土師器(112・113) 112は甕、113は杯の破片資料である。調整は112が胴部外面刷毛、内面へら削り、口縁部内外はヨコナデ仕上げ、113は外低部へら削り、体部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は112が28.4cm、113が14.1cmを測る。

須恵器(114・115) 小型の杯蓋破片である。口縁端部のつまみ出しは断面三角形状をなす低平な杯蓋である。調整は体部内外回転ナデ仕上げで、色調は114の外表面が黒灰色、内面灰色、115は灰色を呈し、焼成堅緻である。(井上)

#### 33号住居跡(図版38, 第81図)

A群にあり35・39号住居跡を切って、西壁側を34号住居跡に切られた状態で検出された住居跡で、南壁側は用地外のため未掘である。カマドは北壁にあって中央よりやや東偏して付設されている。南西側は不明だが、柱穴はP1～P3の3本と思われる。床面はさほど締っていない。住居の規模は、現存部で東西298cm、南北315cm、壁高は5cmを測る。遺物は土師器・須恵器などの小破片が若干出土しただけである。

カマド 煙道部は削平され、僅かに遺存するII類のカマドである。燃燒部は床面よりやや窪み、後世の攪乱によるものか灰層が入り乱れていた。右袖は暗緑黄色粘質土で盛られ、左袖は34号住居に切られ遺存しない。(渡辺)

#### 出土遺物(第82図)

土師器(116) 小型甕の破片で、復原口径は13cmを測る。調整は胴部外面を刷毛、内面をへら削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口縁部内面には紫の付着がみられる。

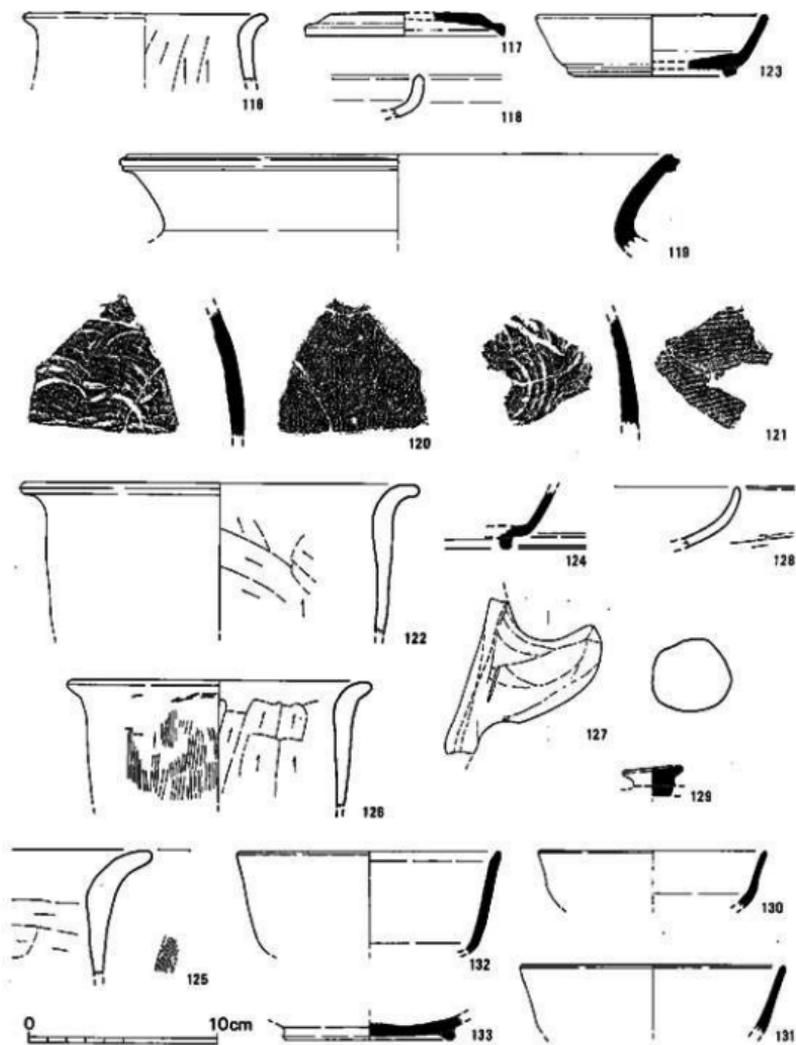
須恵器(117) 天井部が低平で小型の杯蓋で、口縁端部の断面形は三角形状を呈す。復原口径は10.7cm、復原器高1.25cmを測る。色調は黒灰色を呈し、焼成は堅緻である。(井上)

#### 34号住居跡(図版38, 第81図)

33・35号住居跡を切った状態で検出された小型の住居跡で、南西半部は用地外のため未掘である。カマド・柱穴なども不明である。住居の規模は、現存部で東西220cm、南北160cm、壁高は10cmを測る。(井上)

#### 35号住居跡(図版38, 第81図)

A群にあって36号住居跡を切って、34・35号住居跡に切られた状態で検出された住居跡であ



第 82 图 33·35·39-44号住居跡出土土器実測図 (1/3)

る。34号住居跡と同様、南半部は用地外のため未掘である。カマドは北壁中央に付設されている。柱穴は南西隅が不明であるが、P1～P3の3個は柱穴と思われる。遺物はカマド内と住居跡埋土中より土師器小片が若干出土したのみである。(井上)

カマド 煙道部は完全に削平され、浅く遺存するⅡ類のカマドである。カマド内は床面よりやや窪み、土器片が散乱して灰層が厚く残る。両袖は幸うじて遺存し、暗茶褐色土で盛られていた。(渡辺)

#### 出土遺物(第82図)

土師器(118) 杯の口縁部付近の小破片で、色調は淡褐色を呈し、焼成も良好である。

土 鉢(第36図8) 紡錘形の土鉢の半欠品で、残存長2.3cm、最大径1.2cmを測る。(井上)

#### 36号住居跡(図版38, 第81図)

ほんの一部を確認しただけの住居跡で、その大半は用地外で未掘であるとともに、東側は35号住居跡に切られていて不明である。したがってカマド・柱穴なども不明である。遺物は何等出土しなかった。(井上)

#### 37号住居跡(図版38, 付図1)

A群の西端部から検出された住居跡で、その大半は用地外のために未掘である。また、東壁側は36号住居跡で切られている。カマド・柱穴などは不明で、規模は現存部で東西242cm、南北380cm、壁高は9cmを測る。遺物は土師器・須恵器小片が若干出土しただけである。(井上)

#### 38号住居跡(第54図)

E群にあって10・11号住居跡に切れ、78号住居跡を切った状態で検出された方形プランの住居跡である。カマド・柱穴等は不明で、北壁と東壁の一部は10号住居跡の壁と重複している。床面下からは多数のビットが検出されたものの、柱穴としてのまとまりをなさない。遺物は土師器・須恵器小片が若干出土しただけである。住居の規模は、東西372cm、南北362cm、壁高6cmを測る。(井上)

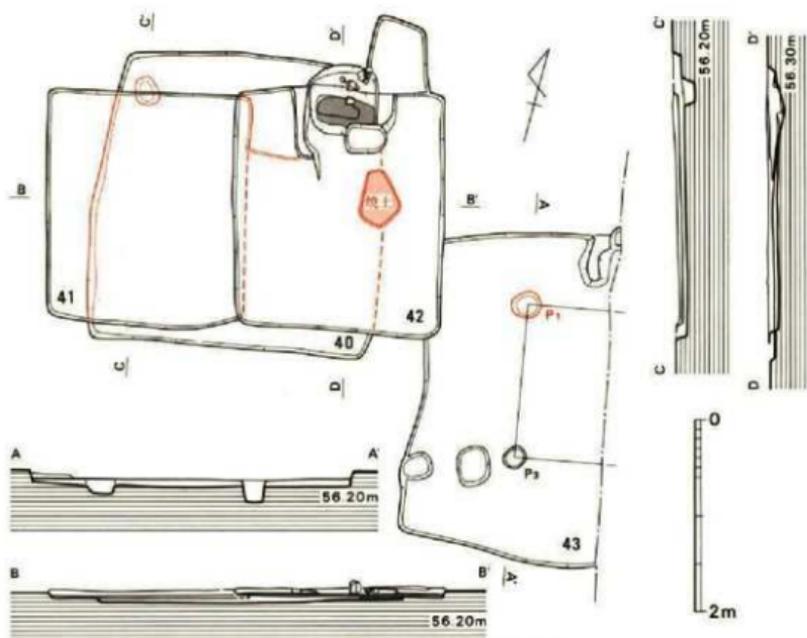
#### 39号住居跡(図版38, 付図1)

A群の東端にあって33号住居跡に切られた状態で検出された住居跡で、南半は用地外のため未掘である。カマド・柱穴などは不明で、壁際には幅70cmの溝がめぐっている。現存部での規模は、東西165cm、南北300cm、壁高8cmを測る。遺物は須恵器甕破片など若干と刀子片が出土している。

#### 出土遺物(第82図)

須恵器(119) 中型甕の口縁部破片で、口縁端部外面は凸帯をなしている。復原口径は29.1cmを測る。外面には煤のようなものが付着している。

刀 子(第40図4) 鉄製刀子の柄部付近の破片で、柄部には一部木質が残っている。残存長5cm、刃部幅1.15cm、背厚4mmを測る。(井上)



第 83 図 40～43号住居跡実測図 (1/60)

#### 40号住居跡 (図版39, 第83図)

D群にあって41・42号住居跡に切られた状態で検出された方形プランの住居跡である。カマドはすでに削平されていたが、42号住居跡の床面下から検出された焼土面が位置からして本住居跡のカマドと考えられる。床面はかなり敲き締められていたが、柱穴と思われるピットは検出できなかった。住居の規模は、東西310cm、南北297cm、壁高は9cmを測る。遺物は床面下から須恵器小片が出土しただけである。

#### 出土遺物 (第82図)

須恵器 (120) 甕の胴部片で、外面は平行タタキ目、内面は青海波文のタタキ目を施している。色調は淡緑灰色を呈し、焼成はやや良である。 (井上)

#### 41号住居跡 (図版39, 第83図)

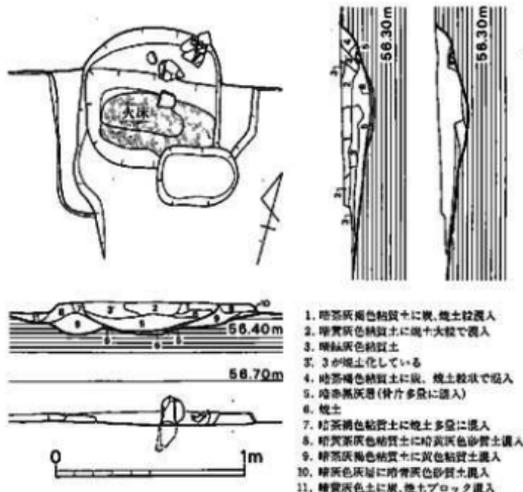
40号住居跡を切り、42号住居跡に切られた状態で検出された長方形プランの小型住居跡である。床面はかなり堅くしまっていたが、カマド・柱穴などは不明である。住居の規模は東西213cm、南北247cm、壁高は6cmを測る。

出土遺物 (第82図)

須恵器 (121) 甕の胴部小片で、外面を平行タタキ、内面は青海波文のタタキ目を施している。(井上)

42号住居跡 (図版39, 第83図)

40・41・43号住居跡を切って作られた長方形プランの小型住居跡である。カマドは北壁中央に付設されているもの、柱穴は検出されなかった。床面は堅く蔽きしめられていた。遺物はカマド内から土師器・須恵器片が出土した。(井上)



第 84 図 42号住居跡カマド実測図 (1/30)

カマド (第84図) 殆ど削

平されているが、幸うじてカマド燃焼部が残るII類のカマドである。火床面は床面より緩やかに窪んで焼土化し、中央より右へ偏って角柱石が立っている。支脚に使用したと思えるがやや不自然な位置である。内部は右奥に多くの土器片が遺存し、小さな骨片を含んだ灰層の上を堅い焼土塊が覆い、破壊を受けずそのまま押しつぶされた状態と窺われる。カマド前庭部にはかき出された炭・焼土粒等が散乱していた。袖部は右をピットに切られるが、暗緑灰色と暗茶褐色の粘質土で盛られていた。(渡辺)

出土遺物 (第82図)

土師器 (122) 胴部上半の甕破片で、復原口径は21.2cmを測る。調整は胴部内面へラ削り、外面は風化が著しく不明、口縁部内外はヨコナテ仕上げである。外面から口縁部内面には煤の付着がみられる。色調は褐色を呈し、焼成はやや良である。

須恵器 (123) 高台付椀の破片資料で、復原口径は10cm、器高3.3cmを測る。高台は低く、畳付けは外傾している。調整は内底部がナアの他は、回転ナア仕上げである。色調は淡灰色を呈し、焼成も良い。(井上)

43号住居跡 (図版39, 第83図)

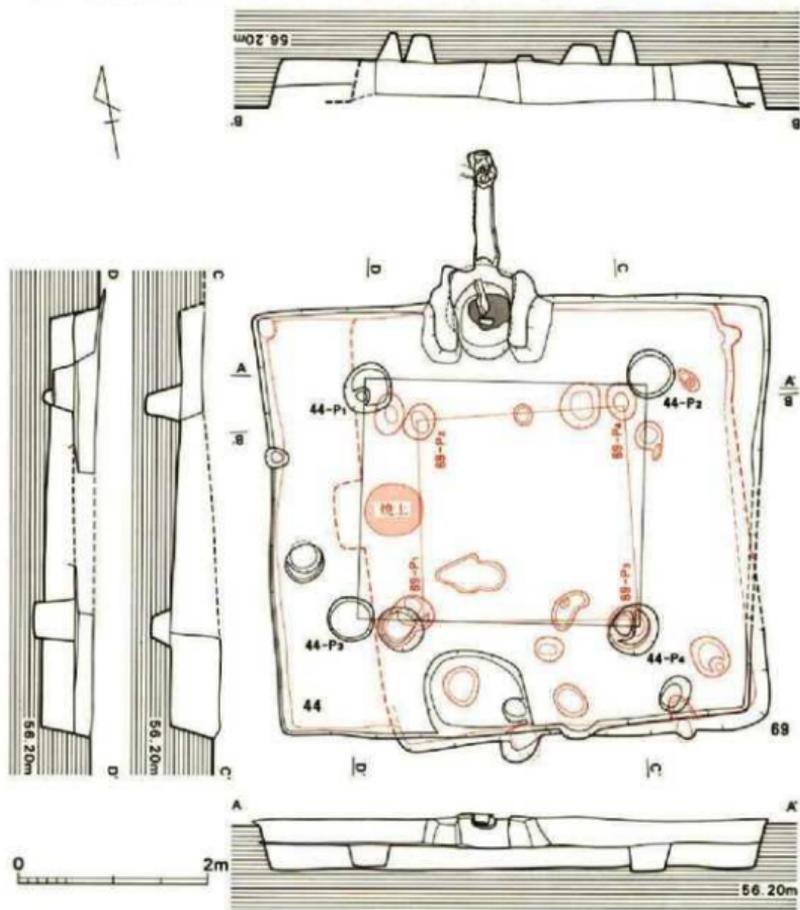
北西隅を42号住居跡に切られた状態で検出された住居跡で、東半部は農道のため未掘である。カマドは北壁に付設されているが、西半部を検出したただけである。柱穴も西側の2個だけで、

東側は未掘である。現存部での住居の規模は、東西210cm、南北347cm、壁高は8cmを測る。遺物は須恵器片が若干出土したのみである。(井上)

カマド 殆ど発掘外の為、左袖のみ確認出来たII類のカマドである。(渡辺)

出土遺物 (第82図)

須恵器 (124) 高台付椀の小破片で、高台は直に立ち、体部外面には屈折線がみられる。色



第 85 図 44・69号住居跡実測図 (1/60)

調は灰色を呈し、焼成堅緻である。

(井上)

#### 44号住居跡 (図版40, 第85図)

C群にあって45・47・69号住居跡を切った状態で検出された長方形プランの最も大型の住居跡である。カマドは北壁中央よりやや西側に付設されていた。柱穴はP1～P4のしっかりした4本柱で、床面も堅く敲きしめられていた。遺物は土師器・須恵器片など多数と、土錘・鉄鎌などが出土した。住居の規模は東西520cm, 南北465cm, 壁高は26cmを測る。 (井上)

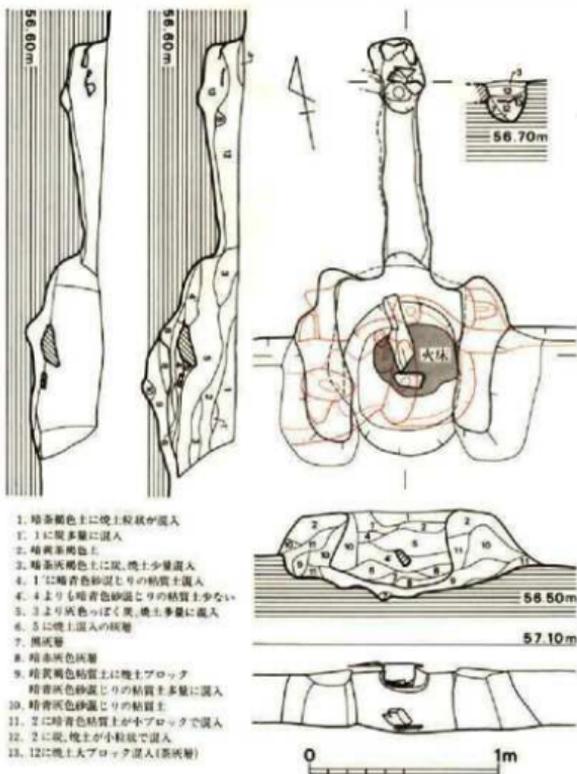
**カマド** (図版40, 第86図) 遺存度の良いカマドで、II類に分類される。火床面は床面とはほぼ水平で、火床面下層に焼土・炭・土器片があり、作り直されたのだろうか。その火床面の奥に

径15cmの支脚抜き痕が確認出来た。又、灰層上より二つの扁平な石が出土し、カマドの壁体で使用されていたものだろうか。袖部はカマド奥壁より暗黄茶褐色や暗青灰色の粘質土で盛り、下層にビットを設け焼土灰等を埋め込んでいた。煙道は先細りの下り勾配で隔り込まれ、先端にビットを設け煙出口としている。このビットには浮いた状態で土器片が多く出土した。(渡辺)

出土遺物 (第82・87図)

土師器 (125～128)

125・126は甕の破片資料で、126は復原口径16.2cmを測る。調整は胴部外面を刷毛、内面へら削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げて

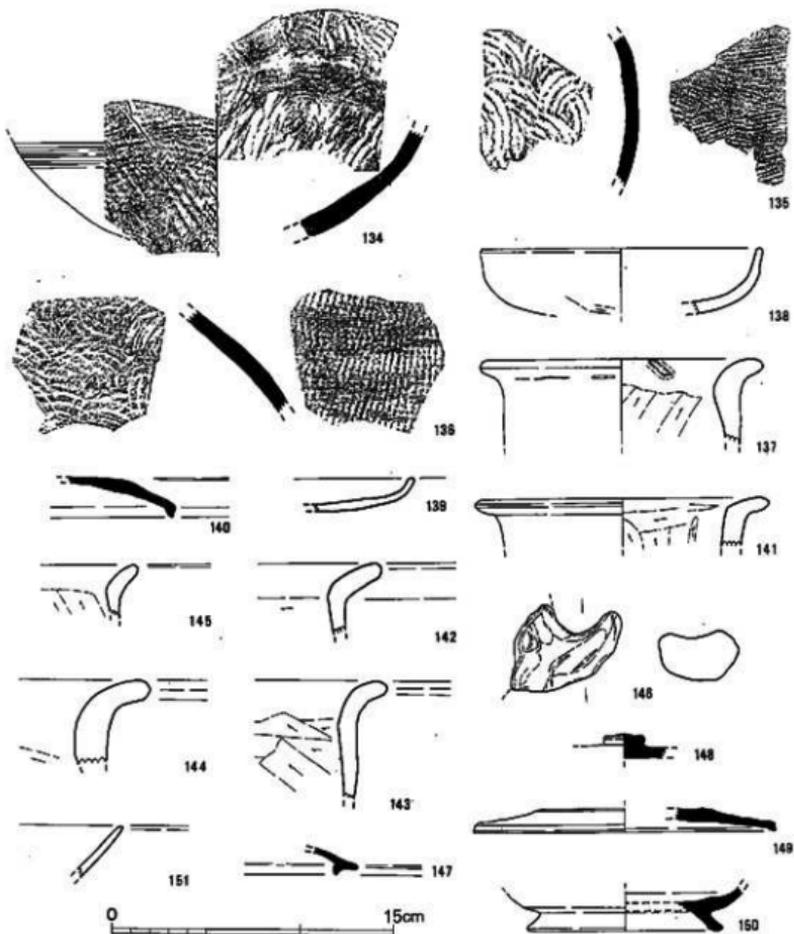


1. 暗赤褐色土に焼土板状が混入
2. 1に灰多量に混入
3. 暗黄茶褐色土
4. 暗赤褐色土に灰、焼土少量混入
4. 1に暗青灰色砂質じりの粘質土混入
4. 4より暗青灰色砂質じりの粘質土少ない
5. 5より灰色つぼく黄、焼土多量に混入
6. 5に焼土混入の灰層
7. 陶瓦層
8. 暗赤褐色灰層
9. 暗黄茶褐色粘質土に焼土ブロック
9. 暗青灰色砂質じりの粘質土多量に混入
10. 暗青灰色砂質じりの粘質土
11. 2に暗青灰色粘質土が小ブロックで混入
12. 2に灰、焼土が小粒状で混入
13. 12に焼土大ブロック混入(茶褐色)

第 86 図 44号住居跡カマド実測図 (1/30)

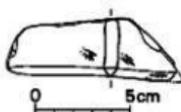
いる。127は甕の把手、128は杯の小破片である。125・128は埋土、126はカマド煙突、127はカマド左袖内出土である。

須恵器 (129~136) 129は杯蓋の低平な宝珠形鈕である。130~133は高台付碗の破片資料で、130~132は高台部分を欠いている。大きさにも大小があり、129は復原口径12.2cm, 131は14.1cm



第 87 図 44・45・48・50～52号住居跡出土土器実測図 (1/3)

132は14cmを測り、132は杯部が深めの椀である。133は外方に張り出した高台で、復原高台径9.2cmを測る。調整は体部内外とも全て回転ナデで、133の内底部はナデ仕上げである。134~136は甕の破片で、134は底部付近、135は胴部中位、136は胴部上半の資料である。調整は134が胴部外面を格子目タタキのあと、上位をカキ目、内面は青海波文のタタキ、135は外面を平行タタキ、内面を青海波文、136は外面を格子目タタキのあとカキ目、内面は青海波文のタタキ目を施している。色調は134が暗灰色、135が暗灰色、136は暗青色を呈し、焼成は堅緻である。129・130・132はカマド内、134はカマド煙突内、131・136はカマド左袖内、他は住居内埋土出土である。



第 88 図 44号住居跡出土石器実測図 (1/3)

土 錘 (図版61, 第36図9) 紡錘形の土錘で、全長4.85cm、中央部径1.1cm、重さ7.62gを測る。

鉄 鎌 (図版64, 第40図5) 鎌の切先付近の破片資料で、現存長7.8cm、刃部幅2.5cm、背厚0.3cmを測る。 (井上)

石 器 (第88図) 石鎌ないし石包丁状の形態を有す。内湾状の刃部はそう鋭いものではない。前面の新磨は丁寧に行なわれる。幅3.2cm、厚0.7cm。 (木下)

#### 45号住居跡 (図版41, 第89図)

44号住居跡に切られ、その大半を欠失した住居跡で、全体の1/3にあたる北壁側を残すのみである。カマドは北壁のほぼ中央に付設され、柱穴は南西隅は不明であるがP1~P3と思われる。床面は44号住居跡と同様に堅く敷きしめられていた。遺物はカマド内から土師器片が若干と土錘が出土している。現存部での住居の規模は、東西480cm、南北175cm、壁高は10cmを測る。 (井上)

カマド (図版41, 第90図) カマド内部を44号住居の煙道に切られながらも明瞭に痕跡が残るI類のカマドである。火床面は床面より僅かに窪んで焼土化し、支脚の角柱石が出土した。その支脚は、右方へ押しつぶされたかのように、傾き頭部が割れ壊たわっていた。又、カマド奥壁より15cm位は粘質土を詰め込み底面を10cm程高くしている。これは熱効率に関連することなのか。焚口部にも小ビットがありカマドの作り直しとも思われる。袖部は左袖のみ下層にビットがあり、暗青灰色粘質土で盛られていた。煙道部は削平されて遺存しない。右袖横のビットは深さ30cm程で焼土・炭ブロック混の灰層が詰まり、火種用の穴かも知れない。 (渡辺)

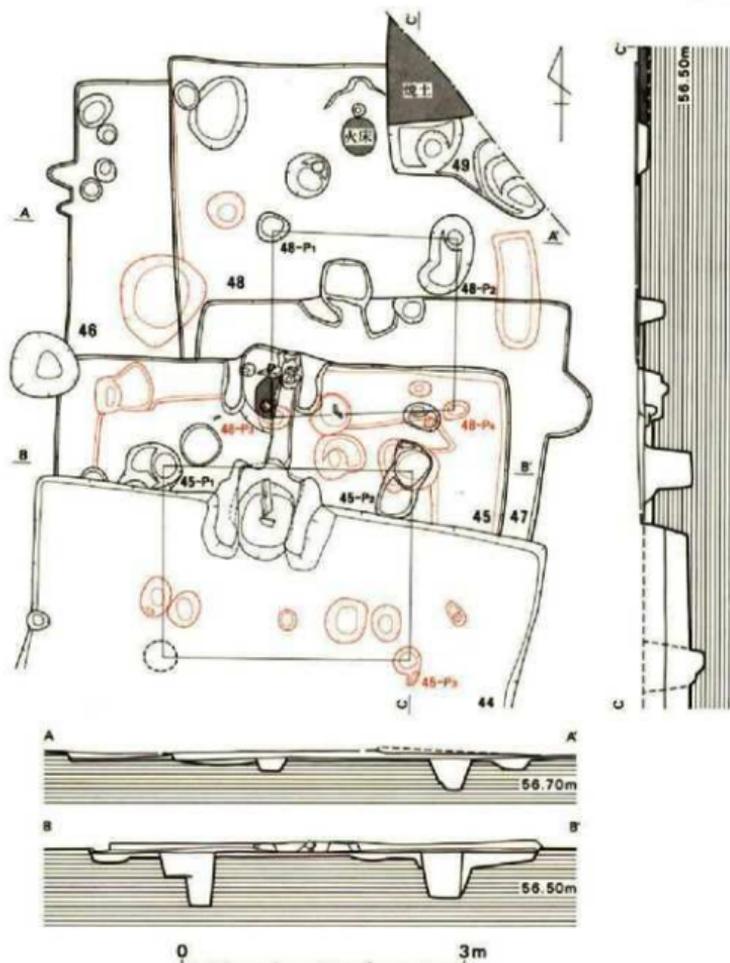
#### 出土遺物 (第87図)

土師器 (137・138) 137は小型甕の口縁部付近の破片で、復原口径は15cmを測る。調整は胴部内面をへら削り、外面は風化のため不明、口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は褐色を呈し、焼成はやや良である。138は杯破片で、復原口径は15cmを測る。調整は内底部ナデ、外底部へら削り、体部内外はヨコナデで仕上げ、口縁部外面はわずかに凹む形状をなす。色調は褐

色を呈し、焼成は良好である。

土 鍾 (第36図10) 紡錘形の土鍾で、全長4.6cm、中央部径1.3cm、重さ6.93gを測る。

(井上)



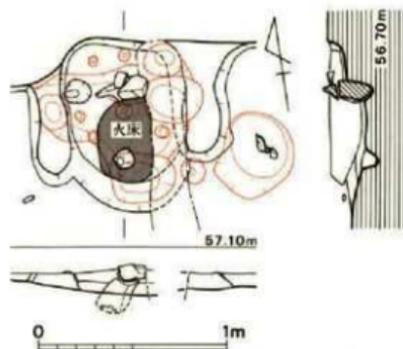
第 88 図 45-49号住居跡実測図 (1/60)

#### 46号住居跡 (図版39, 第89図)

C群にあって45・47・48号住居跡に切られ、西側の一部を残すだけの住居跡で、カマド・柱穴なども不明である。現存部での規模は、東西120cm, 南北294cm, 壁高は5cmを測る残りの悪い住居跡である。床面はかなり敲きしめられているもの、遺物は何等出土しなかった。(井上)

#### 47号住居跡 (図版41, 第89図)

48号住居跡を切って作られているものの、44・45号住居跡に切られ、北壁側と東壁側の一部を残すだけの住居跡である。カマドは北壁中央より西に偏して付設されている。床面はある程度しまっていたが、明確な柱穴は検出できなかった。現存部での規模は東西390cm, 南北255cm, 壁高は3cmを測る。遺物としては土師器小片が若干出土しているのみである。



第90図 45号住居跡カマド実測図 (1/30)

(井上)

**カマド** 煙道部が削平され、僅かに遺存する皿類のカマドである。燃焼部は床面より一段窪まっているが、火床面ははっきりしない。内部は焼土粒・ブロック等混入した粘質土が詰まっている。袖は暗緑灰色砂利混の粘質土が僅かに痕跡を残す。又、カマド外部のまわりには、多量の黒灰が径50cm程散乱していた。(渡辺)

#### 48号住居跡 (図版41, 第89図)

47・49号住居跡に切られ、46号住居跡を切った状態で検出された住居跡で、南半部と東壁を欠失している。カマドは北壁側に付設されているが、火床を残す程度で残りが悪い。柱穴はP1~P4の4本柱と思われる。遺物は土師器小片が若干出土しただけである。(井上)

**カマド** 40×35cmの火床面と、支脚抜き痕と思えるピットが遺存する1類のカマドである。ただ、壁穴からやや内側に遺存し、特異なタイプのカマドとも思える。(渡辺)  
出土遺物 (第87図)

**土師器** (139) 浅い杯の小破片で、残存部での器高は1.75cmを測る。色調は淡褐色を呈し、焼成はやや良である。(井上)

#### 49号住居跡 (図版41, 第89図)

C群の北東端部で南西隅付近だけを検出した住居跡で、その大半は用地外のために未掘であるが、小型の住居と思われる。カマドは西壁側に付設されているが、柱穴は不明である。検出部での規模は、東西165cm, 南北165cm, 壁高は12cmを測る。遺物は何等出土していない。(井上)

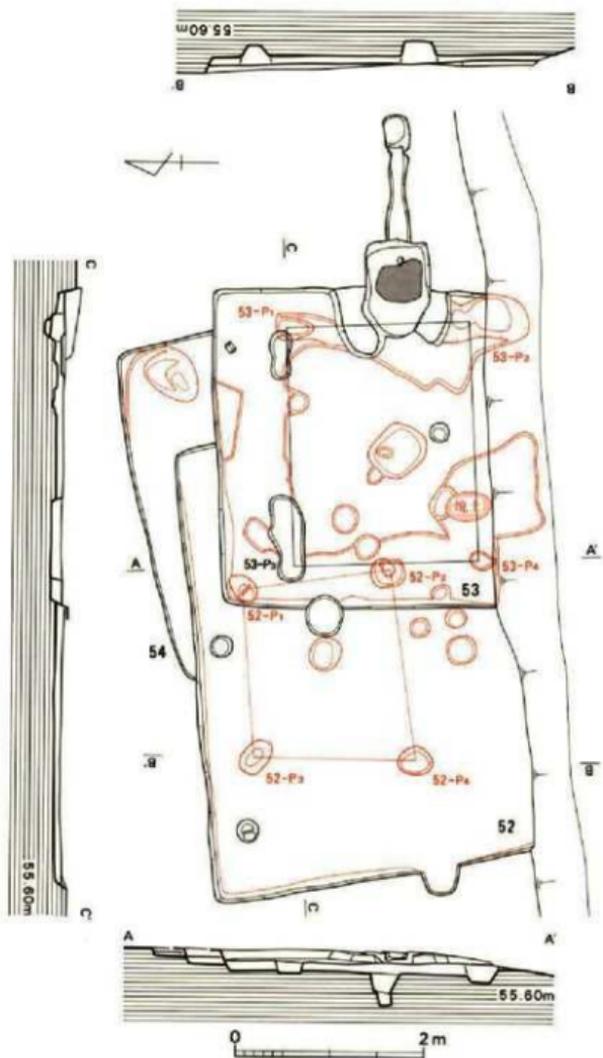


图 91 52-54号住居跡実測图 (1/60)

カマド カマドの大半が発掘外に存在し、焼土のみ遺存するもので、カマドの痕跡を窺わせるに留まる。(渡辺)

#### 50号住居跡 (図版23, 第50図)

E群にあり8・10・78号住居跡に切られた住居跡で、北壁側は新しい溝で欠失している。カマドの位置は不明で、柱穴はP1・P2・P4の3個は確実で、P3は内側に入りすぎるため若干不安が残る。新しい溝で欠失したものかもしれない。現存部での住居の規模は、東西460cm、南北415cm、壁高は20cmを測る。遺物は土師器・須恵器小片が若干出土しただけである。

#### 出土遺物 (第87図)

須恵器 (140) 低平な杯蓋の小破片で、口縁端部の断面形は三角形を呈す。調整は天井部外面は回転へう削り、内面ナデ、体部内外は回転ナデである。色調は灰色を呈し、焼成は堅緻である。(井上)

#### 51号住居跡 (図版26, 第54図)

E群にあり、発掘区東端から検出された住居跡で、東半部は未掘である。カマド・柱穴などは不明であるが、床面は堅くしまっていた。遺物としては土師器甕、須恵器杯蓋・高台付椀などの破片が出土している。現存部での住居の規模は、東西160cm、南北347cm、壁高は19cmを測る。

#### 出土遺物 (第87図)

土師器 (141~146) 141~145の甕の口頸部付近の破片、146は甕の把手である。141は口径15.6cmに復元できるが、他は小破片のため不明である。調整は胴部内面をへう削り、外面は風化が著しく不明、口縁部内外はヨコナデ仕上げである。143の外面には煤の付着がみられる。145が下層出土の他は全て床面出土。

須恵器 (147~150) 147は身受けの返しをもつ杯蓋、148は杯蓋の低平な宝珠形鉢、149は低平な杯蓋で、口縁端部の断面形は不明瞭な三角形をなす。149は復原口径16.1cmを測り、調整は天井部外面を回転へう削り、内面はナデ、体部内外は回転ナデで仕上げている。149は外方に強く張り出した高台が付く椀で、復原高台径は10.4cmを測る。調整は内底部をナデ、体部外面と高台付近は回転ナデ仕上げである。色調は暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。

#### 52号住居跡 (第91図)

E群の南端にあり、東半部を53号住居跡に切られた状態で検出された住居跡で、南壁側は畑の開削で消失している。カマドは不明で、柱穴はP1~P4の4本柱と思われるが、その配置が北側に偏しているため不安が残る。床面は堅く敷きしめられていた。遺物は土師器小片が若干出土したのみである。現存する住居の規模は東西487cm、南北345cm、壁高は8cmを測る。

#### 出土遺物 (第87図)

土師器 (151) 深めの杯の小破片である。調整は風化が著しく不明だが、色調は淡茶褐色を

呈し、焼成はやや良である。

### 53号住居跡 (図版43・44, 第91図)

E群の南東端部に位置し、52号住居跡を切った状態で検出された住居跡で、南壁側は52号と同様に畑の開削で消失している。カマドは東壁に付設されていて、柱穴は壁際に寄っているもののP1～P4の4個と思われる。床面は堅固に敷きしめられていて、その下層を掘り下げた結果、壁に沿ってコ字状にめぐる幅広の周溝が検出され、南西隅溝底からは焼土も検出された。遺物は土師器甕・杯・高台付皿、須恵器高台付碗などの破片と、土鎌が出土している。現存する住居の規模は、東西337cm、南北340cm、壁高は10cmを測る。 (井上)

**カマド** (図版43, 第92図) 1号住居の新カマドと同様、竪穴壁に粘土を貼りつけて作られた

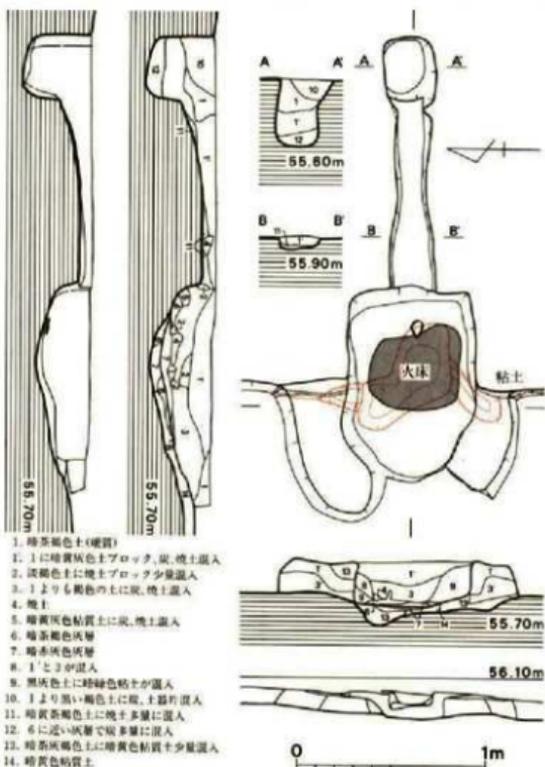
遺存度のよいⅢ類のカマドである。火床面は床面より深く窪んで40×50cmを測る。支脚は確認出来ず、5cm程の灰層の上に焼土塊等が詰まり、天井部の残骸だろう。内壁は堅く焼け、煙道壁も焼土化していた。火床面下に焼土ブロック混の灰層があり、右袖下に焼土・炭が入り込んでいて、カマドの作り直しが窺える。袖部は焼土・炭混入の硬質の暗茶褐色土で盛られ、木の灰の炭化物が出土した。煙道は中空みで緩やかに下り、先端に径30cmのピットを設け、煙出口としている。

(渡辺)

出土遺物 (第93図)

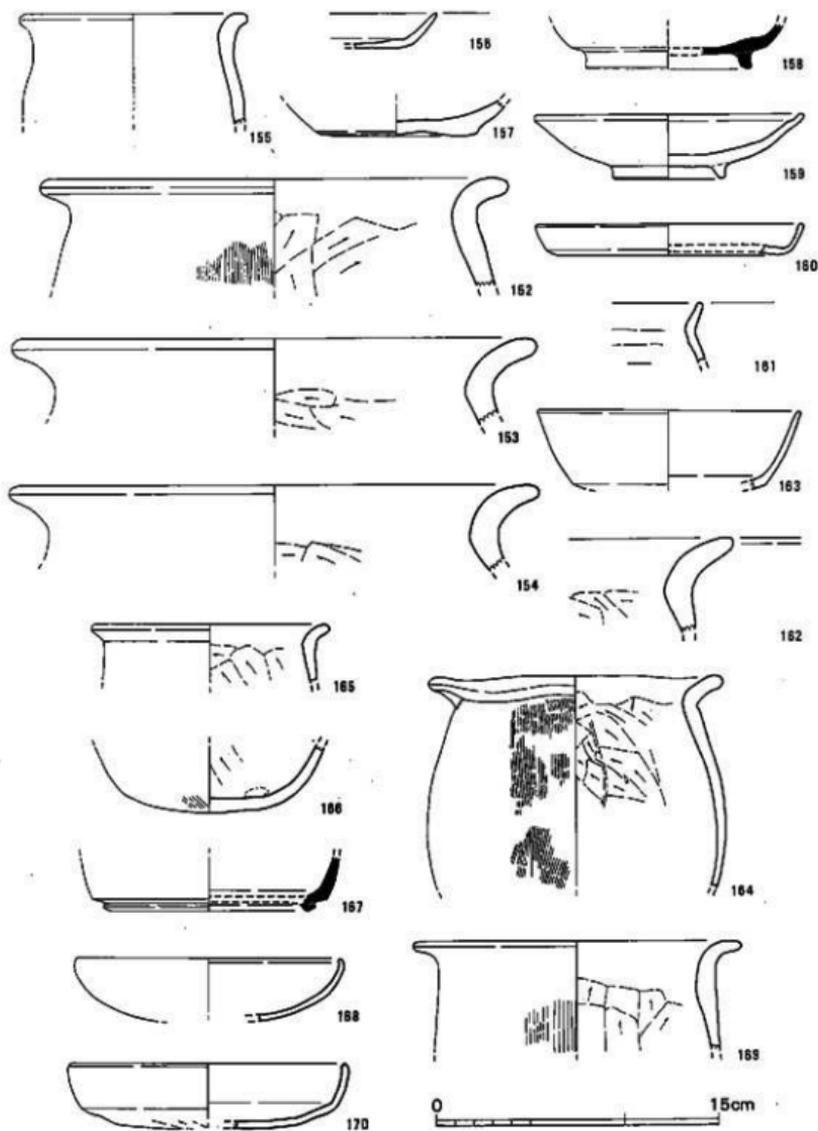
土師器 (152～157・

159) 155は小型甕, 152



1. 暗茶褐色土(硬質)
2. 1に暗茶褐色土ブロック、炭、焼土混入
3. 2より暗茶褐色土に焼土少量混入
4. 焼土
5. 暗茶褐色粘質土に炭、焼土混入
6. 暗茶褐色灰層
7. 暗茶褐色灰層
8. 1と2の混入
9. 黒灰色土に暗茶褐色粘質土少量混入
10. 1より濃い暗茶褐色土に炭、土器片混入
11. 暗茶褐色土に焼土少量混入
12. 6に近い灰層で炭少量混入
13. 暗茶褐色土に暗茶褐色粘質土少量混入
14. 暗茶褐色粘質土

第 92 図 53号住居跡カマド実測図 (1/30)



第 93 图 53·55·59·60·63·64·66号住居跡出土土器実測图 (1/3)

~154は大型甕の口頸部付近の破片資料である。いずれも器面の風化が著しく調整は不明な点を多く残すものの、151は胴部外面刷毛、内面へら削りで、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。復原口径は151が25cm, 153が28cm, 154が28.4cm, 155が12.2cmである。156は浅い杯小片, 157は深めの杯の体部下半の資料である。調整は風化が著しく不明瞭。159は高台付の皿で、口縁部内面は凹縁状に凹む。この種の器形は土師器には殆どみられない特殊な土器で、その類型を知らない。復原口径は14.2cm, 高台径6cm, 器高3.45cmを測る。色調は暗茶褐色を呈し、焼成はやや良である。

須惠器 (158) 口縁部を欠く高台付椀の破片資料で、復原高台径は8.8cmを測る。色調は暗灰色を呈し、焼成堅緻である。

土 鍾 (第36図11) 管状の土鍾で、全長6cm, 中央部径1.9cm, 重さ19.3+αgである。

#### 54号住居跡(第91図)

52・53・71号住居跡に切れ、北壁側をわずかに残すだけの住居跡で、カマド・柱穴なども不明である。現存部での規模は、東西355cm, 南北102cm, 壁高5cmを測る。遺物は何等出土しなかった。

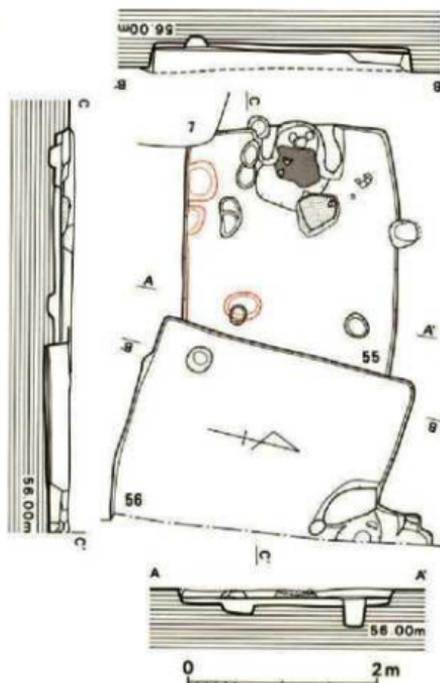
(井上)

#### 55号住居跡 (図版44, 第94図)

D群にあり南西隅を7号住居跡に、東壁側を56号住居跡に切られた小型の住居跡である。カマドは西壁中央に付設されているが、柱穴などは不明である。カマドの前面からは粘土塊が検出されたが、その性格は判らない。床面は中央付近が良く締っていた。遺物は土師器片が少量出土している。

(井上)

カマド (第95図) 煙道部は完全に削平され、僅かに遺存するI類のカマドである。やや小型のカマドであるが、火床面はガチガチに焼土化していた。奥詰った所に支脚と思わ



第 94 図 55-56号住居跡実測図 (1/60)

れる角柱石があり、灰層も多く残存し、土器片や天井部の崩壊の残骸が堆積していた。前庭部の右側に多量の暗青灰色粘土があり、カマドに関連するものか判断し難い。袖部は短く残り、暗黄茶灰褐色粘質土で盛られていた。左袖下層に径30cmのビットがあり、灰等が詰っていた。

(渡辺)

#### 出土遺物 (第93図)

土師器 (160) 浅い杯の破片で、復原口径14.2cm、器高1.5cmを測る。外底部はヘラ削り、内底部はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡褐色を呈し、焼成はやや良である。

#### 56号住居跡 (図版44, 第94図)

55号住居跡を切って作られた住居跡で、東半部は農道のため未掘で、カマドは北壁に付設されているものの東半部は不明である。床面はかなり絞き締められていたものの、柱穴は検出できなかった。現存部での住居の規模は、東西225cm、南北283cm、壁高は19cmを測る。遺物は土師器・須恵器の小破片が若干出土しただけである。

(井上)

カマド カマドの2/3は発掘外にあり、内部も攪乱を受けて辛うじてⅢ類と分類出来たカマドである。燃焼部は火床面まで攪乱を受け、粘土・焼土・炭等が入り混じって詰まっていた。左袖は僅かに遺存し、取り付け際の所が焼土化して痕跡を留める。

(渡辺)

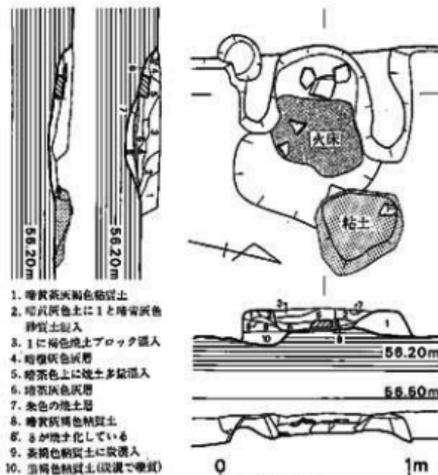
#### 57号住居跡 (第96図)

E群の北端部から検出された住居跡で、南半部は新しい溝で破壊され消失している。カマドは東壁側にあるが、火床を残すだけである。床面は整く締っていたものの、柱穴は判らない。現存部での住居の規模は、東西382cm、南北110cm、壁高は26cmを測る。遺物は土師器片が若干出土しただけである。

(井上)

#### 58号住居跡 (図版45, 第97図)

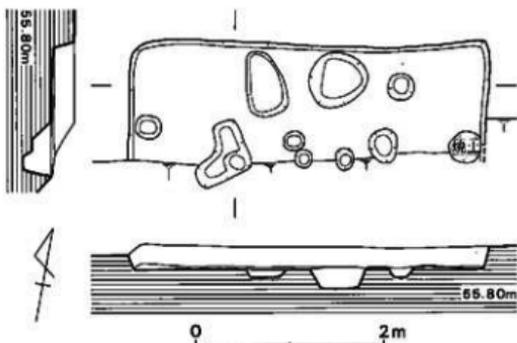
発掘区南東端部にあたるF群から検出された住居跡で、南壁側は59号住居跡に切られている。カマドは東壁側に付設され、柱穴は東側の2個が東壁に近接しすぎるが、P1~P4の4本柱と思われる。現存部での住居の規模は、



第 95 図 55号住居跡カマド実測図 (1/30)

東西288cm, 南北285cm, 壁高は7cmを測る。遺物は土師器片が若干出土したのみである。(井上)

カマド(第98図) 燧道部は完全に削平されたⅢ類のカマドである。燃焼部は二段に落ち窪み、支脚抜き痕が残る。火床面はあまり焼けていないが、壁体は堅く焼けて遺存する。袖部は調査時の雨水で流失し、辛うじて痕跡が残り暗茶褐色粘質土で盛られていたようだ。袖部が長く、異様に思える。(渡辺)



第 98 図 57号住居跡実測図 (1/60)

#### 59号住居跡 (図版45, 第97図)

58号住居跡の南壁側を切った状態で検出された住居跡で, 南半部は用地外のため未掘である。カマドは北壁中央よりやや西側に偏って付設されていた。柱穴は南側の2個が不明であるが, P1・P2からなる4本柱と思われる。現存部での規模は, 東西342cm, 南北330cm, 壁高は12cmを測る。遺物は土師器・須恵器小片が若干出土しただけである。(井上)

カマド 58号住居と同様削平著しく, 辛うじて痕跡が残るⅡ類のカマドである。燃焼部は床面とほぼ同じで, 焼土混の灰層が僅かに残っていた。袖部はカマド奥壁より盛ったタイプで, 暗茶灰色土を使っていた。(渡辺)

#### 出土遺物 (第93図)

土師器 (161) く字状口縁の壺の口縁部付近の小破片である。調整は内外ともヨコナデ仕上げで, 色調は淡褐色を呈し, 焼成はやや良である。(井上)

#### 60号住居跡 (図版26, 第93図)

E群にあって, 10・12・51号住居跡に切れ, その大半を欠失した住居跡で, カマド・柱穴なども不明である。床面の敷き締めはかなり堅固であった。現存部での住居の規模は, 東西135cm, 南北204cm, 壁高は11cmを測る。遺物は土師器片が若干出土しただけである。

#### 出土遺物 (第93図)

土師器 (162・163) 162は高台付椀の杯部破片と思われ, 復原口径は14cmを測る。調整は内外とも風化が著しく不明である。163は壺の口縁部付近の小片である。胴部内面はへら削りで, 口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

### 61号住居跡 (図版29, 第66図)

E郡にあって、16・17号住居跡に切れ、16号住居跡と東西壁がほぼ重なる長方形プランの住居跡である。カマドは遺存状態も悪く、かつ他の住居跡と異なる短辺の北壁側にあるなど疑問は残るが、焼土面が確認されているので北壁に付設されたものと考えておきたい。柱穴も明確ではないが、16号住居跡の柱穴であるP1～P4であった可能性も高く、16号住居跡は61号住居の立替住居と思われる。床面の敷き締めは堅固である。住居の規模は、東西314cm, 南北505cm, 壁高は6cmを測る。遺物は何等出土していない。

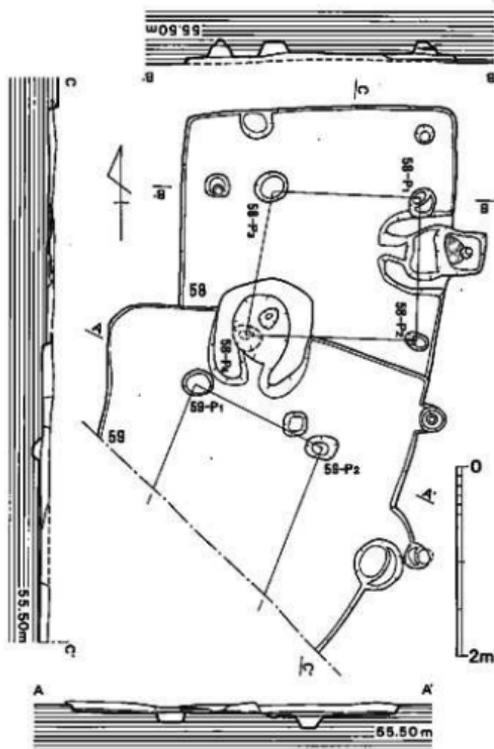
### 62号住居跡 (図版29, 第99図)

E群の西端付近にあって、61・63・64号住居跡に切れ、北壁側の一部を残すだけの住居跡である。カマドは北壁に付設されているが、焚口と右袖の一部は消失している。カマドが北壁のほぼ中央に付設されたものだとすれば、残存する北西隅の位置からして大型の住居が考えられる。明確な柱穴は確認できなかった。遺物はカマド内から出土した若干の土師器片のみである。

カマド (第100図) 煙道部は完全に削平され、焚口部を63号住居に、右袖部を61号住居に切られながらも明瞭に痕跡が残るI類のカマドである。燃焼部では支脚の確認は出来なかったが、火床面は焼土化し天井部の残骸が詰まっていた。袖部は取り付けの所と中程の下層にピットを設け、焼土混の粘質土を詰め暗黄灰色粘質土が盛られている。

### 63号住居跡 (図版29, 第99図)

62号住居跡を切り、64号住居跡に切られた状態で検出された住居跡である。カマドは北壁ほ



第 97 図 58・59号住居跡実測図 (1/60)

ば中央に付設されている。柱穴はP1～P4の4本柱である。現存部での住居の規模は、東西445cm、南北355cm、壁高は22cmを測る。遺物は土師器甕、須恵器碗などの破片が少量出土した。(井上)

**カマド** (図版45, 第101図) III類のカマドで、燃焼部は床面よりやや窪まり、支脚抜き痕と火床面が遺存していた。カマド壁体は焼けておらず、カマド内及び前庭部にカマドの崩壊と思われる粘質土・焼土が多量に散乱していた。袖部は下層にビットを持ち、焼土灰等を詰め黄色粘質土混の暗茶褐色粘質土で盛られていた。煙道は平行に僅かな下り勾配で、先端は左方へ曲っていた。途中を後世のビットで切られている。



第 98 図 58号住居跡カマド実測図 (1/30)

(渡辺)

#### 出土遺物 (第93図)

**土師器** (164～166) いずれも甕の破片資料である。164は胴部上半の資料で、復原口径は15.7cm、165は小型の甕で、復原口径12.7cmを測る。調整は164が胴部外面刷毛、内面へら削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。165・166とも胴部内面はへら削りで、165の内底部には指頭ナデによる圧痕がみられ、外面には刷毛調整の痕跡が残っている。

**須恵器** (167) 高台付碗の体部下半の小破片で、復原高台径は11.3cmを測る。高台は低く、畳付けは外傾している。調整は内外とも回転ナデ仕上げである。色調は淡灰色を呈し、焼成は堅緻である。(井上)

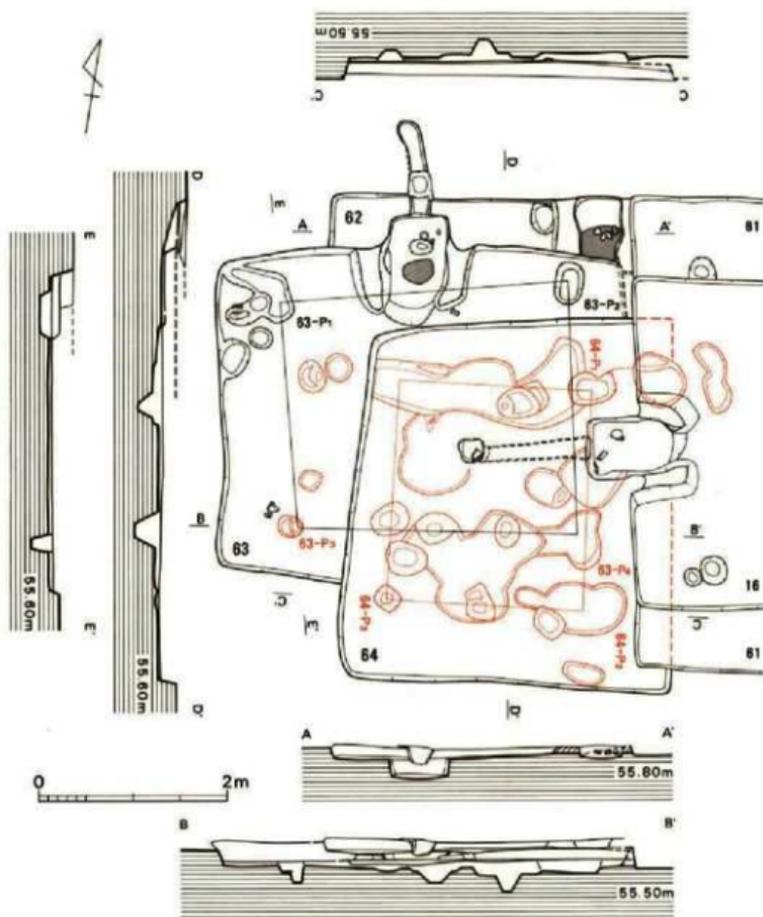
#### 64号住居跡 (図版29, 第99図)

E群の西端部に位置し、63号住居跡を切って16・61号住居跡に切られた状態で検出された住居跡で、東壁側を欠失している。柱穴は西壁側に少し片寄ってはいるがP1～P3の4本柱と思われる。カマドは明確ではないが、破壊されている東壁側に存在したと思われる。床面は良く敷きしめられていた。遺物は土師器片が若干とガラス小玉が1点出土している。

#### 出土遺物 (第93図)

**土師器** (168) 内湾気味に外反する浅い杯破片で、復原口径は14.2cmを測る。器面は風化が著しく調整は不明であるが、体部外面には黒漆の塗布の痕跡がみられる。

**小 玉** (第36図12) 径8mm、厚さ3mmのガラス小玉で、色はダークブルーである。



第 98 図 62-64号住居跡実測図 (1/60)

#### 65号住居跡 (付図1)

E郡にあって11・13・66・72号住居跡に切れ、南壁側の西半部をわずかに残すだけの住居跡である。従って、カマド・柱穴などは不明である。住居の規模は現存部で東西205cm、南北110cmを測り、壁高は2cmと浅い。遺物は土師器小片が若干出土しただけである。

### 66号住居跡 (付図1)

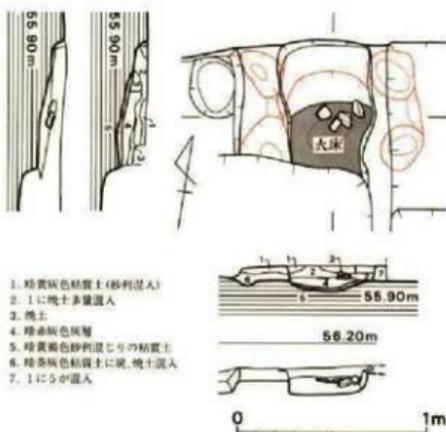
65号住居跡を切り、9号住居跡に切られた状態で検出された小型の住居跡である。カマドの位置は明確ではないが、東壁側が欠失しているの  
で、東壁側に存在した可能性がある。柱穴は不明で、床面もあり敷き詰められていなかった。住居の規模は東西220cm、南北215cm、壁高4cmを測る。遺物は甕・杯などの土器器片が少量出土した。

### 出土遺物 (第93図)

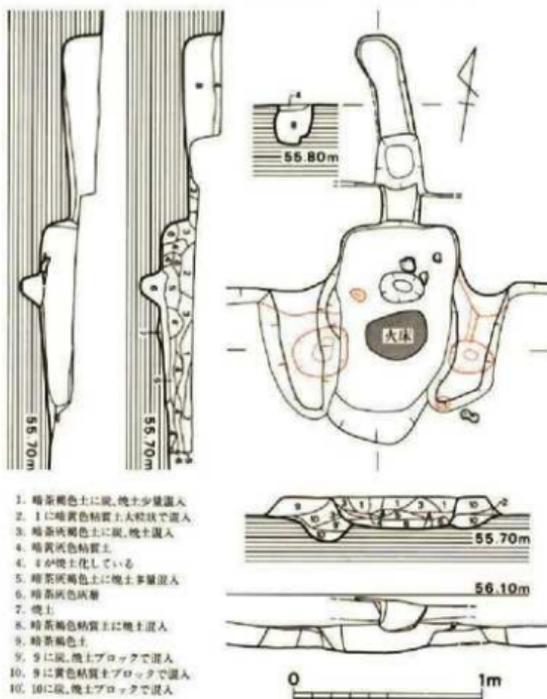
土器器 (169・170) 169は胴部の張らない中型の甕で、復原口径は17.5cmを測る。調整は胴部外面を粗い刷毛、内面をへら削り、口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は暗茶褐色を呈す。170は内湾気味に反する浅い杯で、体部外面下半に屈折稜を有す。調整は体部外面下半をへら削り、内底部はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は暗褐色を呈す。

### 67号住居跡 (第102図)

71号住居跡の下層から検出された住居跡で、北壁と西壁の一部は73号住居跡に切られ、欠失している。カマドや柱穴など



第 100 図 62号住居跡カマド実測図 (1/30)



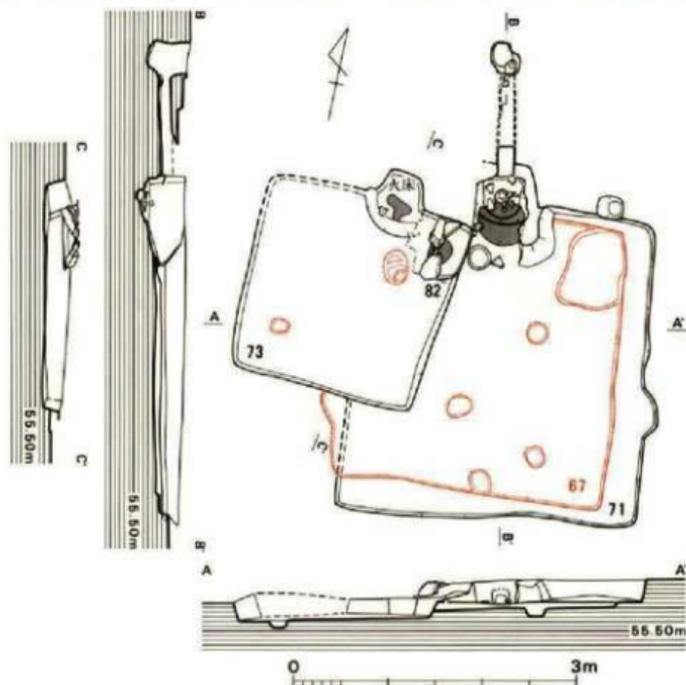
第 101 図 63号住居跡カマド実測図 (1/30)

は不明である。住居の規模は東西302cm、南北294cm、壁高は5cmを測る。遺物は土師器・須恵器破片が少量と土錘1点が出土した。

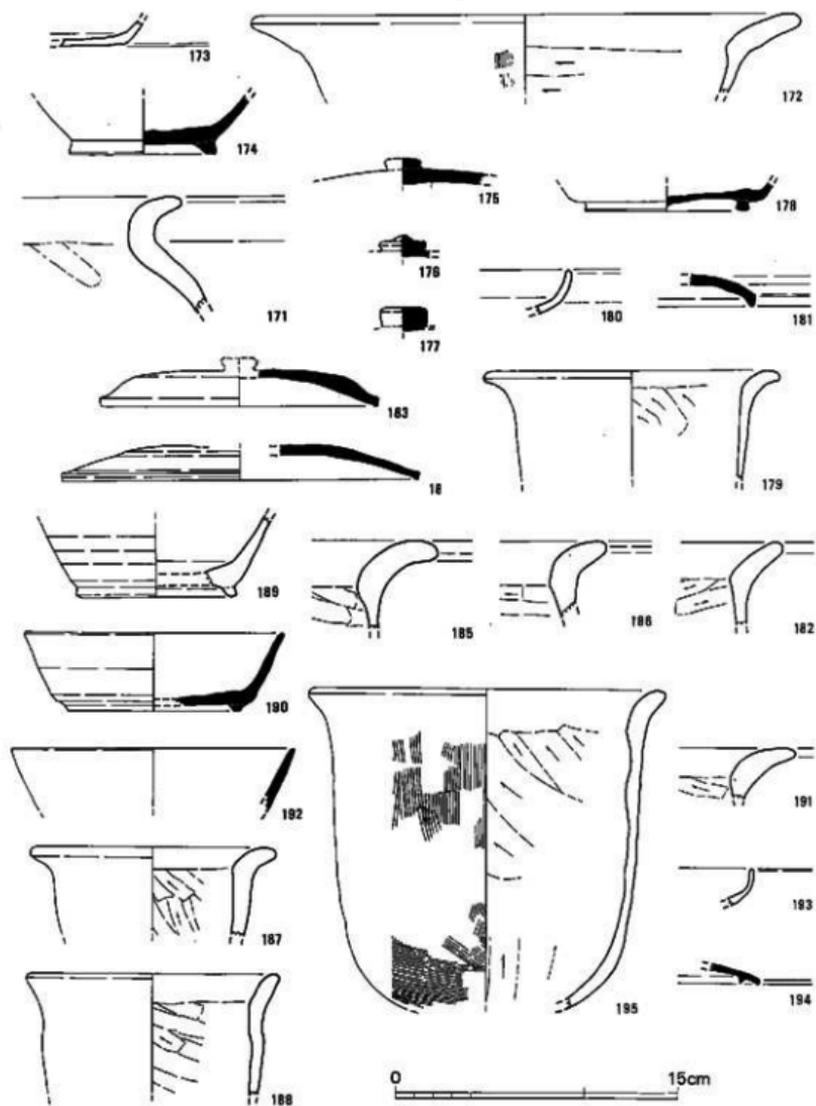
#### 出土遺物(第103図)

**土師器(171~174)** 171は胴部の張った甕の小片である。172は復原口径29.4cmを測る。大型の鉢で、体部外面刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外はココナデで仕上げている。外面には煤の付着がみられる。173は杯の底部付近の小破片で、調整は器面の風化が著しく不明である。174は口縁部付近を欠く土師質の高台付椀で、復原高台径は7.8cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、調整は風化のため不明である。

**須恵器(175~178)** 175~177は杯蓋で、175・177は扁平な鈕、176は宝珠形の鈕を有す。178は高台付椀で、体部上半を欠く資料である。高台は直に立ち、甕付は平坦である。体部内外は回転ナデ、内底部はナデ、外底部はヘラ切り離しのあとナデで仕上げている。色調は暗灰色を



第 102 図 67・71・73・82号住居跡実測図 (1/60)



第 103 图 67·69·71~73·75·77·78号住居跡出土土器实测图 (1/3)

呈し、焼成は、堅緻である。

#### 68号住居跡 (第54図)

E群にあって11・12号住居跡に切られ、わずかに南壁側の一部を残すだけの住居跡で、カマド・柱穴なども不明である。現存部での住居の規模は東西237cm、南北50cm、壁高13cmを測る。遺物は土師器小片が若干出土しただけである。

#### 69号住居跡 (第85図)

C群にあって44号住居跡に切られ、その大半を欠失した住居であるが、床面下から検出された北壁の一部と西壁側から出土したカマドの火床などから、東西400cm、南北455cmの規模の住居と思われる。壁高は残りの良い南壁で52cmである。柱穴は若干西壁側に偏するがP1-P4の4本柱と考えられる。床面の敲き締めは堅い。遺物は土師器・須恵器片が若干出土したのみである。

#### 出土遺物 (第103図)

土師器 (179・180) 179は小型の壊破片で、復原口径は15.8cmを測る。調整は胴部内面がヘラ削りの他は風化のため不明である。180は浅い杯の小片で、内外ともナデで仕上げている。

須恵器 (181) 杯蓋の口縁部付近の小片で、口縁端部の断面は嚙状を呈す。天井部外面を回転ヘラ削り、内面はナデ、口縁部内外は回転ナデで仕上げている。色調は淡黒灰色を呈し、焼成は堅緻である。 (井上)

石器 (第104図) 軟質アブライト製の礫石。覆土より出土。 (木下)

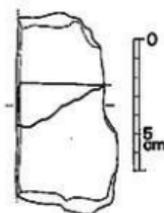
#### 70号住居跡 (第75図)

C群にあって28・29号住居跡に切られ、東壁側の一部を残すだけの住居跡である。カマドは他の住居跡とは異なり北東隅に付設されている。柱穴等は不明である。現存部での住居の規模は、東西183cm、南北390cm、壁高は13cmを測る。遺物は土師器小片が若干出土したのみである。

#### 71号住居跡 (図版46, 第102図)

E群にあって14・73号住居跡に切られた状態で検出された方形プランの住居跡である。カマドは北壁のほぼ中央に付設されているが、西側袖は73号住居跡に切られ、欠失している。床面は全体に良く敲き締められているが、柱穴等は不明である。住居の規模は、東西330cm、南北340cm、壁高22cmを測る。遺物は土師器・須恵器片が少量出土した。 (井上)

カマド (図版46, 第105図) 左袖を73号住居に切られるⅢ類のカマドである。燃焼部は床面より深く掘り込まれ、支脚抜き痕・火床面等遺存していた。カマド中央部は厚く灰層が残りに、天井部の残骸が詰まっていた。袖部は、カマド奥壁から黄色粘質土を盛り、袖部下層に例のごとく、ビットを設けて焼土等を埋め込んでいる。煙道は先細りで、ほぼ水平に伸びていた。煙道の天井部も直線的であり、断面形から掘り込み式と思われる。先端のビットは一段深く掘ら



第104図 69号住居跡出土石器実測図(1/3)

れ、壁体も堅く焼けていた。

(波辺)

#### 出土遺物(第103図)

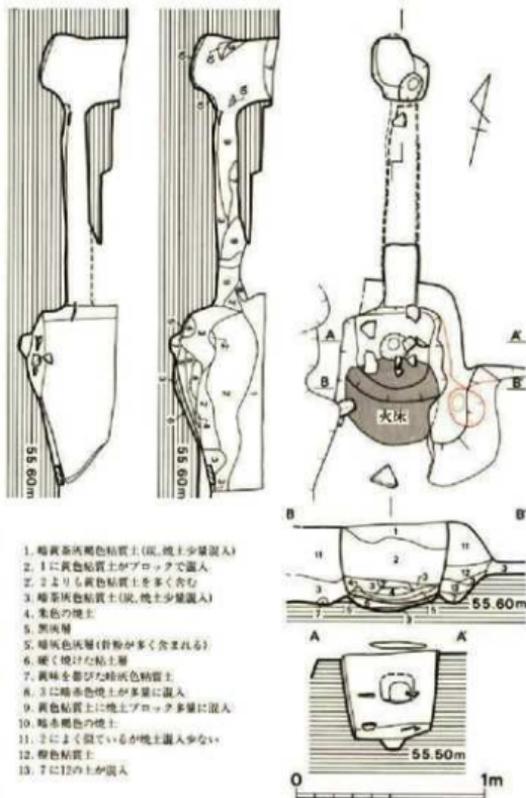
土師器(182) 甕の口縁部付近の小破片で、口縁部内外はヨコナデ、胴部内面はへう割りし、外面は器面風化のために不明である。色調は茶褐色を呈し、焼成も良好である。

須恵器(183・184) いずれも杯蓋で、大小がある。183は復原口形14.7cm、184は19cmを測る。口縁端部は嘴状で、断面三角形を呈す。184は内外とも風化が著しく調整手法は不明瞭であるが、183は天井部内外ともナデ、口縁部と体部内外は回転ナデで仕上げている。色調はいずれも灰色を呈し、焼成は183は堅緻、184はやや良である。

#### 72号住居跡(第106図)

13・14・71・73号住居跡に切れ、65・77号住居跡を切った状態で検出された住居跡で、北壁側と東壁側を残すだけである。カマドは北壁のほぼ中央に付設されているものの、柱穴等は不明である。住居の規模は現存部で、東西366cm、南北320cm、壁高は25cmを測る。遺物は土師器甕・碗、須恵器碗などが出土している。(井上)

カマド(第107図) 遺存の良い典型的な田類のカマドである。燃焼部は床面とは水平で、中央に支脚付き痕、その手前に火床面が遺存していた。焚口近くは黒灰の詰まった30×20cmのビットがあり前庭部にも黒灰が散乱していた。袖部はやや短く遺存し、下層に浅い掘り込みがあり灰層を詰め暗茶灰褐色粘質土で盛っていた。又、左袖には焼



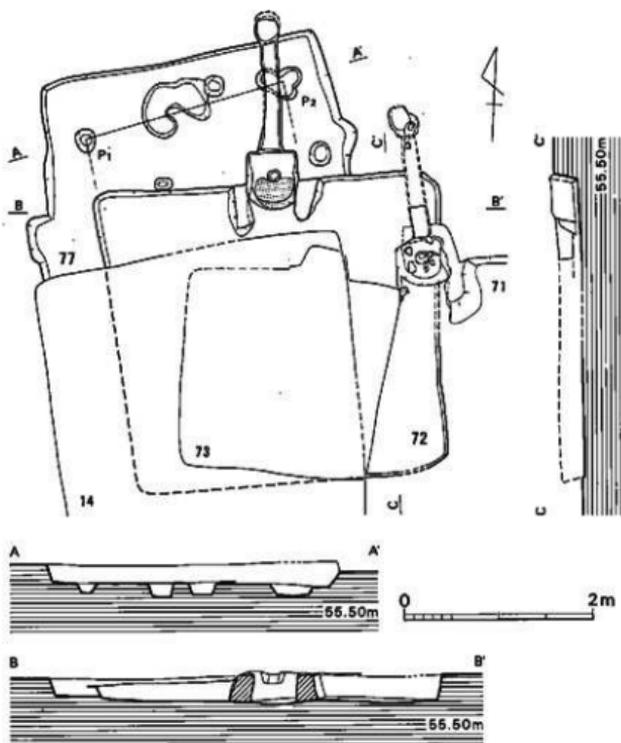
第 105 図 71号住居跡カマド実測図(1/30)

土が大ブロックで混入されており補強材であろうか。煙道は先細りの緩やかな下り勾配で、先端にピットを設けて煙出口としている。(渡辺)

出土遺物(第103図)

土師器 (185-189) 185-188は甕で、口縁部の形状からして、185・186は大型、187・188は小型品である。187は復原口径13cm, 188は13.4cmを測る。調整手法は胴部内面へラ削り、口縁部内外はヨコナデ、胴部外面は風化のため不明瞭であるが刷毛調整と思われる。色調は185・186が黄褐色, 187・188は褐色を呈し、焼成は良好である。189は高台付椀の体部下半の資料で、復原高台径8.5cmを測る。内外とも回転ナデ仕上げである。色調は黄褐色で、焼成は良である。

須恵器 (190) 高台の低い椀で、復原口径13.8cm, 器高4.3cmを測る。調整は底部内外ともナ



第 106 図 72・77号住居跡実測図 (1/60)

テ、体部内外と高台付近は回転ナデで仕上げている。色調は外面淡灰色、内面は黄灰色を呈す。焼成はやや軟質である。

### 73号住居跡 (図版46, 第102図)

13・14号住居跡に切られた方形プランの小型の住居跡で、東西215cm、南北220cm、壁高は27cmを測る。カマドは北壁中央よりやや東偏して付設されていたが、袖や煙道は遺存していなかった。ピットは下層から2個検出されたもの、柱穴は不明である。遺物は土師器・須恵器片が若干と、刀子片1点、土錘2点が出土している。

(井上)

**カマド** 両袖がまったく遺存しないⅢ類のカマドである。燃焼部は床面とほぼ水平で、火床面のみが僅かに残っていた。煙道も削平されて遺存しない。

(渡辺)

### 出土遺物 (第103図)

**土師器 (191)** 甕の口縁部付近の小破片で、色調は茶褐色を呈し、焼成も良い。

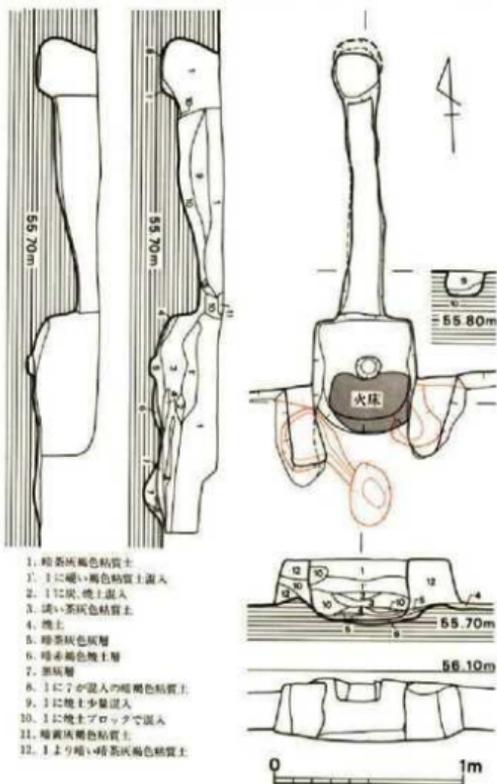
**須恵器 (192)** 碗の体部破片で、復原口径は15cmを測る。体部内外とも回転ナデ仕上げで、色調は灰色を呈し、焼成は堅緻である。

**刀子 (第40図6)** 切先と基部を欠く刀子で、現存長4.2cm、刃部最大幅0.9cmを測る。

**土錘 (第36図14・15)** いずれも紡錘形の土錘である。14は完形品で、全長4cm、最大径1.2cm、重さ5gを測る。15は上下端部を欠くが、現存長4.4cm、最大径1.3cmを測る。

### 74号住居跡 (付図1)

E群にあって9・17号住居跡に切られた状態で検出された小型の住居跡で、カマド・柱穴と



第 107 図 72号住居跡カマド実測図 (1/30)

も不明である。住居の規模は現存部で、東西140cm、南北220cm、壁高7cmを測る。遺物は何等出土しなかった。

#### 75号住居跡(第50図)

E群の北端部にあって、8号と50号住居跡の下層から検出された住居跡である。北壁は新しい溝で、東壁は削平され、消失している、カマドも不明である。床面は全体に堅く敲き締められていて、柱穴P1～P4の4本柱と思われる。現存部での住居の規模は、東西422cm、南北370cm、壁高8cmを測る。遺物は土師器小片が若干出土したのみである。

#### 出土遺物(第103図)

土師器(193) 内湾気味に立ち上がった浅い杯の口縁部付近の小破片である。色調は褐色を呈し、焼成も良い。胎土は精良である。

#### 77号住居跡(第106図)

E群の中央部にあって13・72号住居跡に切られた状態で検出された住居跡である。柱穴は南壁側が消失しているが、北壁側はP1・P2の2個で、カマドの位置は不明である。現存部での住居の規模は、東西325cm、南北210cm、壁高25cmを測る。遺物は土師器・須恵器小片が若干出土しただけである。

#### 出土遺物(第103図)

須恵器(194) 身受けの返りを有す杯蓋の小片である。内外とも回転ナデ調整で仕上げた灰色を呈す焼成堅緻な土器である。

#### 78号住居跡(図版26, 第54図)

9・10・38号住居跡に切られ、50号住居跡を切った状態で検出された小型の住居跡である。住居は北壁側と西壁側を残すだけで、その大半は消失しているが、カマドは北壁中央に付設され遺存していた。しかし、柱穴と思われるピットは検出できなかった。住居の規模は、現存部で東西243cm、南北315cm、壁高25cmを測る。遺物は土師器甕と土鏝1点が出土している。(井上)

カマド(第108図) 左袖の一部を9号住居に切られているが、造り度の良いⅢ類のカマドである。燃焼部は床面とほぼ同じで、火床面は砂質土の為か焼けていない。内部は土器片を多く含んだ灰層が厚く残り、支脚に使用されたいし土師器の小型甕片が倒立して遺存していた。その甕の内側に暗黄灰色粘質土があり、固定に使用したのであろう。袖部はカマド奥壁より暗青灰色粘質土等を盛っている。このような構築方法は44号住居と71号住居に見られ、宮原遺跡(註1)で多く確認されたタイプである。煙道は平行で、下りの急勾配で掘り込まれて先端部を後世の穴に切られる。(渡辺)

註1 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告(17) 宮原遺跡 II 1990

#### 出土遺物(図版62, 第103図)

土師器(195) ずん胴な胴部に緩やかに外反する口縁がつく小型の甕で、復原口径は18.9cm

を測る。胴部外面を刷毛、内面は粗いヘラ削り、口縁部内外はココナテ調整で仕上げている。

土 錘 (第36図16) 紡錘形の土錘で、全長7.1cm、最大径1.6cm、重さ19.7gを測る。

#### 78号住居跡 (第54図)

E群にあって10~12号住居跡に切られた状態で下層から検出された小型の方形住居跡で、北半部は欠失している。カマドは西壁側にあったらしく焼土面が残っていた。柱穴は不明である。現存部での住居の規模は、東西285cm、南北145cm、壁高は4cmを測る。

#### 80号住居跡 (付図1)

E群にあって52号住居跡の下層から検出された南西隅を残すだけの住居跡で、カマド・柱穴・住居の規模等は不明である。現存部での住居の規模は東西80cm、南北110cm、壁高9cmを測る。

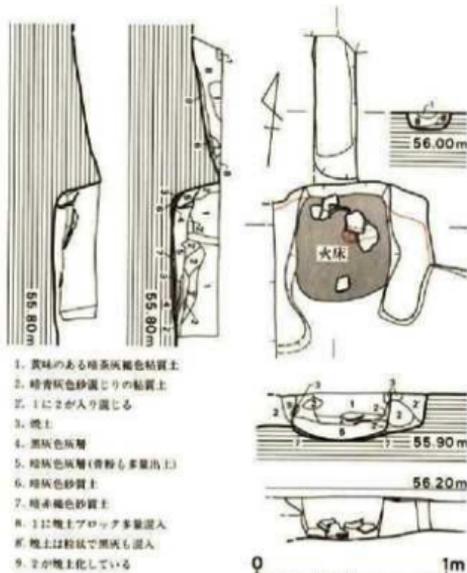
#### 81号住居跡 (付図1)

11・65・72・77号住居跡に切られた状態で検出された東壁側の一部を残すだけの住居跡で、カマド・

柱穴なども不明である。現存部での住居の規模は東西110cm、南北180cm、壁高24cmを測る。

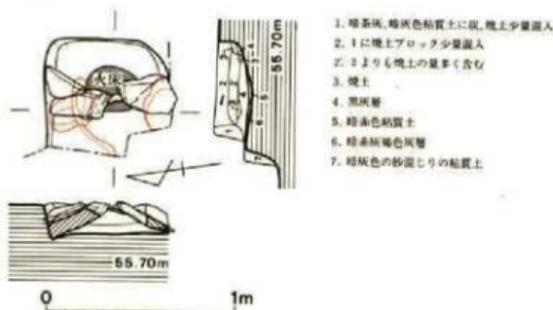
#### 82号住居跡 (第102図)

71号住居跡の北側から検出されたカマドの火床面を残すだけの遺構で、住居の規模等は



1. 黄味のある暗赤褐色粘質土
2. 暗青色砂混じりの粘質土
3. 1に2が入り混じる
4. 焼土
5. 黒灰色灰層
6. 暗灰色灰層(骨粉も多量混入)
7. 暗灰色粘質土
8. 暗赤褐色粘質土
9. 1に焼土ブロック少量混入
10. 焼土は粒状で黒灰も混入
11. 2が焼土化している

第 100 図 78号住居跡カマド実測図 (1/30)



1. 暗赤褐色粘質土に灰、焼土少量混入
2. 1に焼土ブロック少量混入
3. 2よりも焼土の量多く含む
4. 焼土
5. 黒灰層
6. 暗赤褐色粘質土
7. 暗赤褐色灰層
8. 暗灰色の砂混じりの粘質土

第 109 図 82号住居跡カマド実測図 (1/30)

全く不明である。火床の範囲は長径80cm、短径40cmを測り、南側は71号住居跡により切られ、消失している。火床面からは土師器杯・壺破片とともにフイゴの羽口片も出土している。従って、この住居で鍛冶が行われていた可能性もある。(井上)

カマド(第109図) 73号住居より新しく、14号住居より古い住居に伴うカマドで、カマドのみ遺存してタイプは分類出来ない。燃焼部は25×30cmの火床面に多くの黒灰層が残り、両壁体よりやや扁平な長方形の石が合掌風に倒れ込んでいる。袖部に使用されていた石と思われ、特異なタイプである。(渡辺)



第 110 図 発掘風景

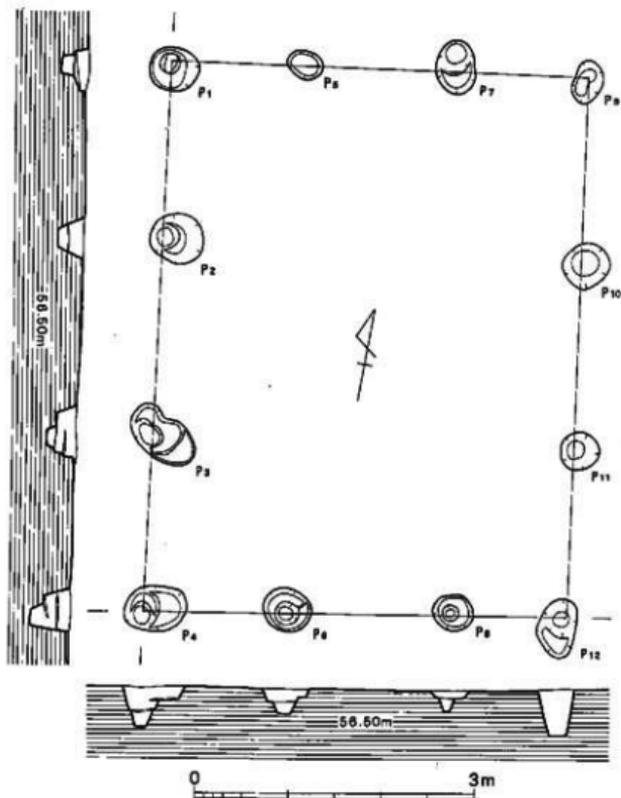
## (2) 掘立柱建物跡

### 1号掘立柱建物跡 (図版47, 第111図)

31号住居跡の北側から検出された3間×3間の建物跡である。梁間間平均449cm, 桁行間平均592cmを測る。柱穴は二段掘りと素掘りのものがある。桁行方位N-8.5°-Wを指す。また, 柱穴内から須恵器杯蓋・甍片が出土した。時期は8世紀中頃に比定できる。

### 2号掘立柱建物跡 (図版47, 第113図2)

6号住居跡の南西側から検出された2間×2間の総柱の建物跡で, 西側梁間より東側梁間が

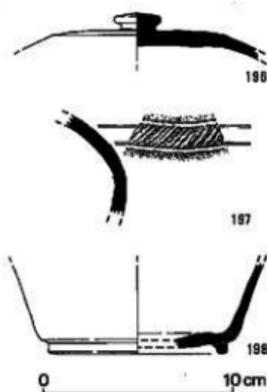


第 111 図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

若干幅広である。梁間平均311cm，桁行間平均442cmを測る。柱穴はいずれも二段掘りのものである。桁行方位はN-92.5°-Wを指す。

3号孤立柱建物跡 (図版47, 第113図3)

2号建物跡の南側に並列する2周×2間の総柱の建物跡である。梁間平均306cm，桁行間平均502cmを測る。柱穴はいずれも二段掘りのもので、深さはP3・P6・P7が浅い他は深くしっかりしている。桁行方位はN-92.5°-Wを指す。また、柱穴内からは須恵器高台付碗破片が出土した。



第 112 図 1・2号孤立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)

表 2 1号孤立柱建物跡計測表

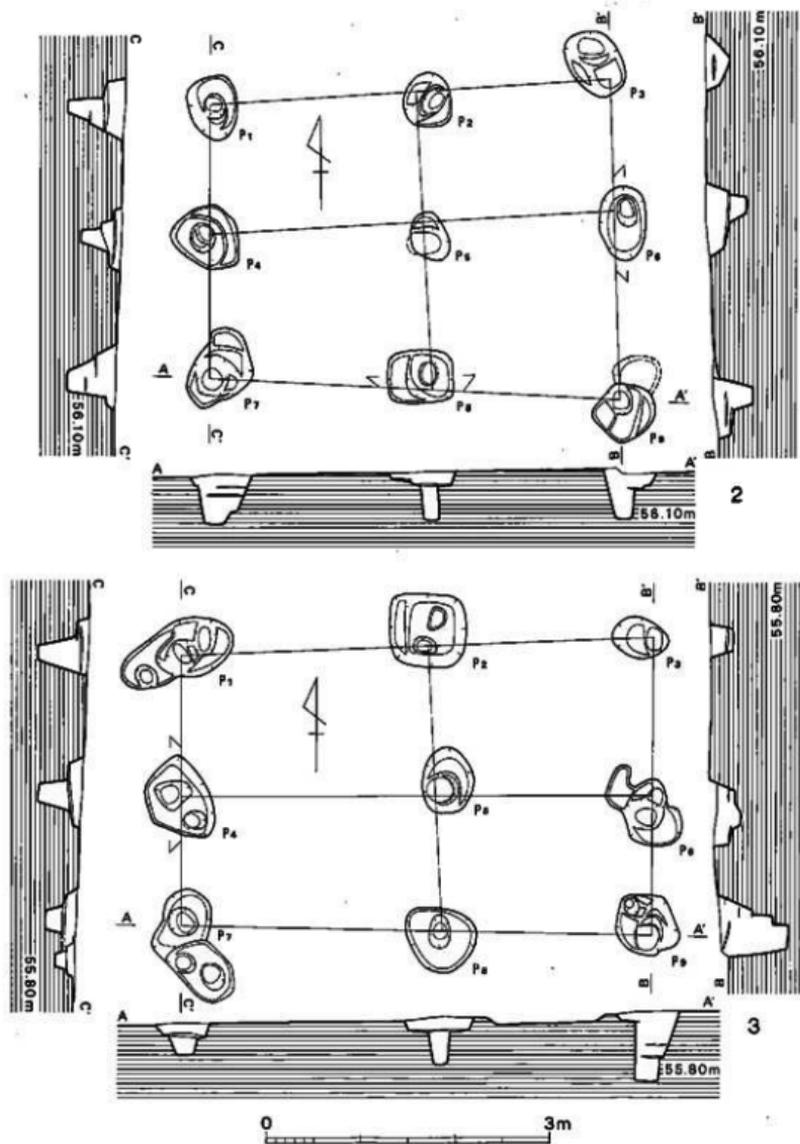
(単位cm)

桁行柱間寸法			桁行寸法			梁間柱間寸法			P	深 さ			
P1-P2 185	P2-P3 212	P3-P4 205	P1-P4 602	P1-P5 143	-	-	P4-P6 154	1	29.6	6	28	11	24.7
-	-	-	P5-P6 590	P5-P7 161	-	-	P6-P8 175	2	25.4	7	11.7	12	48.3
-	-	-	P7-P8 600	P7-P9 142	-	-	P8-P12 120	3	31.5	8	22.5		
P9-P10 195	P10-P11 197	P11-P12 185	P9-P12 577	梁 間 寸 法				4	41.3	9	16		
				P1-P9 446	P2-P10 447	P3-P11 453	P4-P12 449	5	14.1	10	17.2		

表 3 2号孤立柱建物跡計測表

(単位cm)

桁行柱間寸法			桁行寸法			梁間柱間寸法			P	深 さ			
P1-P2 235	P2-P3 205	P1-P3 490	P1-P4 137	P2-P5 153	P3-P6 143	1	60	5	51.5	9	42		
P4-P5 235	P5-P6 215	P4-P6 450	P4-P7 155	P5-P8 140	P6-P9 235	2	50	6	42				
P7-P8 230	P8-P9 205	P7-P9 435	梁 間 寸 法				3	25	7	51			
			P1-P7 292	P2-P8 293	P3-P9 348	4	42	8	40.5				



第 113 图 2·3号独立柱建筑物实测图 (1/60)

表 4 3号獨立柱建物跡計測表

(単位cm)

折行柱間寸法		折行寸法		浴間柱間寸法			P	深 さ			
P1-P2 256	P2-P3 245	P1-P3 501	P1-P4 153	P2-P5 157	P3-P6 167	1	54	5	60.8	9	74
P4-P5 286	P5-P6 230	P4-P6 516	P4-P7 140	P5-P8 152	P6-P9 150	2	68.7	6	28		
P7-P8 270	P8-P9 220	P7-P9 490	浴 間 寸 法			3	24	7	33.7		
			P1-P7 293	P2-P8 309	P3-P9 317	4	45.8	8	50		

## (3) 鍛冶状遺構 (付図1)

71号住居跡に一部切られた状態で検出された堅く焼き固められた焼土面で、長径85cm、短径40cmの不整形である。焼土面からは土師器杯・甕などととも、フイゴの羽口片が1点出土した。当初、住居跡のカマドの一部と想定したが、付随する住居のプランが検出できないので、フイゴの羽口片の出土などから明確ではないが鍛冶状遺構の一部と推定したものである。しかし、鉄滓などが検出されていないので、かならずしも鍛冶状遺構として十分な内容を備えていないものかもしれない。遺構としては、掘り込み面を残すものでなく、下底部の焼土面を残すだけの遺構で、上部の構造は不明である。

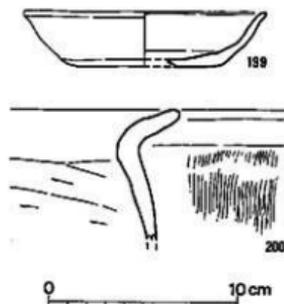
## 出土遺物 (図版61, 第114図)

土師器 (199・200) 199は復原口径12.8cm、器高2.9cm、底径8.2cmを測る杯である。体部内外ロクロコナナ、内底部ナテ、外底部はヘラ切り手法で仕上げている。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。200はく字状口縁の甕破片である。調整は胴部外面粗い刷毛、内面ヘラ削り、口縁部内外ヨコナテ仕上げである。色調は茶褐色で、焼成良好である。

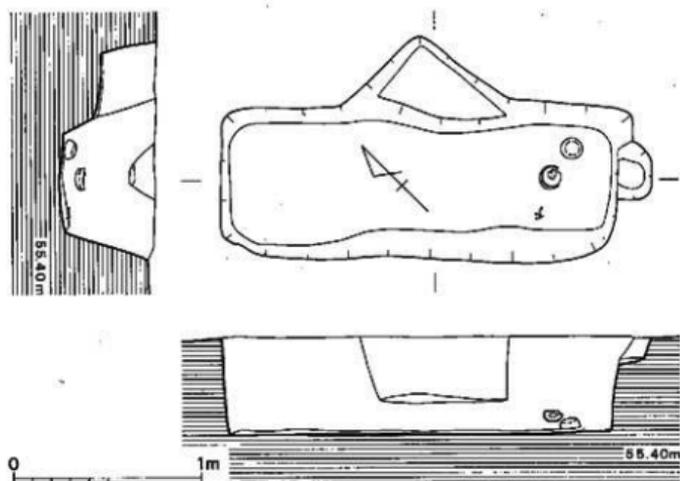
羽口 (第36図19) 羽口の先端部付近の小破片で、一部ガラス質を残している。

## (4) 土墳墓 (図版48, 第115図)

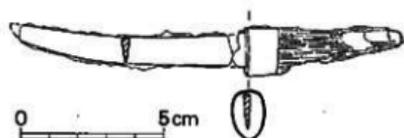
3号獨立柱建物跡の南側、弧状に配置された竪穴住居跡群の中央広場ともいえる空白地から検出された。一部東側側壁中央と南側小口部でピットと複合しているが、長辺211cm、短辺87cm、深さ52cmを測る長方形プランの茶掘りの土墳墓である。底面の規模は南北203cm、東西中央で53



第 114 図 鍛冶状遺構出土土器実測図 (1/3)



第 115 図 土器墓実測図 (1/30)

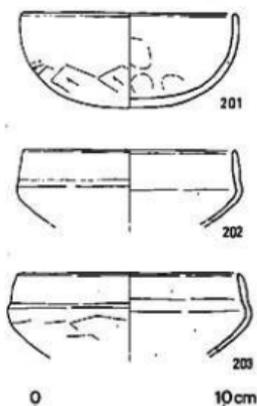


第 116 図 出土鉄器実測図 (1/2)

cm, 北側小口で63cm, 南側小口で55cmを測る。棺内南側小口部付近からは床面よりわずかに浮いた状態で、土師器杯身3個と刀子1点が出土した。底面小口の規模は南より北側が広いので頭位は北かもしれない。時期は6世紀中頃に比定できる。

出土遺物 (第116・117図)

鉄刀子 (第116図) 切先と基部の一部を欠失するものの、木柄の一部が残っていた。現存部での長さ13.5cm, 刃部長8cm, 刃部中央幅0.9cm, 身厚0.25cm, 柄部長5.5cmを測る。



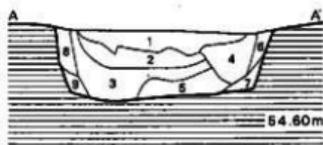
第 117 図 出土土器実測図 (1/3)

土師器 (第117図) 201は内湾気味に立ち上がる口縁を有す碗で、口径11.5cm、器高5.1cmを測る。調整は体部下半をへら削り、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。202・203は体部外面中位に、不明瞭ながらも蓋受けの屈折線をもつ杯身で、復原口径202が11.4cm、203が12cmを測る。調整は202は器面風化のために不明であるが、203は体部外面へら削り、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ仕上げである。いずれも胎土は精良で焼成も良い。

### (5) 溝状遺構

#### 溝1 (図版3, 第118図)

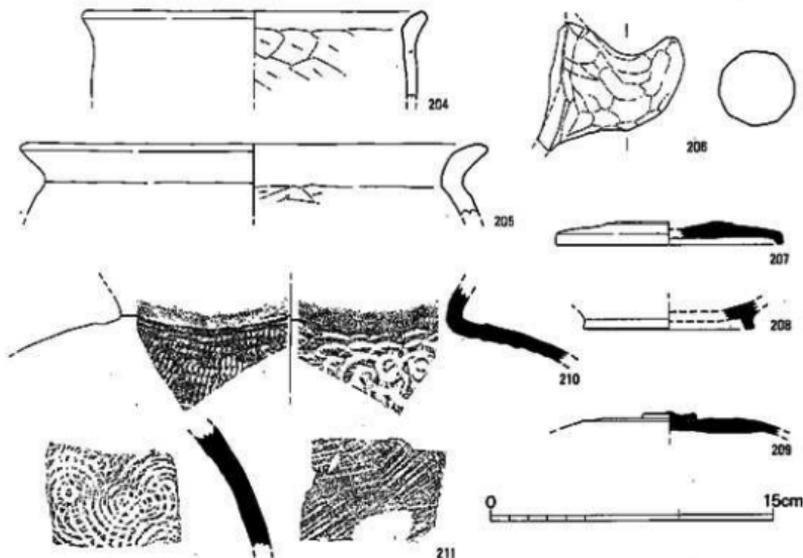
発掘区北西端部から検出されたほぼ東西に走る溝で、北西端部で南に直角に屈折する。溝の北側と西側には浅い小溝が直交して付設されていたらしく数条が残っていた。溝1の幅は65~100cm、深さは20~40cmで溝底は東から西に傾斜している。北側と西側に付設された小溝はいずれも浅く、溝幅も20~35cmと狭いものである。小溝の間隔も約



- |                     |                  |
|---------------------|------------------|
| 1. 赤褐色土             | 6. 暗赤褐色土         |
| 2. 赤褐色土に暗赤褐色土が混入    | 7. 灰色砂土          |
| 3. 暗赤褐色土に灰ブツが混入     | 8. 赤褐色土          |
| 4. 暗褐色土に黒褐色土及びブツが混入 | 9. 赤褐色土に暗赤褐色土が混入 |
| 5. 赤褐色土             |                  |



第118図 溝1土層断面図 (1/20)



第119図 溝状遺構出土土器実測図 (1/3)

50cmとほぼ一定しているようである。溝内からは土師器・須恵器片が数点出土していて、時期は8世紀中頃に比定できる。

#### 出土遺物 (第119図)

土師器 (204・206) 204・205とも甕の口縁部付近の破片で、206は把手である。204はわずかに外反する口縁を有す甕で、復原口径は18.4cmを測る。205は張りのある胴部に強く外反する口縁部がつく甕で、復原口径は24.8cmを測る。両者とも調整は胴部内面をへら削り、口縁部内外はヨコナデ、胴部外面は風化が著しく調整は不明である。

須恵器 (207・208) 207は低平で小型の杯蓋で、復原口径は12.1cmを測る。天井部外面は回転へら削り、内面はナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成は不良である。208は高台付椀の高台の破片で、高台径9.2cmを測る。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好、堅緻である。

#### 溝2 (図版3, 付図1)

溝1の東側から検出されたほぼ南北に走る溝である。溝幅は25~40cm、深さは12~16cmで溝底は北から南に傾斜している。時期は遺物が何等出土していないので不明である。

#### 溝3 (図版2, 付図1)

発掘区北端の丘陵斜面裾部に形成された平面形がL字形をなす溝で、溝幅は30~50cmを測る。溝内からは須恵器甕・杯蓋等の破片が出土していて、時期は8世紀代に比定できる。

#### 出土遺物 (第119図)

須恵器 (209・210) 209は体部から口縁部付近を欠く杯蓋で、鈕は低平な宝珠形をなす。調整は天井部外面を回転へら削り、内面ナデ、鈕部は回転ナデで仕上げている。色調は外面が暗灰色、内面は黒灰色を呈し、焼成は良好堅緻である。210は頸部から肩部にかけての甕破片で、肩部外面を格子目のタタキ、内面は同心円文のタタキ、頸部内外は回転ナデで仕上げている。色調は外面を紫灰色、内面は暗灰色を呈す。

#### 溝4 (図版2, 付図1)

溝3の南側に隣接して検出された溝である。溝底は東から西に傾斜している。全長6m、溝幅は中央部で85cmを測る。溝内から須恵器甕等の破片が少量出土しただけである。

#### 出土遺物 (第119図)

須恵器 (211) 甕の胴部破片で、外面平行タタキ、内面同心円文のタタキを施している。色調は外面黒灰色、内面灰色を呈し、焼成はやや良である。

#### 溝5 (図版2, 付図1)

溝4の南側に平行する溝で、全長6mを測る。溝は他の溝と同様に東から南西に傾斜している溝で、溝幅は最大部で190cmである。遺物は何等出土していないものの、埋土には焼土塊が多量に含まれていた。

## (6) 畝状遺構 (図版49, 第120図)

発掘区中央付近から検出された10数条からなる小溝で、一部若干方向を異にする溝は存在するものの、ほぼ並列する畝状をなす溝状遺構である。上面が削平されていることもあって小溝は断続している。溝幅は14-66cm、深さも5.7-17.4cmと浅く、断面形も浅いU字状を呈している。これら小溝からは土師器・須恵器小片が若干出土しているものの、時期を確定できる資料ではない。しかし、1-3号住居跡や2・3号獨立柱建物跡に切られた状態で検出されているので、それらの住居跡や建物跡が形成される以前の遺構であることは明らかである。また、発掘区北西端部で検出されている溝1の北側に付設されている小溝と類似する遺構ではあるが、走行方向が若干異なるので時期を異にする可能性が高い。時期は切り合い関係のある1・2号住居跡が8世紀前半に比定できるから、少なくともそれ以前に形成されたものであることが判る。

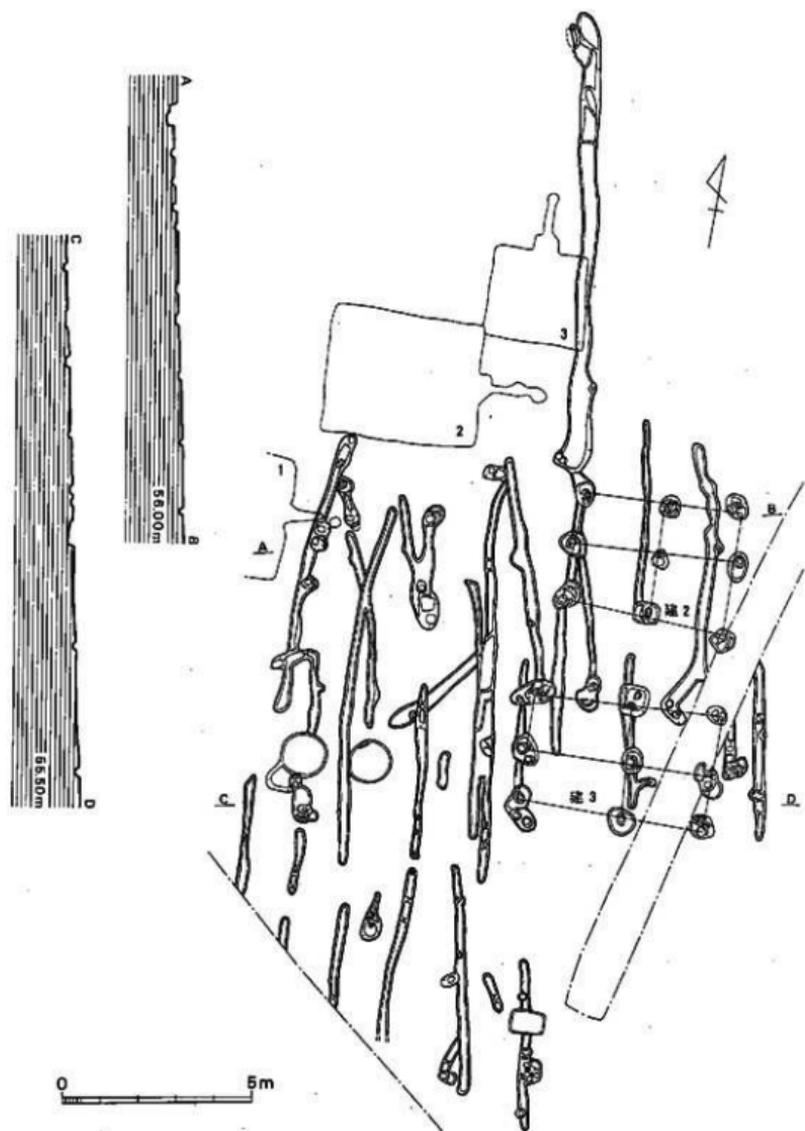
## (7) ビット及び表採遺物

### 土師器 (第121図212-216, 第122図232-235)

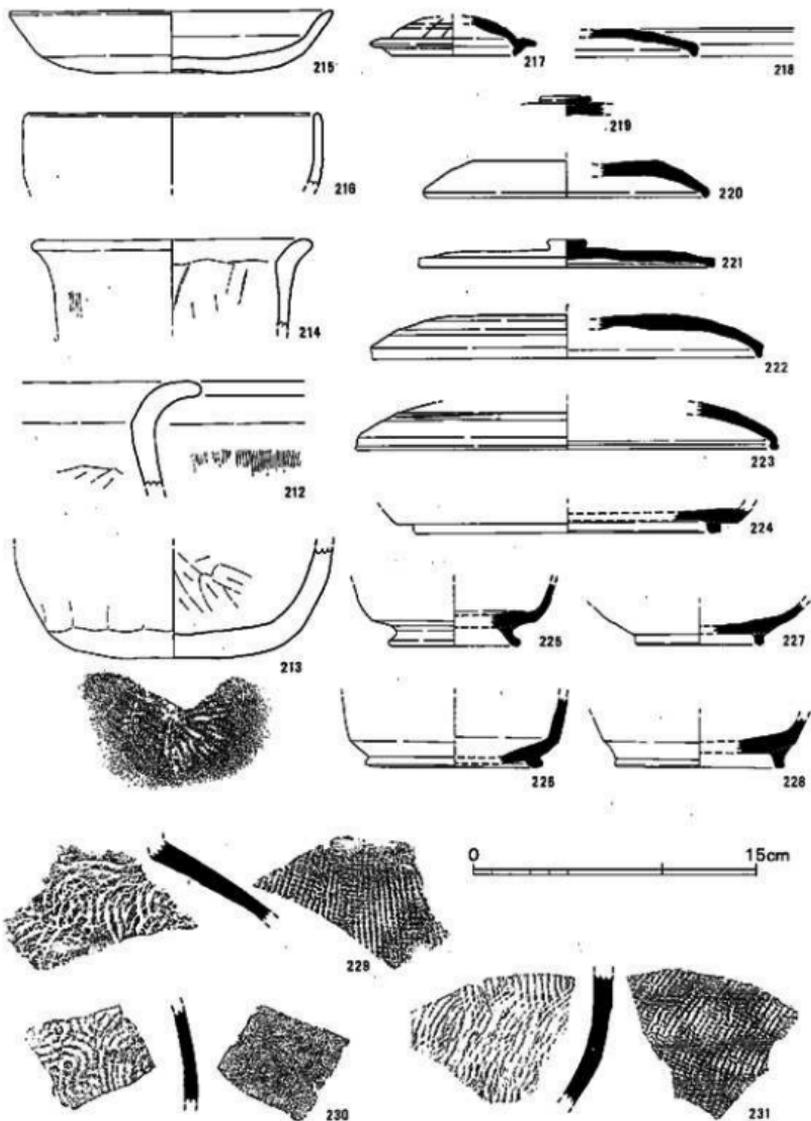
212-214は甕の破片資料で、212は大型甕、214は小型甕の口縁部付近、213は胴部下半の資料である。調整は212・214とも胴部外面刷毛、内面へら削り、口縁部内外ヨコナデで仕上げている。213は内外ともへら削りのあと粗くナデで仕上げている。色調は212・214が茶褐色、213が暗黄褐色を呈し、焼成も良い。215は復原口径17.3cm、器高3.3cmを測る杯である。調整は体部内外ともナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は暗黄褐色を呈す。以上、ビット内出土の資料である。232-234は胴部の張った大型の甕の破片資料である。調整は232が胴部内外ナデ、234はへら削り、口縁部内外はいずれもヨコナデで仕上げている。色調は232が褐色で、他は茶褐色を呈し、焼成は良好である。復原口径は232が15.6cm、233が20.8cmを測る。235は復原口径14cm、器高3.4cmを測る杯である。調整は外底部へら削り、内底部ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。胎土は精良で、色調は暗黄褐色を呈す。232-235は表採資料である。

### 須恵器 (第121図216-231, 第122図236-239)

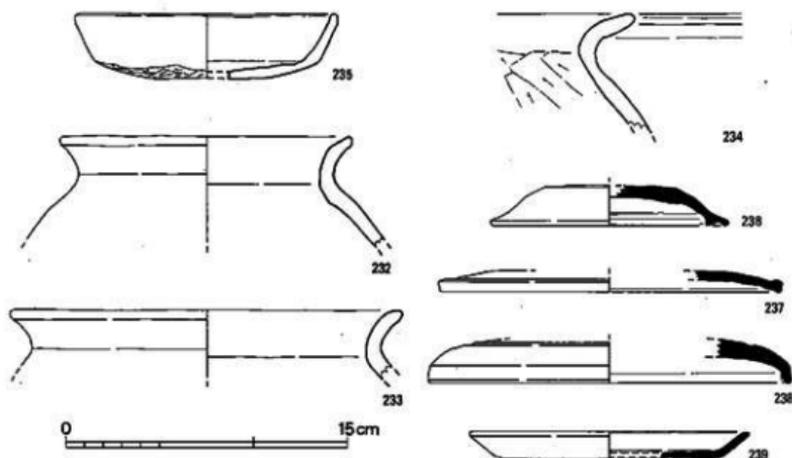
216は身受けの返りをもつ小型の蓋で、おそらく鈕が付くものと思われる。体部最大径8.8cmを測る。体部外面にへら記号がある。調整は天井部外面回転へら削り、体部内外はロクロヨコナデ仕上げで、色調は外面灰色、内面淡紫灰色を呈し、焼成は良好である。218・220-222は口縁端部が断面三角形形状を呈し、223は台形状をなす杯である。大きさにも大小あり、復原口径は220が15.2cm、221が15.8cm、222が20.9cm、223が22.5cmを測る。調整は天井部外面をナデで仕上げた220・221と、回転へら削りの218・222、223があり、天井部内面はいずれもナデ、体部内外もロクロヨコナデ仕上げである。色調は灰色から暗灰色を呈し、焼成も良好である。224-228は高台付碗の破片資料で、224は復原高台径16.3cmを測る大型品で、高台は低く直立し、



第 120 图 款状造桥尖测图 (1/150)



第 121 図 ビット内出土土器実測図 (1/3)



第 122 図 表採土器実測図 (1/3)

壘付けは平坦である。225は高台が高く外反が強い。226は低く外反が強く、壘付けも外傾している。227・228ともほぼ直立する高台で227は低く、228はやや高い高台である。復原高台径は225が7cm、226が9.4cm、227が6.8cm、228が9cmを測る。色調は灰色～暗灰色で、焼成は227がやや不良の他は良好である。229～231は壘の胴部破片で、胴部外面は229が平行タタキ目文のあとカキ目調整、230はカキ目調整、231は格子目文タタキのあとカキ目調整、内面はいずれも青海波文のタタキ目を施している。217～231はいずれもビット内出土の資料である。236は身受けの返りを有す天井部が低平な杯蓋で、復原体部径12.8cmを測る。天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデ仕上げである。237は口縁端部断面が三角形状、238は台形状を呈す杯蓋である。復原口径237が18cm、238は19.4cmを測る。色調は236の外面暗灰色、内面灰色、237・238が淡灰色を呈し、焼成はいずれもやや不良である。調整は238の天井部外面が回転ヘラ削り、237はナデ、内面は両者ともナデで、口縁部付近も内外ともロクロヨコナデで仕上げている。239は復原口径14.6cm、器高1.5cmの皿で、調整は器面風化のために不明である。色調は灰色で、焼成は軟質である。236～239はいずれも表採資料である。

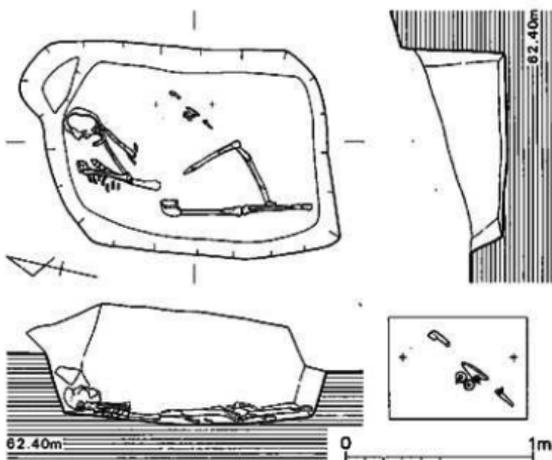
## 5. その他の遺構と遺物

### (1) 近世墓 (図版50, 第123図)

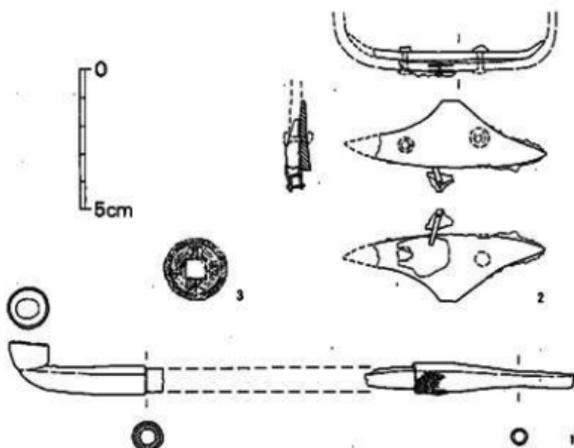
発掘区北西端部の丘陵上から検出された近世墓で、木棺等の底跡は不明の素掘りの土壌墓である。主軸はN-12°-Wを指す。規模は長径150cm, 短径110cm, 深さは残りの良い東壁で56cmを測る。墳内から中央よりやや西壁に寄って人骨一体が検出された。遺存した人骨の出土状態から左足を折り曲げて埋葬されていたことがわかる。副葬品としては、東壁側中央部付近からキセル1個、タバコ入れの一部と思われる留金具1個、寛永通宝1個、鉄銭1個が出土した。古銭は紐通しされていたらしく紐の小片も検出された。

出土遺物 (図版64, 第124図)

煙管 (1) 雁首と吸口部は青銅製、煙管部は竹製で、布で包ま



第 123 図 近世墓実測図 (1/30)



第 124 図 出土遺物実測図 (1/2)

れていたのか、粗い布片が吸口部に付着していた。

煙草入れ (2) 扁平な扇形を呈した鉄製の留金具で、2個の鉄があり、上部中央には紐掛け用のものと思われる青銅製の金具が付いている。本体は遺存していないが、留金具が内側に付設された可能性が高いので、木製というよりは型持ちの悪い革製であったと思われる。

銭 (3) 青銅製の寛永通宝で、径2.2cmを測る。他に、径2.5cmの鉄銭があるが腐蝕が著しく詳細は不明である。

## 6. おわりに

鎌塚遺跡の調査結果は、すでに詳述したところである。遺構は検出されなかったものの、ナイフ形石器・台形石器などの先土器時代の遺物をはじめ、縄文時代の陥穴状遺構や晩期の土壌群、弥生時代前期の貯蔵穴群や住居跡、さらには、80軒にもおよぶ堅穴住居跡と3棟の掘立柱建物跡からなる奈良時代の一大集落跡の発見など、多大な成果を得た。

ここでは、それら成果について、若干触れ、まとめたい。

### 1. 先土器時代について

包含層はすでに削平されていたが、国府型ナイフ形石器をはじめ、百花台型の台形石器、横長剥片を素材とした三稜尖頭器、角錐状石器、細石刃核と、点数は少ないものの多様な石器が検出されたことは大きな成果の一つである。近年、高速道路関係の調査により、この地域ではこれまで少なかった先土器時代の石器類が、甘木市塔ノ上遺跡や朝倉町原の東遺跡・山ノ神遺跡・金場遺跡・上ノ宿遺跡などで発見され、一躍、注目されるようになってきた。とりわけ、層位的に確認できた原の東遺跡の調査成果は大きなものがあり、今後、この地域の基準資料となるだろう。今回、発見されたこれらの資料も、後日、報告される原の東遺跡の調査報告書でとりまとめられる予定であり期待したい。

### 2. 縄文時代について

この時代の遺構は、陥穴状遺構とされる遺構2基と、晩期の土壌3基のみで、上面が削平されているとはいえ生活の痕跡の密度は低い時期である。しかし、晩期の生活遺構は、未調査である南側の台地にまだ拡大する可能性が高い。3基検出された土壌の性格は、かならずしも明確ではないが、貯蔵庫的機能を有するものとも思われ、居住の場である住居跡については南側の地区に拡がっているものと推定される。だが、散在的な土壌のあり方や出土遺物の量からしても、その規模は小規模かつ短期的な集落であったと思われる。

### 3. 弥生時代について

前期後葉の貯蔵穴19基、前期末の円形住居跡1軒と中期前葉のものと思われる不整形土壇1基のみである。この時期の遺構も、上面が削平されているとはいえ、遺存状態も悪くなく、もともと発掘区中央付近を中心とした小規模な集落跡といえるだろう。

しかし、貯蔵穴群はまだ南側に拡大する可能性が高く、この時期の住居跡も確認できていないので、小規模とはいえ、さらに南側に拡がるのが予想される。また、前期末の住居跡についても同様のことが考えられる。

### 4. 奈良時代の集落跡について

時期 集落の形成時期は、調査地区内での結果をみると9・11・15号住居跡出土の土器群が示す7世紀後半といえるだろう。また、その終焉の時期は14・16・17・63・67・71号住居跡出土の土器群などが示す8世紀後半で、約百数十年前後の間に形成された集落といえる。各住居跡とも遺存状態も悪く、遺物の出土量も少ないため、各住居跡の時期比定が困難なものも多く、集落の変遷を知る上で障害となった。さらに、重複関係の密度も高く、また、同一型式内でも、少なくとも三時期の変遷があるようで、一層、複雑である。出土土器の型式変化からすれば、大きくは四期に分けることができる。I期：7世紀後半、II期：8世紀前半、III期：8世紀中頃、IV期：8世紀後半の四期である。各期とも単純に存続期間を割り振るとすれば、33年間前後となり、さらに各期とも三時期の変遷があるとすれば12期にも細別できることになる。集落の全体像が把握できていないので、何ともいえないが、調査された80軒分を単純に割り算しただけでも7軒前後となる。また、集落はまだ南側と一部東側に拡大する可能性が高いので、倍の160～200軒前後としても、同時に併存した住居跡は15軒前後という結果になろう。あくまでも単純計算の結果であり、一つの目安である。

群構成と変遷 80基からなる住居跡群は、中央の広場ともいえる空白地を残し、A～Fの六群をなして弧状に配置されている。各群がそれぞれ一つの単位集団を形成していることは、その分布状況からも、各住居跡の重複関係からも読みとることができるだろう。それはまた、各単位集団、各住居跡間の土地に占有規制の存在も如実に示している。しかし、これら単位集団が全時期にわたって併存していたとは思われない。出土土器が少ないので、確定的なことはいえないが、現状の出土土器のみをかぎり、I期の時期にはまずE群に形成されはじめ、II期の時期になるとB・D・E群にも拡大し、III期には新たにA群・C群や1号掘立柱建物も加わり、各群の構成が成立するともいえる。しかし、IV期には、再びE群に収束されるという傾向がみられ、集落の終焉をむかえるようにも思われる。六群の成立時期がいつなのかということはいえないが、出土土器からするとI期の時期はE群にのみ集中する傾向があり、II期で

表5 住居跡一覧表

(単位cm)

No	規 模		カマド		壁 高	出 土 遺 物	備 考	群	時期
	長 径	短 径	位 置	支 脚					
1	335×326		北・東		16	土師器・須恵器(第35図1~9), 箭鏃(第36図1)	カマド作り変える	B	8C前 -中
2	415×345		東		20	土師器・須恵器(第35図10-15), 瓦片・不明鉄器(第40図1-2)	住3より新	B	#
3	260×250		北		8	土師器・埴土器(第35図16-17)	住2より古	B	
4	207×197		東		8			B	
5	183×(155)		東		8	土師器・瓦(第47図18-23)		B	8C前 -中
6	442×390		西		5	土師器(第47図24)		C	
7	255×215		西		7	羽口小片	住5より新	D	
8	506×387		?		16	土師器・須恵器(第51図23-29)	住50・75より新	E	8C
9	(450)×440		西		11	土師器・須恵器(第51図30-36)	住38・75より古, 住66より新	E	7C後
10	325×325		北		30	土師器・須恵器(第56図37-44), 土師(第40図6)	住38・60・78より新	E	8C前
11	(245)×(160)		?		5	土師器・須恵器(第56図45-47)	住38・68より新, 住10・12より古	E	#
12	256×255		北		13	土師器・須恵器(第56図48-49)	住11・69・88より新, 住19-51より古	E	
13	225×220		西		9	土師器(第56図50)	住14・72・73・77より新	E	
14	352×325		北		20	土師器・須恵器(第62図51-55), 土師(第40図7)	住71-73より新, 住13より古	E	8C後
15	385×380		西		30	土師器・須恵器(第62図60-69), 羽口小片		E	7C後 -8C前
16	350×320		西		23	土師器・須恵器(第68図70-80), 釣針(第40図3)	住61・62・64より新, 住17より古	E	8C後
17	325×295		北		20	土師器・須恵器・埴土器(第68図81-90), 羽口小片	住16・61・74より新	E	8C後
18	375×320		北		15	土師器小片		E	
19	355×(140)		?		30	土師器・須恵器(第71図91-92)		E	8C中
20	427×(336)		?		6	土師器(第71図93-95)	住21より新, 住22・24・31より古	C	
21	507×363		東?		5	須恵器(第71図96)	住20・22より古	C	
22	345×340		北		5	土師器・須恵器小片	住20・21より新, 住29・31より古	C	
23							欠葬		
24	(324)×(95)		北		6	土師器(第71図97-98)	住25より新, 住27・29・31より古	C	
25	475×(120)		?		13	土師器・須恵器小片	住26より新, 住24・27・29より古	C	
26	(590)×(140)		北		6	土師器(第71図99)	住25・27より古	C	
27	330×(173)		?		5	土師器(第76図100)	住28・29より古, 住25-26より新	C	

(単位cm)

No.	概 績		カ ー ド		票 高	出 上 道 物	番 号	群	時期
	長 径	短 径	位 置	支 脚					
28	220	(175)	北		15	土師器・須恵器小片	住27・70より新	C	
29	390	×330	北		17	土師器・須恵器(第78図101-105, 第80図2)	住22・24・25・27・30・70より新	C	8 C中
30	(200)	×(52)	?		6	土師器小片	住22・29より古	C	
31	330	×242	北		6	土師器・須恵器(第78図106-111)	住20・22・24より新	C	8 C中
32	430	×(280)	北西		17	土師器・須恵器(第76図112-115)	群をはずれる		
33	(315)	×298	北		5	土師器・須恵器(第82図116・117)	住35・39より新, 住34より古	A	8 C中
34	230	×(180)	?		10		住33・35より新	A	
35	302	×(145)	北		11	土師器小片(第82図118), 土師(第40図8)	住36より新, 住33・34より古	A	
36	(165)	×(124)	?		10		住35より古	A	
37	(380)	×(242)	?		9	土師器・須恵器小片	住36より古	A	
38	372	×382	?		6	土師器・須恵器小片	住66-68・78より新, 住9-11より古	A	
39	(300)	×(163)	?		8	須恵器(第82図119), 刀子(第40図4)	住33より古	A	
40	310	×297	東		9	須恵器片(第82図120)	住41・42より古	D	
41	247	×213	?		6	須恵器片(第82図121)	住40より新, 住42より古	D	
42	238	×223	北	○	5	土師器・須恵器(第82図122・123)	住40・41・43より新	D	8 C前 -中
43	347	×(210)	北		8	須恵器片(第82図124)	住42より古	D	
44	520	×486	北		26	土師器・須恵器(第82図125-126, 第84図51, 第84図52)	住45・47・69より新	C	8 C中
45	480	×(175)	北	○	10	土師器(第87図137・138), 土師(第36図10)	住46-48より新, 住44より古	C	
46	(294)	×(120)	?		5		住45・48より古	C	
47	390	×(256)	北		3	土師器小片	住47より新, 住46より古	C	
48	330	×(230)	北		12	土師器小片(第87図139)	住46より新, 住45・47より古	C	
49	(165)	×(165)	西		12		住48より新	C	
50	(460)	×(415)	?		20	須恵器片(第87図140)	住75より新, 住8より古	E	
51	347	×(160)	?		19	土師器・須恵器(第87図141-150)	住12・60より新	E	8 C前
52	487	×(345)	?		8	土師器小片(第87図151)	住54・80より新, 住53より古	E	
53	(337)	×340	東		10	土師器・須恵器(第93図152-155), 土師(第36図11)	住32・54・80より新	E	8 C中 -後
54	336	×(102)	?		5		住32・53・71より古	E	

(単位:cm)

No.	規模		カマド		壁高	出土遺物	備考	群	時期
	長	幅	位置	支脚					
55	265	×226	西		13	土師器(第93図160)	住7・56より古	D	
56	283	×(225)	北		19	土師器・須恵器小片	住55より新	D	
57	382	×(110)	東		26	土師器片		E	
58	(285)	×288	東		7	土師器片	住59より古	F	
59	342	×(330)	北		12	土師器・須恵器片(第93図161)	住58より新	F	
60	(204)	×(135)	?		11	土師器(第93図162・163)	住10・12・51より古	E	8C前?
61	505	×314	北		6		住62・64より新, 住16・17より古	E	
62	(320)	×(130)	北		10	土師器片	住16・61・63・64より古	E	
63	445	×355	北		22	土師器・須恵器(第93図164~167)	住62より新, 住64より古	E	8C後
64	395	×350	東?		15	土師器(第93図168), 小玉(第36図12)	住62・63より新, 住16・61より古	E	
65	(305)	×(110)	?		2	土師器小片	住11・66より古	E	
66	220	×215	?		4	土師器(第93図169・170)	住65より新, 住9・38より古	E	
67	302	×294	?		5	土師器・須恵器(第103図171~176), 土師(第36図13)	住14・71・73より古	E	8C後
68	(237)	×(50)	?		13	土師器小片	住11・12より古	E	
69	455	×400	西		52	土師器・須恵器(第103図179~181), 黒石(第184図)	住44より古	C	8C中
70	(390)	×(183)	北東		13	土師器小片	住28・29より古	C	
71	340	×330	北		22	土師器・須恵器(第103図182~184)	住54・67・72より新, 住73より古	E	8C後
72	366	×320	北		25	土師器・須恵器(第103図185~190)	住77より新, 住13・14・71・73より古	E	8C中?
73	220	×215	北		27	土師器・須恵器(第103図190, 7子(第40図6), 土師(第36図13)	住57・71より新, 住14より古	E	
74	220	×(140)	?		7		住9・17より古	E	
75	(422)	×(370)	?		8	土師器小片(第103図193)	住8・50より古	E	
76	490	×485	-	-	43		弥生前期末の住居跡		
77	325	×(210)	?		25	土師器・須恵器小片(第103図194)	住79より新, 住13・72より古	E	
78	315	×(243)	北		25	土師器(第103図195), 土師(第36図16)	住50より新, 住9・10より古	E	8C前
79	(285)	×(145)	西		4		住10・12より古	E	
80	(110)	×(80)	?		9		住52・53・71より古		
81	(180)	×(110)	?		24		住65・71・72・77より古		
82							カマドのみ, 住73より新, 住14より古		



はじめて三群へと拡大するので、この時期が六群の成立時期かもしれない。一方、集落の北側と西側の眼界を画すると思われる溝1の成立時期がⅢ期であり、A・C・E群や1号掘立柱建物と広範な領域に拡大した時期であり、六群の成立時期はⅢ期とすべきかもしれない。現状では最も有力な解釈であろう。

**集落と畑地** 集落の形成期から六群の単位集団が成立していなかったらしいことは、すでに指摘したことである。このことは、発掘区中央で1～3号住居跡や2・3号掘立柱建物跡に切られた状態で検出された畝状遺構の小溝群を解釈する上で、極めて重要なことと考えている。この畝状遺構の時期は、出土した土師器や須恵器などはいずれも小片のため、時期の確定はできないものの、集落の形成時期とさほど異ならない時期といえるだろう。従って、この畝状遺構の性格を畑地跡と理解できるとすれば、いわゆる1～3号住居跡出土の土器群が示すⅡ期以前、すなわち集落形成期であるⅠ期の時期の畑地が、集落の近接地に形成されていたと解釈できるのである。

また、集落の北西側と西側を画する溝と考えられる溝1の北側と西側の一部から検出されたわずかに遺存した小溝群も、さきの畝状遺構と方向も形状も類似している。この小溝も畑地の畝と理解できるとすれば、溝1が形成されたⅢ期の畑地は、北西から西側の谷部に移動し、集落の外側に形成されるという興味深い解釈が可能となるのである。

最後に、本遺跡の南側150mの所に建設された工事用道路建設時に、発見され、調査された鎌塚西遺跡の集落跡との関係について触れ、まとめとする。鎌塚西遺跡の調査内容はV章を参照されたい。発見された遺構は竪穴住居跡6軒と掘立柱建物跡(3間×5間)1棟で、鎌塚遺跡の形成時期ともほぼ同じ、7世紀後半から8世紀にかけての集落跡のようである。しかし、付図1をみても明らかのように、溝1の集落区画からみても、その位置からしても別の集落跡と理解すべきであろう。集落規模等は判らないが、近接して存在する両集落間の関係など多くの問題や興味深い問題を持っていて、今後の調査がますます期待される地域である。



# 圖 版



1 鎌塚遺跡・山ノ神遺跡遠景（西から）



2 鎌塚遺跡全景空中写真



1 瓮掘区东部全景



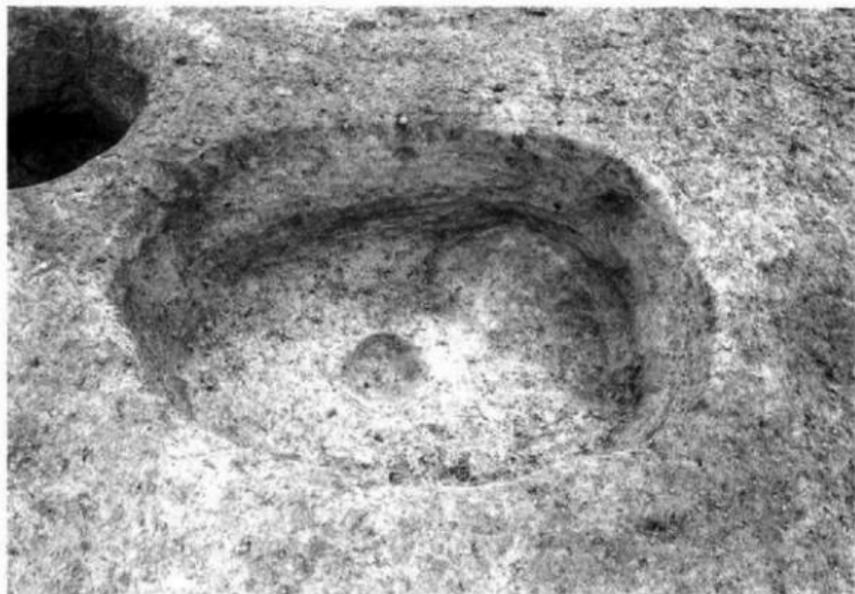
2 瓮掘区中央部全景



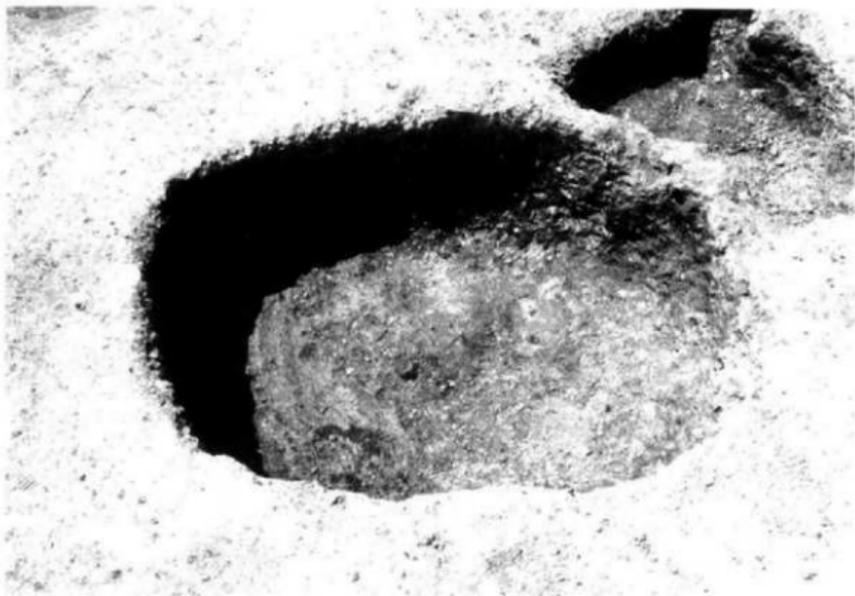
1 発掘区西部全景



2 1号陥穴状遺構 (東から)



1 2号陥穴状遺構 (西から)



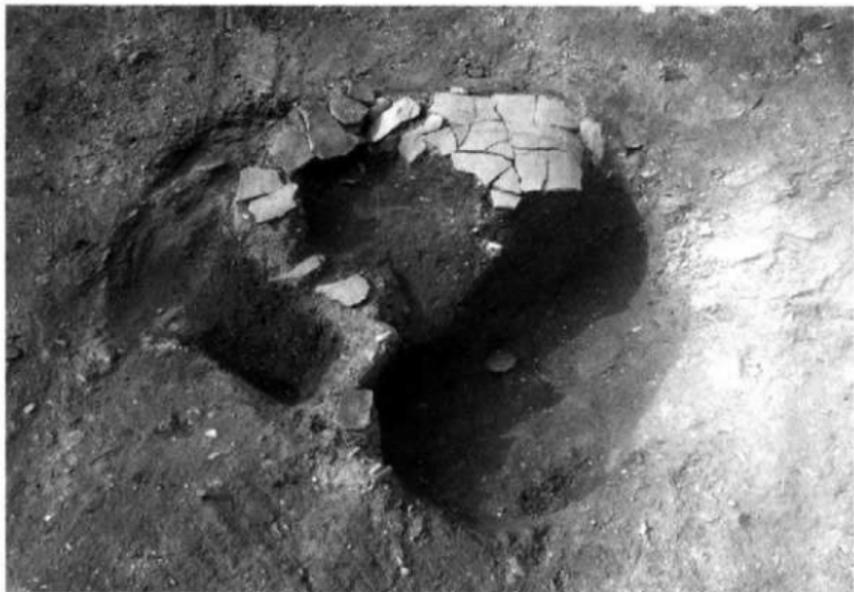
2 1号土坑 (北から)



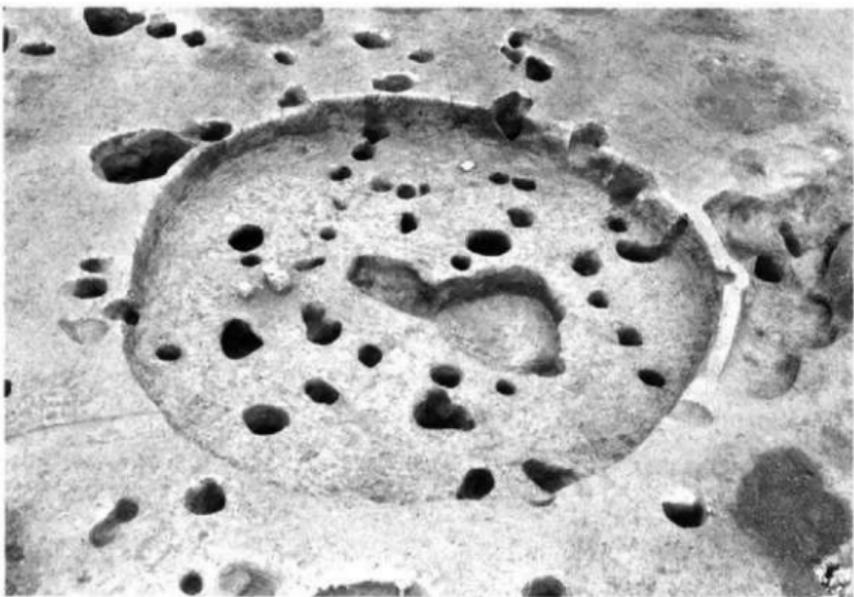
1 2号土壇 (西から)



2 2号土壇内縄文土器出土状態 (西から)



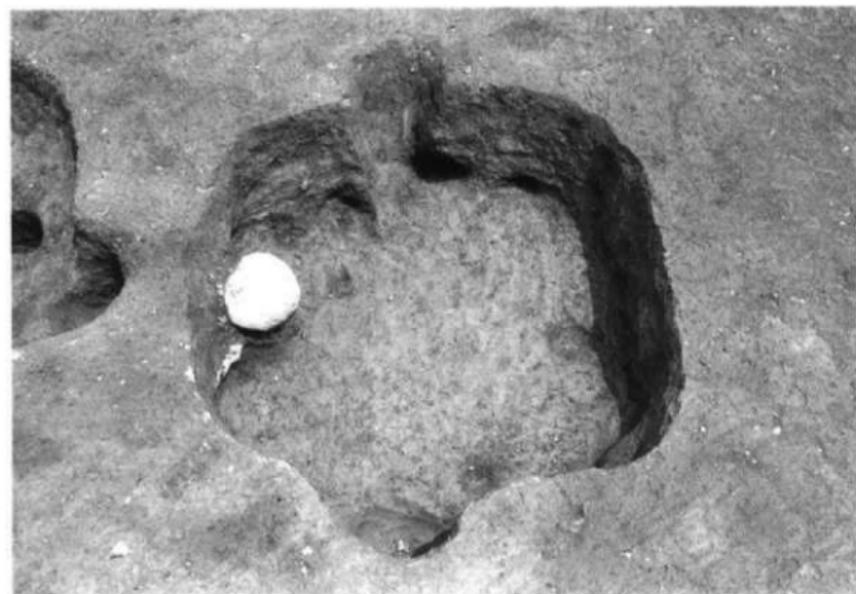
1 3号土坑 (南から)



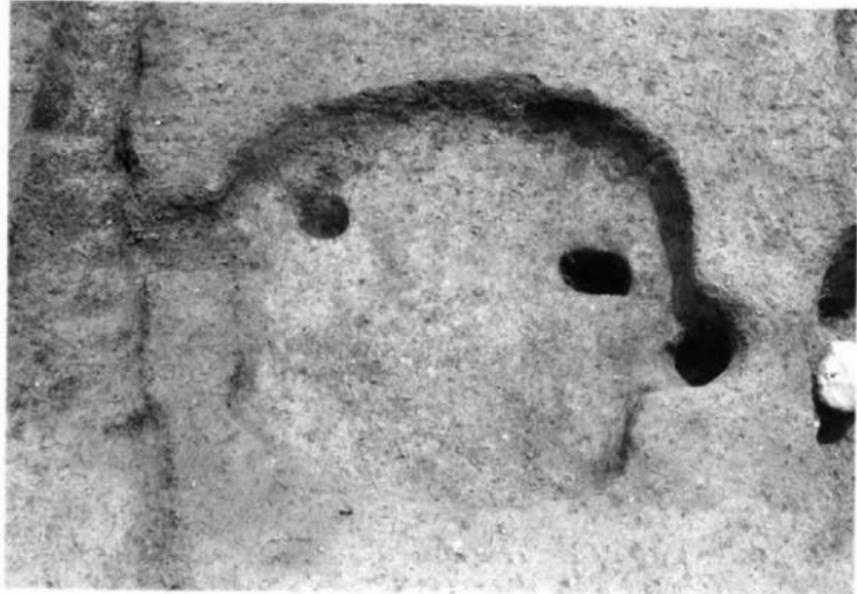
2 76号住居跡 (東から)



1 1号貯蔵穴（東から）



2 2号貯蔵穴（西から）



1 3号貯蔵穴 (西から)



2 4号貯蔵穴 (北から)



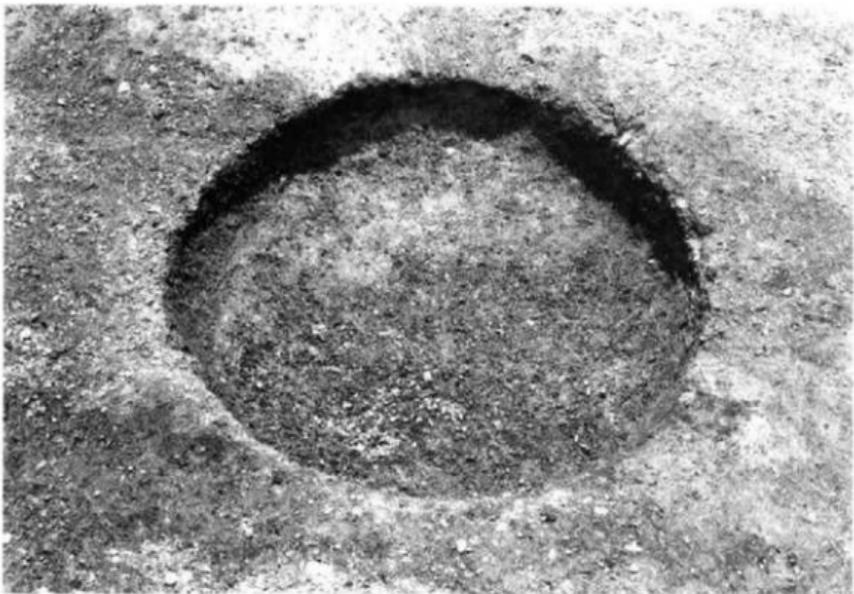
1 5号貯蔵穴 (南から)



2 5号貯蔵穴内外出土土器出土状態 (南から)



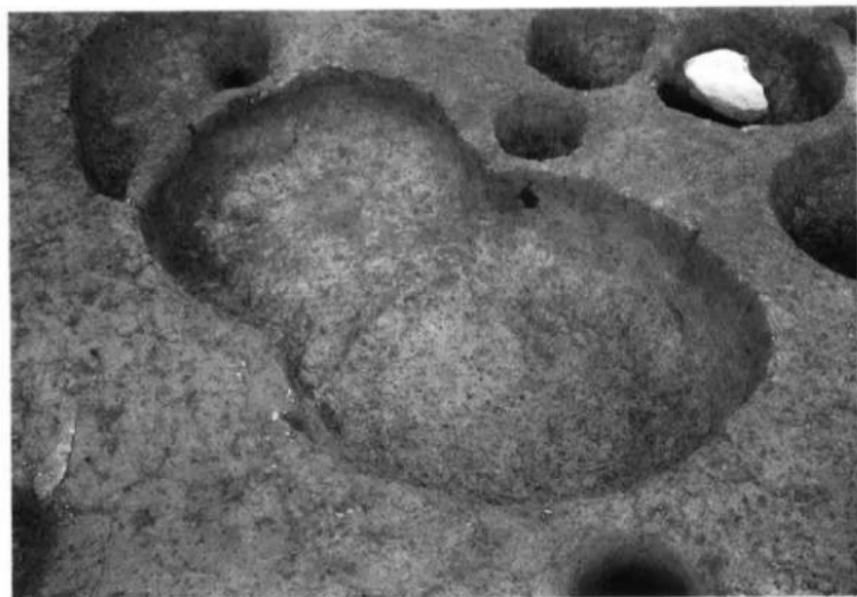
1 5号貯蔵穴土器除去後（北から）



2 6号貯蔵穴（南から）



1 7号貯蔵穴（北から）



2 8・9号貯蔵穴（北から）



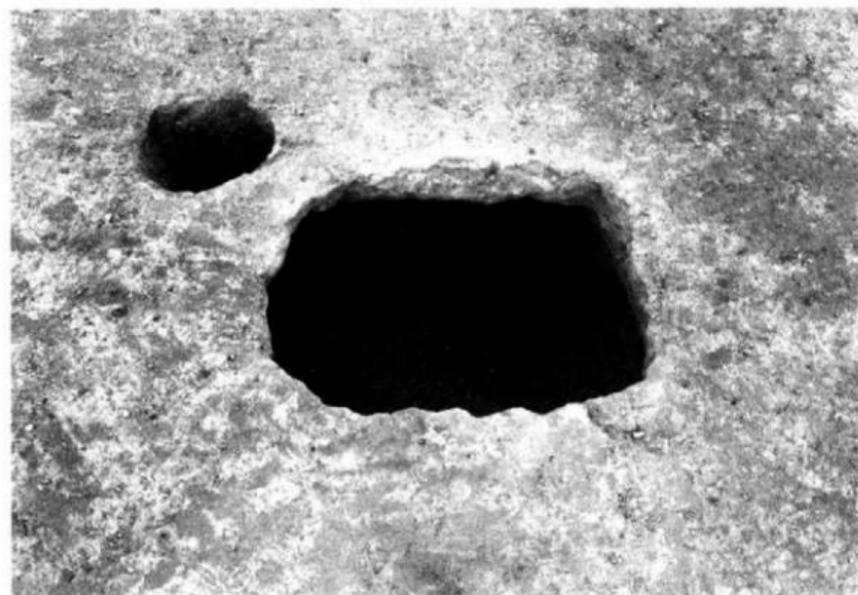
1 11号貯蔵穴 (南から)



2 12号貯蔵穴 (南から)



1 13号貯蔵穴（西から）



2 14号貯蔵穴（東から）



1 17号貯蔵穴 (西から)



2 18号貯蔵穴 (東から)



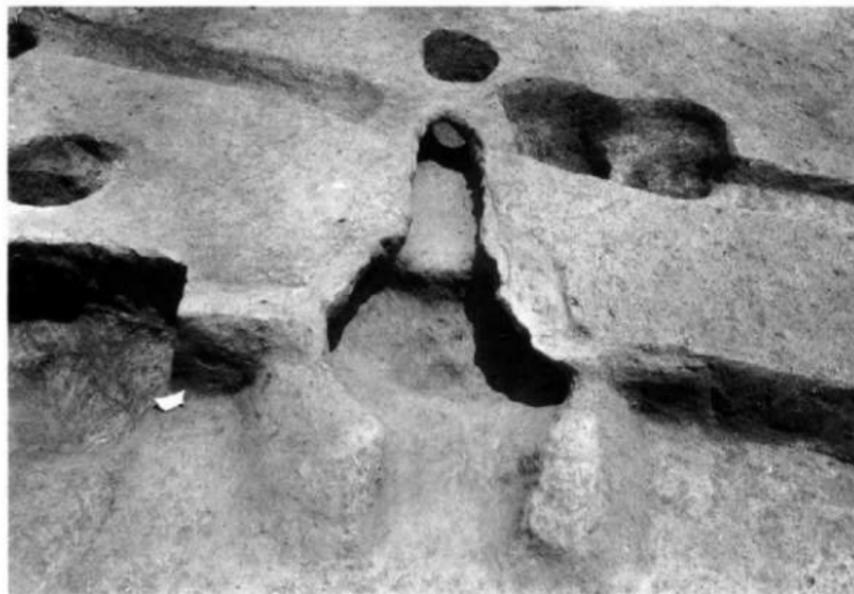
1 住居跡 D・E 群全景



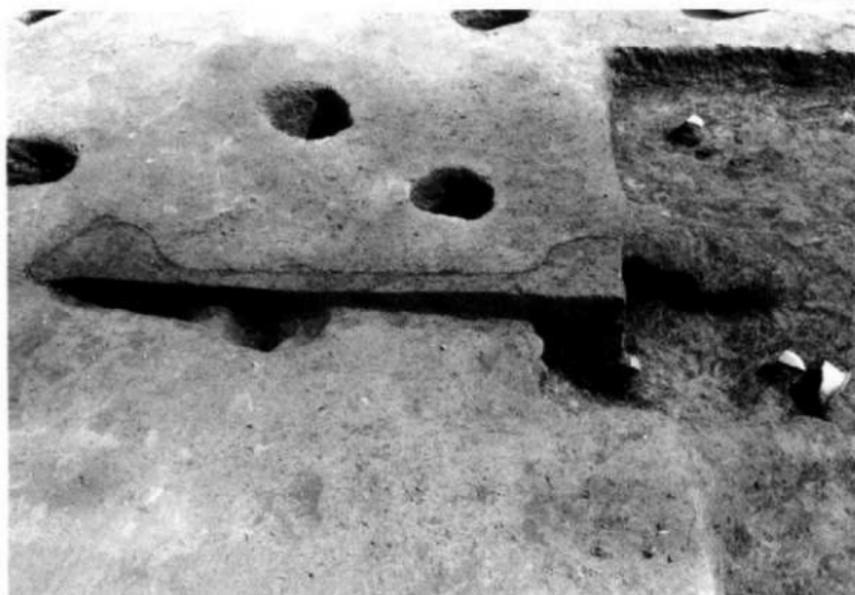
2 住居跡 E・F 群全景



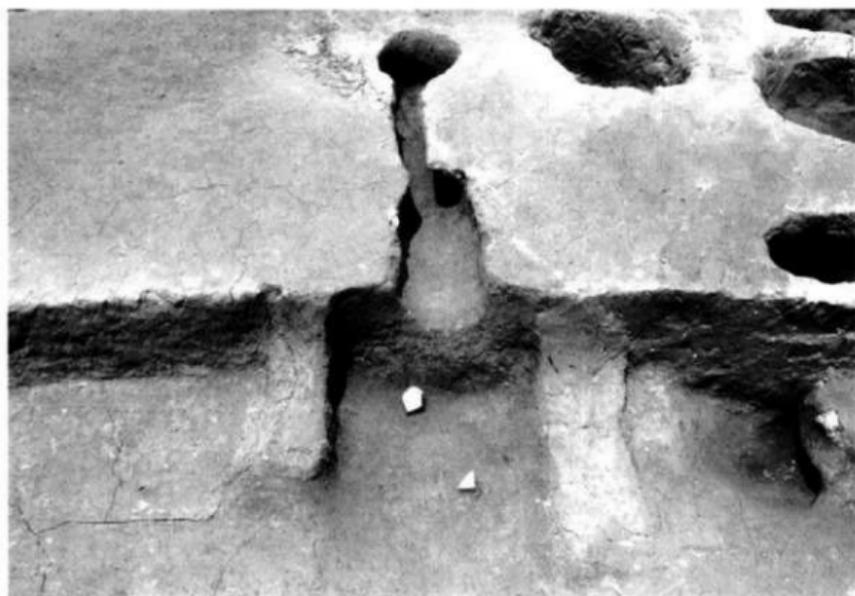
1 1号住居跡 (西から)



2 1号住居跡カマド (西から)



1 1号住居跡田カマド内土層断面（西から）



2 1号住居跡田カマド（南から）



1 2·3号住居跡全景



2 2号住居跡(西面)



1 2号住居跡カマド (西から)



2 2号住居跡内鉄鎌出土状態 (北から)



1 3号住居跡 (南から)



2 3号住居跡カマド (南から)



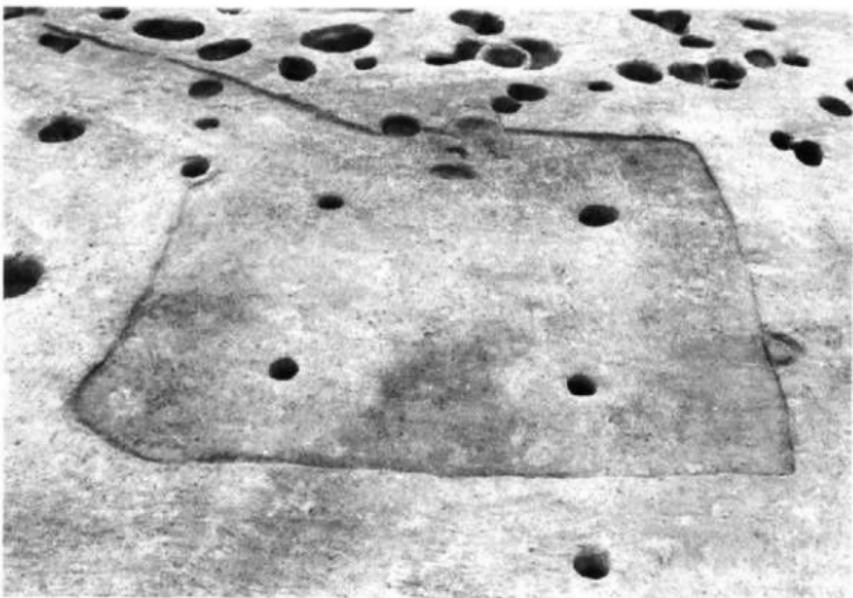
1 4号住居跡 (西から)



2 5号住居跡 (西から)



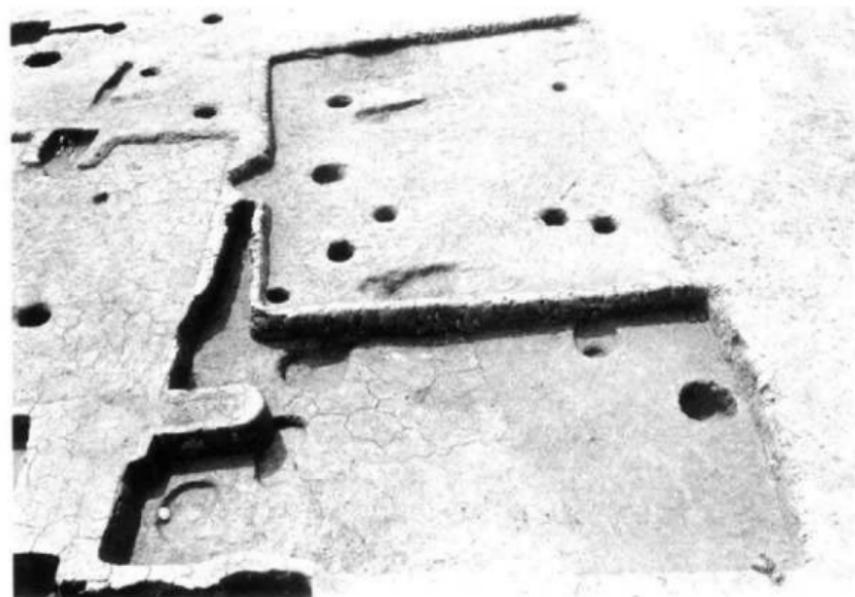
1 5号住居跡カマド（西から）



2 6号住居跡（東から）



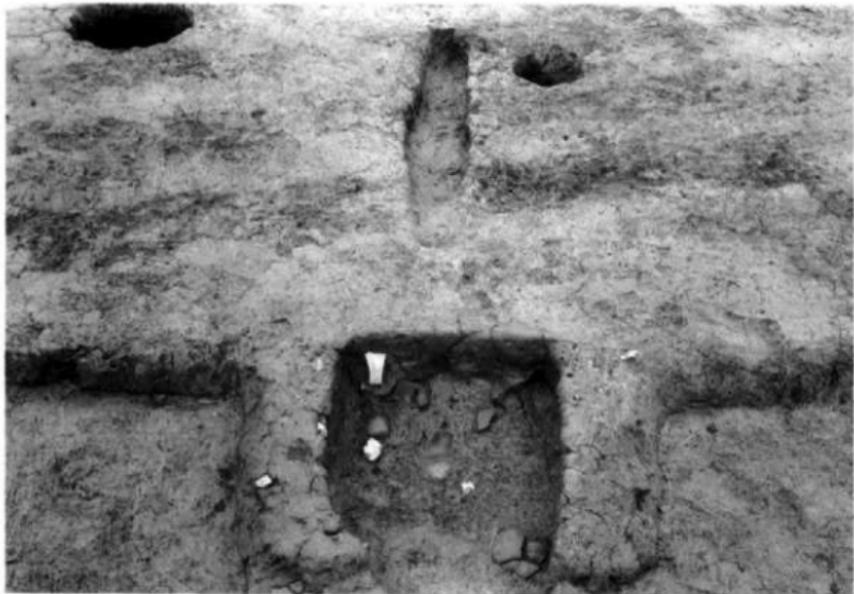
1 7号住居跡 (東から)



2 8・50号住居跡 (東から)



1 9号住居跡(東から)



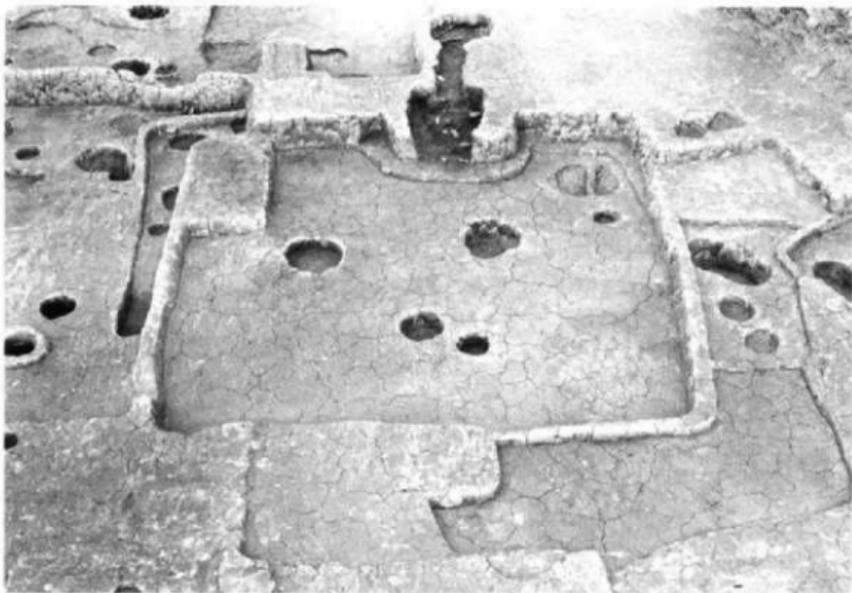
2 9号住居跡カマド(東から)



1 10号住居跡 (南から)



2 10号住居跡カマド (南から)



1 10・11・38・60・78・79号住居跡群 (南から)



2 12・51・60・68・79号住居跡群 (南から)



1 13号住居跡 (東から)



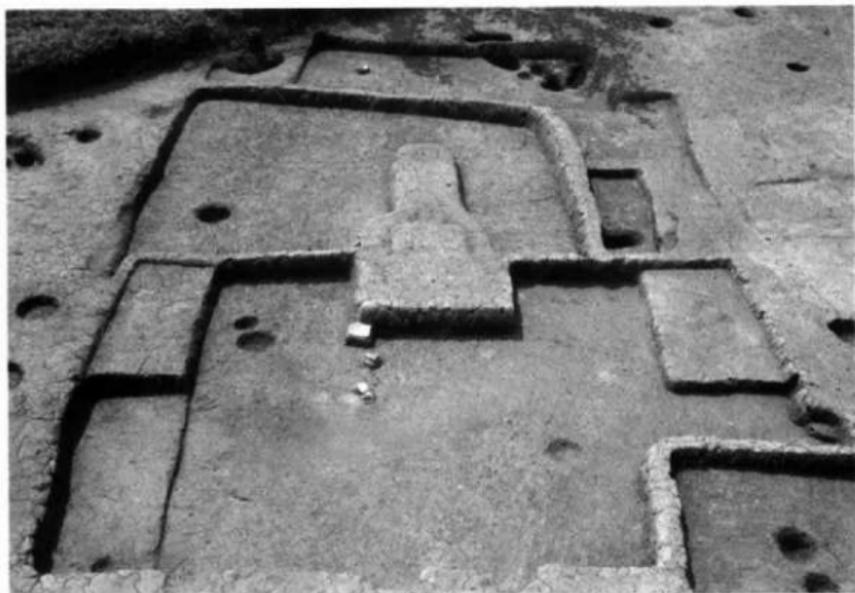
2 13号住居跡カマド (東から)



1 14号住居跡 (南から)



2 15号住居跡 (東から)



1 16・61・64号住居跡(東から)



2 16・61・64号住居跡(東から)



上 16号住居跡（東から）

下 16号住居跡カマド  
（東から）



1 17号住居跡 (南から)



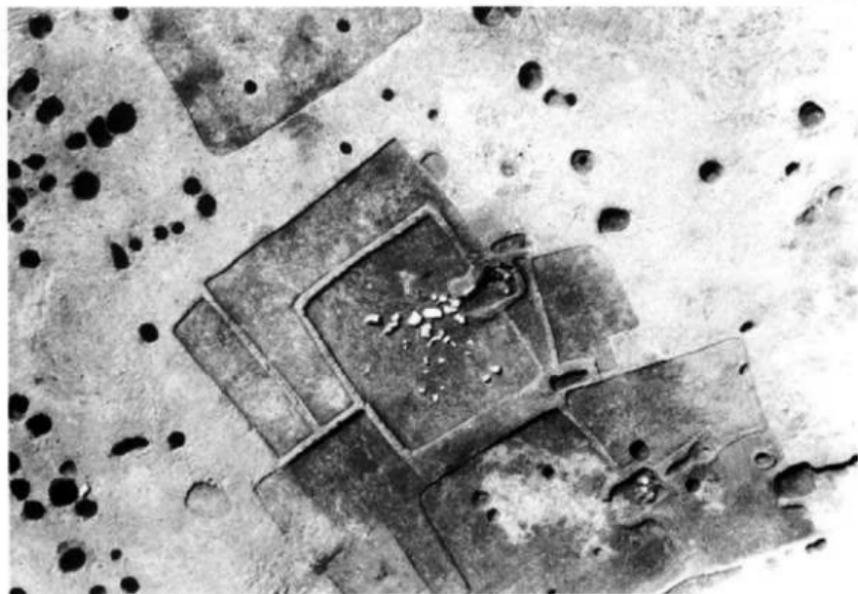
2 17号住居跡カマド (南から)



1 18号住居跡 (西から)



2 19号住居跡 (北から)



1 20・22・27・31号住居跡群



2 20・21・31号住居跡 (南から)



1 28号住居跡 (南から)



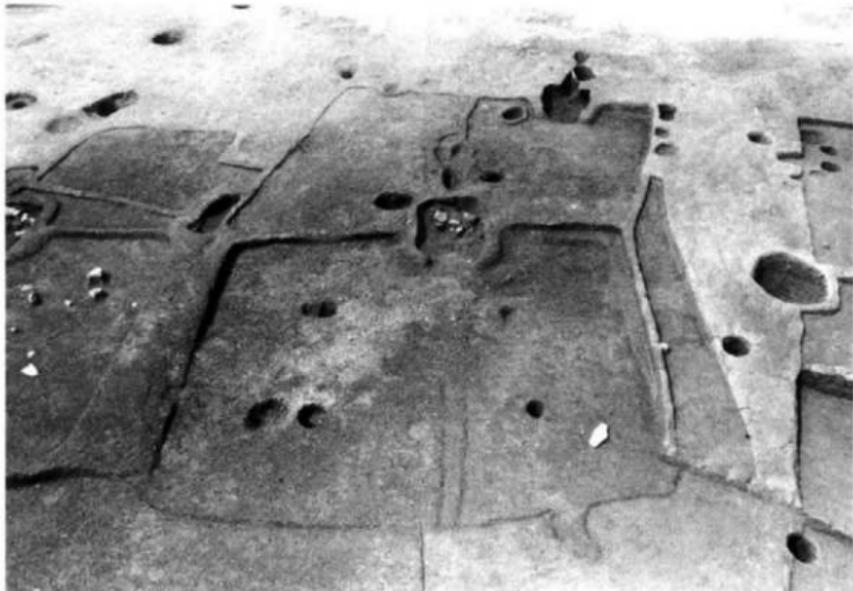
2 28号住居跡カマド (南から)



1 29号住居跡 (南から)



2 29号住居跡カマド (南から)



1 28・29・70号住居跡 (南から)



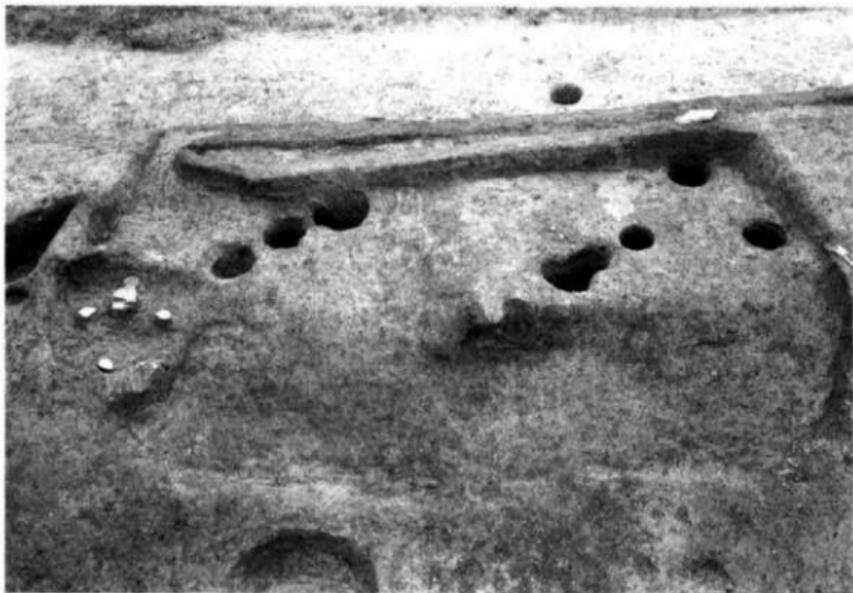
2 28・29・70号住居跡下層 (南から)



1 20・21・25・26・31号住居跡下層 (南から)

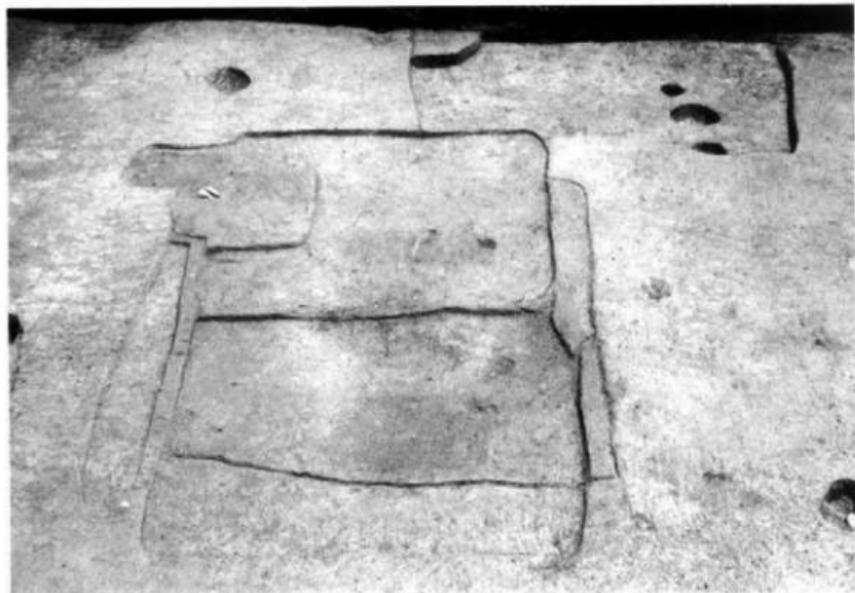


2 31号住居跡カマド (南から)

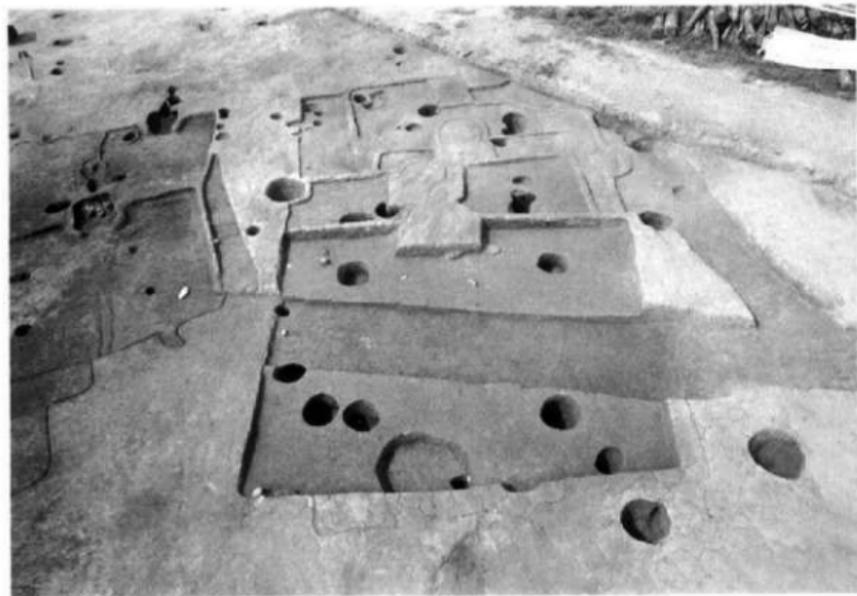


上 32号住居跡 (西から)

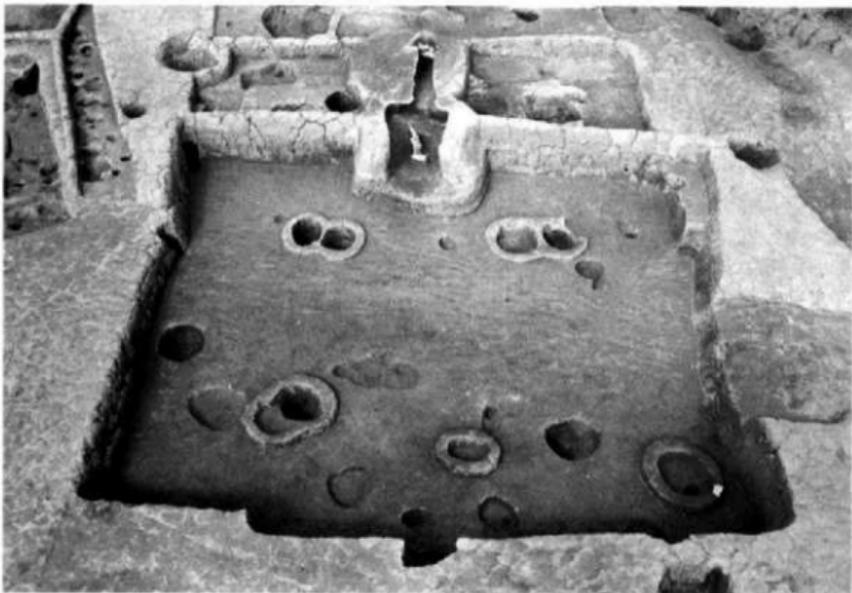
下 33~37・39号住居跡  
(西から)



1 40～43号住居跡（西から）



2 44～49号住居跡（南から）



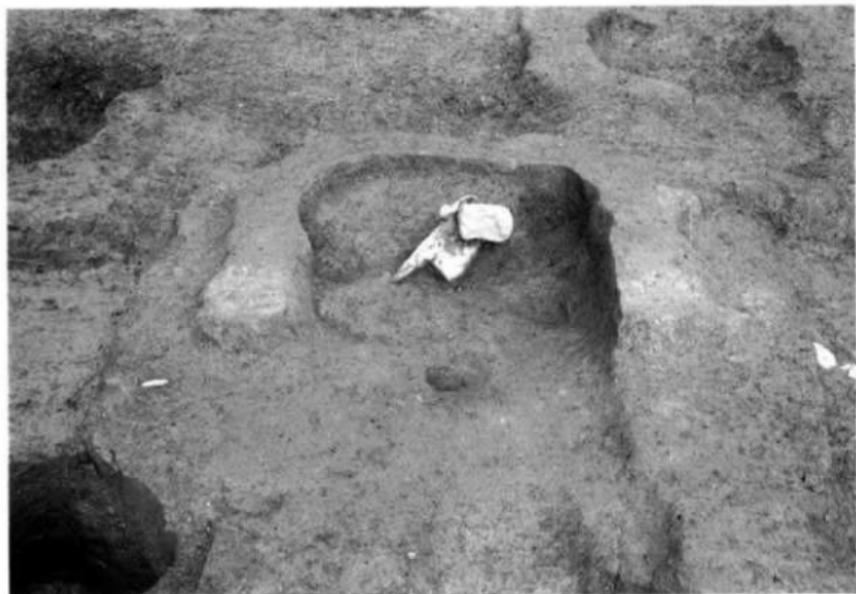
1 44号住居跡下層 (南から)



2 44号住居跡カマド (南から)



1 45～49号住居跡（南から）



2 45号住居跡カマド（南から）



1 东半部住居跡群全景



2 东半部住居跡群近景



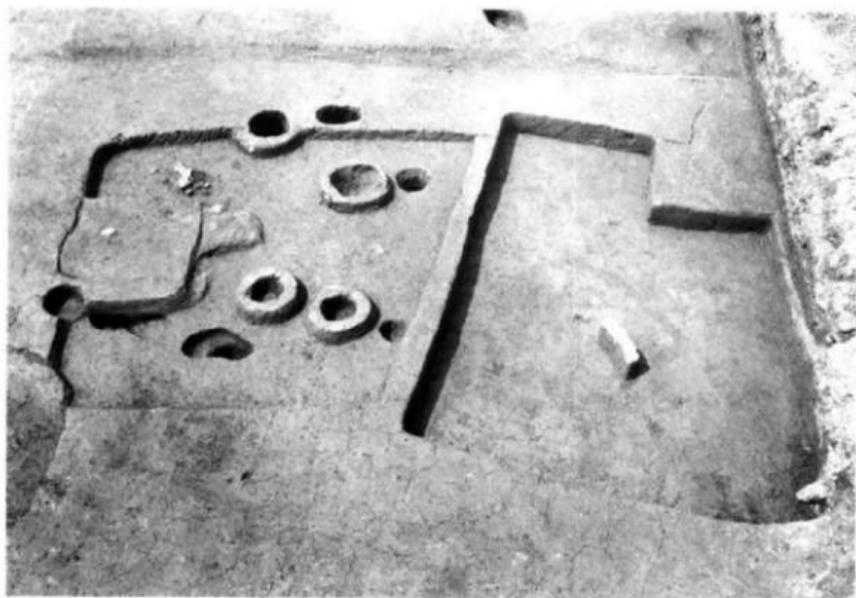
1 53号住居跡 (西から)



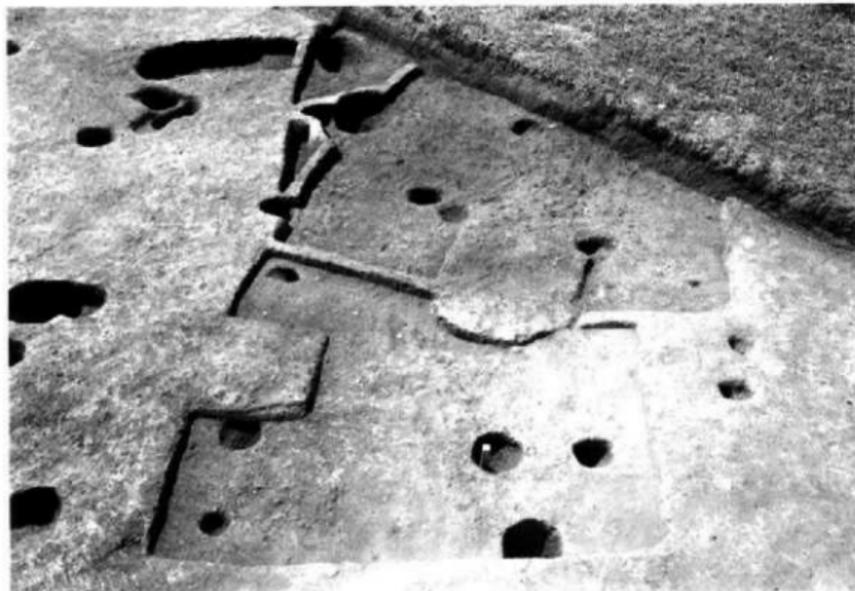
2 53号住居跡カマド (西から)



1 53号住居跡下層 (西から)



2 55・56号住居跡 (南から)



1 58・59号住居跡 (北から)



2 63号住居跡カマド (南から)



1 71・73号住居跡 (南から)



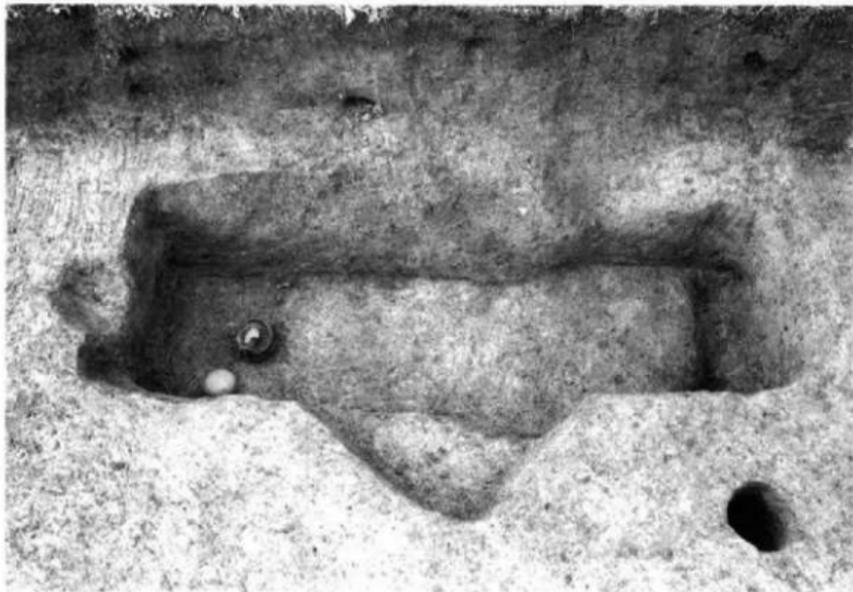
2 71号住居跡カマド (南から)



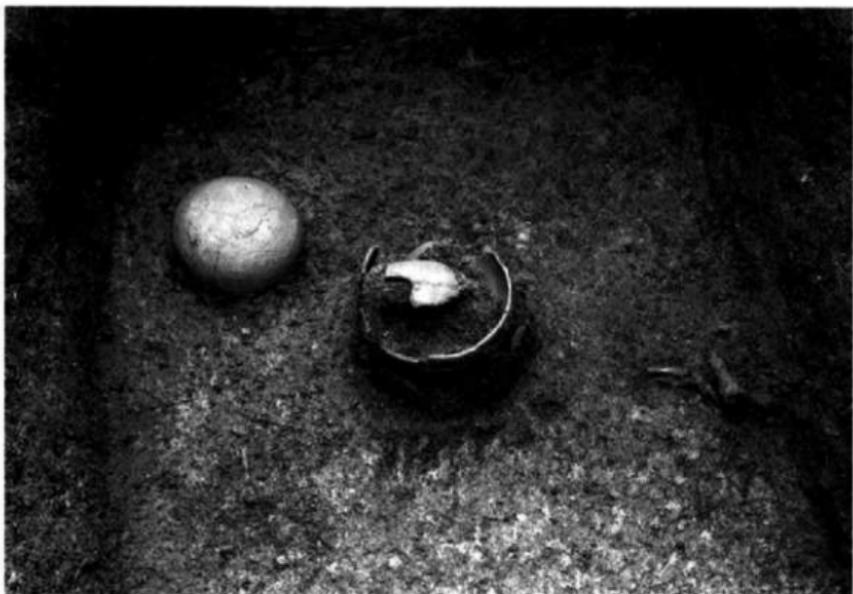
1 1号掘立柱建物跡 (北から)



2 2・3号掘立柱建物跡 (北から)



1 1号土槨墓 (北から)



2 1号土槨墓内遺物出土状態 (西から)



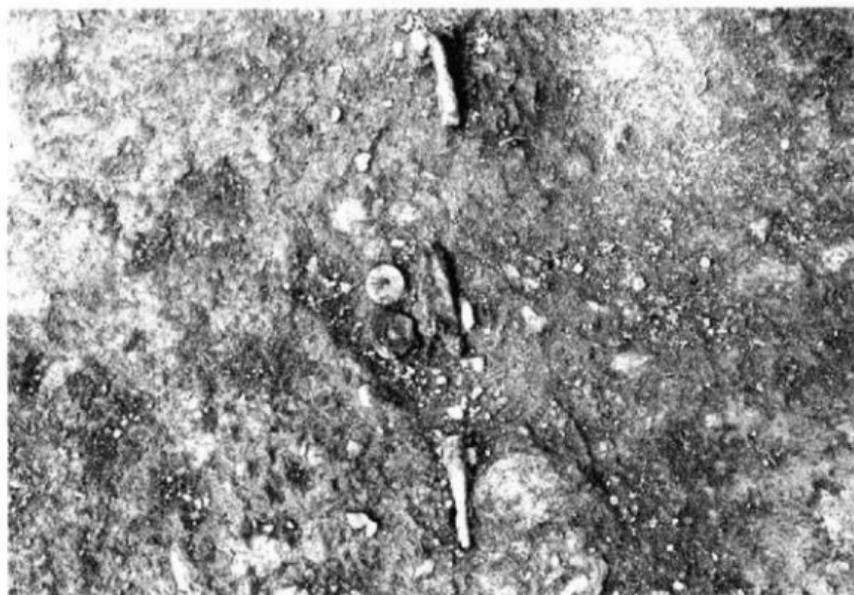
1 畝状遺構全景



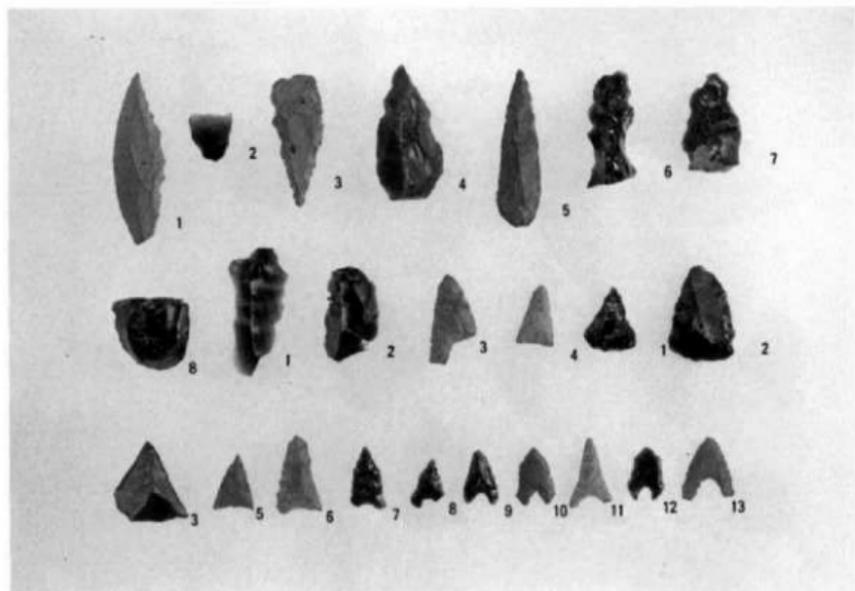
2 畝状遺構近景 (北から)



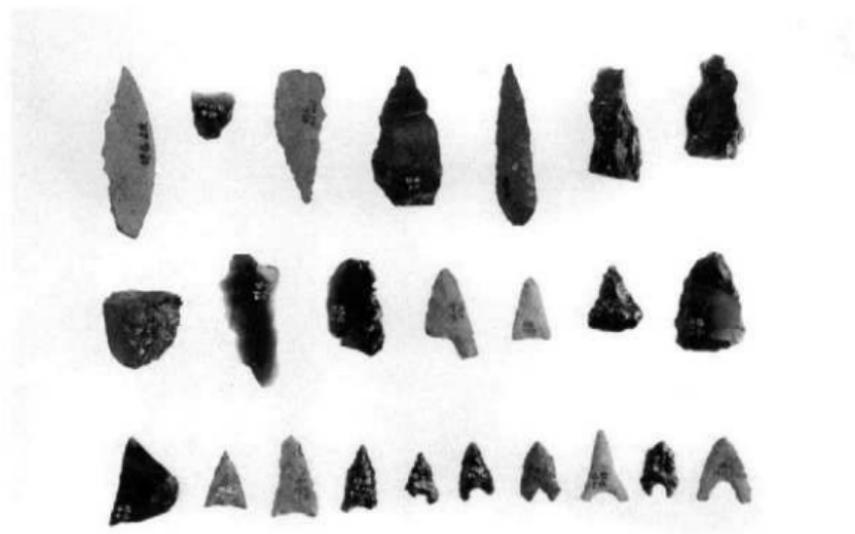
1 岗上遗址 (编号·2)



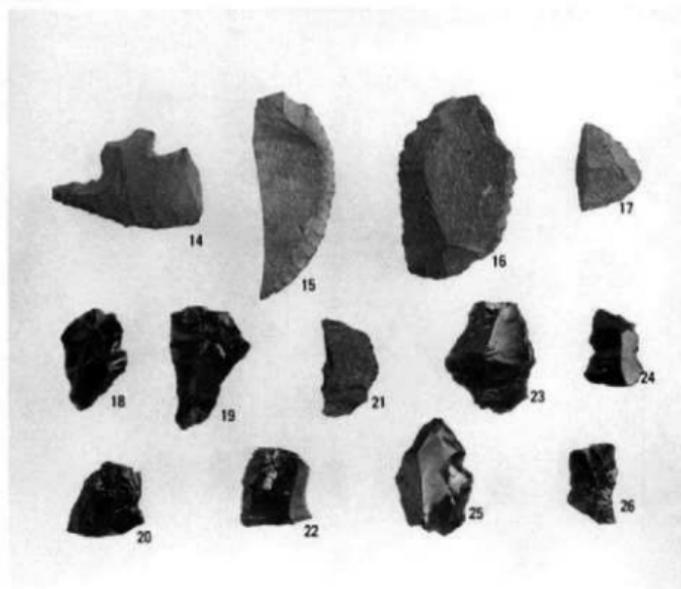
2 岗上遗址内出土物品出土状图 (编号·2)



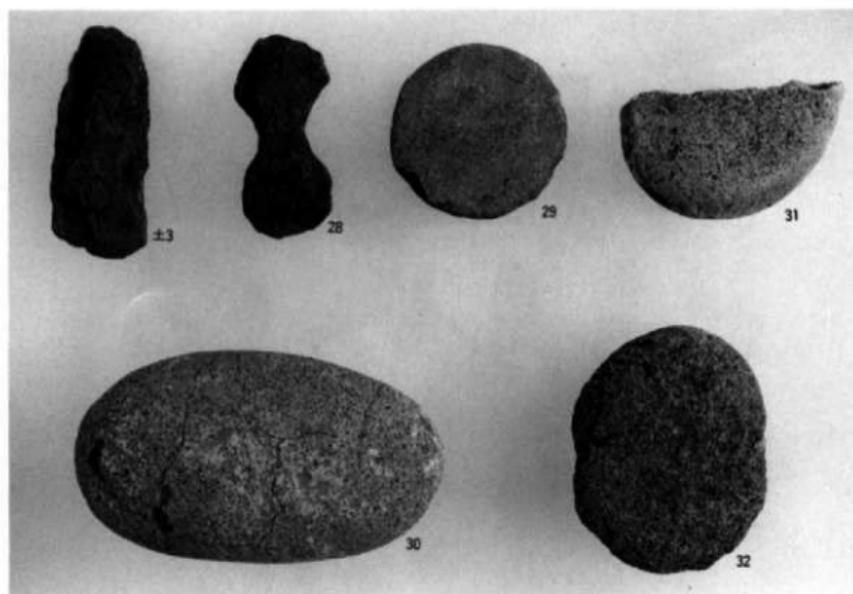
1 出土石器① (表)



2 出土石器② (裏)



1 出土石器②



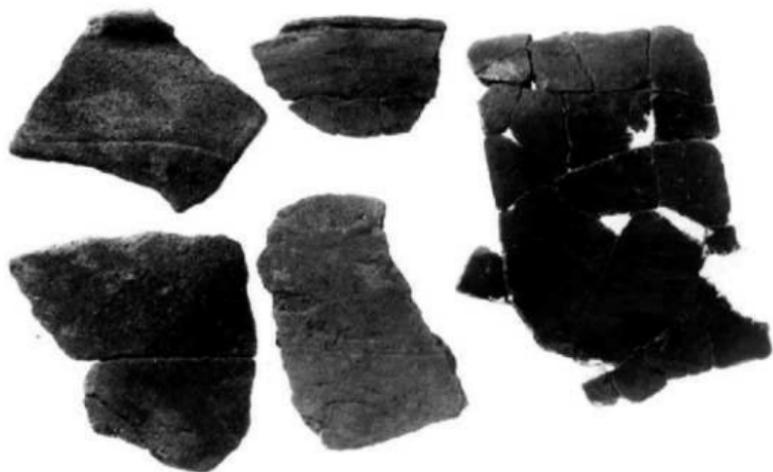
2 出土石器③



1 2号土坑出土绳文土器



2 3号土坑出土绳文土器



1 1·2号土坑出土陶文土器(表)



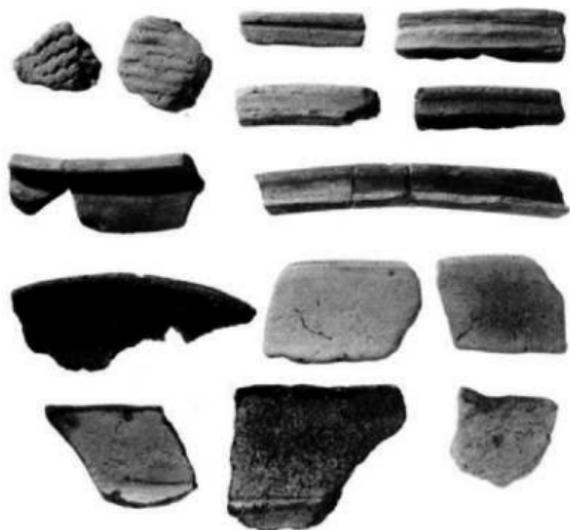
2 1·2号土坑出土陶文土器(裏)



1 3号土坑出土陶文土器(表)



2 3号土坑出土陶文土器(表)



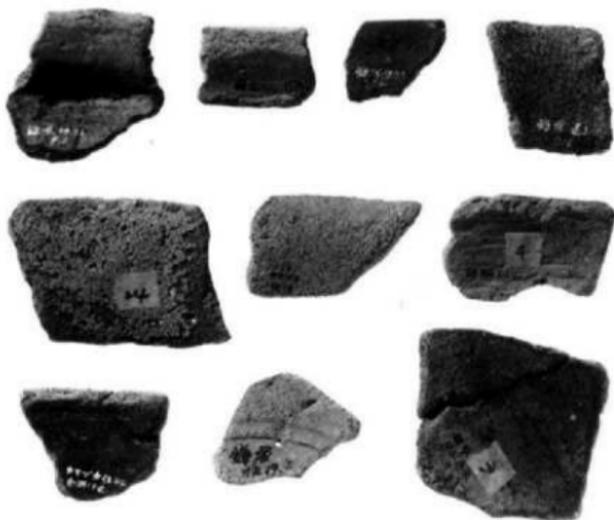
1 包含層出土縄文土器① (A)



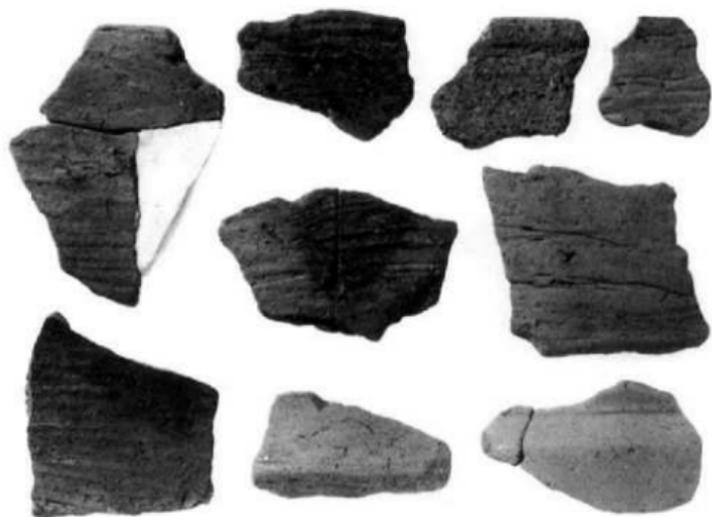
2 包含層出土縄文土器① (B)



1 包含層出土縄文土器②(表)



2 包含層出土縄文土器②(裏)



1 包含层出土绳文土器③(表)



2 包含层出土绳文土器③(表)



3



28



14



26



15



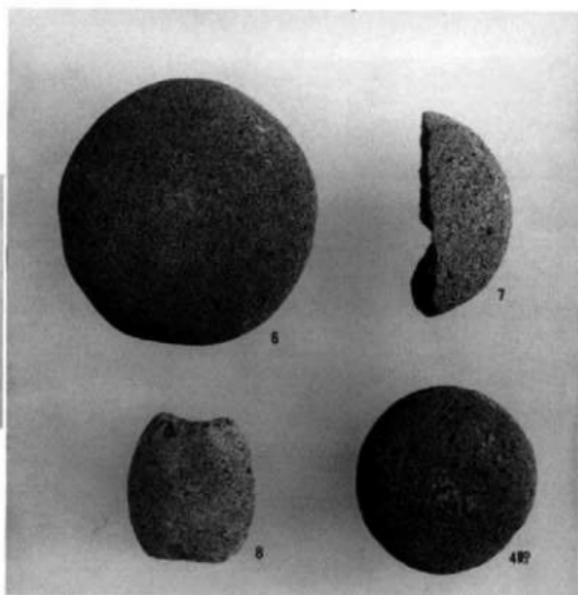
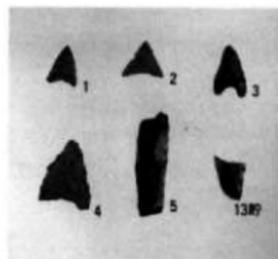
61



25



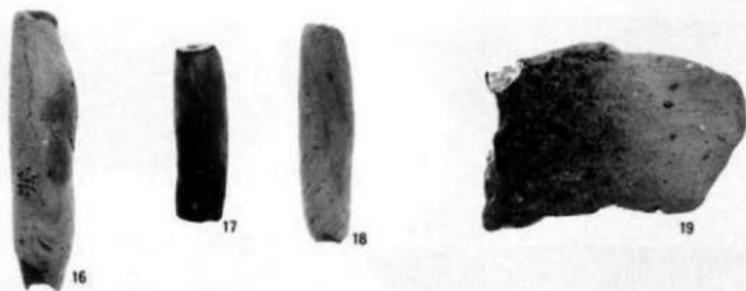
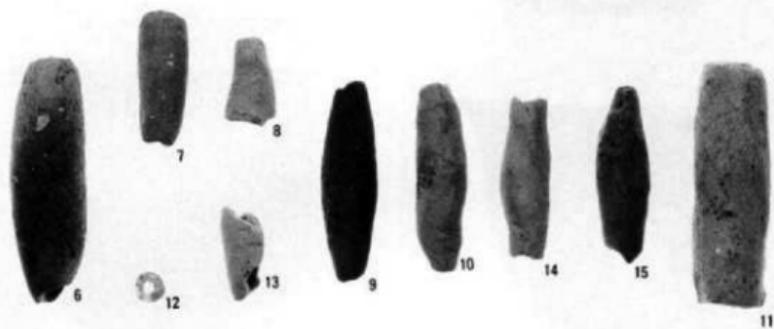
45



1 76号住居跡，4・13号貯藏穴出土石器

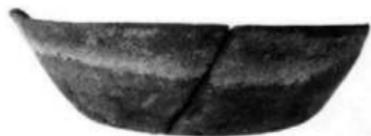


2 住居跡出土石器

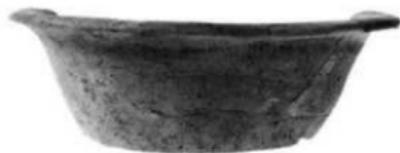




8



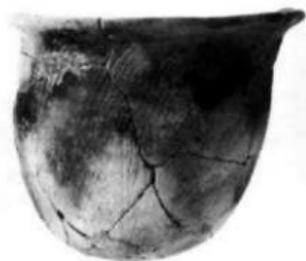
62



12



90



19



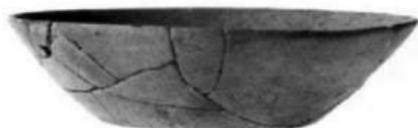
195



20



201



32



202



97



154



213



236



216



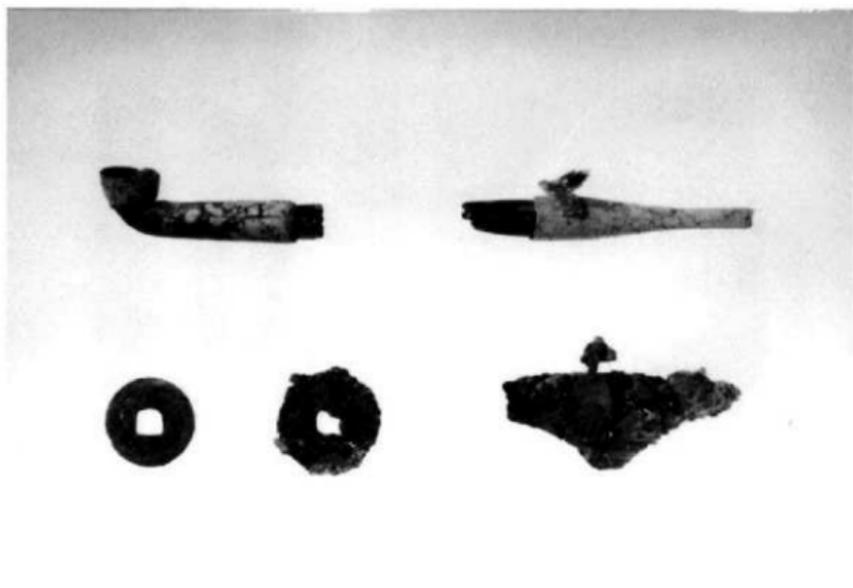
23



23



1 住居跡・土壌裏出土鉄器



2 近世墓出土副葬品

# 山ノ神遺跡の調査

## 本文目次

1. 遺跡の概要 .....	129
2. 先土器・縄文時代の遺構と遺物 .....	129
(1) 先土器時代の遺物 .....	129
(2) 竪穴状遺構 .....	130
(3) 土葬 .....	133
(4) 包含層出土の縄文土器・石器 .....	139
3. 古墳時代の遺構と遺物 .....	142
(1) 古墳 .....	142
(2) その他の遺物 .....	148
4. おわりに .....	149

## 図 版 目 次

本文封照頁

図 版 1	(1) 山ノ神遺跡全景空中写真 .....	129
	(2) 山ノ神遺跡発掘区全景 .....	129
図 版 2	(1) 1号竪穴と土壌 .....	130
	(2) 1号竪穴(東から) .....	130
図 版 3	(1) 1号竪穴・15号土壌(東から) .....	130
	(2) 2号竪穴・14号土壌(北から) .....	130
図 版 4	(1) 1号土壌(北から) .....	133
	(2) 2号土壌(北から) .....	133
図 版 5	(1) 6号土壌(北から) .....	133
	(2) 7号土壌(西から) .....	135
図 版 6	(1) 8号土壌(東から) .....	135
	(2) 10号土壌(西から) .....	135
図 版 7	(1) 11号土壌(北から) .....	135
	(2) 12号土壌(東から) .....	138
図 版 8	(1) 13号土壌(東から) .....	138
	(2) 古墳全景空中写真 .....	142
図 版 9	(1) 石室全景空中写真 .....	143
	(2) 周溝(北から) .....	144
図 版 10	(1) 出土石器(表) .....	130
	(2) 出土石器(裏) .....	130
図 版 11	(1) 3・14・15号土壌出土縄文土器(表) .....	135
	(2) 3・14・15号土壌出土縄文土器(裏) .....	135
図 版 12	(1) 1号竪穴状遺構出土縄文土器(表) .....	130
	(2) 1号竪穴状遺構出土縄文土器(裏) .....	130
図 版 13	(1) 包含層出土縄文土器(表) .....	139
	(2) 包含層出土縄文土器(裏) .....	139
図 版 14	出土縄文土器・土師器・須恵器 .....	132
図 版 15	(1) 出土土師器・須恵器 .....	144
	(2) 出土装身具・鉄器 .....	144

## 挿 図 目 次

第 1 図	先土器時代包含層の確認調査	129
第 2 図	包含層・竪穴出土石器実測図(1/3)	130
第 3 図	竪穴遺構実測図(1/40)	131
第 4 図	1号竪穴遺構出土石器実測図1(1/3)	132
第 5 図	1号竪穴遺構出土石器実測図2(1/3)	132
第 6 図	竪穴出土石鏃実測図(1/2)	133
第 7 図	土壌実測図1(1/30)	134
第 8 図	3・11号土壌出土石器実測図(1/3)	135
第 9 図	土壌実測図2(1/30)	136
第 10 図	土壌実測図3(1/30)	137
第 11 図	12号土壌出土石器実測図(1/3)	138
第 12 図	包含層出土石器実測図(1/3)	140
第 13 図	包含層出土石器実測図1(1/2)	141
第 14 図	包含層出土石器実測図2(1/3)	141
第 15 図	溝状遺構土層断面図(1/40)	142
第 16 図	石室実測図(1/60)	143
第 17 図	出土装身具・鉄器実測図(1/2)	144
第 18 図	石室内出土石器実測図1(1/3)	145
第 19 図	石室内出土石器実測図2(1/3)	146
第 20 図	溝状遺構・その他出土石器実測図(1/3)	147
第 21 図	発掘調査に参加した人達	149

## 表 目 次

表 1	縄文土器観察表	141
-----	---------	-----

## 付 図

付 図 1	山ノ神遺跡遺構配置図(1/200)
-------	-------------------

## IV 山ノ神遺跡の調査

### 1. 遺跡の概要

遺跡は、鍾塚遺跡の東側に狭い谷を挟んで隣接した標高56mの狭長な丘陵のほぼ先端部に位置している。調査は一部鍾塚遺跡の調査と並行して行った。調査の結果は、縄文時代の竪穴遺構2基と土甕13基、古墳時代後期の大型の単室圓張りの横穴式石室を有する古墳1基が発見された。他に、ほぼ同時期の溝1条が検出されている。周溝の一部だとすれば径30mを越す古墳となる。また、時期は不明であるが多数のピットと、包含層は遺存していなかったものの、三稜尖頭器などの先土器時代の遺物も発見された。

この遺跡は、すでに周知されている山ノ神古墳群の一部を形成し、今回の調査は、すでに削平されていた先端部の古墳を検出したことになった。 (井上)

### 2. 先土器・縄文時代の遺構と遺物

#### (1) 先土器時代の遺物

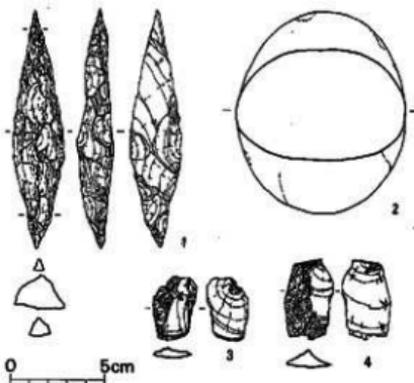


第 1 図 先土器時代包含層の確認調査

## 石器 (図版10, 第2図1)

非常に良く整った三稜尖頭器の完形品で採集資料。安山岩製の横長切片を素材とし、主要剥離面側と背稜から丁寧な調整を施す。先端下1cmの箇所まで厚0.7cm, 中央部で1.8cm, 基部近くで1cmを測る。長12.3cm, 幅2.7cm, 重46.5g。県内では福岡市和白遠跡・夜須町金山遠跡・朝倉町鎌塚遠跡に類例が知られる。

(木下)



第2図 包含器・整穴出土石器実測図 (1/3)

## (2) 整穴状遺構

### 1号整穴 (図版2・3, 第3図)

発掘区西側中央先端から検出された

長方形プランの整穴で、東西227cm, 南北277cm, 深さ22~33cmを測る。掘土中からは多くの炭化物小片とともに縄文時代前期後半の曾畑式土器と晩期の土器片が混在して出土した。晩期の深鉢形土器が形状を知りうる大型破片である他は、いずれも小破片である。床面は南東隅付近がテラスを形成する他は、平坦で、北東と北西隅にはピットが穿たれている。また、床面には住居跡のような敲きしめはみられない。

(井上)

### 出土遺物 (図版12, 第4~6図)

縄文土器 (12~18・38) 12・38を除いてすべて前期後半の曾畑式土器である。しかし、本遺構の下位からは曾畑式土器の他に晩期土器をも含む15号土壌が検出されており、遺構の先後関係とは必ずしも対応しない。12は外面に二枚貝の貝殻条痕が施され、口縁部に刻みを持つ早期の土器である。13~18は胎土に滑石が混入されない曾畑式土器である。二枚貝の腹縁による貝殻条痕を器面調整の基本とするが、中にはそれをナデ消すものも見られる。38は晩期の深鉢形土器で、口縁部を外側へつまみ出し、胴部の屈曲部上位には1条の沈線文を施す。器面調整は外面が植物質原体による条痕、内面がナデである。

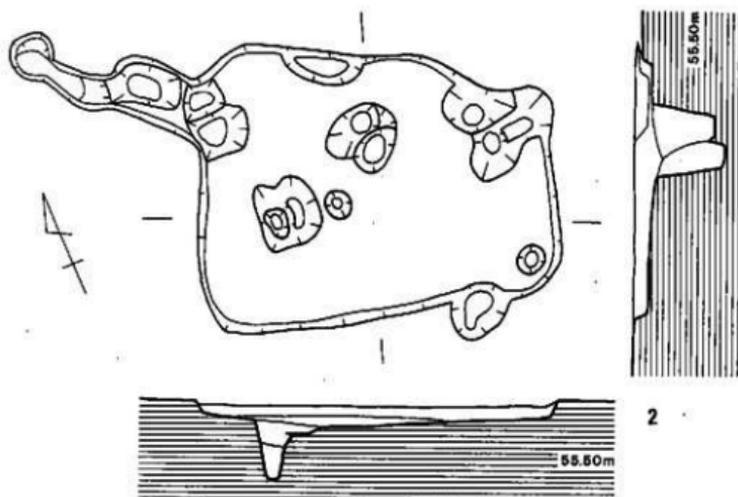
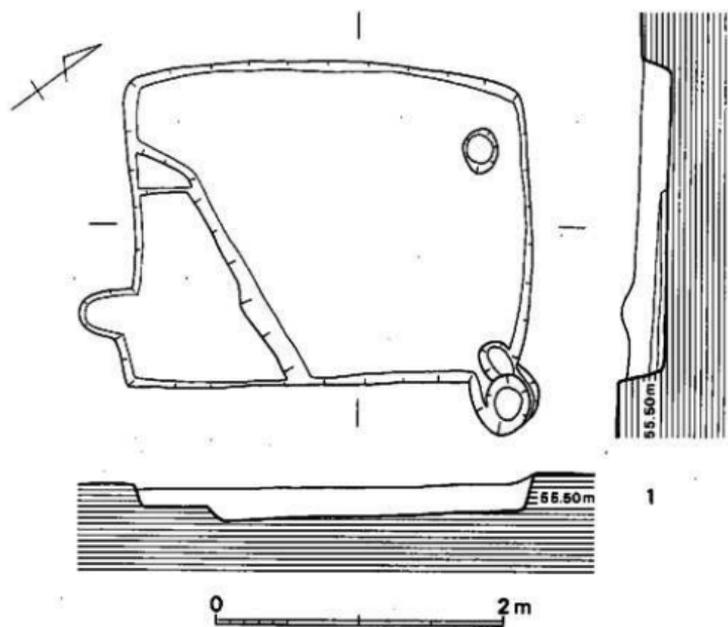
(水ノ江)

石器 (図版10, 第6図) 先端、片脚を欠損する切片鎌。脚部付近へ丁寧な調整を施し、他は鋭い縁をそのまま残す。床面出土で良質の黒曜石製。残存長3.2cm, 重1.9g。

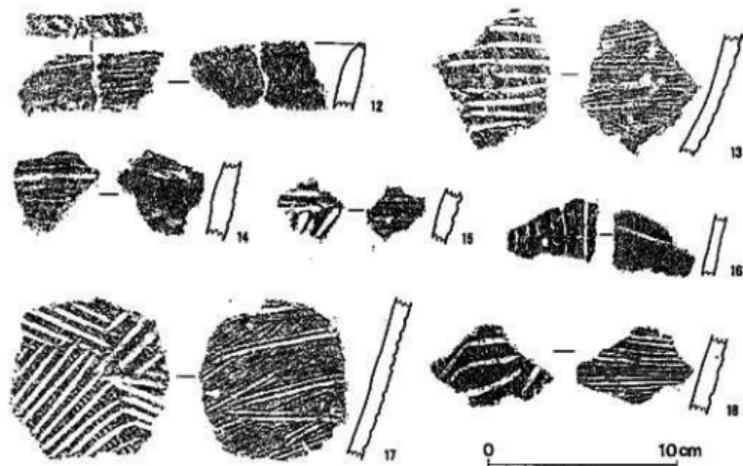
(木下)

### 2号整穴 (図版3, 第3図)

1号整穴の東側、発掘区中央北半から検出された不整な隅丸長方形プランの整穴である。北西隅にはピットが重複し、溝状をなすものの、付随する遺構であるか不明である。規模は、中央部で東西250cm, 南北185cm, 深さは10~15cmを測り、西壁に比べ東壁が狭い。床面には柱穴



第 3 图 整穴遺構実測図 (1/40)

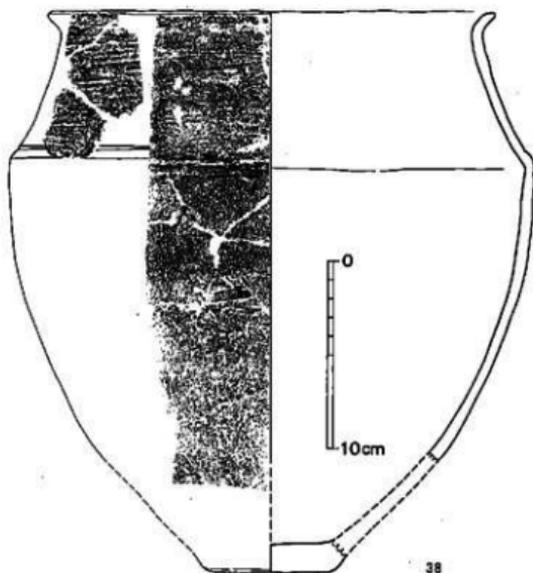


第 4 図 1号壑穴遺構出土石器実測図1 (1/3)

状のピットが多数穿たれているものの、配置に規則性がみられない。また、床面も1号壑穴と同様、住居跡にみられる堅固さをもたない。埋土中からは炭化物小片が多数検出されたが、磨石が1点出土した他は、土器などは出土しなかった。(井上)

出土遺物 (第2図)

石器 (2) 長円形に近い磨石だが、あまり使い込まれた形跡は無い。長径15.8cm、短径9cm、厚5.9cm、重750gで輝石安山岩製。(木下)



第 5 図 1号壑穴遺構出土石器実測図2 (1/3)

### (3) 土 塚

#### 1号土塚 (図版4, 第7図)

発掘区中央よりやや南側から検出された土塚で、古墳石室の北側に位置する。平面形は不整円形を呈し、径約108cm、深さは15~21cmを測り、中央部がやや深くなっている。埋土中からは炭化物小片が多数検出された他は、何等出土しなかった。

#### 2号土塚 (図版4, 第7図)

1号土塚の北側から検出された不整隅丸方形プランの土塚である。規模は東西98cm、南北最大で105cm、深さは東壁で18cm、西壁で28cmと深くなり、床面は西側に傾斜している。1号土塚と同様、埋土中からは炭化物小片と焼土塊が若干出土しただけである。

#### 3号土塚 (第7図)

2号土塚の北東に隣接して検出された不整楕円形プランの土塚で、東壁は新しいピットと重複している。規模は、現存部で東西128cm、南北98cm、深さは5~7cmと浅い土塚である。埋土中から多数の炭化物小片と焼土塊、縄文土器片1点が出土した。(井上)

#### 出土遺物 (図版11, 第8図)

縄文土器 (1) 3号土塚から出土した土器はこの1点だけである。器面調整は内外面ともナデであるが、外面にはLの縄文を原体とした燃糸文が施される。早期のものであるが、詳細な位置づけは難しい。(水ノ江)

#### 4号土塚 (第7図)

3号土塚の北西から検出された不整隅丸長方形プランの土塚で、南壁側床面の中央にはピットが1個穿たれている。規模は東西94cm、南北129cm、深さは3~8cmを測る。他の土塚と同様、埋土中からは炭化物小片と焼土塊が出土している。

#### 5号土塚 (第7図)

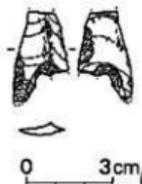
4号土塚の南側から検出された楕円形プランの土塚で、床面から4個のピットが検出された。その内の一つからは柱穴の根石を思わせる河原石が検出されたが伴出するものかは不明である。埋土中からは炭化物小片が少量出土した。調査時には6号土塚として取扱ったものである。

#### 6号土塚 (図版5, 第7図)

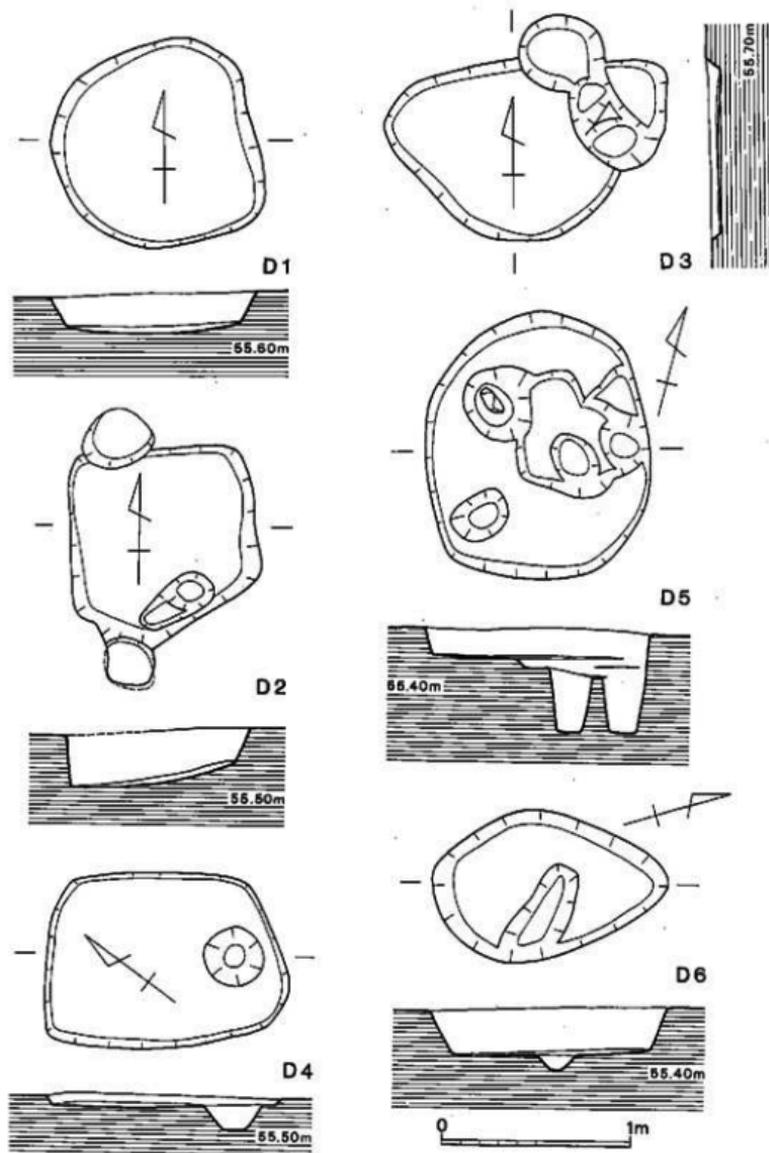
4号土塚の西側から検出された不整楕円形プランの土塚で、東壁側中央床面には浅いピットが穿たれている。規模は、東西82cm、南北125cm、深さ23cmを測る。埋土中からは、炭化物小片が多数と、黒曜石製の縦長剃片が1点出土した。調査時には7号土塚としたものである。(井上)

#### 出土遺物

石 器 (第2図3) 縦長剃片で、片縁に刃こぼれがみられる。良質の黒曜石製。(木下)



第6図 竪穴出土石鏡実測図 (1/2)



第 7 圖 土坑實測圖 1 (1/30)



第 8 図 3・11号土坑出土土器実測図 (1/3)

7号土坑 (図版5, 第9図)

6号土坑の西側から検出された長楕円形プランの土坑で、規模は東西54cm, 南北160cm, 深さは10-17cmを測る。他と同様、埋土からは炭化物小片が検出された。調査時には8号として取扱った。

8号土坑 (図版6, 第9図)

1号竪穴に切られた状態で検出された隅丸方形プランの土坑である。規模は、現存部で東西90cm, 南北112cm, 深さは8cmを測る。埋土には炭化物小片が含まれていたものの、土器等の遺物は出土しなかった。調査時には10号土坑としたものである。

8号土坑 (第9図)

8号土坑の北東にあって、南壁側を1号竪穴に切られた状態で検出された不整隅丸方形プランの土坑である。規模は、現存部で東西175cm, 南北168cm, 深さは8cmを測る。床面は東から西に緩やかに傾斜し、床面上には大小のピットが穿たれている。埋土からは炭化物小片と焼土塊が多数検出されたものの、土器等の遺物は出土しなかった。この土坑は調査時に11号土坑として取扱ったものである。

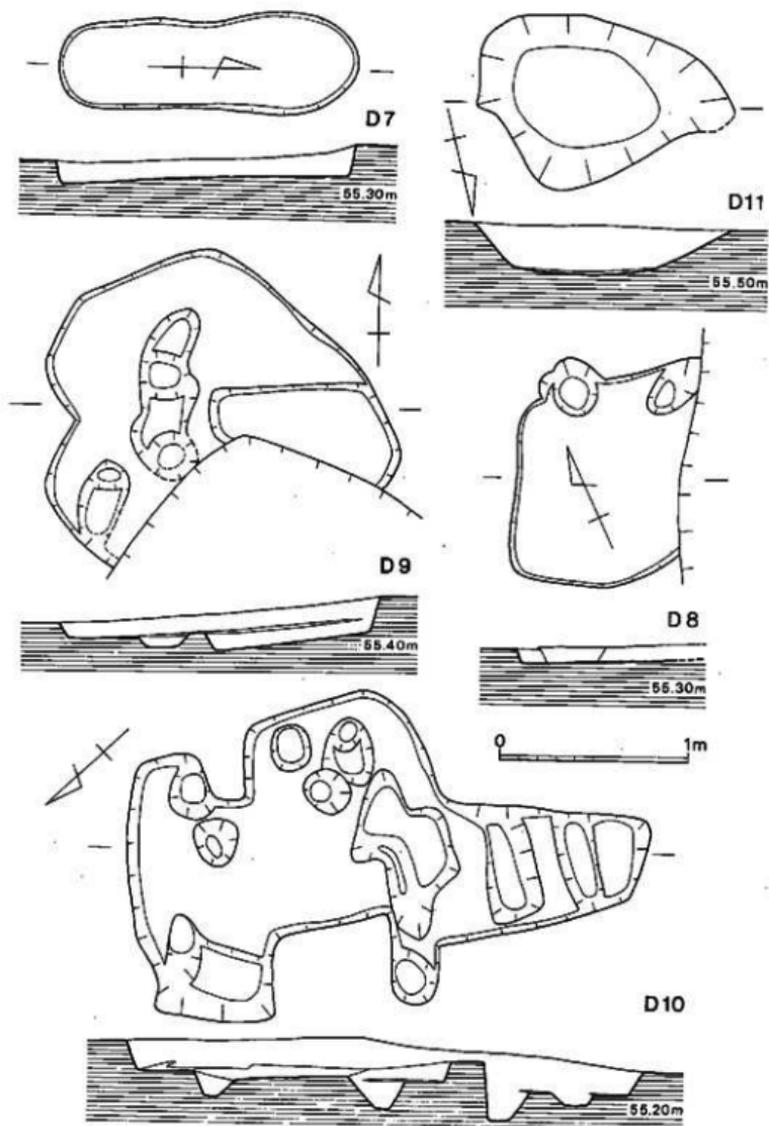
10号土坑 (図版6, 第9図)

9号土坑の北側斜面から検出された不整形の土坑である。本来は複数の土坑やピットが重複したのもかもしれないが、ここでは一つの土坑として取扱う。規模は、最大部で東西150cm, 南北278cm, 深さは5-21cmを測る。埋土中からは多量の炭化物片や焼土塊が検出された。調査時には12号土坑として取扱ったものである。

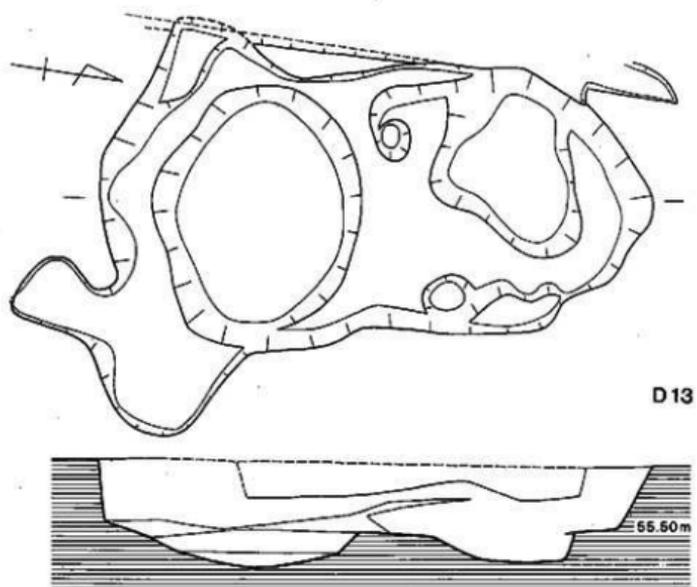
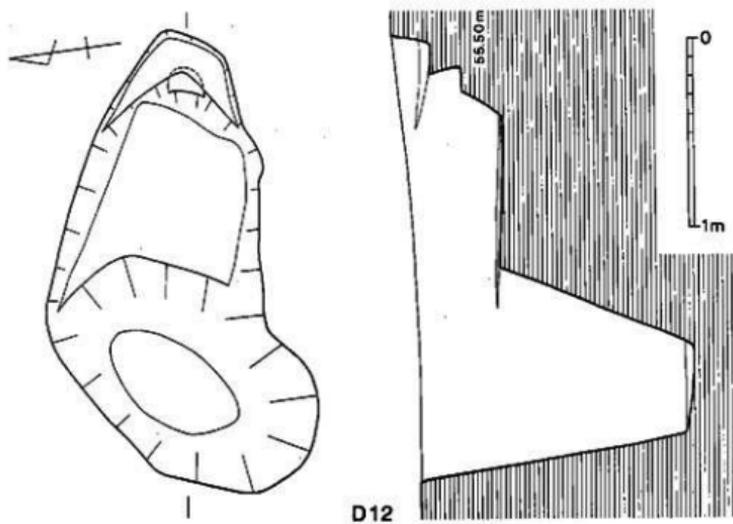
11号土坑 (図版7, 第9図)

2号竪穴に切られた状態で検出された楕円形プランの土坑で、断面形は緩やかな鍋底状をなす。規模は、現存部で東西139cm, 南北93cm, 深さは中央で25cmを測る。他の土坑と同様、埋土中から多量の炭化物小片と焼土塊が検出された。他に、縄文土器片も若干出土した。調査時には14号土坑としたものである。 (井上)

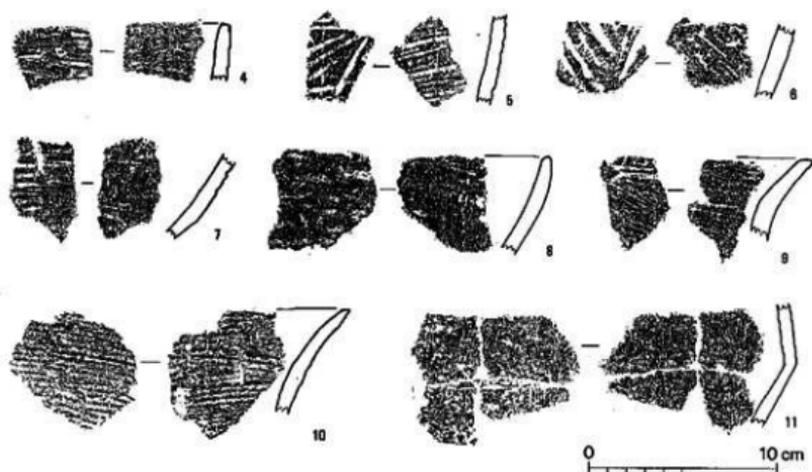
出土遺物 (第8図)



第 9 图 土坑实测图 2 (1/30)



第 10 圖 土壤実測図 3 (1/30)



第 11 図 12号土壌出土土器実測図 (1/3)

縄文土器 (2・3) いずれも深鉢形土器で、弧線状の沈線文が施される。器面調整は外面が植物質工具による未痕、内面はナデである。 (水ノ江)

#### 12号土壌 (図版7, 第10図)

1号竪穴の床面下から検出された不整楕円形プランの土壌で、東半部はテラス状をなし浅く、西半部は逆台形状に深くなっている。規模は、東西250cm、南北115cm、深さは東側で50cm、西側で145cmを測る。1号竪穴と同様、埋土中からは縄文前期と晩期の土器片や石器が混在して出土した。また、他と同様、炭化物小片や焼土塊も多量に検出された。この土壌は調査後の15号土壌にあたる。 (井上)

#### 出土遺物 (第2・11図)

縄文土器 (4~11) 4~7は前期後半の管型土器である。4は外面のみ文様を持つ口縁部で、端部付近には1条だけ押引文が、その下位には短沈線文が施される。管型土器に特徴的な滑石の胎土への混入は見られない。8~11は粗製土器である。11の胴部屈曲および本遺跡では早・前期土器のほかには晩期土器しか見られないことなどから判断して、これらは晩期に属するものと考えられる。 (水ノ江)

石器 (第2図4) 背面の半分に自然面を残す幅広い縦長裂片。断面三角形を呈し、打面調整が著しい。自然面と反対縁に刃こぼれが見られる。長4.3cm、重6.3gで良質の黒曜石製。

#### 13号土壌 (図版8, 第10図)

3号土壌の北東にあり、溝状遺構の西側に隣接して検出された不整楕円形プランの土壌であ

る。床面上には大小のピットが穿たれているので、10号土壌と同様、本来は複数の土壌やピットが重複した結果かもしれないが、検出時には一つの遺構としてとらえたものである。規模は、東西145cm、南北292cm、深さは北壁で93cm、南壁で35cmを測る。埋土からは土器等の遺物は出土しなかったものの、多量の炭化物小片が検出されているので他の土壌と同様の性格を有す遺構であろう。(井上)

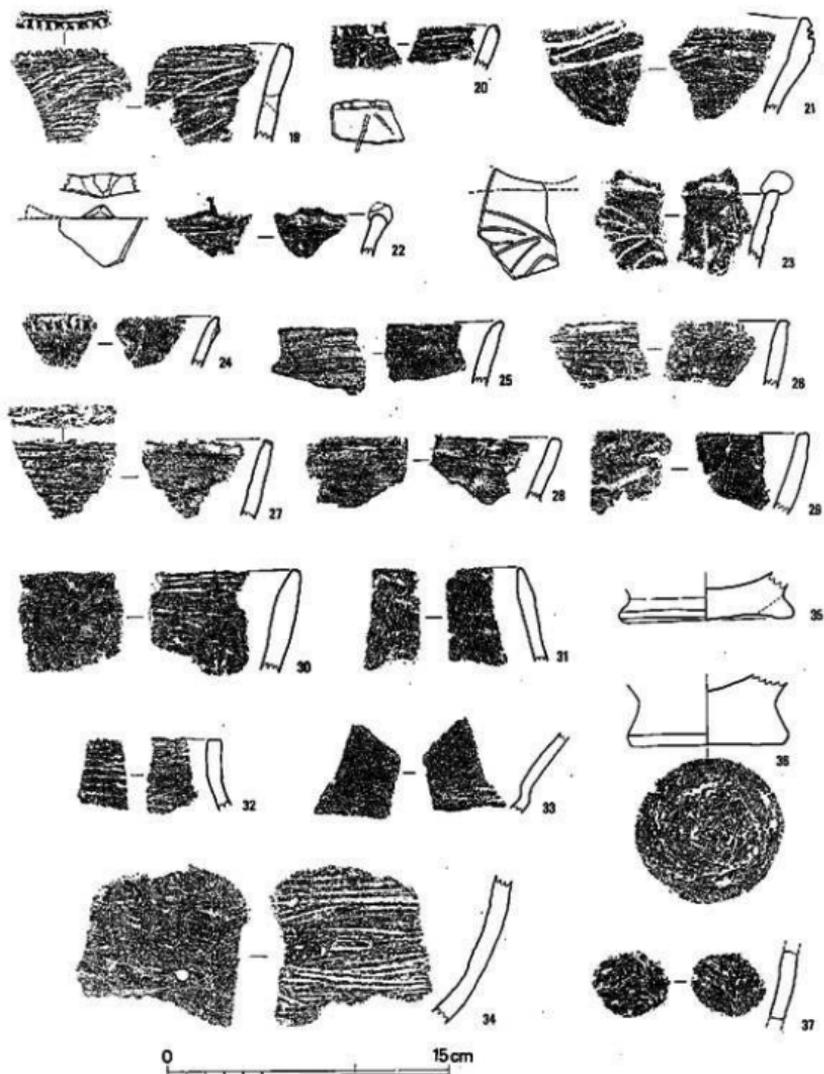
#### (4) 包含層出土の縄文土器・石器

##### 縄文土器 (図版13, 第12図)

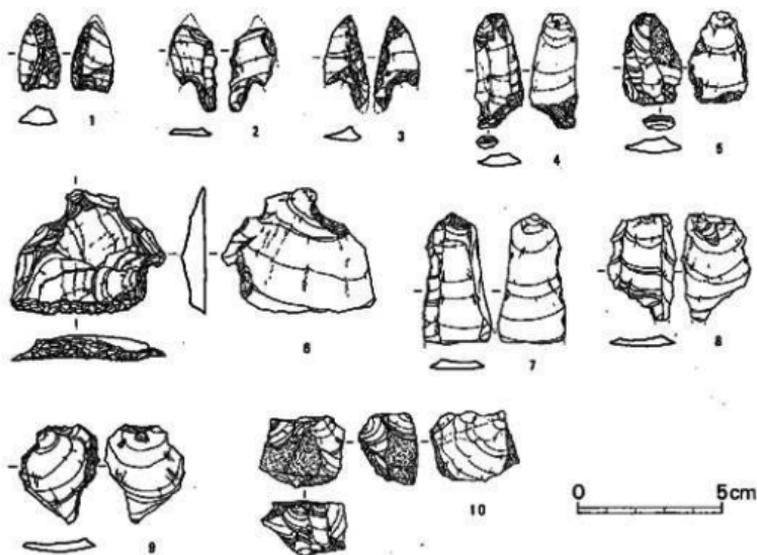
19は二枚貝条痕による器面調整と口縁端部の外側に鋭い刻みが施される、早期末の縄文土器である。20には細い山形状の隆帯文と刻みが施される藤B式土器であろうが、器壁の厚さに若干の違和感を覚える。21は肥厚された口縁部に3条の沈線文が施される土器で、後期中葉の北久根山式系の土器であろうか。22・23は口縁端部に突起を有する晩期中葉黒川式土器の深鉢である。23には弧状の沈線文が施される。24は刻みを有する突帯文土器で、器面調整はナデである。25-32は粗製深鉢形土器の口縁部であるが、22・23の黒川式土器に伴うものか24の突帯文土器に伴うものか決めかねたため、ここでは一括して扱った。内面の器面調整はほとんどがナデだが、外面に関しては二枚貝や巻貝の他に植物質工具による条痕も窺える。33は精製鉢形土器の、34は粗製深鉢形土器の胴部と考えられる。35・36はいずれも分厚く胎土の粗い底部であるが、36には二枚貝の腹縁による匝痕が同心円状に残る。31は粗製の土器片を加工・転用した円盤状土製品である。(水ノ江)

##### 石器 (図版10, 第13・14図)

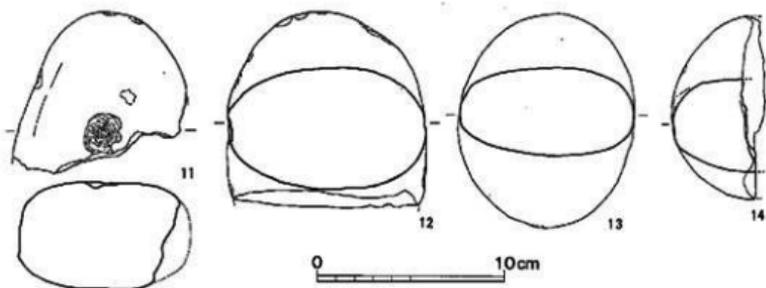
1～3はP-14・77・129出土の剥片鏃。1は平基式の石鏃だが片半分を欠損する。3は片脚鏃で、柄りと片側縁に調整を施す。残存長3.3cm、重1.45g。いずれも良質な黒曜石製。4・5はつまみ型石器。打面が非常に小さいのは5・7と同じ。4は長4cm、重3.7g。P-36出土、5はP-17出土で両者とも良質の黒曜石製。6は横長剥片を素材とした横型石匙。つまみ部の形成は片側みの加工。それに対し刃部の調整は非常に丁寧に行なわれる。長4.4cm、幅5.5cm、厚0.9cm、重20.5g。P-30出土で安山岩製。7・8は刃器状剥片。7は両側縁に刃こぼれが観察される。P-83出土で良質の黒曜石製。8はP-63出土で不純物を含む黒曜石製。9は縦長の剥片でP-167出土。黒曜石製。10は黒曜石製の石刻でP-129出土。11は部厚な長円形を呈す凹石。凹部は径2cm、深3mm内外。周縁の一部に敲打痕が顕著に残る。厚5.9cmで古墳の周溝内出土。12-14は磨石。12の周縁は敲打痕がみられる。P-180出土。13は長円形を呈す完形品、長11.6cm、厚4.5cm、重630g。14は円形に近い資料で、周縁のへこみが著しいので敲石としても使用されている。13・14は古墳の周溝出土。11-14は輝石安山岩製。(木下)



第 12 图 包含层出土土器实例图 (1/3)



第 13 圖 包含層出土石器実測圖 1 (1/2)



第 14 圖 包含層出土石器実測圖 2 (1/3)

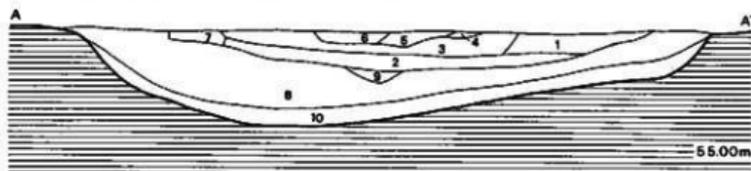
表 1 縄文土器観察表

番号	出土地点	胎土	器面調整(外)	器面調整(内)	整理番号	備 考
1	3号土層	石英・角閃石	ナデ	ナデ	5	擦糸文
2	11号土層	石英・長石	糸痕	ナデ	6	
3	11号土層	石英	糸痕	ナデ	31	
4	12号土層	長石	ナデ	ナデ	32	

5	12号土坑	石英・長石	ナテ	二枚貝乗痕	34	
6	12号土坑	石英・長石	摩滅不明	ナテ	7	
7	12号土坑	石英・長石	ナテ	ナテ	33	
8	12号土坑	石英	ナテ	ナテ	35	外国産化物
9	12号土坑	長石	二枚貝乗痕→ナテ	二枚貝乗痕→ナテ	38	
10	12号土坑	石英・長石	二枚貝乗痕	二枚貝乗痕	36	
11	12号土坑	石英・長石	ナテ	ナテ	39	
12	1号壺穴	石英	二枚貝乗痕	ナテ	27	
13	1号壺穴	石英・長石	ナテ	二枚貝乗痕→ナテ	24	
14	1号壺穴	長石	ナテ	ナテ	29	
15	1号壺穴	石英・長石	ナテ	二枚貝乗痕	30	
16	1号壺穴	石英・長石	ナテ	ナテ	25	
17	1号壺穴	長石	ナテ	二枚貝乗痕→ナテ	26	
18	1号壺穴	石英・長石	ナテ	二枚貝乗痕	28	
19	P-92	石英	二枚貝乗痕	二枚貝乗痕	22	
20	1号壺石室	石英	二枚貝乗痕	二枚貝乗痕	2	
21	P-5	石英・長石・角閃石	ナテ	ナテ	8	
22	P-87	長石	乗痕	ミガキ	18	
23	P-14	石英	摩滅不明	摩滅不明	9	
24	P-130	石英・長石	ナテ	ナテ	40	
25	P-21	石英	帯貝乗痕	ナテ	12	
26	P-61	石英・雲母	帯貝乗痕	ナテ	16	
27	P-56	石英・長石	二枚貝乗痕	ナテ	15	
28	1号壺石室	石英	ナテ	ナテ	3	
29	P-58	石英	ナテ	ナテ	14	
30	P-91	石英	ナテ	二枚貝乗痕→ナテ	21	
31	P-15	石英・長石	ナテ	ナテ	10	
32	P-78	石英	二枚貝乗痕	二枚貝乗痕→ナテ	17	
33	1号壺石室	長石・雲母	ミガキ	ミガキ	1	
34	P-90	長石・雲母	ナテ	二枚貝乗痕	20	
35	P-42	石英・雲母	ナテ	ナテ	41	
36	P-116	石英	ナテ	ナテ	19	二枚貝乗痕(?)の圧痕
37	1号壺石室	石英・長石・雲母	ナテ	ナテ	4	土器片転用の土製円盤
38	1号壺穴	石英・長石	乗痕	ナテ	12	胴部黒曲面上位に比繪文

### 3. 古墳時代の遺構と遺物

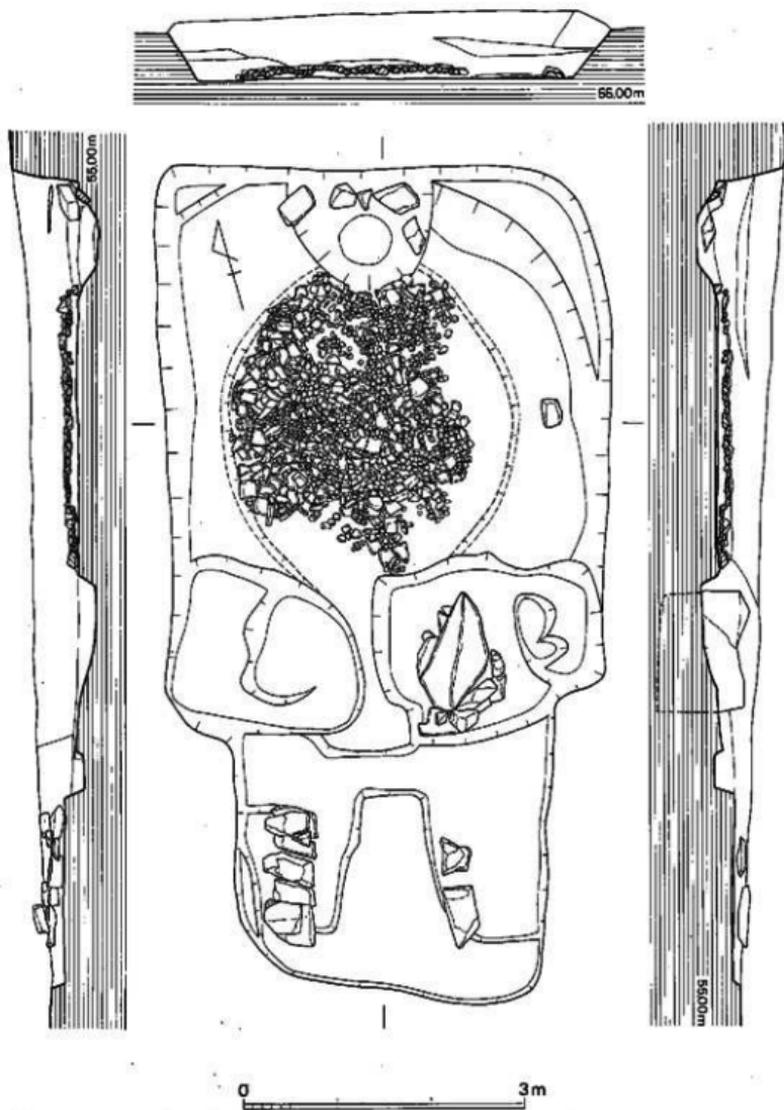
#### (1) 古墳 (図版 8・9, 付図 1・第16図)



1. 淡黄色褐色土  
 2. 淡灰褐色土(淡褐色粘質土ブロック層)  
 3. 暗茶褐色土(淡灰褐色土山)  
 4. 暗茶褐色土  
 5. 1に同じ  
 6. 4に同じ  
 7. 暗質褐色土  
 8. 黄褐色粘質土  
 9. 雲母色土  
 10. 暗黄褐色土(淡黄褐色土山)

0 2m

第 15 図 溝状遺構土層断面図 (1/40)



第 16 圖 石室實測圖 (1/60)

墳丘(図版8、付図1) 調査前は、柿畑として造成されていたこともあり、墳丘はすでに削平され、古墳の存在は確認できなかった。調査の結果は、かならずしも明確ではないが、主体部の北東側から検出された溝状遺構が周溝の一部であった可能性がある。しかし、丘陵中央から西側では検出されていないなど、若干、疑問は残るが、溝内出土の土器が主体部の土器類と同一時期のもので、他に、この時期の遺構は検出されていないので、周溝の一部と理解するのが最も妥当と思われる。仮に主体部の位置が中心だとすれば、径30mを越す円墳となるだろう。溝はわずかに主体部側に内湾気味の形状を呈すものの、明瞭ではない。溝底は北西から南東の方向に傾斜している。溝の断面形は、主体部側が深く、外側が浅い、低平な鍋底状を呈している。また、溝内の土層堆積状態(第15図)も墳丘内側と考えられる主体部側からの流入状況を示し、この溝状遺構が周溝の一部であることを裏付けるものかもしれない。現存する溝の全長は約17m、最大幅は東端部で約4.5m、最深部で約67cmを測る。

主体部(図版9、第16図) 主体部は大型の単室の横穴式石室で、主軸方位は明確ではないが、ほぼN-11°30'-Eを指し、南に開口している。石室も石材の大半を抜き取られ、床面の敷石と羨道部の側壁を僅かに残すのみであった。玄室内の敷石の遺存状態と掘方のプランの形状から、玄室は強い崩壊の石室であったことがわかる。玄門部は東側側壁の巨石を一石残すだけで明確ではない。羨道部は西壁と東壁の一部を残すだけで、残りの良い西壁でも下から二段が遺存しただけである。いずれも扁平な緑泥片岩の小口積である。石室の規模は、明確ではないが、残存する石材や敷石、掘り方等から考えて、石室全長は約7.2m、玄室長約3.25m、玄室最大幅約3m、羨道部長約1.6m、羨道部幅約1.4mといえるだろう。石室内からは原位置をとどめないものの、玄室内に散在して、耳環3・管玉1・鉄鏃片2点が他に須恵器壺・提瓶・甕・杯身・杯蓋・土師器碗などが出土した。出土土器からして、築造時期は6世紀末頃と思われる。

出土遺物(図版14・15第17~20図)

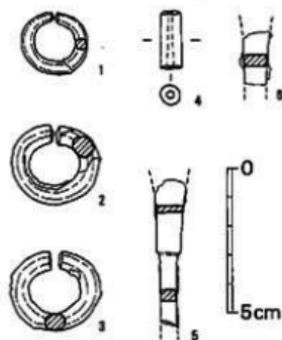
#### 石室内出土遺物

耳環(第17図1~3) 大小二種類あり、1は径23mmの小型、2・3は径31mmの大型で対をなす。いずれも銅地金張りの金環である。

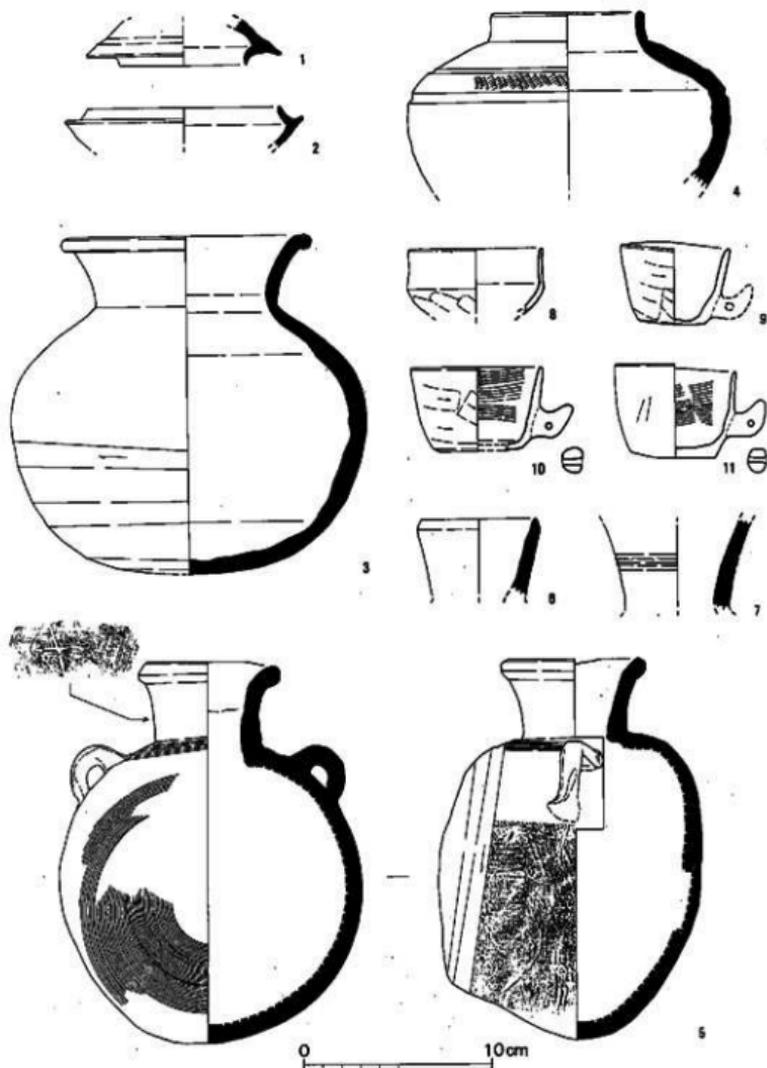
管玉(第17図4) 碧玉製の管玉で、上端を一部欠損している。全長21mm、径6.7mmを測る。

鉄鏃(第17図5・6) 5・6とも基部付近の小破片で、型式などは不明である。

須恵器杯蓋(第20図1) 最大径10.4cmを測る小型の杯蓋で、低い身受けのかえりを有す。内外ともクロヨコナテ調整で、色調は黒灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。



第17図 出土装身具・鉄器実測図(1/2)



第 18 图 石室内出土土器实测图 1 (1/3)

須恵器杯身（第18図2） 壺受部の立ち上がりが低い杯で、体部径12.6cmを測る。内外ともクロヨコナデ調整で仕上げ、色調は暗灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

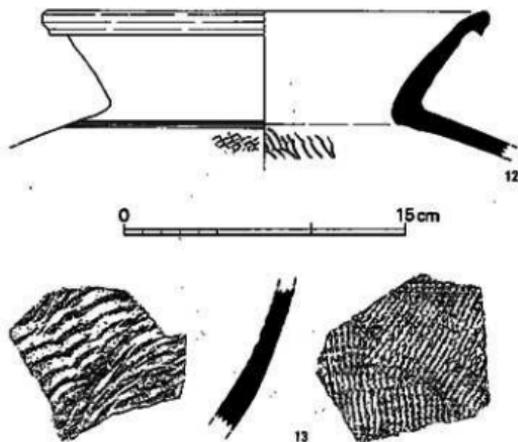
須恵器壺（第18図3・4） 3は扁球形の胴部に緩やかに外反する口縁部がつく壺で、端部を丸く肥厚させている。復原口径13.2cm、胴部最大径18.7cm、器高17.8cmを測る。口縁部内外と胴部上半はクロヨコナデ、胴部内面ナデ、胴部外面下半は回転ヘラ削りで仕上げている。色調は灰色から青灰色を呈し、焼成は良好である。4は肩部の張る扁球形の胴部に、直立した短口縁がつく壺で、肩部には二条の沈線がめぐり、その間は歯齒の刺突文が施されている。内外ともクロヨコナデ調整で、色調は暗青灰色を呈し、焼成は良い。復原口径8.2cm、胴部最大径17.2cm、現存器高9.5cmを測る。

須恵器提瓶（第18図5～7） 5は両耳付の提瓶で、口径7.25cm、胴部最大径16.1cm、胴部厚13.8cm、器高20.15cmを測る。調整は口頸部内外をクロヨコナデ、胴部表面はカキ目、裏面はナデと回転ヘラ削りである。色調は黄灰色から灰色を呈し、焼成は良好である。口頸部外面にはヘラ記号が施されている。6・7は口頸部の破片で、7の頸部は3条の沈線がめぐる。

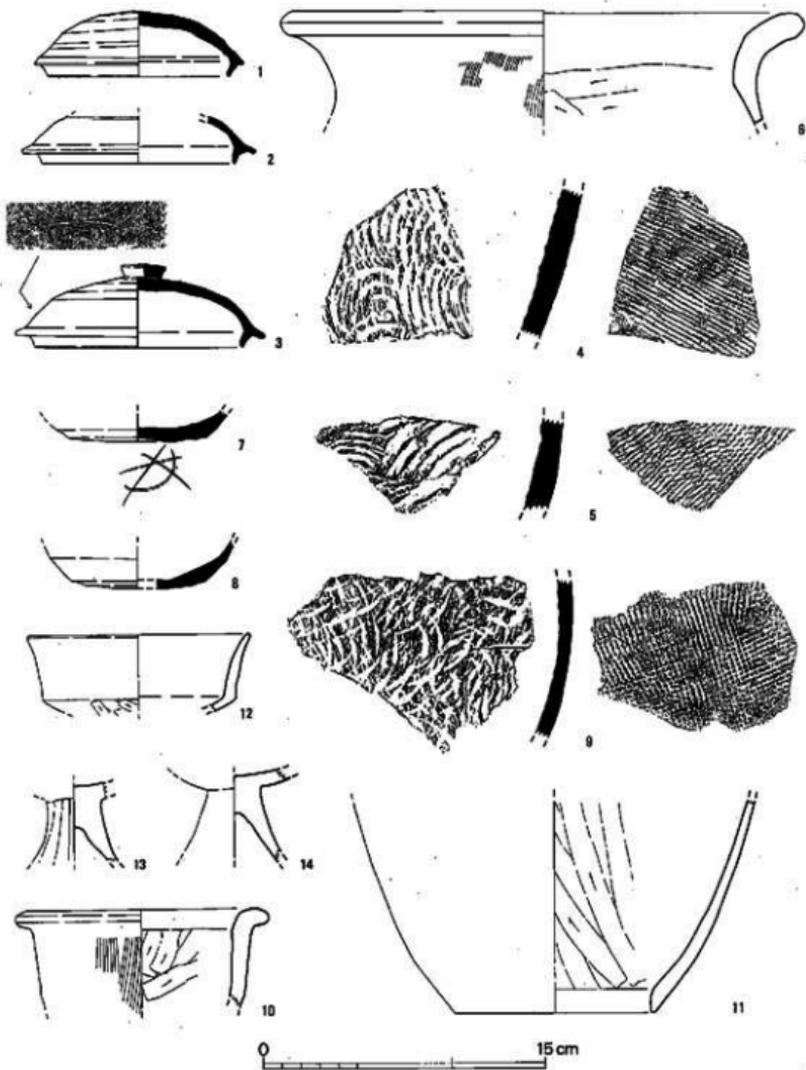
須恵器壺（第19図12・13） 12は口頸部付近、13は胴部下半の小破片の資料である。12は強く張った肩部に大きく外反した口縁部がつく壺で、口縁端部は肥厚させ、段を形成している。調整は口頸部内外をクロヨコナデ、胴部外面は格子目文のタタキのあとクロヨコナデ、内面は青海波文のタタキを施している。色調は暗赤紫色を呈し、焼成は良好・堅緻である。13は胴部外面を平行タタキ目、内面は青海波文のタタキ目を施している。色調は灰色で、焼成は良好である。

土師器杯身（第18図8） 小型で深めの杯身で、体部外面中央には不明瞭ながらも屈折線がみられる。調整は体部外面下半をヘラ削り、口縁部と体部内面はヨコナデで仕上げている。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。復原口径7.2cm、現存器高3.5cmを測る。

土師器椀（第18図9～11） 9は欠失しているが、いずれも把手のつ



第19図 石室内出土土器実測図2（1/3）



第 20 図 溝状透摺・その他出土土器実測図 (1/3)

く柄で、把手には小孔が穿たれている。調整は体部外面と外底部がへら削り、内面は9がナデ、10・11は刷毛で仕上げている。色調はいずれも褐色を呈し、焼成は良好である。口径は9が5.8cm, 10が7cm, 11が6.5cm, 器高は9が4.35cm, 10が4.43cm, 11が4.95cmを測る。

#### 溝状遺構内出土遺物 (第20図)

須恵器杯蓋 (1-3) 1は体部径11.2cmを測る身受けのかえりを有す杯蓋である。口縁部内外をロクロヨコナデ、体部外面回転へら削り、内面ナデで仕上げている。色調は暗緑灰色を呈し、焼成は良好である。3は宝珠形の鈕がつく杯蓋で、低平だが身受けのかえりをもつ。調整は天井部外面をカキ目、内面ナデ、体部内外と鈕はロクロヨコナデで仕上げている。体部径は13.35cm, 器高4.45cmを測る。色調は灰色から暗灰色を呈し、焼成は良好・堅緻である。2は破片資料であるが、天井部外面にカキ目痕が残っているので、3と同じ鈕の付く杯蓋と思われる。復原体部径12.4cmを測る。

須恵器壺 (4・5) いずれも胴部破片の資料で、胴部外面は平行タタキ目、内面は青海波文のタタキを施している。

土師器壺 (6) く字状に強く外反した口縁部を有す甕で、復原口径28cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面へら削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は暗茶褐色で、焼成も良好である。

## (2) その他の遺物

#### 須恵器 (第20図7-9)

7・8は杯身の破片資料と思われる。7の外底部にはへら記号がみられる。調整は外底部を7が回転へら削り、8は回転へら削りのあとナデ、内底部は8がナデで、他は7・8ともロクロヨコナデである。色調は7が灰色、8は外面灰色、内面暗赤紫色を呈し、焼成も良好・堅緻である。9は甕の胴部破片の資料で、外面を平行タタキ、内面は青海波文のタタキを施している。

#### 土師器 (第20図10-14)

10は復原口径13.4cmの小型の甕で、口縁部の外反は短くて強い。調整は胴部外面を刷毛、内面へら削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色で、焼成も良好である。11は甕の胴部下半の破片資料である。胴部外面ナデ、内面へら削りで仕上げている。色調は黄褐色を呈し、焼成も良い。12は高杯の杯部、13・14は高杯の脚部の資料である。12は体部外面下半に屈折線を有す杯部で、復原口径11.9cmを測る。調整は体部外面下半をへら削りの他は、ヨコナデで仕上げている。色調は褐色を呈し、胎土も精良で焼成も良好である。14は器面の風化が著しく調整は不明だが、13の脚部外面はタテへら削り、内面ナデで仕上げている。色調はいずれも黄褐色から褐色を呈す。

#### 4. おわりに

柿畑造成時の削平が著しいことは、古墳の残存状態からも判るものの、全体に遺構の密度は低い遺跡であったと思われる。調査の結果は、縄文時代早期・前期・晩期の土器群が出土した土壇13基と竪穴遺構2基をはじめ、大型の単室の横穴式石室を有す径30mを越す古墳1基を検出しただけである。6世紀末の古墳としては、この地域一帯に群在する多数の古墳群の中でも大規模古墳の一つといえるだろう。また、時期は不明だが、近在する大型の円墳である鎌塚との関連も、今後興味深い問題である。古墳の残存状況は悪く不明な点を多く残すものの、これまで不明であった山ノ神古墳群の一端が明らかにできたことは一つの成果といえるだろう。

(井上)



第 21 図 発掘調査に参加した人達

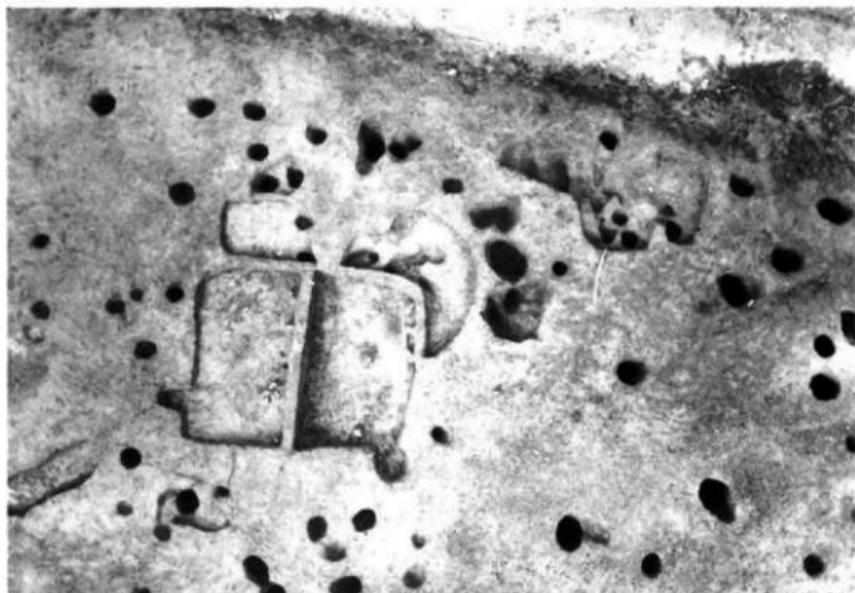
# 圖 版



1 山ノ神道跡全景空中写真



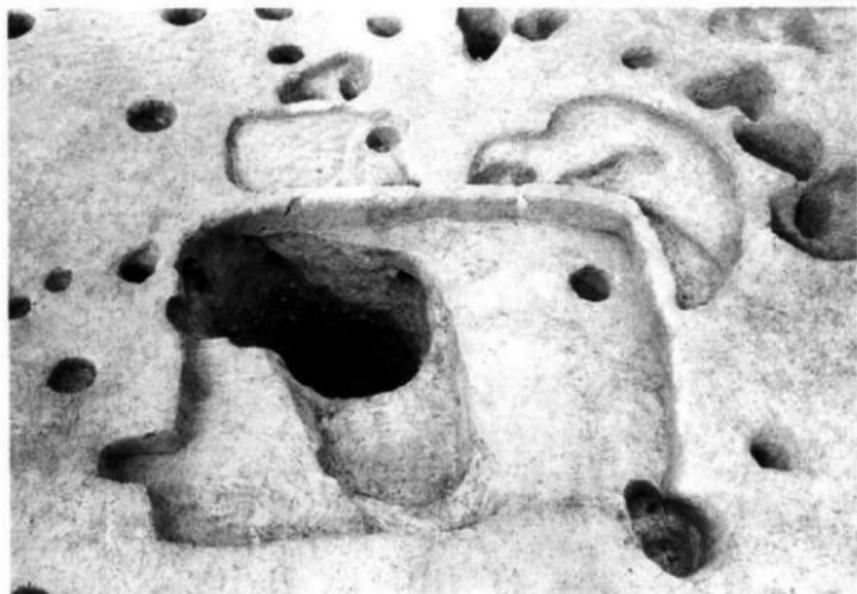
2 山ノ神道跡発掘区全景



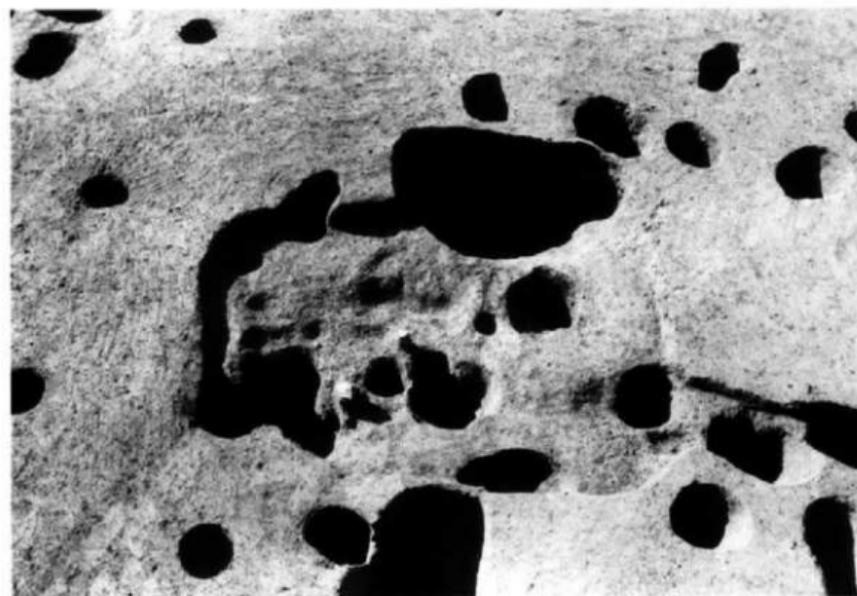
1 1号堅穴と土壌



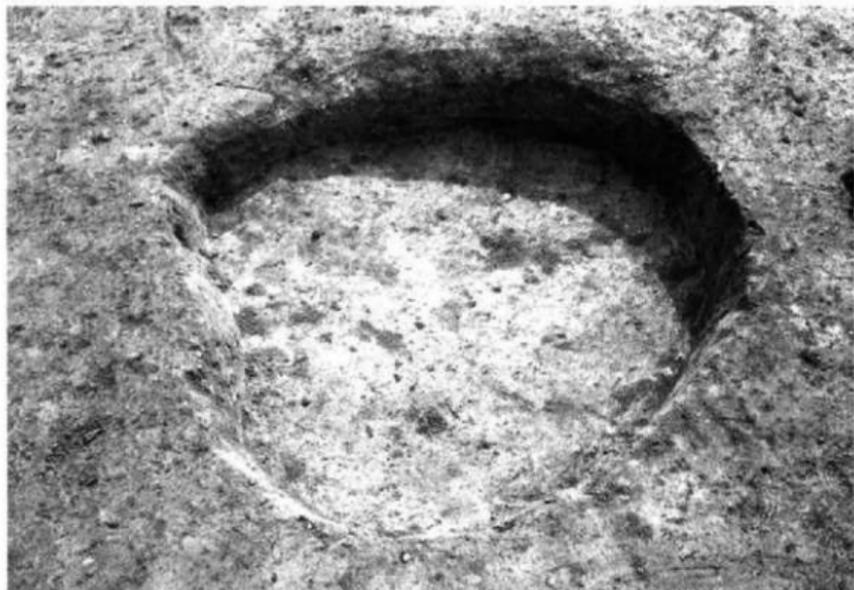
2 1号堅穴 (東から)



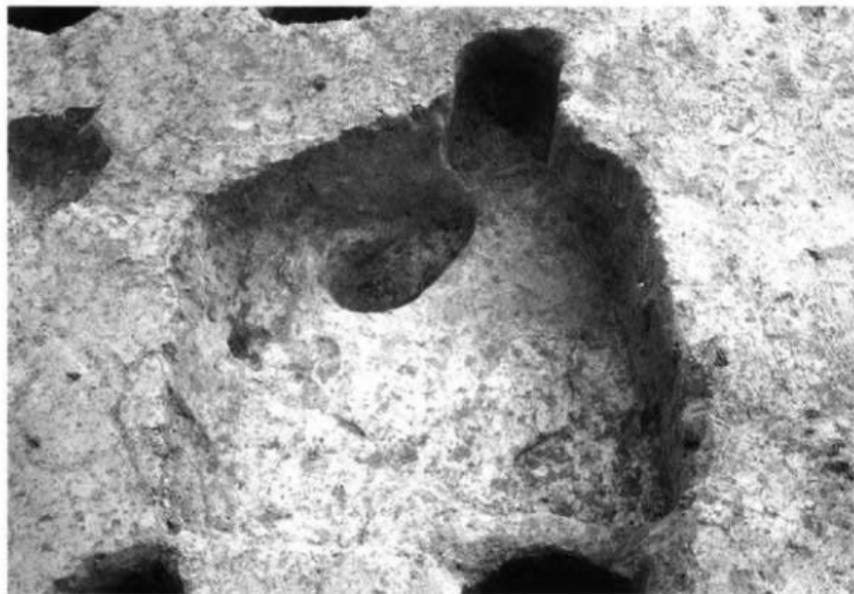
1 1号整穴・15号土壌 (東から)



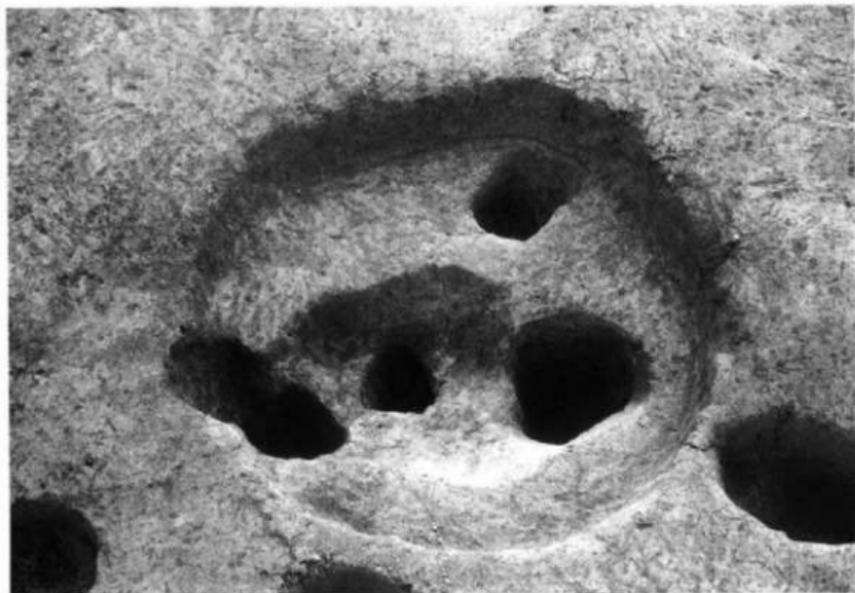
2 2号整穴・14号土壌 (北から)



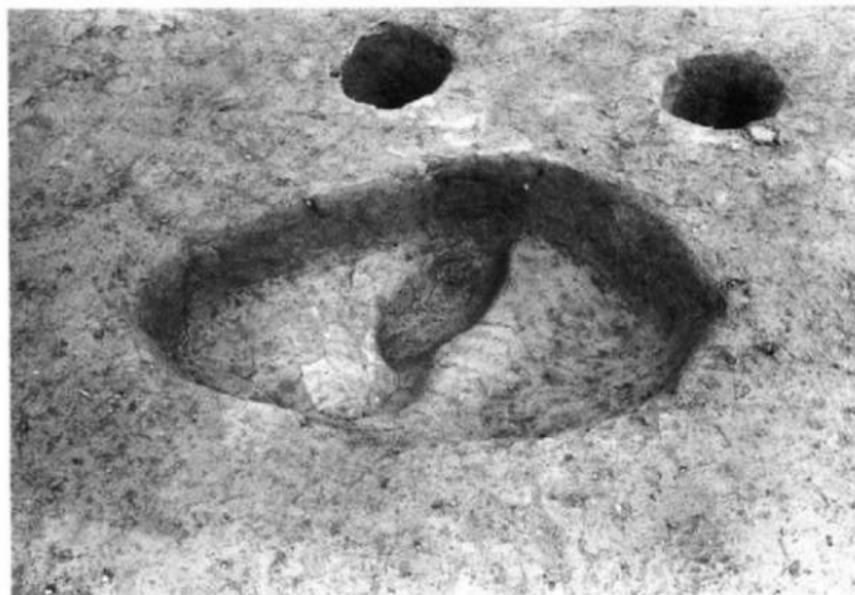
1 1号土壇 (北から)



2 2号土壇 (北から)

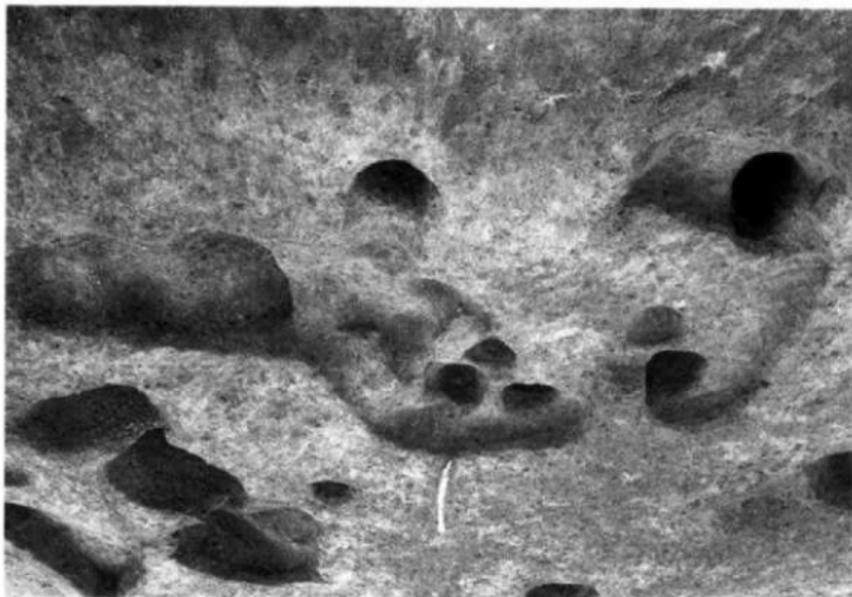


1 6号土壇 (北から)



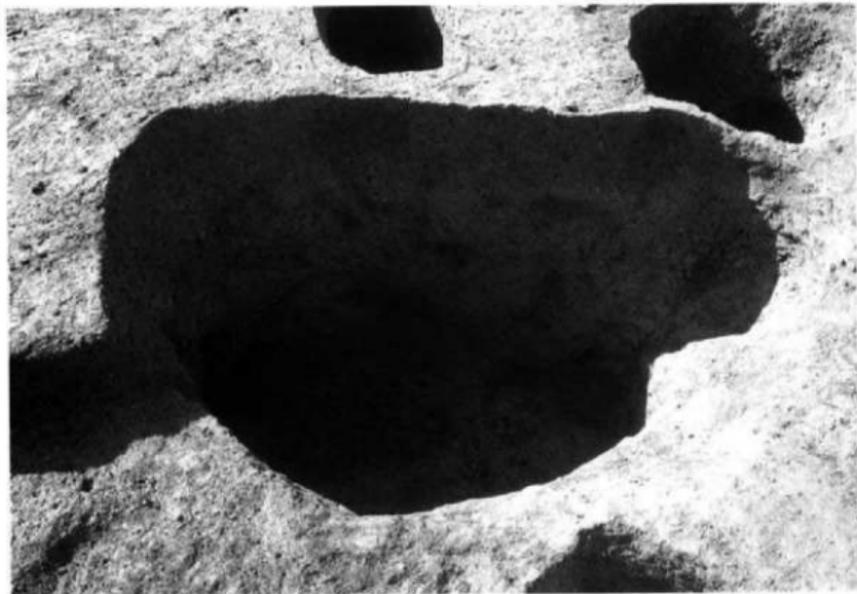
2 7号土壇 (西から)

2 10号土層 (西2号)

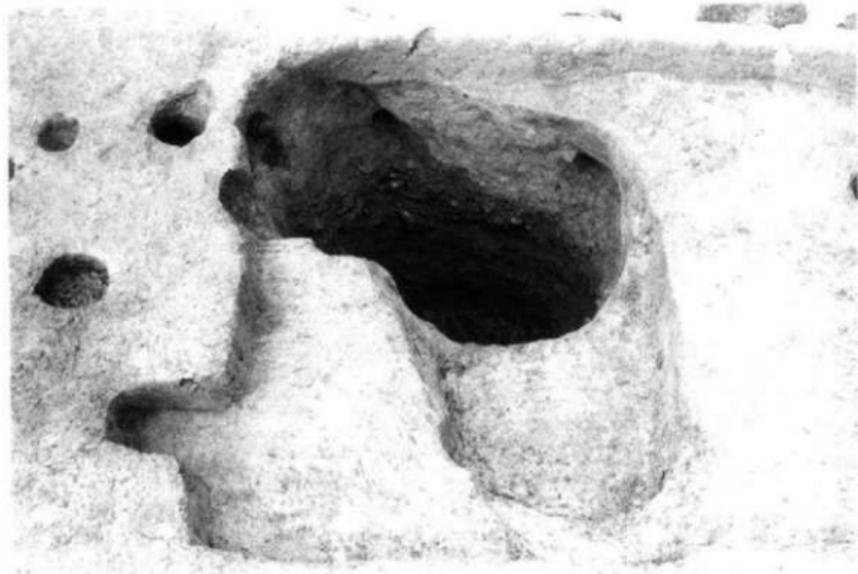


1 8号土層 (東2号)





1 11号土塙 (北から)



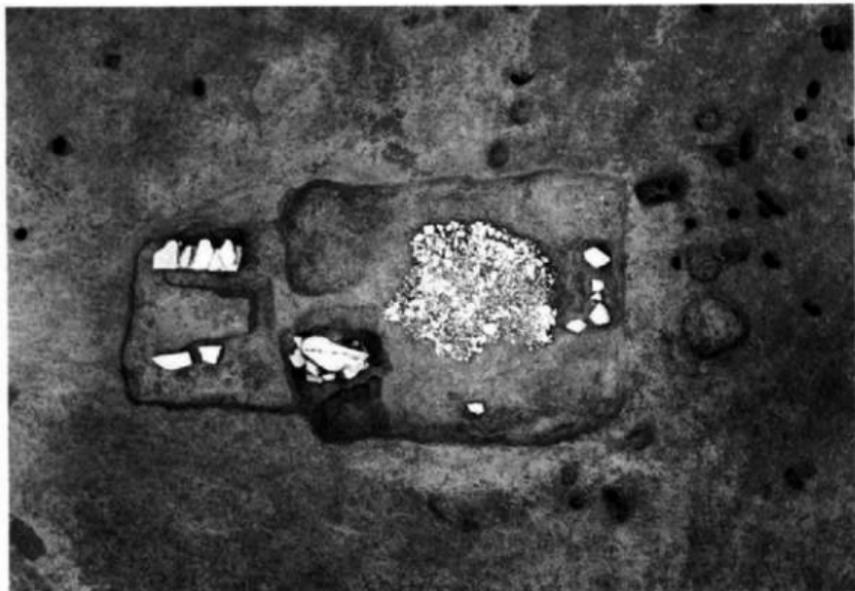
2 12号土塙 (東から)



1 13号土壘（東から）



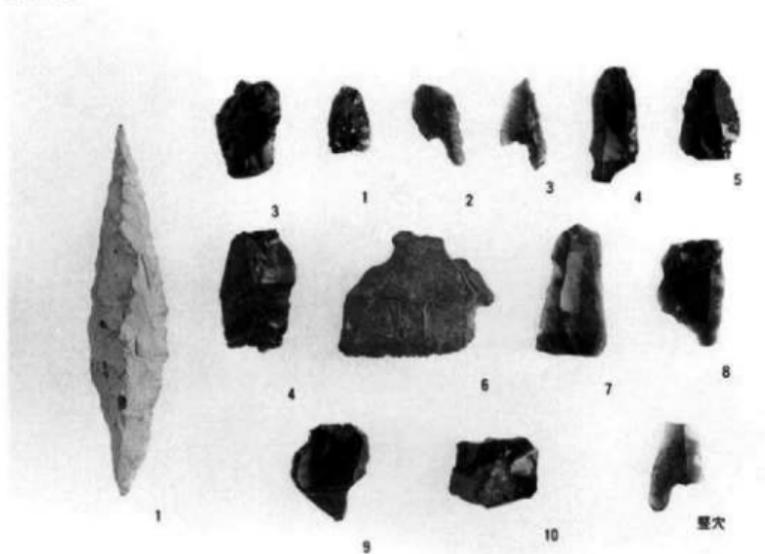
2 古墳全景空中写真



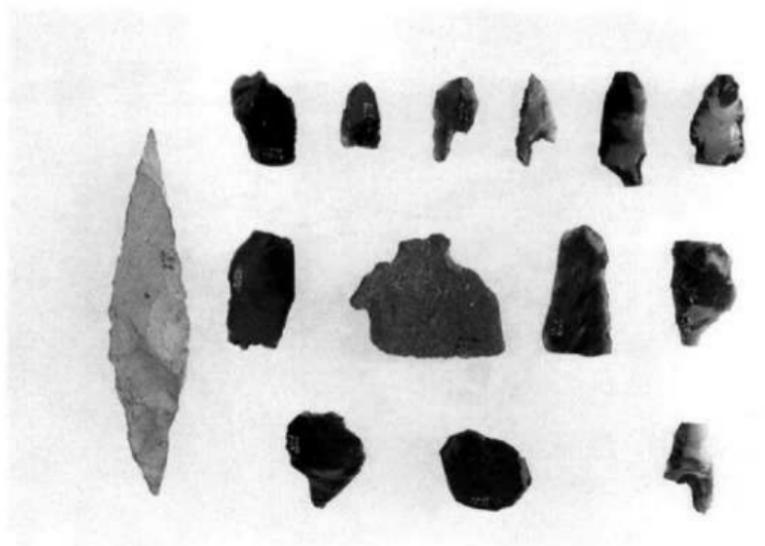
1 石室全景空中写真



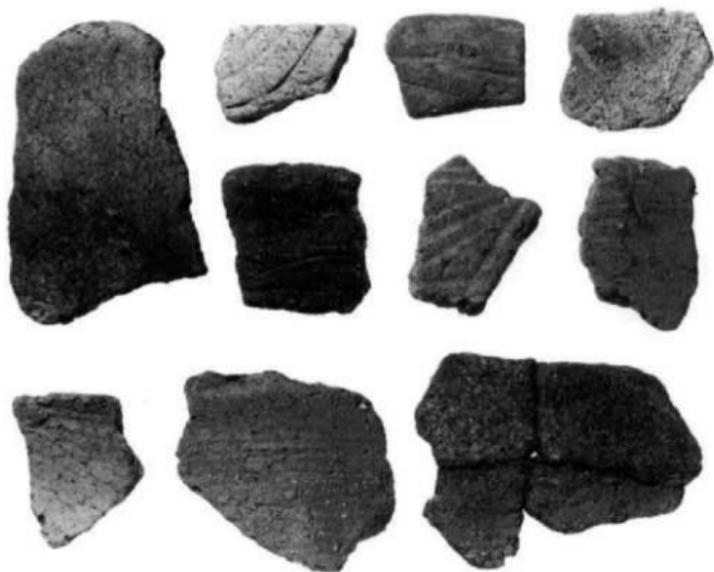
2 周溝 (北から)



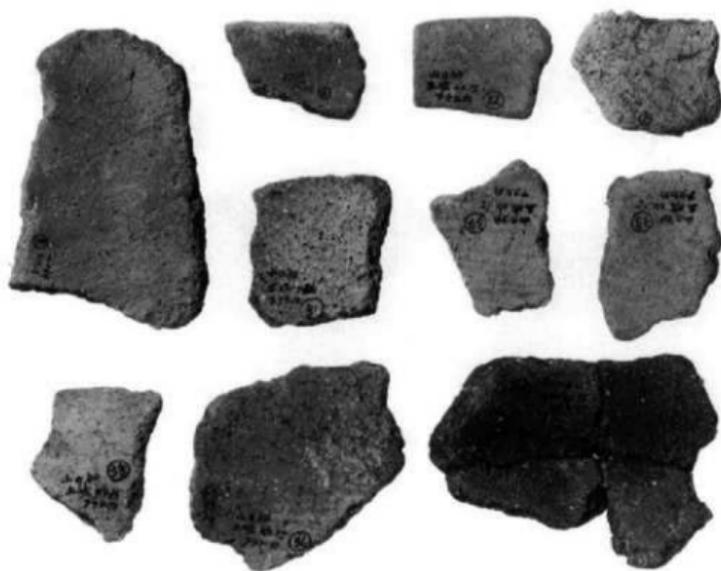
1 出土石器 (表)



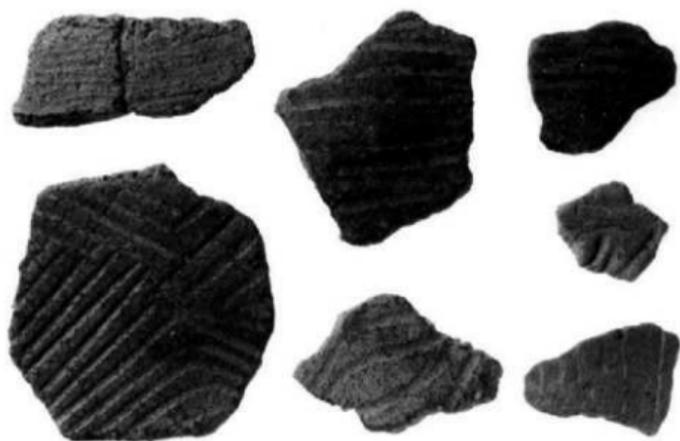
2 出土石器 (裏)



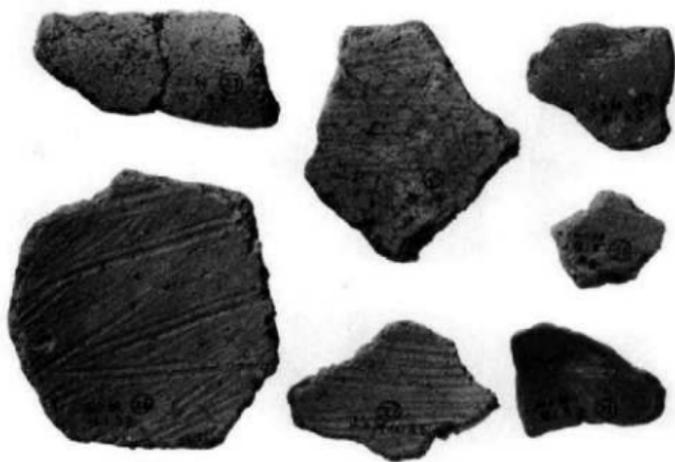
1 3·14·15号土堆出土绳文土器(表)



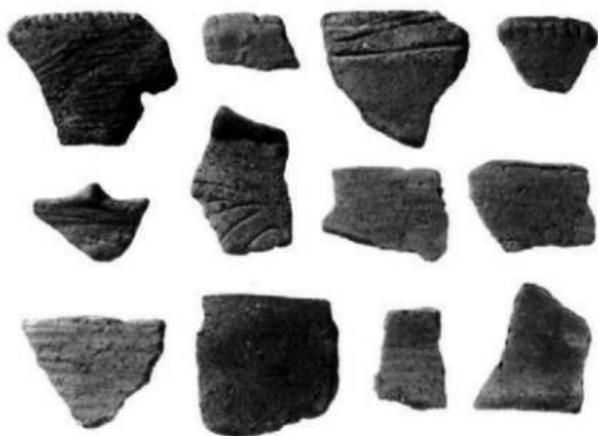
2 3·14·15号土堆出土绳文土器(表)



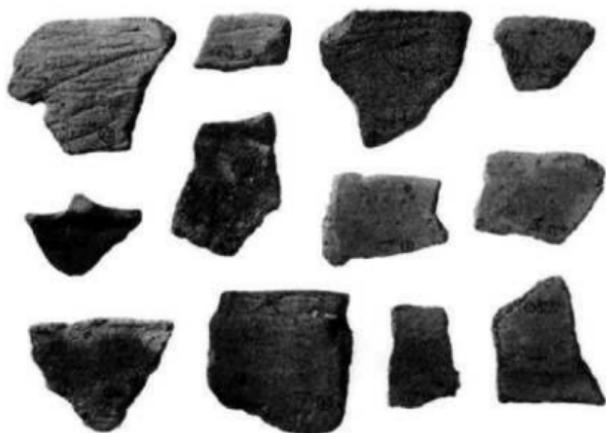
1 1号竖穴状遺構出土縄文土器(表)



2 1号竖穴状遺構出土縄文土器(裏)



1 包含层出土绳文土器(表)



2 包含层出土绳文土器(裏)



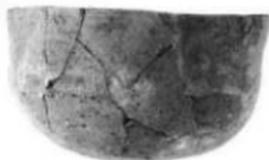
38



5



3



8



9



4



10



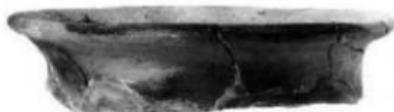
11



3



1



6



14

1 出土土陶器·須恵器



1



2



3



5



6



4

2 出土装身具・鉄器

# 鎌塚西遺跡の調査

## 本文目次

1. はじめに.....	151
2. 遺構と遺物.....	151
3. おわりに.....	161

## 図 版 目 次

本文対照頁

図 版 1	(1) 鎌塚西遺跡全景 (西から).....	151
	(2) 鎌塚西遺跡全景 (東から).....	151
図 版 2	(1) 1号住居跡 (南から).....	151
	(2) 掘立柱建物跡 (北東から).....	158
図 版 3	(1) 1号住居跡他出土鉄器 .....	153
	(2) 3号住居跡他出土土錘 .....	156

## 挿 図 目 次

第 1 図	鎌塚西遺跡の位置と遺構配置図 (1/10,000, 1/200).....	152
第 2 図	1号住居跡実測図 (1/60) .....	153
第 3 図	2～4号住居跡実測図 (1/60) .....	154
第 4 図	住居跡出土土器実測図 (1/3).....	155
第 5 図	鉄器実測図 (1/2).....	157
第 6 図	土製品実測図 (1/2).....	157
第 7 図	5号住居跡実測図 (1/60) .....	157
第 8 図	掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	159
第 9 図	掘立柱建物周辺・その他出土土器実測図 (1/3).....	160
第 10 図	調査風景 .....	161

## V 鎌塚西遺跡の調査

### 1. はじめに

鎌塚西遺跡は、九州横断自動車道建設に伴う工事用道路を設置する際に発見された遺跡で、朝倉郡朝倉町大字菱野字先半田693番地他に所在する。

鎌塚西遺跡は、横断道本線用地内の鎌塚遺跡調査区から南西約160mの位置にあり、間に鎌塚古墳(現況で直径約30m、周囲の状況からみて周溝を含めると直径80m前後であろう)を挟んでいる。

この遺跡の調査は、工事用道路建設工事中の1983年8月17～19日に行ったが、県文化課の栗原和彦・新原正典・小池史哲・武田光正・日高正幸が調査を担当した。実施にあたり施工業者の株式会社塩見組、担当者の後藤良一氏、他地点調査中の作業員諸氏の協力を得た。

### 2. 遺構と遺物

この遺跡では、道路用地内の幅4～7mで約40mの距離にわたる約220㎡を発掘調査し、検出された遺構は、堅穴住居跡6軒分とカマドらしい焼土1、掘立柱建物跡1棟分および柱穴状ビット群である。

#### 1号住居跡(図版2-1, 第2図)

調査区の東南端に検出されたが、住居跡の東北隅は調査区域外に相当する。長軸は南北方向で3.65m、短軸3.30mの長方形プランを呈している。周壁は約20cmの高さに残り、床面は極めて堅緻で、床面を掘り込む6ヶ所の柱穴状ビットのうち、隅から1m程内側にあるビットが主柱穴と推定される。炉跡はみられない。北東側調査区域外にカマドのある可能性が高い。

住居跡からの出土遺物は少ないが、西側周壁に近い床面直上に鉄鍬がまとまった状態で出土した。住居跡内には黒色土が堆積していた。

#### 出土遺物(図版3, 第4図)

土師器(第4図1～5) 1は上層から出土した甕口縁部破片で、復原口径24.5cmの大きさ。口縁は肥厚し外反する。胴部はほとんど聚らまない。胴部外面は粗いハケ目、内面はヘラケズリされている。

2～5は埋土の下部から出土した破片である。2は甕の底部で復原直径17.5cmの大きさ。口縁側にはバケツ状に広がる模様で内外面ともにヘラケズリで調整されている。



第 1 圖 榑原西遺跡の位置と遺構配置図 (1/10,000, 1/200)

3・4は杯で、口縁部は直線的に立ち上るが底部との境は明瞭で、外底面はヘラケズリされている。2点ともに復原口径は約13cmを測る。

5は口縁部が外反する杯で、復原口径15.5cmの大きさ。外底面はヘラケズリされている。

須恵器（第4図6）壺ないしは平瓶類の頸部破片で、口縁部は大きく外反し、体部も大きく脹らむようで屈曲が強い。体部外面はカキ目調整されている。

鉄器（第5図1～14）西側周壁に近い床面からまとも出土した。数点は錆着して一塊となっているが、遊離した破片はうまく接合しない例が多い。

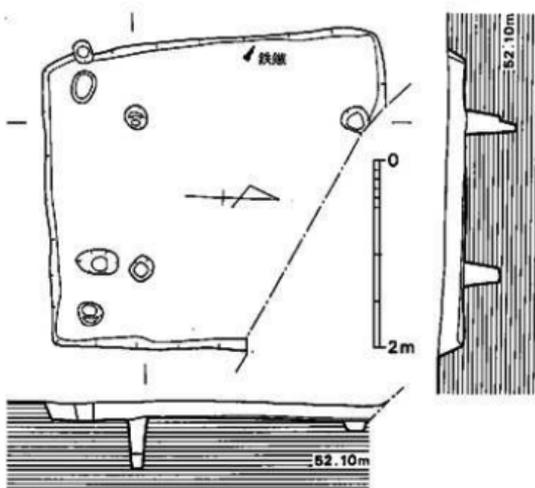
1は長頸類の鉄鎌が、6点錆着して塊状となったもので、先端から基部端まで残存する資料はないが、鎌身部が4点確認できる。いずれも片丸造り両刃式である。2～4は片丸造り両刃式ないしはその可能性のある破片である。5・8では刀子に似た形状の破片が錆着しているが本来の形は不明。6・9・10・12は基部端の破片、7・11は中途部分の破片である。以上から最低7点の鎌があったことになろう。

13は先端部を欠失し全体の形は不明だが、0.5cm角の棒状の端部が、蕨手風に巻いて環状を呈する。

14は基部端を欠くがやや内反りの刀子で、残存長8.2cmを測る。刃部長は6.6cm、刃幅は1cm前後だが、関部で刃と背の両方から幅を減じて基部幅は0.5cmである。

## 2号住居跡（図版1-2、第3図）

1号住居跡の約5m西北に検出された住居跡状の竪穴で、南北方向に主軸方向をとるか3.1×3.1mの方形プランを呈している。北東隅は調査区域外にのびるが高壁は20cm程の高さで残る。



第2図 1号住居跡実測図（1/60）

床面は堅緻で、床面を掘り込む柱状ビットはいずれも20cm程の深さを有している。カマドは検出されなかったが、北端に一部焼土が確認された。竈穴内には暗茶褐色土が堆積していた。

出土遺物（図版3、第4・5図）

土師器（第4図7～10）

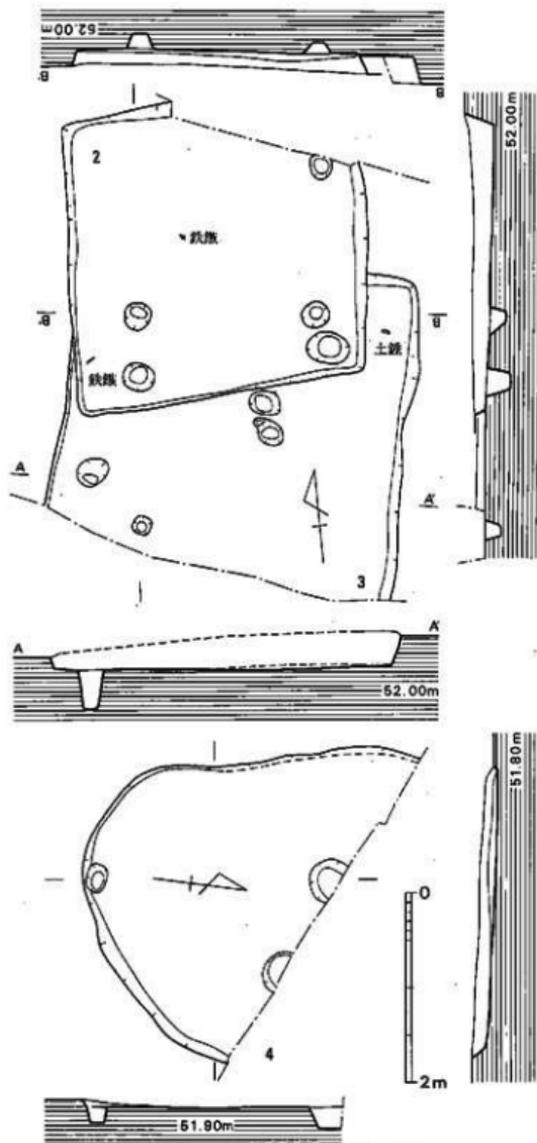
7は上層から出土した甕口縁部破片で、復原口径21.1cmの大きさ。肥厚した口縁部は外反するが、屈曲は強い。

8は皿で復原口径15.0cm、器高2.55cmの大きさ。外底面はヘラケズリのあと軽くナデられている。

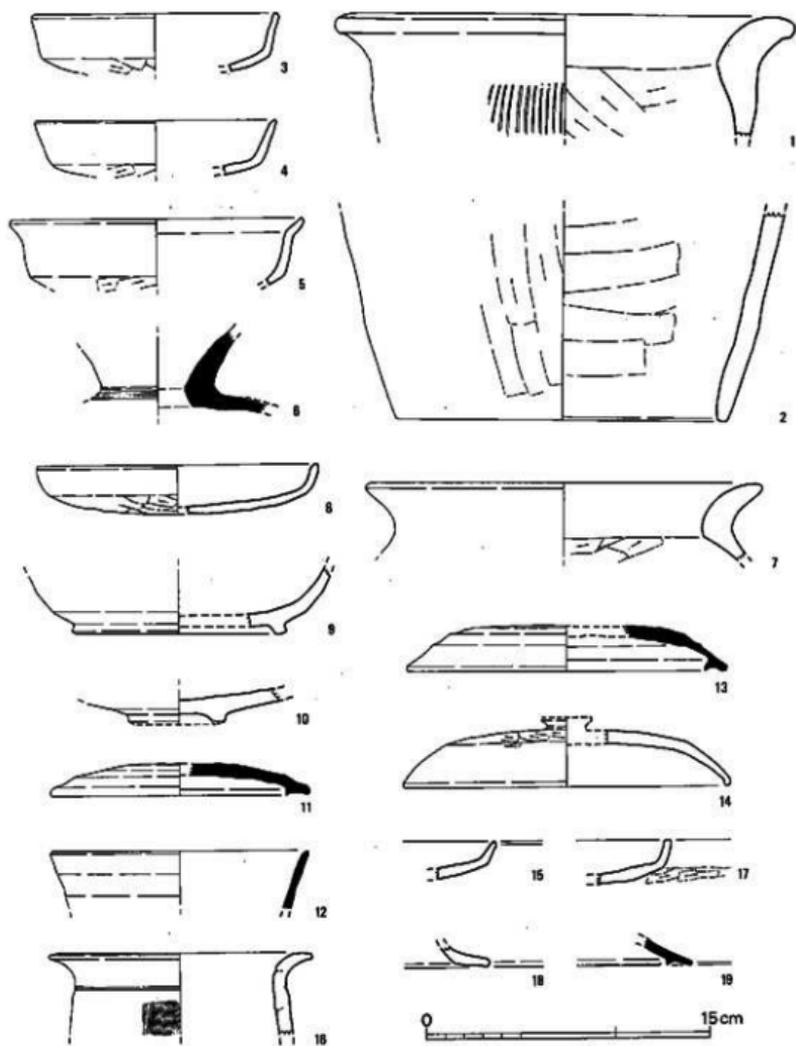
9は復原高台径11.4cmの杯破片。10は5.1cm径の高台が付くものの体部の開きが大きい。

須恵器（第4図11・12）  
11は復原口径13.8cm、器高2.7cmの、身受けのかえりをもつ杯蓋で、回転ヘラケズリされる外天井につまみは付かず、かえりは浅く短い。

12は復原口径13.6cmの杯口縁部破片で口縁部は



第3図 2-4号住居跡実測図 (1/60)



第 4 圖 住居跡出土土器実測圖 (1/3)

直線的に立ち上がる。

鉄器(第5図15・16) 15は中央部の埋土中から出土した鐵先端部片で端刃廻り片刃式のものである。16は南西隅部の埋土中から出土した鐵の基部端破片で木質は遺存しない。

### 3号住居跡(第3図)

2号住居跡と一部重複し、2号住居跡に切られる。北北東-南南西に主軸方向をとり、東西3.7mを測るが、南側は調査区域外にまで伸びていて南北方向3.5m以上の規模の方形ないしは長方形プランであろう。周壁は東側で約30cmの高さに残る。床面は堅緻で、床面を掘り込む柱穴状ピット4ヶ所のうち西端の一つは約40cmの深さだが他のものは約20cmの深さを有している。住居跡内の堆積土は2号住居跡よりもやや淡い色調の暗茶褐色土である。北東隅部の埋土下位から管状土鏝1点と、軽石塊1点が出土した他は土師器小片が若干出土した程度である。

#### 出土遺物(第6図)

管状土鏝(1) 半截した状態で残っている。長さ6.9cm、体部径2.1cmの大ききで孔径は0.9cm。わずかに砂を含む精良な胎土で、暗黄褐色に焼成されている。

### 4号住居跡(第3図)

2号住居跡の北西側3mの距離をおいて検出された住居跡で、北東側は調査区域外に続く。不整形な楕円形状プランをなし、周壁は明瞭に立ち上がらずに、浅い落ち込みのようになっているが、一応住居跡とした。南北には3.5m、東西には3.2mを測る。床面はさほど堅緻でないが、調査区端に深さ20cm程の柱穴状ピットが2ヶ所ある。土器片・木炭・焼土が北東側に集中して出土した。堆積土は、1号住居跡のそれに近い。

#### 出土遺物(第4図)

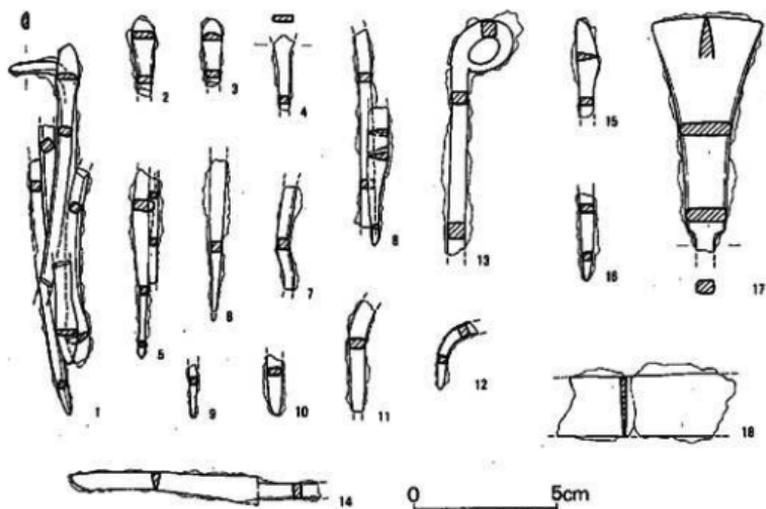
須恵器(13) 身受けのかえりをもつ杯蓋で、天井部中央を失うため、つまみの有無は不明。復原口径17.0cm、器高2.4cmで、かえりは浅く短い。外天井は回転ヘラケズリされている。

土師器(14~16) 14は鳥嘴状のかえりをもつ杯蓋で、扁平なつまみが付く。復原口径17.5cm、器高3.7cmで、かえりの屈曲は緩い。外天井は手持ちヘラケズリされている。

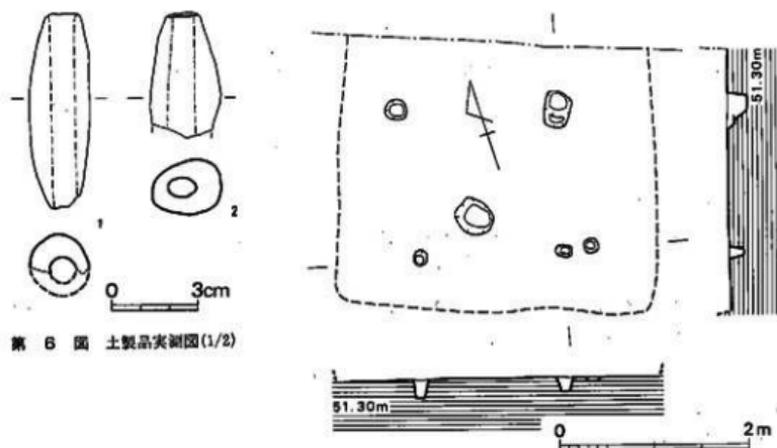
15は小破片だが皿の口縁部であろう。16は復原口径14cmの小形甕口縁部破片で、胴部はさほど展らまない。口縁部は肥厚せず以外反する。胴部外面は細かいハケ目、内面はナデ調整されている。

### 5号住居跡(第7図)

調査区の北西端部に検出された住居跡で、北東側は調査区域外に続く。周壁はほとんど残らないが、北北東-南南西に主軸方向をとる方形ないし長方形プランである。方向は3号住居跡



第 5 图 铁器实测图 (1/2)



第 6 图 土製品实测图 (1/2)

第 7 图 5号住居跡实测图 (1/60)

にはほぼ平行する。床面は堅硬で、床面に掘り込まれている柱穴状ピットは6ヶ所ある。東南隅に近い小さなピットは浅く、南側寄り中央にあるピットは30cm余りの深さを有すが、他は20cm前後の深さである。

#### 出土遺物 (第4図)

土師器 (17・18) 17は小破片だが杯ないし皿であろう。外底面はヘラケズリ、内面はナデ調整されている。18は高杯の槽部破片で踏張る形をなし、柱状部内面はヘラケズリである。

須恵器 (19) 身受けのかえりをもつ杯蓋の口縁部破片で、かえりは浅く短い。

#### 6号住居跡 (第1図)

5号住居跡の東側で、住居跡床面が検出され、調査区域端の堆積土の観察によって周壁らしい10cm程の段差を確認し、5号住居跡南東隅の東2mの位置にも周壁の一部らしいわずかな段差が検出された。調査区域内は工事による掘削が進んでいて、5号住居跡との重複関係などは不明だが、堅硬な床面の一部がその北側に残されていて、深さ10cm程の小さな柱穴状ピットが2ヶ所検出された。床面に接して鉄鏃1点が出土した他には遺物の出土はない。

#### 出土遺物 (第5図)

鉄鏃 (17) 広根類の方頭斧箭式鏃で莖被部を欠く。鏃身部長7.5cm、先端部幅1.3cm、基部側幅1.3cm、厚さ0.4~0.45cmの大きさ。

#### カマド跡? (第1図)

用地幅ぎりぎりまで拡張した部分で、4号住居跡の西南西約5mの位置で焼土の一部が検出された。よく焼けているが、用地外にのびるために規模などは不明。住居跡カマドの可能性が高い。

#### 掘立柱建物跡 (第8図)

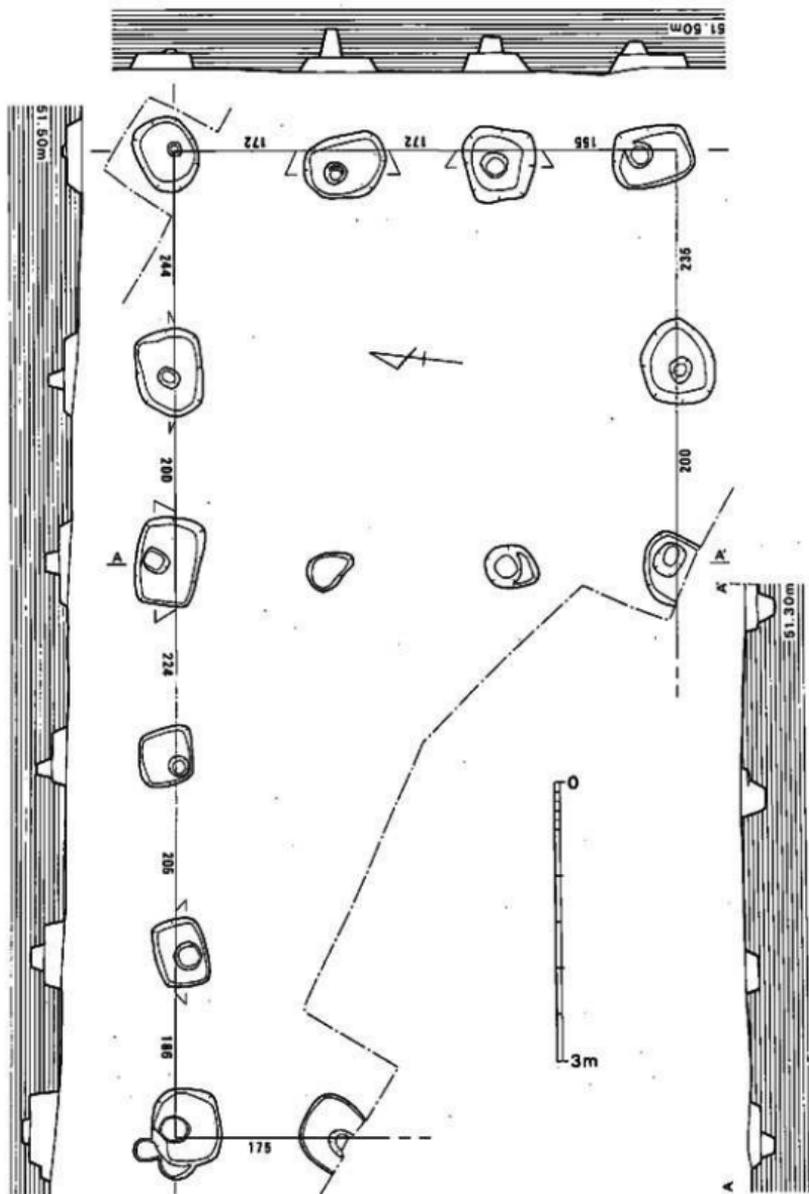
調査区の西半で、広さ50×80cm程の柱穴列が検出されて、用地幅一杯まで調査区を拡張して5×3間の掘立柱建物跡であることを確認した。

主軸方向はN-83°30'-Eで、北辺での長軸10.4m、東辺での短軸4.95mの規模だが、東辺から2間目で間仕切の可能性がある部分での短軸幅は5.50mの距離を測る。

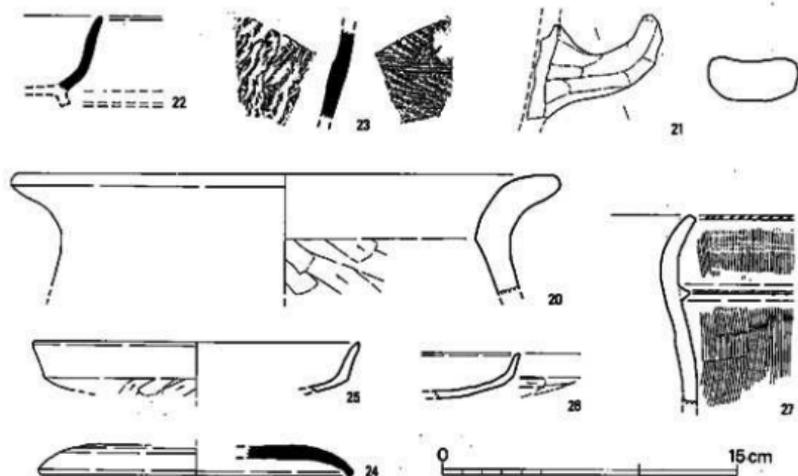
柱穴は完掘していないが、10~30cm程で検出された柱底部分の掘り下げでは約30cmの深さを有している。

#### 出土遺物 (第9図)

土師器 (20・21) いずれも付近から出土した破片である。20は復原口径27.8cmの甕口縁部で、やや肥厚した口縁が外反する。胴部外面はナデ調整のようだが、内面はヘラケズリされている。



第 8 图 覆立柱地物群实测图 (1/60)



第 9 図 獨立柱遺物周辺・その他出土土器実測図 (1/3)

21は狭ないし瓶の把手でやや扁平に曲がる牛角形を呈している。

須恵器 (22~24) 22・23は付近から出土したが、24は北西隅から一つ南の柱穴から出土した。22は杯身の口縁部破片で、高台が付くものであろう。23は甕の胴部破片であらう。外面は平行タタキのあと一部カキ目が施され、内面には同心円当て具痕がみられる。24はほとんど屈曲しない鳥嘴状口縁をもつ杯蓋で、復原口径16.0cmの大きさ。外天井は回転ヘラケズリされるが、中央部を欠きつまみの有無は不明。

鉄器 (第5図18) 付近出土の小刀片で現存長5.9cm、幅2.2cm、厚み1mm強の大きさ。

#### その他の遺物 (第9図)

土師器 (25~27) 25・26は2号住居跡と4号住居跡の間の柱穴状ビットから、27は工事中の排土から採集した資料である。25・26は皿で外底面はヘラケズリされている。25は復原口径16.5cmの大きさ。27は甕の口縁部破片で、外反する口縁下に1条の三角凸帯が貼り付けられるが、外面はハケ目調整、内面はナデ調整されている。凸帯上と面取りされた口唇部に浅い刻み目が施される。

管状土鏝 (第6図2) 2号住居跡の西外側のビットから出土した。現存長4.4cm、体部径2.0×2.4cm、孔径6×9mmの大きさ、精良な胎土で淡い暗黄褐色に焼成されている。

### 3. おわりに

鎌塚西遺跡では、やや不確実なプランの4号住居跡を除くと、いずれも南北ないしは南北に近い方向に一辺が向く、方形プランの竪穴住居跡が発見された。規模としては、一辺が3.10m～3.70mの大きさで、カマドが付設されていたとすれば北側であろうが、調査区域が狭いこともあり、確認しえなかった。

掘立柱建物跡は、梁行4.95m、桁行10.40m規模の3間×5間建物で、柱穴は大きめである。

住居跡などの重複関係から少なくとも2時期、5号住居跡・6号住居跡と掘立柱建物跡の位置関係からは3時期にわたると解釈するべきであろう。

住居跡から出上した土器類からは、破片資料ばかりで確定し難いが、1号住居跡が8世紀前半頃、2号住居跡が8世紀初頭～中頃、4号住居跡が7世紀後半～8世紀中頃の時期幅をもち、5号住居跡は7世紀末におさまるか？といった時期であろうか。また、掘立柱建物跡周辺出土土器では、8世紀前半から中頃までの時期が考えられる。

1号住居跡では、土器類の出土が少ないにもかかわらず西端付近の床面で、6本+αの鉄鍔が錆着して残されていたのは、不自然にも思える。住居使用時には一括して保管されていたと推定される鉄鍔が、住居を廃棄した折に持ち出されなかったと、解釈するべきであろうか。次の住居に移るにあたって、最低限必要な日常生活用具から除外されたか、失念されたのか、あるいは一括して廃棄されたのかは知ることもできないが、既に無用の長物と化していた可能性が高いと言えよう。

鎌塚西遺跡の北西側約160mにある、鎌塚遺跡調査区では81軒の竪穴住居跡と3棟の掘立柱建物跡からなる奈良時代の集落が発見されている。时期的には7世紀後半から8世紀後半の幅があり、集落を区画する溝があるという。両遺跡の間には、鎌塚古墳があり現況でも周溝の名残とみられる畑の畦が残されていることからして、別々の集落と考えるのに、やぶさだかでない。(小池)



第 10 図 調査風景

# 图 版



1 鎌塚西遺跡全景（西から）



2 鎌塚西遺跡全景（東から）



1 1号住居跡 (南から)



2 掘立柱建物跡 (北東から)



1 1号住居跡他出土鉄器



2 3号住居跡他出土土鍬

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 3	登録番号 11

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—22—

平成4年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社

福岡市博多区東比恵2丁目9番1号

# 九州横断自動車道関係

## 埋蔵文化財調査報告

—22—

付 図

鎌塚遺跡  
山ノ神遺跡  
鎌塚西遺跡

1992

福岡県教育委員会



付圖1 熊鷹遺跡遺構配置圖 (1/200)

